

大阪市内埋蔵文化財包蔵地  
発掘調査報告書

(2022)

2024.3

大阪市教育局  
(一財)大阪文化財協会

## 例言

1. 本報告書は令和4年度の大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたものである。
2. 第1部の調査は大阪市教育委員会の指導のもと（一財）大阪市文化財協会が各原因者より委託をうけて実施したものである。  
第2部の調査は大阪市教育委員会が各原因者より委託をうけて実施したものである。
3. 第1部の執筆は（一財）大阪市文化財協会調査課長 高橋工(当時)の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。担当者の氏名は各報告書に記してある。  
第2部の執筆は大阪市教育委員会文化財保護課長 鈴木慎一の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告書に記してある。
4. 本報告書の編集は大阪市教育委員会事務局文化財保護課において行った。

## 目 次

### 第1部

#### 北 区

中津1丁目所在遺跡発掘調査（CT22-1）報告書	1
中之島蔵屋敷跡発掘調査（NX22-3）報告書	9
大深町遺跡発掘調査（OC22-1）報告書	25

#### 中 央 区

大坂城跡発掘調査（OS22-1）報告書	51
大坂城跡発掘調査（OS22-2）報告書	69

#### 天王寺区

大道1丁目所在遺跡発掘調査（DA22-1）報告書	89
四天王寺旧境内遺跡・上本町遺跡発掘調査（ST22-1）報告書	115
四天王寺旧境内遺跡・上本町遺跡発掘調査（ST22-2）報告書	135

#### 阿倍野区

難波大道跡発掘調査（ND22-1）報告書	169
----------------------	-----

### 第2部

#### 北 区

中之島蔵屋敷跡発掘調査（SNX22-1）報告書	177
天神橋遺跡発掘調査（STJ22-1）報告書	181

#### 中 央 区

大坂城下町跡発掘調査（SOJ22-1）報告書	185
大坂城跡発掘調査（SOS22-1）報告書	189
大坂城跡発掘調査（SOS22-3）報告書	193

#### 天王寺区

史跡四天王寺旧境内試掘調査（SST22-1）報告書	199
上本町遺跡発掘調査（SUH22-1）報告書	205
上本町遺跡発掘調査（SUH22-2）報告書	209
上本町遺跡発掘調査（SUH22-3）報告書	213

#### 阿倍野区

阿倍野筋南遺跡発掘調査（SAS22-1）報告書	217
-------------------------	-----



# 第 1 部



北区中津一丁目 4 - 3 における建設工事に伴う  
中津 1 丁目所在遺跡発掘調査(CT22- 1)報告書

調査個所 大阪市北区中津1丁目4-3  
調査面積 160㎡  
調査期間 令和4年9月2日～9月21日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋 工



## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は北区のJR大阪駅西のいわゆる梅北ヤードの北にあって、JR梅田貨物線と阪急線が立体交差する地点の北東に当る。地形的には、上町台地の北に広がる天満砂堆の西縁部付近に立地する。

中津1丁目所在遺跡は本調査に先立つ試掘調査で新たに発見され、中世から近世の集落跡とされている。調査地の北西には中津3丁目所在遺跡(CT13-1次調査)、同B地点(CT17-1次調査)・C地点(CT16-1次調査)があるが、いずれも1地点のみの調査であり、遺跡としての面的な広がりを把握できていない。CT13-1次調査では奈良時代後半、平安時代末～鎌倉時代、中世・近世の作土層が検出された。平安時代末～鎌倉時代には水路を伴う整備された耕作地になったと考えられ、富島庄の荘園の一部と推定された[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015]。この東のCT17-1次調査でも並行する時代の作土層の累重が確認されている[大阪文化財研究所2018]。CT16-1次調査では中世の作土に加えて12～13世紀の溝・土壌などが検出されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018a]。

調査地の北東150mでは豊崎3丁目所在遺跡の調査(TS16-1次)が行われていて、11～13世紀と17世紀後半の土壌などの遺構と中世・近世の作土層が発見されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018b]。

調査地の南西には大深町遺跡B地点があって、OC11-1・22-1次調査が行われている。OC11-1次調査では、近世後半とみられる溝や土壌状の遺構と幕末頃の作土層が検出された[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013]。

以上のような遺跡環境下にある当地において、建築工事が計画され、大阪市教育委員会によって事

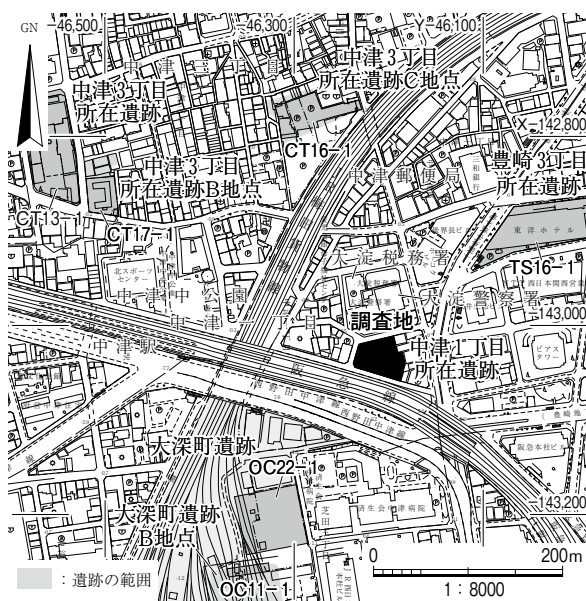


図1 調査地位置図

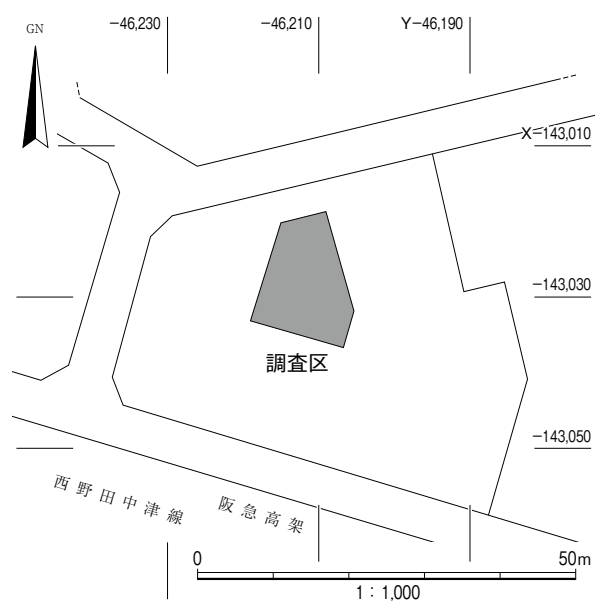


図2 調査区配置図

前に試掘調査が行われた。その結果、地表下約1.4mで本格的な発掘調査を必要とする中世以前の遺構面と遺物包含層が発見された。これを受けて、こうした地層の年代や遺構・遺物の分布状況など、この地域の歴史の変遷の基礎資料を得ることを目的として本調査が行われることとなった。

令和4年9月2日、機材を搬入し、重機による表土掘削を始めて調査に着手した。現地地表下約1.4mの第6層(後述)上面までを重機によって除去し、以下、同約1.9mの河成層(後述の第10層)上面までを人力によって掘り下げた。途中、遺構検出とその掘下げ、地層の掘下げを繰り返し、遺物の捕集に努めた。必要に応じて平面・断面の実測図を作成し、写真撮影によって記録保存を行った。現地地表下約1.9m以下は、河成堆積層の時期を判定する遺物を探索し、同層の古流向を調べる必要があったため、大阪市教育委員会と協議のうえで、さらに約0.8mの掘下げを行った。同年9月21日にはすべての調査工程を終え、機材を撤収して調査を終了した。

本報告で用いた方位は、現地で作成した街区図を大阪市デジタル地図(S=1/2500)に合成することで世界測地系座標に乗せており、座標北を基準とする。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文中では「TP+○m」と略記している。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3～6、図版1・2)

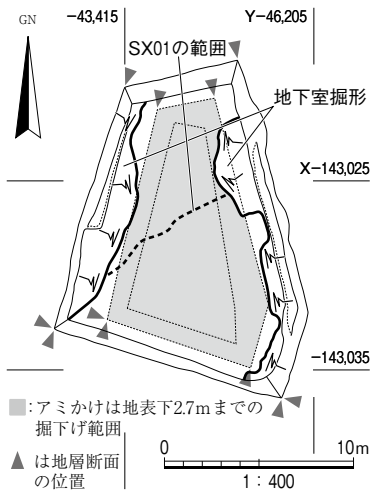


図3 地層の遺存状況・深掘り範囲

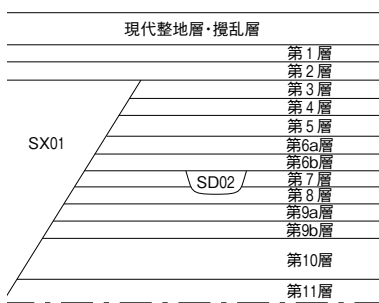


図4 地層と遺構の関係図

着手前の調査地は駐車場として利用されていて、アスファルト舗装が行われていたが、その上面の標高はTP+0.2~0.4mで平坦であった。アスファルトと地盤改良剤によって固化された現代整地層および攪乱層より下位の地層を以下の11層に分層した。なお、調査区の東・西側は旧建物の地下室があり、その掘形がトレンチ内に及んでいた。重機による掘削の後、検出面でこの掘形を避けて内側に壁面を設定したため、同じ壁面でも複数の断面ラインが生じた(図3)。一部断面図で、遺構の検出面が実際と異なっているのはこのためである(図5の西壁)。

第1層：オリブ黒色(5Y3/1)から灰色(5Y4/1)粗粒砂からなる整地層で、層厚は最大で25cmであった。第2次世界大戦時の火災によって上面が赤変した箇所があり、近代の地層である。

第2層：黒褐色(2.5Y3/1)シルトからなる作土層で、層厚は12cmである。上面の畝間を観察できる箇所があった。上面は上位の客土層に覆われるので、近代まで存続したことは確かである。

第3層：黄灰色(2.5Y4/1)細礫混り粘土質シルトからなる作土層で、層厚は15cmである。断面観察からみれば、本層上面から18世紀代の遺構であるSX01が掘り込まれていた。

第4層：黄灰色(2.5Y4/1)~オリブ黒色(10Y3/1)細粒砂質シ

ルトからなる作土層で、層厚は10cmである。

第5層：灰色(5Y4/1)わずかに細礫混り砂質シルトからなる作土層で、層厚は20~25cmであった。

第6層：作土層で、南部では第6a・6b層の2層に細分できた。第6a層は灰色(5Y4/1) 細粒砂混りシルトからなり、層厚は20cmであった。第6b層は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルトからな

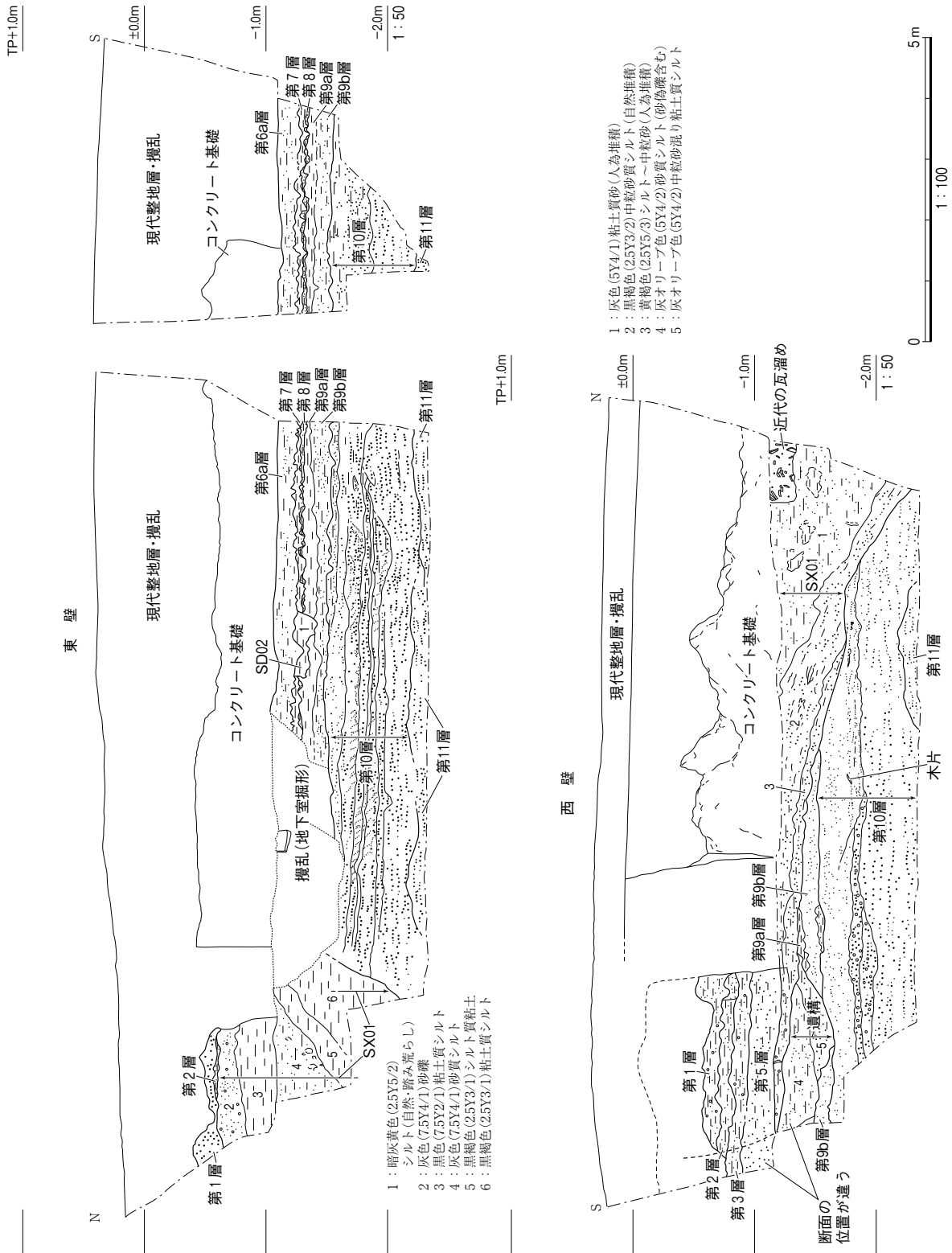


図5 東壁・西壁地層断面図

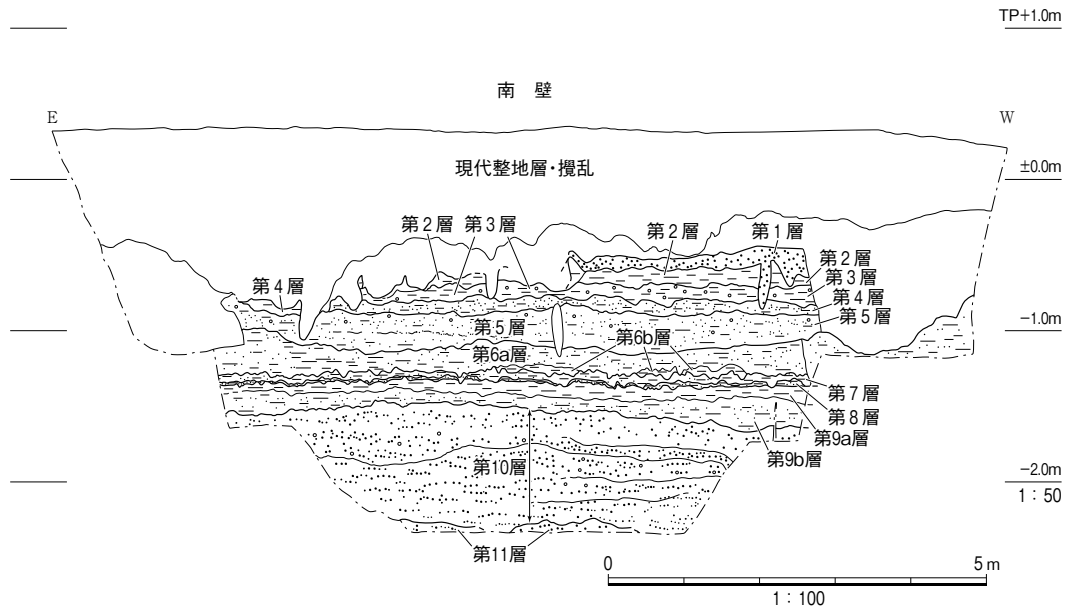


図6 南壁地層断面図

り、層厚は最大で7 cmであった。南側以外では上位層の耕作によって消滅したものとみられる。第6a層からは土師器皿5 (図8)と細片ながら瓦質土器が出土しており、中世後半の地層とみられる。また、上位の第3～5層からは遺物が発見されていないが、中世から18世紀までの作土層ということになる。

第7層：黒褐色(2.5Y3/2)わずかに極細粒砂混りシルトからなる湿地性の堆積層で、層厚は10cm未満であった。上面・下面ともに凹凸が激しく、踏み荒らされたものとみられた。本層上面でSD02が検出された。

第8層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト～極細粒砂からなる水成層で、層厚は最大で10cmであった。上面は上位層からの踏込みで凹凸が顕著であった。

第9a層：暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルトからなる湿地性の堆積層で、層厚は10cmであった。

第9b層：黒褐色(2.5Y3/2)極細粒砂～シルトからなり、下位から続く河成堆積の最終段階のものである。層厚は10～20cmであった。

第10層：黄灰色(2.5Y5/1)細粒～中粒砂、灰オリーブ色(5Y5/2)粘土質シルト～中粒砂などからなる河成堆積層で層厚は80cm前後であった。前置葉理の方向からみた古流向はW3° S、W31° Nなどで、東→西を基調としていた。出土遺物は土師器1～4を掲載した(図8)。1は広口壺、2は甕か鉢の底部、3は甕、4は器種が不明であるが手あぶり形土器の可能性はある。古墳時代初頭～前期に属するものである。

第11層：オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質砂からなる水成層で、層厚は15cm以上であった。上位層に比べて泥質を帯び、暗色を呈する。上位層に比べ流速の低い環境での堆積が考えられる。

## ii) 遺構と遺物

### a. 第7層上面(図7・8、図版2)

SD02 幅1.0～1.3m、深さ7 cmで、方位はE30° Nで直線的に延びる。埋土はシルトが自然に堆積した後に踏み荒らされた形跡がみられた。遺物は出土しなかったが、上位層は中世の地層なので、中

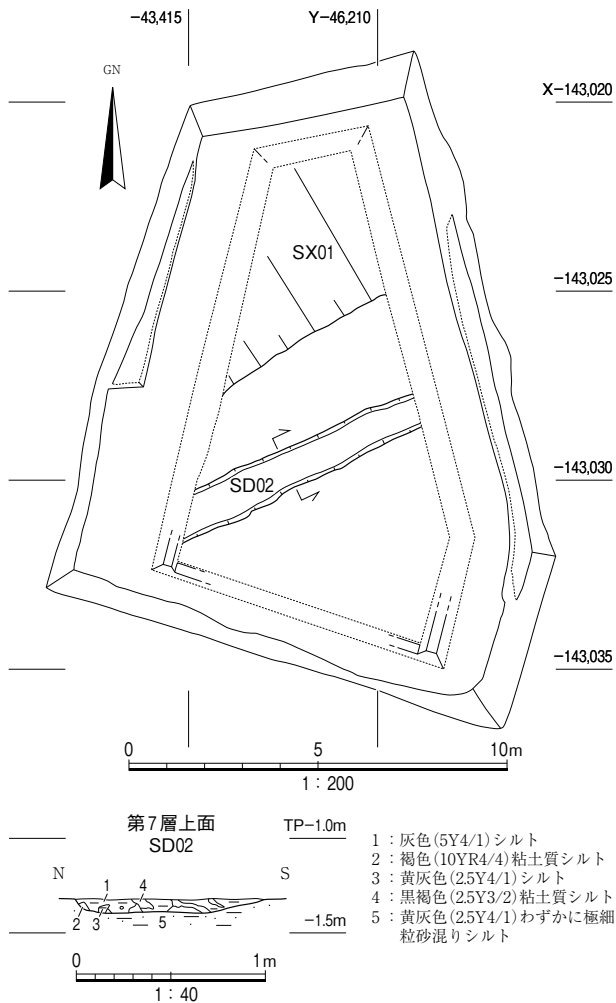


図7 第7層上面平面図・SD02断面図

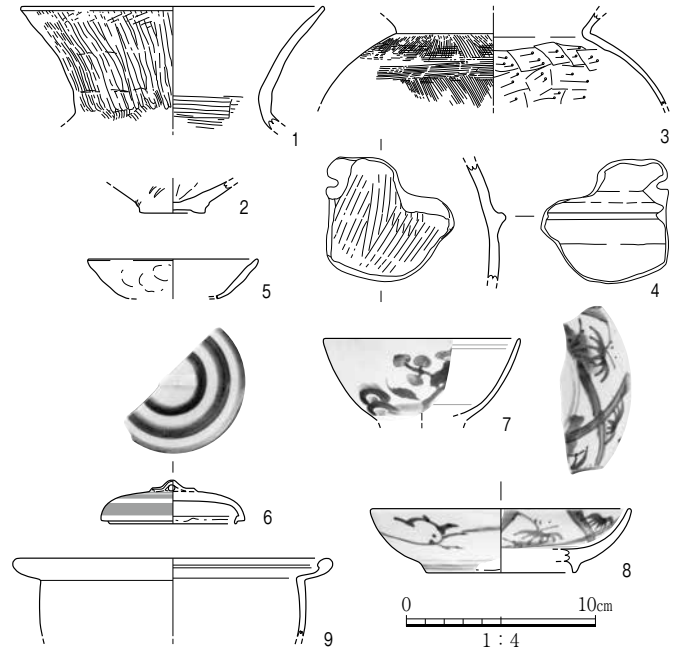


図8 出土遺物実測図  
第10層(1~4)、第6a層(5)、SX01(6~9)

世以前の遺構である。

#### b. 第3層上面

**SX01** 第3層上面の遺構であるが、第6層までを重機で掘削したため、第7層の上面で検出した。北西に向って下がる大きな落込みである。東壁地層断面でみると、深さは1.6mを越えてなお下方へ

続く。人為的な埋め土をはさみながら、泥質な堆積物が流れ込んで埋っていた。遺構の性格は不明であるが、堆積状況からみるとため池などである可能性があろうか。出土遺物は肥前磁器染付蓋6、同碗7、同皿8、関西系陶器土鍋9を掲載した(図8)。これらは18世紀後半に属するものである。

### 3)まとめ

- ・古墳時代初頭～前期以降に堆積した分厚い河成堆積層が検出された。流向は東から西方向が基調で、古代中津川の前身流路[趙哲済・中条武司2017]との関係が考えられる。この層が堆積した後は湿地となった。
- ・中世後半には湿地は耕起されて耕作地となった。
- ・その後、近世に至るまで作土層が重なっていた。耕作地として長く利用されたものであろう。

#### 引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「大深町遺跡B地点発掘調査(OC11-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)』、pp.35-42

2015、「中津3丁目所在発掘調査(CT13-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)』、pp.1-14

2018a、「中津3丁目所在遺跡C地点発掘調査(CT16-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2016)』、pp.9-14

2018b、「豊崎3丁目所在遺跡発掘調査(TS16-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2016)』、pp.91-98

大阪文化財研究所2018、『中津3丁目所在遺跡B地点発掘調査報告』、pp.1-19

趙哲済・中条武司2017、「大阪海岸低地における古地理の変遷—「上町科研」以降の研究—」：『ヒストリア』第264号、大阪歴史学会、pp.19・20

南・西壁地層断面  
(北東から)



東壁南部地層断面



南壁東部地層断面







西壁北部地層断面



第7層上面  
(南東から)



SD01(西から)





北区中之島五丁目1-13の一部における建設工事に伴う  
中之島蔵屋敷跡発掘調査(NX22-3)報告書

調査個所 大阪市北区中之島5丁目1-13の一部  
調査面積 85㎡  
調査期間 令和5年3月10日～3月29日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋 工、岡村勝行

## 1) 調査に至る経緯と経過

中之島蔵屋敷跡は、大川の中洲である中之島にあり、北に堂島川、南に土佐堀川が西流する。おもに徳川期には、堂島や土佐堀・江戸堀と並び、諸藩の蔵屋敷が置かれ、年貢米や諸国特産品の換金・流通の拠点として各藩の財政を支えるとともに、大坂の経済の中心となった。中之島での諸藩蔵屋敷の開設は一部豊臣期に遡るが、本格的な土地開発は淀屋常安による1619(元和5)年の中之島開発が契機となった。その開発地は、今回の調査地を含む、現在の中之島4～6丁目にあたる。

調査地は、中之島蔵屋敷跡の西部、リーガロイヤルホテルの南側、住友病院の東側に所在する。越中橋の北詰やや東寄り、土佐堀川の河岸近くにあり、現存する最古の「大坂図」として知られる「大坂三郷町絵図」(1655(明暦元)年)には、「京極刑部」の記載が見られる。京極家は1658(万治元)年に龍野から丸亀に領地替えになっており、上記は播磨龍野藩時代の蔵屋敷と推定されるが、その後の古絵図では幕末まで同地には「丸亀」もしくは「京極」が確認でき、調査地は1658年以降一貫して、京極家丸亀藩の蔵屋敷内にあったことが窺える。

今回の調査に先立ち、大阪市教育委員会により、令和4年12月21日に敷地内の1箇所を試掘調査が行われ、現地表下1.2m以下で、江戸時代の3時期の生活面および遺物包含層が検出された。この結果を受け、本調査は東西8m、南北10mで、汚染土壌の影響のおよぶ現地表下2.2mまでを対象として、実施することとなった(図2)。調査前に調査区の境界に土留め銅板が、既設管のある東辺を除く3箇所を設置され、約0.5m地下げされていた。令和5年3月10日に調査を開始した。まず重機で現代盛土を掘削した。下位層は人力で掘り下げ、各遺構面で遺構・遺物を検出し、実測・写真撮影による記録を進めた。3月29日に現地における全調査作業を終了し、資材・機材を撤収した。

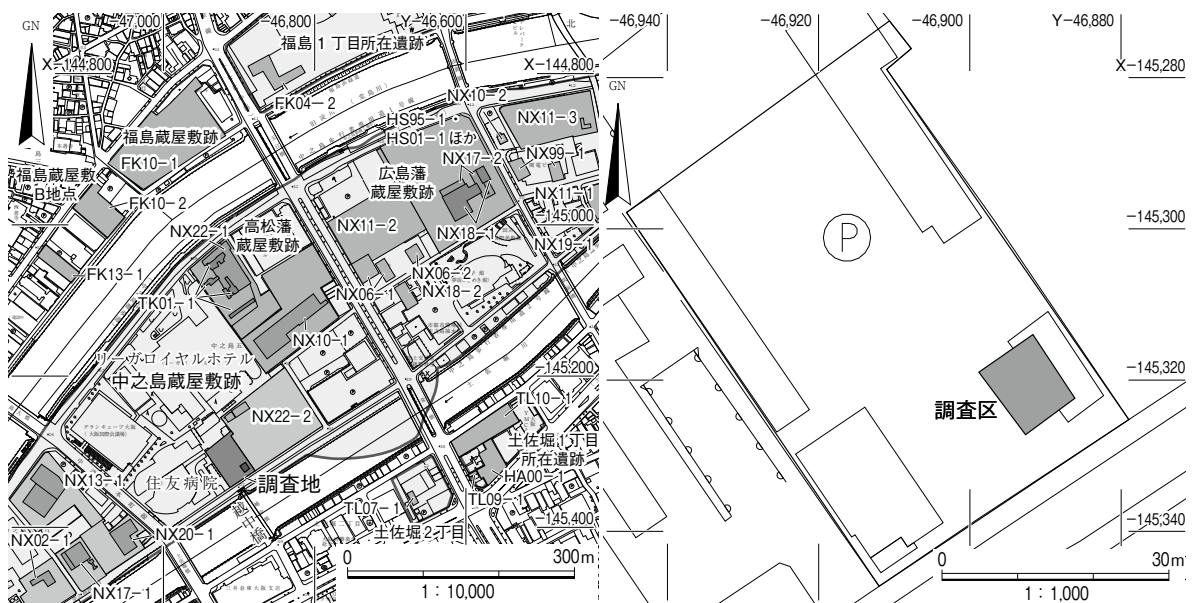


図1 調査地位置図

図2 調査区位置図

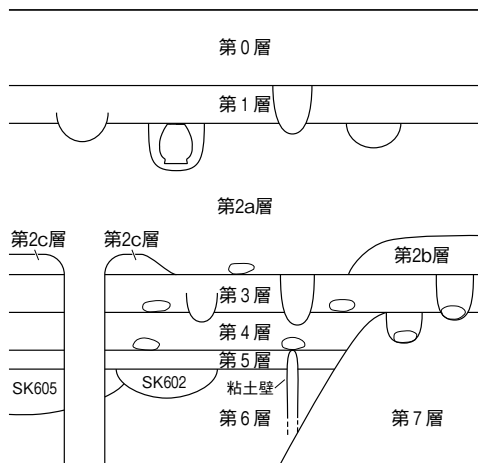


図3 地層と遺構の関係図

報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500  
 大阪市デジタル地図に合成することによって得た世界測  
 地系座標に基づき、座標北を基準とした。標高はT.P.値  
 (東京湾平均海面値)を用いてTP±〇mと表記した。なお、  
 本報告の遺物の記載は調査課学芸員小田木富慈美が担当  
 した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3～6、図版1)

調査地周辺の現地表の標高はTP+1.0m前後で、ほぼ平  
 坦である。調査区の地層を次の第0層～第7層に大別した。

第0層：現代盛土層及び攪乱層で、層厚は70～130cmである。

第1層：黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂シルトを主体とする19世紀以降の整地層で、層厚は20cm前後であ  
 る。北壁に沿って、幅数10cmのみ確認した。

第2層は3層に細分した。

第2a層：にぶい黄橙色(10YR6/4)中粒砂を主体とする近世の盛土層で、層厚は約40cmである。肥  
 前磁器、関西系陶器、軟質施釉陶器、土師器など、18～19世紀の遺物が出土した。上面でSX05・21、  
 土壌などが検出された。

第2b層：褐色(10YR4/6)粘土質シルトの偽礫を主体とする近世の盛土層で、層厚は約30cmである。  
 北壁に沿って、幅約0.6mの範囲にのみ分布する。遺物は確認できなかった。

第2c層：暗オリーブ色(5Y4/3)粘土質シルト～粗粒砂からなる近世の盛土層で、層厚は20～30cm

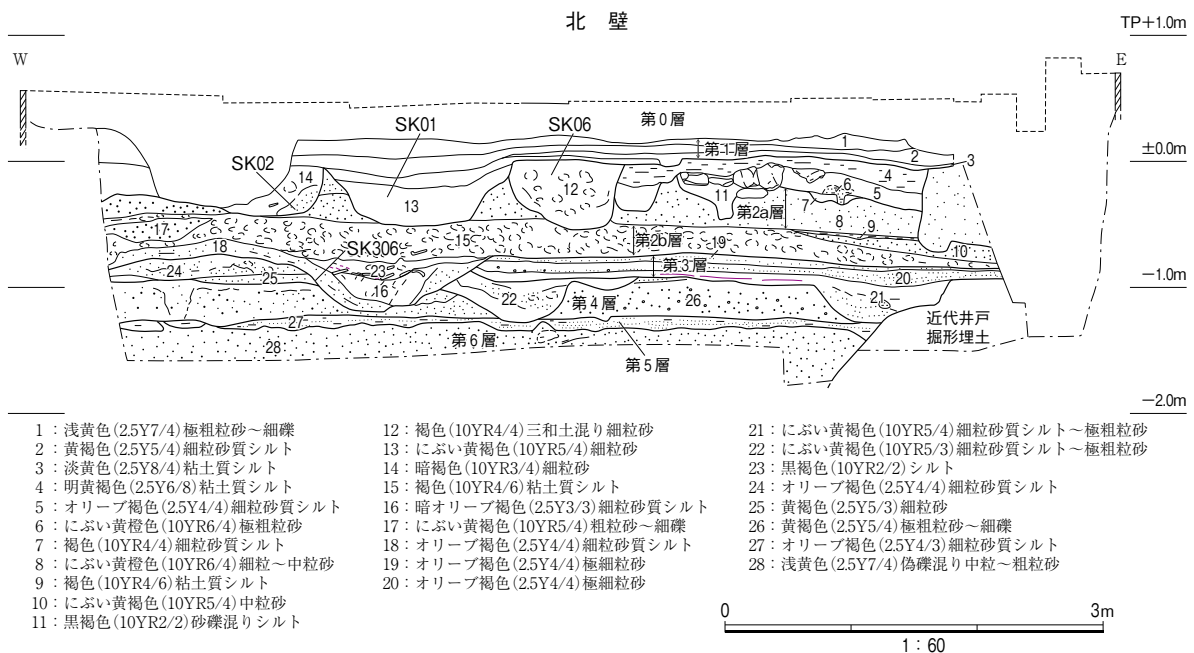


図4 北壁地層断面図

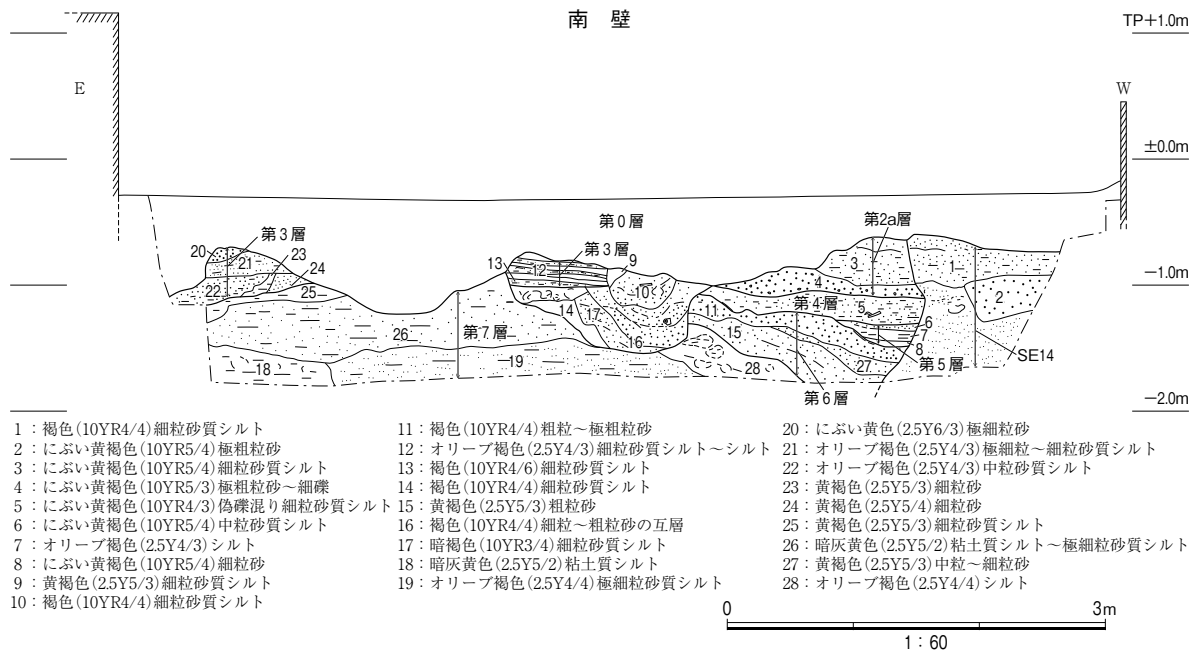


図5 南壁地層断面図

である。西壁近くにはのみ分布する。

第3層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂を主体とする近世の整地層である。厚さ2～5cmの薄層2～4層からなり、全体の厚さは5～20cmである。肥前磁器、丹波挿鉢など17世紀中～後葉の遺物が出土した。上面、層中で柱穴、土壌を多く検出した。

第4層：黄褐色(2.5Y5/4)極粗粒砂を主体とする近世の盛土層で、層厚は30cm前後である。中国産青花皿、肥前陶器・磁器、丹波焼、平瓦など17世紀中～後葉の遺物が出土した。

第5層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂シルトを主体とする近世の整地層で、層厚は5～10cmである。中国産青花皿、肥前陶器皿・鉢、丹波焼挿鉢、高取焼皿、丸瓦、硯など、徳川初期の遺物が出土した。

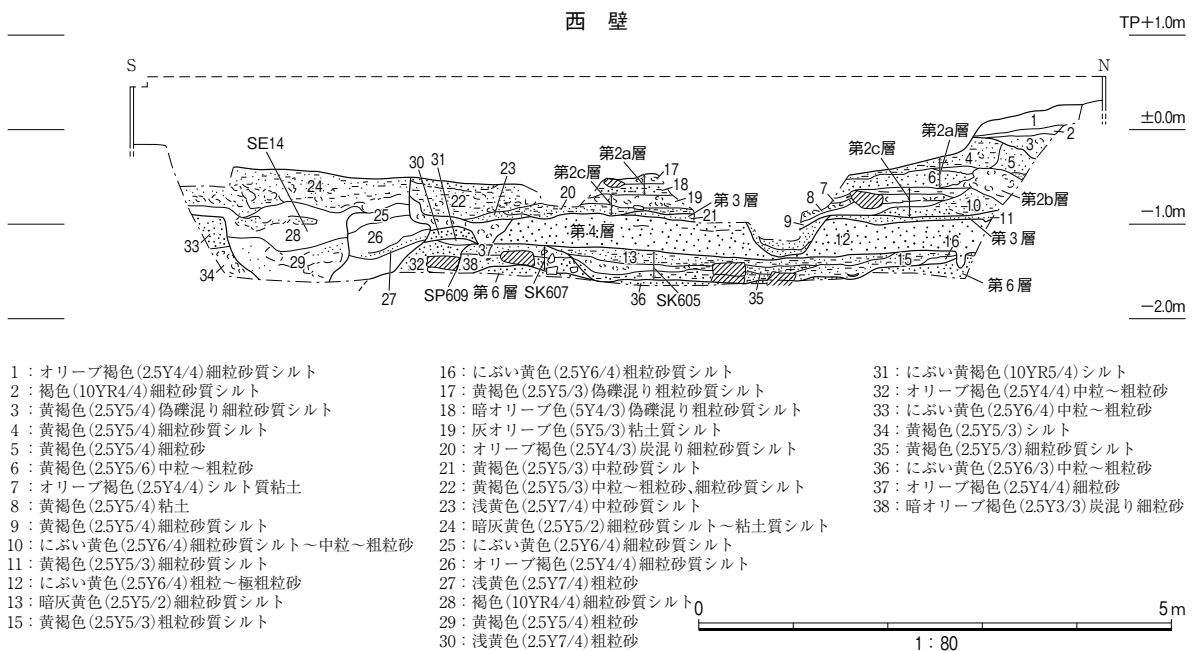


図6 西壁地層断面図

上面で、SB502、SK501などを検出した。

第6層：浅黄色(2.5Y7/4)極粗粒砂を主体とする近世の盛土層で、層厚は60cm以上である。ベトナム産陶器、九州産陶器甕、備前焼播鉢、肥前陶器皿、土師器焙烙、丹波焼播鉢、丸瓦など、豊臣後期の遺物が出土した。上面でSK602～608、層中で粘土壁を検出した。

第7層：黄褐色(2.5Y5/3)粘土質シルトを主体とする近世の盛土層で、層厚は80cm以上である。調査区南東部にのみ分布し、土手状遺構を形成する。遺物は確認できなかった。

ii) 遺構と遺物(図7～15、表1、図版1～4)

遺構の検出は、第2a層、第3層、第5層、第6層のそれぞれ上面と、第3層、第6層の層中で行った。個々の遺構の基本情報は表1に示した。下記には主要な遺構を記載する。第3層上面・層中については、遺構、とくに礎石の帰属層準が困難であったため、一括して図示することにする。なお、調査区の主軸方位は北から西に約40°傾いているが、煩雑を避けるため、調査区内の方位は、北西壁(平面図の天)を北と仮定して、表現することにする。

A. 遺構

a. 第7層の遺構(図5・7、図版1下)

土手状遺構：調査区の南東で検出した、幅1.5m以上、長さ4m以上、高さ0.8m以上の盛土遺構である。主軸は真北に対して、東に約35°、土佐堀川に対して、北に約20°傾く。この土手状遺構から西へ川砂(第6層)による盛土が施されており、この地の盛土造成の基軸の一つと考えられる。遺物は確認できなかった。

表1 検出遺構一覧

遺構番号	検出層位	長辺	短辺	深さ	遺物の時期、 特記事項	遺構番号	検出層位	長辺	短辺	深さ	遺物の時期、 特記事項	遺構番号	検出層位	長辺	短辺	深さ	遺物の時期、 特記事項
土手状遺構	第7層上	400<	180<	90<		SK317	第3層中	60	55	15		SK15	第2a層上	15	15	15	
粘土壁	第6層中	315<	5	45<		SK318	第3層中	40	40<	15		SK18	第2a層上	140	80	35	
SK602	第6層上	135	270<	25	徳川初	SK320	第3層中	40	30	5		SX21	第2a層上	50	50	45	甕を倒立させて設置
SK603	第6層上	130<	70<	30	徳川初	SK321	第3層中	40	40	10		SK26	第2a層上	30	15	10	
SK605	第6層上	250<	470<	30	豊臣後～徳川初	SP322	第3層中	65	60	40		SK27	第2a層上	40	30	10	
SK606	第6層上	50	45	15		SK323	第3層中	130	100<	20		SK28	第2a層上	25	15	5	
SK607	第6層上	140<	110<	30		SK324	第3層中	45	30	30		SK29	第2a層上	30	20	25	
石群608	第6層上	-	-	-		SP331	第3層上	75	75	40		SK30	第2a層上	20	20	10	
SP609	第6層上	50<	35<	30<	礎石柱穴	SK334	第3層上	60	20<	40		SK33	第2a層上	25<	15	15	
SK501	第5層上	85	85	15		SK343	第3層上	55	55	20		SP35	第2a層上	15	15	40	
SB502	第5層上	525<	-	-		SK344	第3層上	45	45	15	17c後半～	SP36	第2a層上	20	20	35	
礎石503	第5層上	45	45	18		SK345	第3層上	70	60	40	17c後～18c前	SP37	第2a層上	35	35	20	
礎石列301	第3層上	460<	-	-		SK01	第2a層上	115	50<	60	18c末～19c初	SK38	第2a層上	35	30	15	19c～
SK301	第3層上	140	125	90	18～19c、 底から平瓦出土	SK02	第2a層上	230	135<	80	19c前～19c中	SP39	第2a層上	25	25	10	
SK302	第3層上	85	85	60	18c後～	SK03	第2a層上	140	120	85	明治30年～	SK40	第2a層上	35	30	10	
SP303	第3層上	60	60	60		SK04	第2a層上	120	70	25	19c～	SK41	第2a層上	45	40	20	
SK304	第3層上	50	50	15		SX05	第2a層上	80	70	30	甕を倒立させて設置	SK42	第2a層上	60	35	30	
SK305	第3層上	30	25	10		SK06	第2a層上	100	60	30		SK343	第2a層上	55	55	20	
SK306	第3層上	210<	150	60	17c後半～	SK07	第2a層上	80	50	30		SK44	第2a層上	80	55	40	19c～
SK307	第3層上	65	30<	5		SK08	第2a層上	40	20	15		SK45	第2a層上	45	35<	50	18c後半～
SK308	第3層上	35	20<	10		SK09	第2a層上	90	80	25		SK46	第2a層上	45	40	35	
SK311	第3層中	45	30	5	17c後半	SK10	第2a層上	75	75	10		SK47	第2a層上	45	15<	10	
SK312	第3層中	75	60<	25	17c中	SK11	第2a層上	50	30	30							
SK313	第3層中	60	50	10		SK12	第2a層上	35	25	15							
SK314	第3層中	35	25	10		SK13	第2a層上	30	30	20							
SK315	第3層中	45	30	5		SE14	第2a層上	220<	220<	120<	19c～	※ 数値の単位はcm、遺物の時期は遺構の時期を示すと考えられる時のみ記載。					



b. 第6層中の遺構(図7・8、図版2下)

粘土壁：調査区東寄りで検出した、建物の壁体である。固められた粘土質シルトからなり、厚さは5 cm前後で、長さ3.00m以上、高さは0.50m以上である。調査区の長軸に平行する。湧水のため、設置面まで確認することはできなかった。

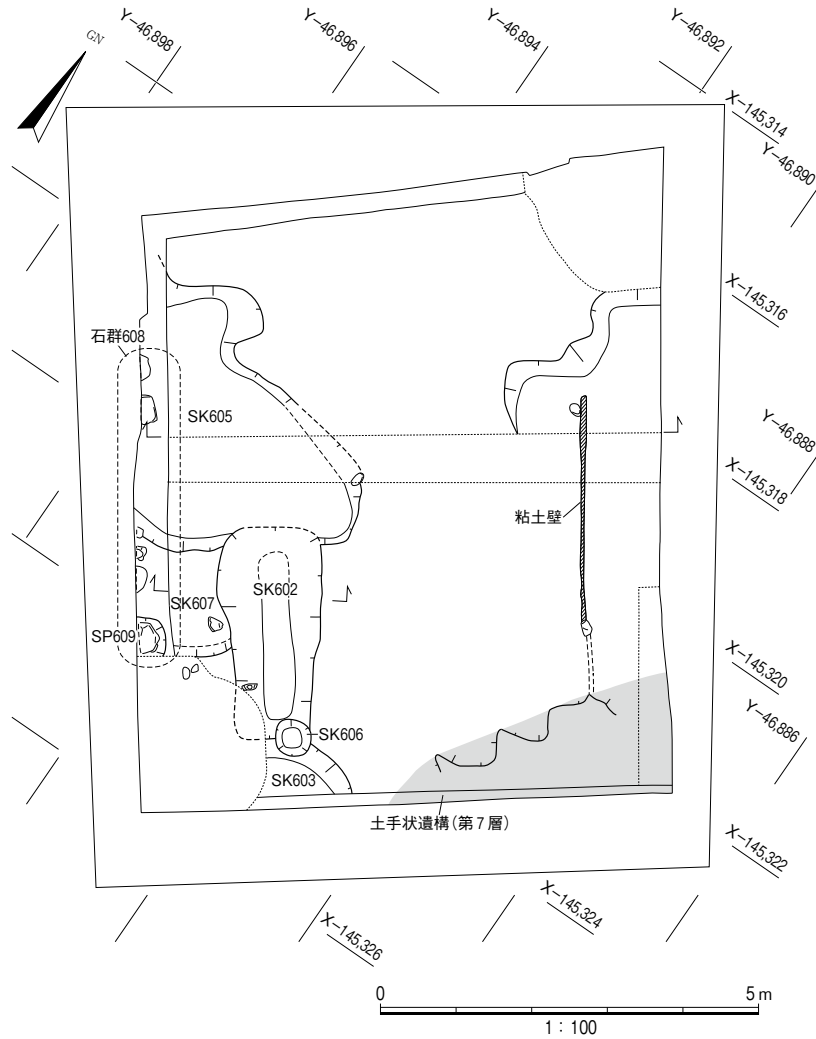


図7 第7層・第6層中・上面遺構平面図

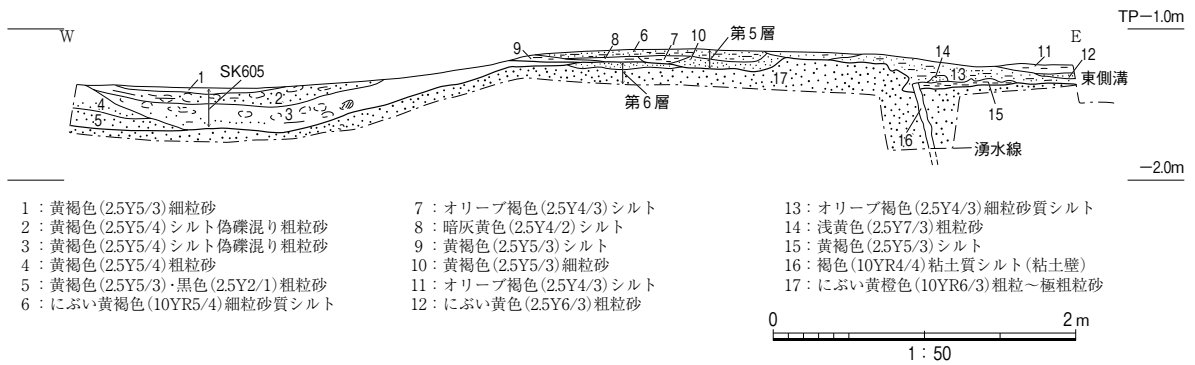


図8 中央東西断面図

c. 第6層上面遺構(図7・8・12、図版1中、2上・中)

土壌、柱穴、礎石群があり、すべて調査区西部で検出された。

SK602:長辺2.70m、短辺1.35m、深さ0.25mの土壌である。SK603・605・607を切る。青花碗・皿、肥前陶器碗・壺、土師器皿・土釜など、徳川初期の遺物が出土した。出土遺物は、SK602・605出土遺物と接合し、これらの遺構はほぼ同時期の可能性がある。

SK603:長辺1.30m以上、短辺0.70m以上、深さ0.30mの土壌である。肥前陶器碗・皿、高取焼皿州産陶器壺・甕、土師器焼塩壺・火入れなど、徳川初期の遺物が出土した。

SK605:長辺4.70m以上、短辺3.00m以上、深さ0.30mの土壌である。青花碗・皿、肥前陶器碗・皿・壺、丹波焼播鉢、土師器皿・焼塩壺、ミニチュア土師器などが出土した。

SK606:長辺0.50m以上、短辺0.45m以上、深さ0.15mの土壌である。SK602・603を切る。土師器皿が出土した。

SK607:長辺1.40m以上、短辺1.10m以上、深さ0.30mの土壌である。

石群608:調査区西壁に沿って、4個ほどの大型の石が検出された(図版1中)。SP608を除き、SK605・607内にあり、原位置であるか明確でなく、また組み合わせも不明だが、個々の石は長辺30~40cm、厚さ約15cmと大きく、堅牢な構造物に用いられた礎石を想定させる。

SP609:長辺0.50m、短辺0.35m以上、深さ0.30m以上の礎石のある柱穴である。SK607を切る。

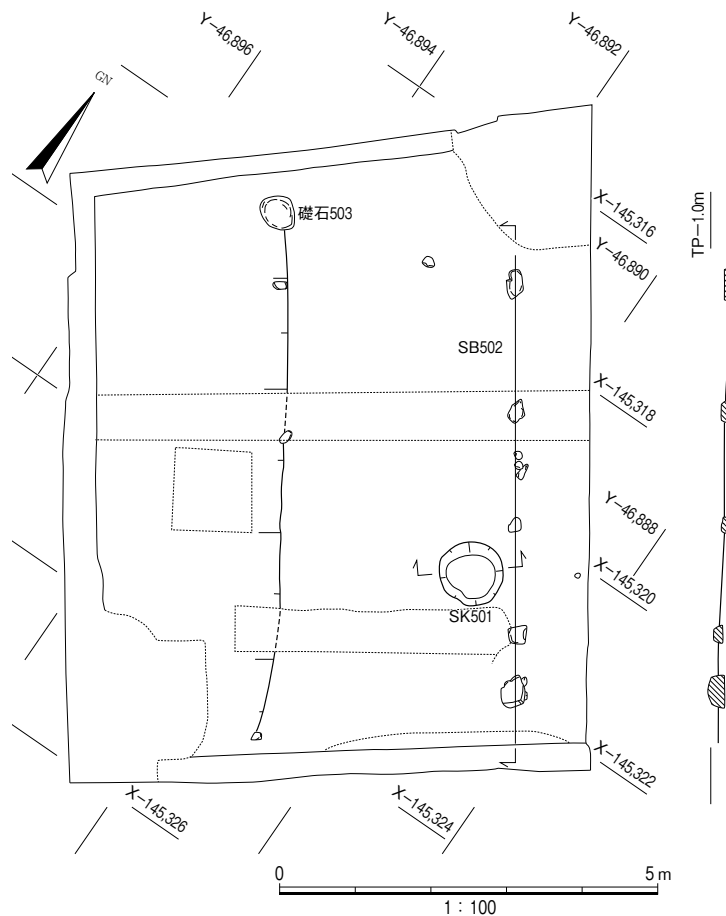


図9 第5層上面遺構平面図

d. 第5層上面遺構(図9・12、図版3上)

SK501: 直径0.85m、深さ0.15mの土坑である。平瓦が出土した。

SB502: 長さ5.25m以上の礎石建物の西側柱列である。南北4間分を検出し、柱間は南から、0.75m、1.40m、1.45m、1.65mである。礎石は長辺0.15~0.45mと幅があるが、全体に小ぶりである。礎石列は第6層中で検出された粘土壁と同じ位置にあり、第6層で埋没した建物との間の時間差が小さく、開発計画の連続性が窺える。

礎石503: 一辺0.45m、厚さ0.18mの大型礎石である。組み合う礎石は調査区内で確認できなかったが、西方への落ちの上端に位置し、南へ長辺0.10~0.20mの小ぶりの石が3つ検出された。

e. 第3層上面・層中遺構(図10・12、図版3中・下)

柱穴、土坑のほか、礎石の可能性のある約30個の石を検出した。調査区北西部に多い傾向は認められるものの、明確な組み合わせを見出せなかった。なお、第3層中遺構は第3層を構成する整地層上面検出遺構をさす。

礎石列301: 調査区南部で検出した柱穴列である。柱間は西から1.40m、1.60m、1.50mである。東端は攪乱により、掘形を欠失し詳細は不明であるが、礎石が他よりかなり薄く、別遺構の可能性があり。掘形は直径0.60~0.80m、深さ0.60~0.75mである。柱穴が深く、大型の礎石が用いられており、堅牢な構造物を想定させる。いずれの柱穴からも時期を特定できる遺物は確認できなかった。

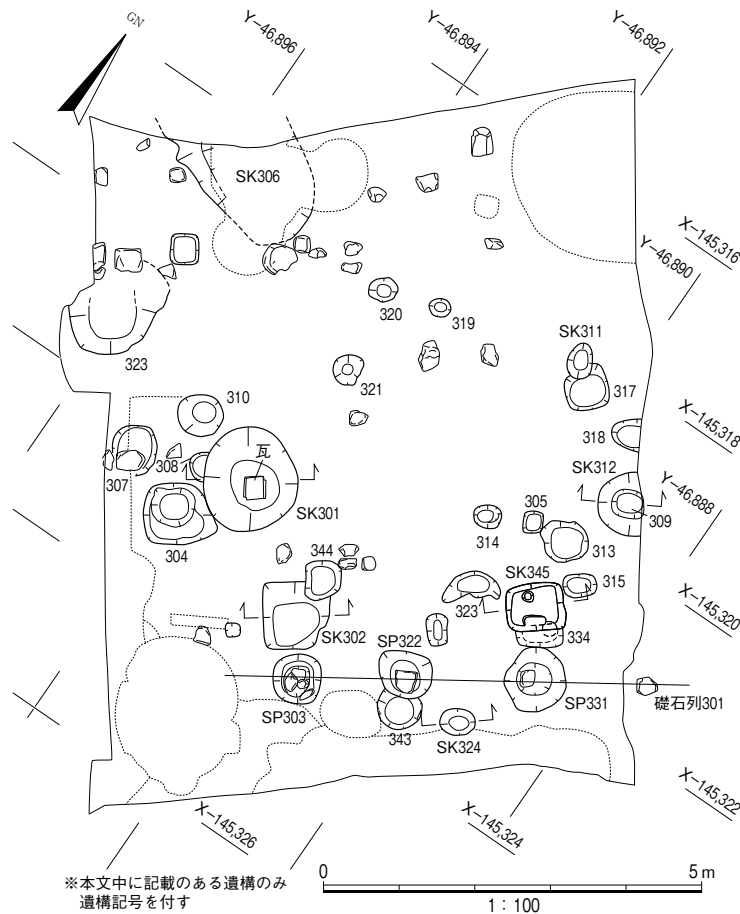


図10 第3層中・上面遺構平面図

SK301：長辺1.40m、短辺1.25m、深さ0.90mの土壇である。底中央で平瓦が一枚検出された。埋土は締まりのない偽礫を多く含む粗粒砂を主体とする。出土遺物は平瓦のほか、肥前陶器碗・皿、信楽焼甕が出土した。

SK302：一辺0.85m、深さ0.60mの土壇である。肥前磁器皿・鉢、関西系陶器土瓶など18世紀後半以降の遺物が出土した。

SK306：長辺2.10m以上、短辺1.50m、深さ0.60mの土壇である(図版3下)。埋土中層には多くの瓦が廃棄されていた。出土遺物は瓦のほか、肥前陶器皿、肥前磁器皿、土師器皿など、17世紀中葉に属する遺物が出土した。

SK311：長辺0.45m、短辺0.30m、深さ0.05mの土壇である。肥前磁器小杯が出土した。

SK312：長辺0.75m、短辺0.60m以上、深さ0.25mの土壇である。肥前磁器碗、土師器皿などが出土した。

SK345：長辺0.70m、短辺0.60m、深さ0.40mの土壇である。軟質施釉陶器、肥前磁器碗、関西系陶器など17世紀末～18世紀前半の肥前磁器が出土した。

f. 第2a層上面遺構(図11・12、図版4)

SX05：長辺0.80m、短辺0.70m、深さ0.30mの土壇である。掘形の底部から0.1mほど上で、肥前

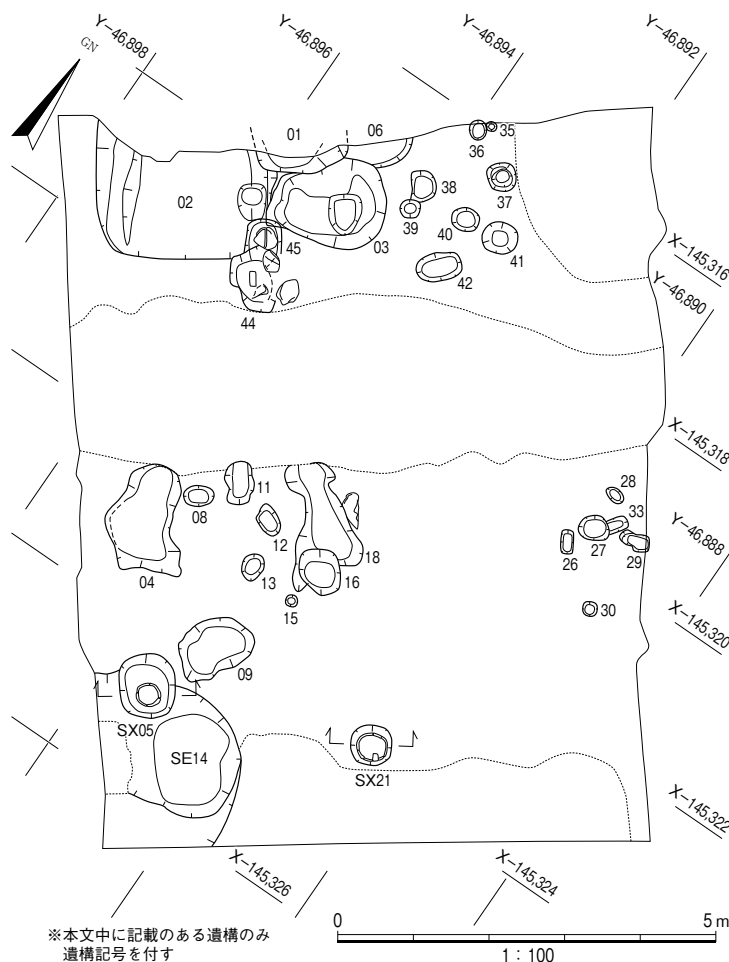


図11 第2a層上面遺構平面図

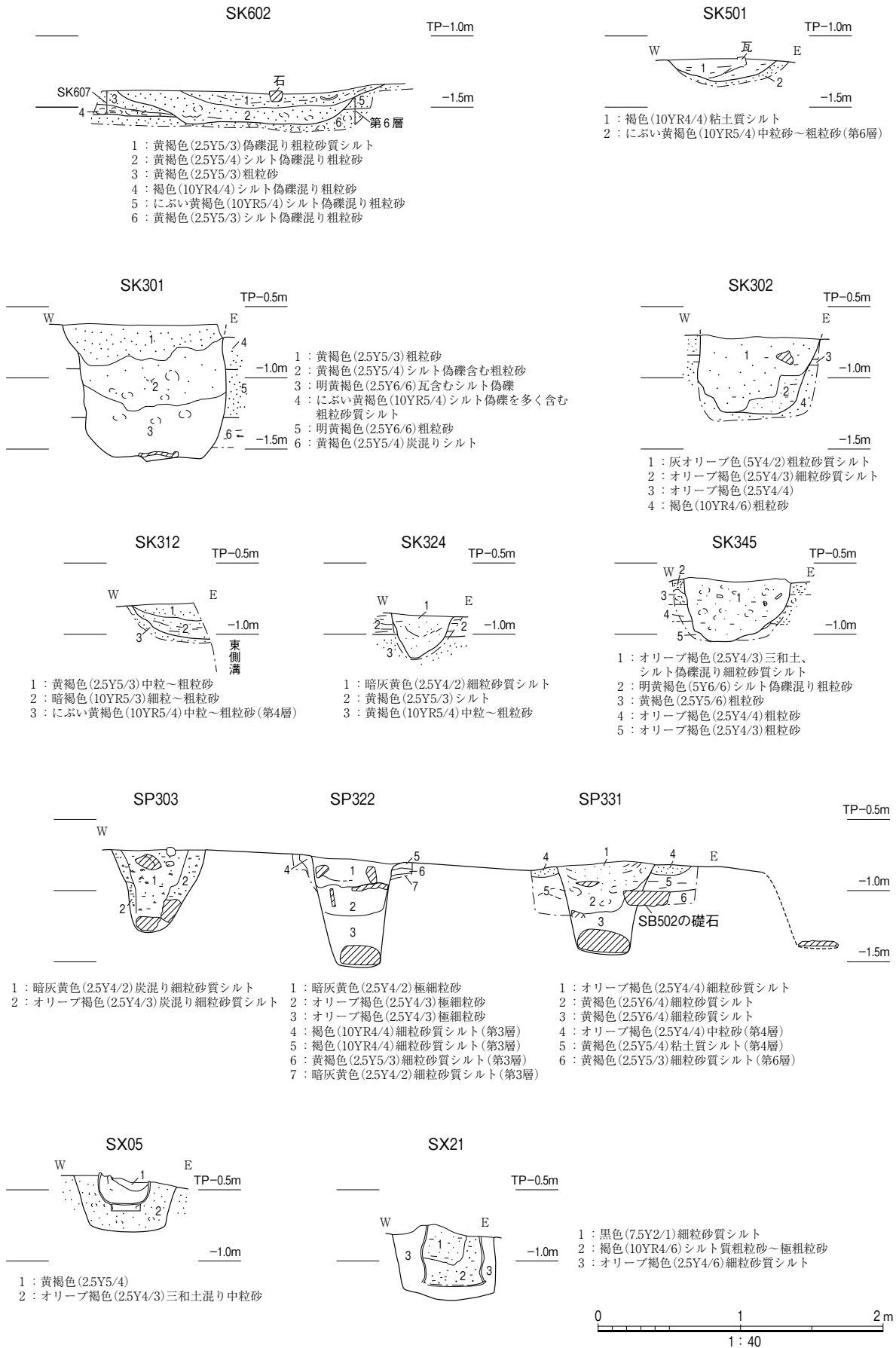


図12 遺構断面図

陶器の甕が倒立した状態で設置されていた(図版4中)。掘形底部に石は敷かれておらず、また甕の底には穴がなかったことから、水琴窟ではなく、雨落ち部分の排水用暗渠などの用途が想定される。

SX21:長辺0.50m、短辺0.50m、深さ0.45mの土壇である。掘形の底部に甕が倒立した状態で設置されていた(図版4下)。甕底は欠失しており、穴の有無は確認できないが、掘形底部に石敷は確認できなかったことから、水琴窟の可能性は低く、SX05同様の用途が考えられる。

SE14:長辺2.20m以上、短辺2.20m以上、深さ1.20m以上の井戸である。下位層由来の遺物のほか、瀬戸美濃焼陶器鉢、丹波焼徳利、信楽焼甕など、19世紀と考えられる遺物が出土した。

## B. 遺物(図13~15)

### a. 豊臣期以前~徳川初期の遺物

第6層: 1は咸平元宝<sup>かんぺいげんぼう</sup>である。初鑄は998年で、日本では15世紀以降に流通していたとされる。2

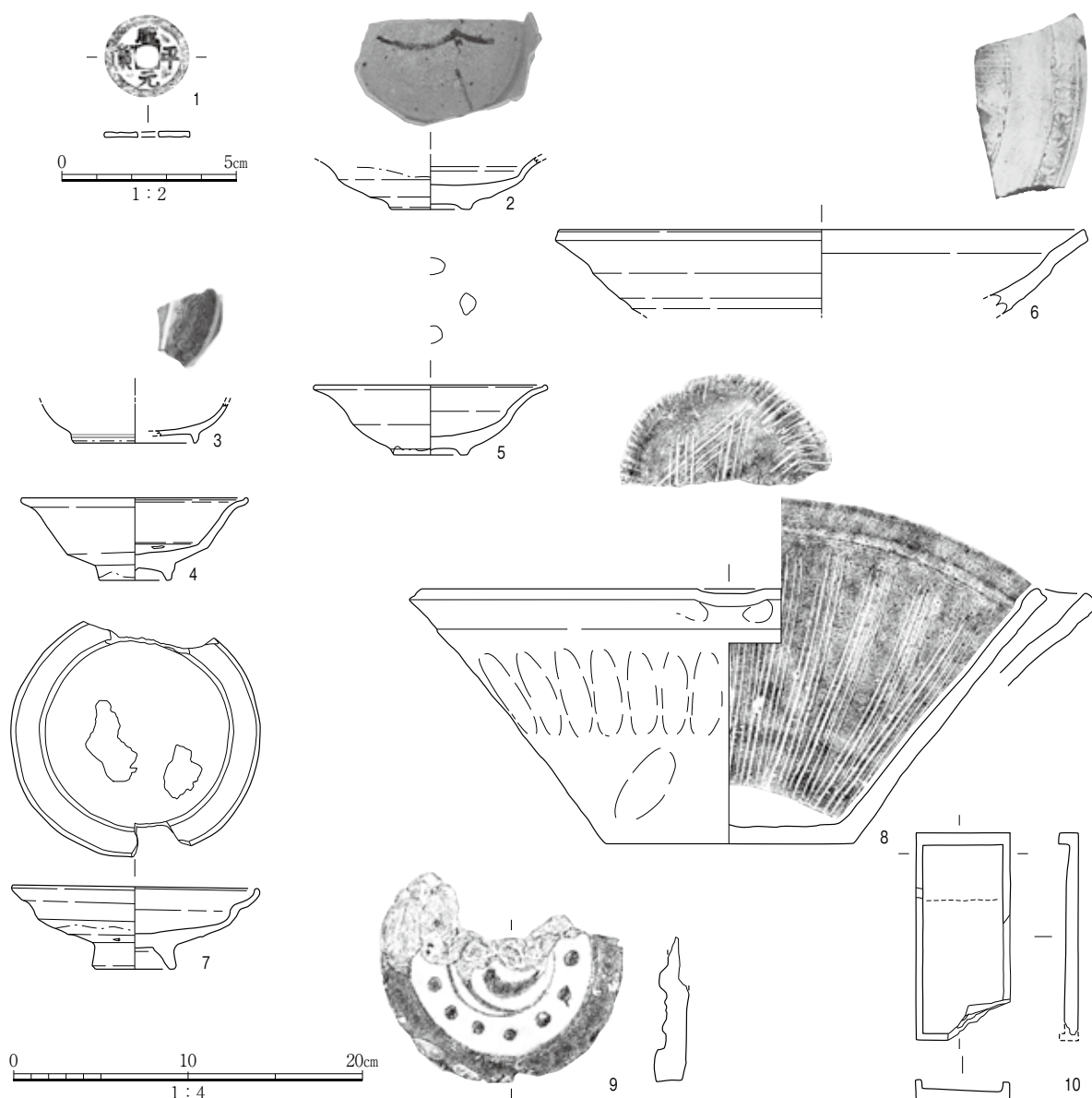


図13 出土遺物実測図(1)  
第6層(1)、第6層上面(2)、第5層(3~10)

は第6層上面から出土した鉄絵を施す肥前陶器の皿で、胎土目跡が見られる。豊臣後期に属する。

SK602：11は中国南方産の青花碗で、口縁部が直線的に開く。12は中国漳州窯産の青花皿である。13は肥前陶器の碗、14は肥前陶器の壺である。15は土師器皿である。底部は平底で、外面にはユビオサエ痕跡が見られる。16は土師器の大和型土釜である。

SK603：17～21は肥前陶器の碗で、体部下半が湾曲するものと直線的なものがある。22は肥前陶器の溝縁皿である。23は高取焼の皿で底部内面の釉を長方形にはぎ取って目積みを行っている。高取焼内ヶ磯窯とみられる。24は肥前陶器の片口である。25は九州産陶器の壺で四耳を有するとみられる。内面には当て具の痕跡が残り、底部外面には貝目跡が見られる。26は九州産陶器の甕で、肩部に縄状突帯を巡らす。体部外面は斜格子状のタタキ、内面には同心円状の当て具痕跡が見られる。底部には輪状の窯道具跡が残る。27は土師器焼塩壺、28は土師器火入れである。以上のうち、19・26はSK605出土遺物、22はSK602出土遺物と接合した。また、25は第6層出土遺物と接合しており、下位層に伴う可能性が高い。

このほか、SK605からミニチュアの土師器羽釜29、土師器皿30が出土している。以上、第6層上面遺構の出土遺物は、肥前磁器を含まないことや肥前陶器の年代観から徳川初期に属するものと考えられる。

第5層：3は中国産青花の皿で、景德鎮窯産である。4・5は肥前陶器の溝縁皿で、胎土目跡が見られる。6は肥前陶器の鉢で、白泥で象嵌文様を施す。口縁部の屈曲は弱い。7は九州産陶器の皿である。口縁部は屈曲して開き、上縁部分の湾曲が強い。藁灰釉を施す。高取焼内ヶ磯窯ないしは上野焼釜ノ口窯であろう。8は丹波焼播鉢である。摺目は4条を1単位とする。9は三巴文軒丸瓦である。10は石製硯である。以上は肥前磁器を含んでいないことから徳川初期に属するとみられ、6はこれよりやや下る可能性がある。

#### b. 17世紀中葉以降の遺物

第4層：31は中国産青花皿で、漳州窯産である。SK602出土の12と類似するが、文様が退化して器壁も厚いことからやや時期が下り、17世紀前半であろう。

第3層：45は小型の管状土錘である。このほかに図示していないが、17世紀中葉の肥前磁器が出土している。

SK306：32は肥前磁器の染付皿である。33・34は肥前陶器の皿で、33は透明釉を施す。34は灰釉を施し、器壁が薄い。35は肥前陶器の把手で、鉄釉を施し一部に白泥を流し掛ける。1か所に円形の装飾を施す。36は土師器皿である。37は三巴文軒丸瓦である。以上は17世紀中葉に属するものであろう。

SK311：38は肥前磁器の草花文を施す染付小杯である。17世紀中葉に属する。

SK345：39～41は軟質施釉陶器である。いずれも釉の剥落が著しい。39は碗である。40は合子の身で、平面は楕円形を呈し、長軸の両端部分を窪ませている。41は手づくね成形で壺形の容器である。口縁部に装飾状の切れ込みがある。このほかに17世紀末～18世紀前半の肥前磁器が出土している。

SE14：42は中国産青花の碗で、SK602出土の11と同一器形である。17世紀前半に属する。43は肥前陶器の呉器手碗である。17世紀中葉に属する。

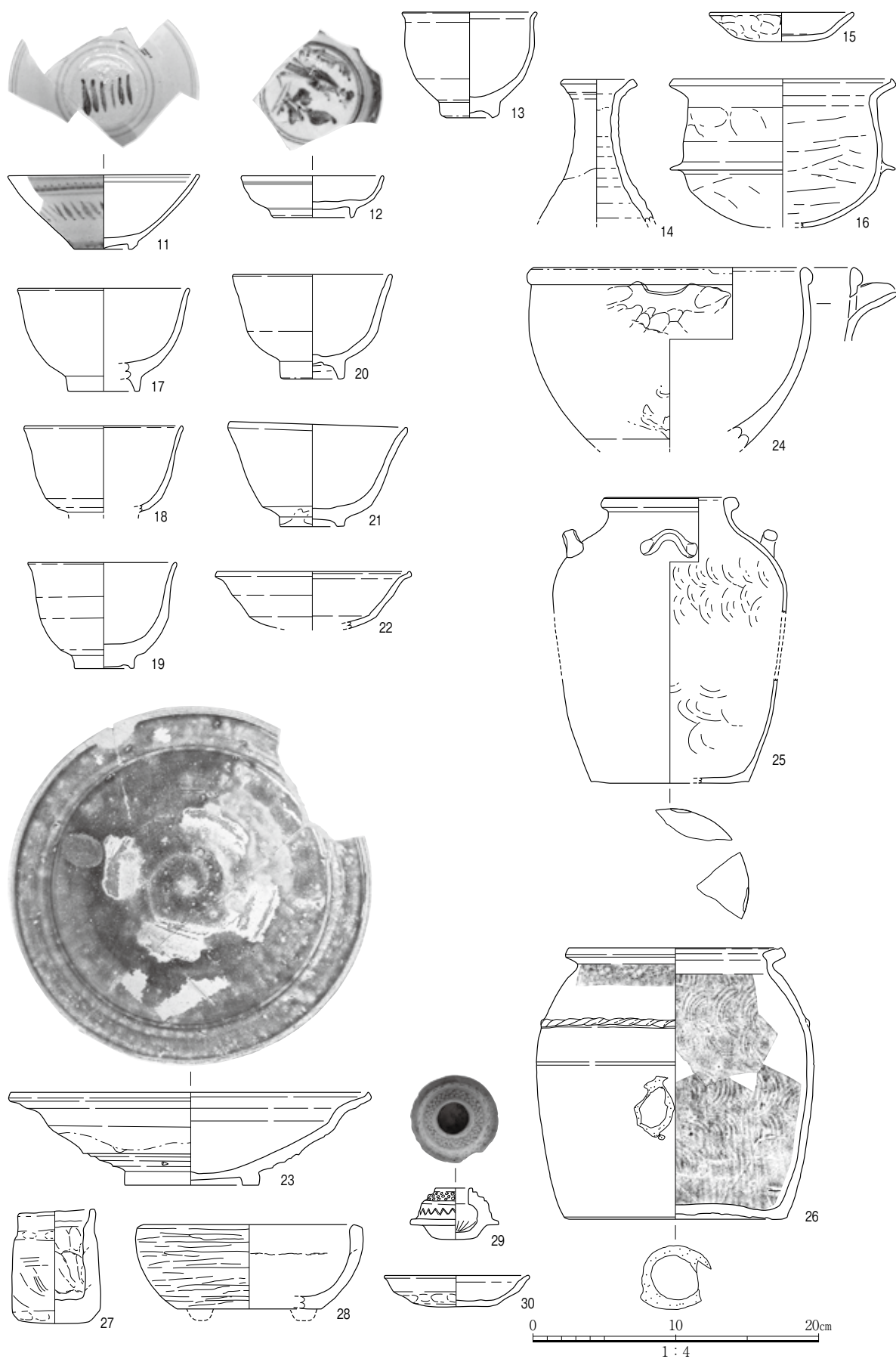


图14 出土遺物実測図(2)  
SK602(11~16)、SK603(17~28)、SK605(29·30)



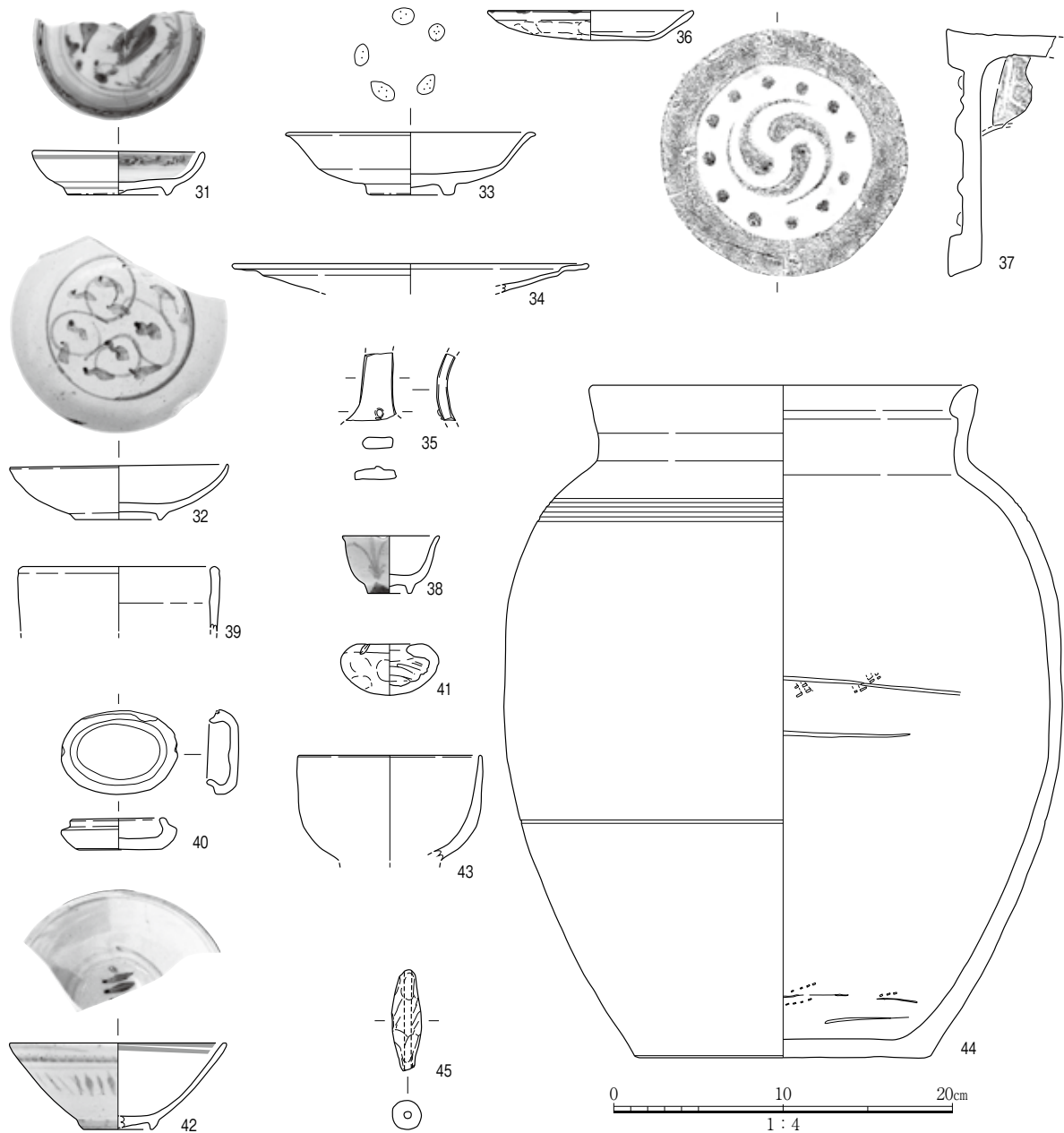


図15 出土遺物実測図(3)

第4層(31)、SK306(32~37)、SK345(39~41)、SK311(38)、SE14(42・43)、SX05(44)、第3層(45)

SX05：44は肥前陶器の甕である。口縁部は玉縁状であり、体部内面には格子目状の当て具痕が見られる。肩部と体部下半には沈線を巡らす。いわゆるハンズーガメの形態で、18世紀前半以降である。

### c. 調査地の歴史の変遷

今回の調査で明らかになった17世紀前葉から19世紀に至る、当地の土地開発、利用の変遷の要点は次のとおりである。

第1段階(17世紀前葉)：調査区南東部に土手状遺構が作られ、西側に向かって、川砂(第6層)で厚く盛土され、この際、既存の建物が埋没した。

第2段階(17世紀前葉)：調査区西部に土壙群が掘削された。

第3段階(17世紀前葉)：土壙群の埋没後に整地された面(第5層上面)にSB502が建てられた。この

建物はさきの埋没建物の位置を踏襲しており、二つの建物にはあまり時期差がなく、盛土造成(第1段階)から屋敷建設(第3段階)まで一連の計画のもとに進められたことが窺える。

第4段階(17世紀中葉～19世紀)：第4層(川砂)の盛土の後、第3層上面には多数の遺構が検出された。遺構出土遺物には18世紀後半のものも含まれ、また、第2層(川砂)には19世紀代の遺物もあったことから、この生活面は百数十年と長期に及んだものと考えられる。

第5段階(19世紀～)：第2a層上面で18世紀末以降、19世紀末頃までの遺物を含む遺構を確認した。

第1段階の大規模な開発は、時期的にも地域的にも、1619(元和5)年の淀屋常安による中之島の開発にあたるものと考えられる。第2段階は盛土造成にかかわった人々が残したものの可能性がある。その後、SB502を含む屋敷地については、17世紀後半以降、幕末に至るまで、当地に蔵屋敷を置いた京極家の動きから可能性を指摘する。中之島を開発した翌年から始まった徳川大坂城の再建工事には京極家(当時は若狭小浜藩主)も動員されており、築城工事の拠点として、この時に中之島に屋敷地が置かれた可能性がある。また、京極家は1637(寛永14)年から播磨龍野藩主となっているが、第4段階から急に増える遺構群は、この時期にあたり、龍野藩蔵屋敷の可能性が考えられる。

### 3)まとめ

中之島ではこれまでおよそ20回の調査が行なわれているが、その開発初期段階から蔵屋敷の設置に至る過程が明確になった例は、今回の調査地の南西200mのNX20-1次調査地[大阪市文化財協会2022]、北150mのNX10-1次調査地[大阪文化財研究所2012]など限られている。

今回の調査は小規模にもかかわらず、中之島の開発、蔵屋敷の設置と展開に関わる重要な情報を得ることができた。

### 引用・参考文献

大阪市文化財協会2022、『中之島蔵屋敷跡発掘調査報告Ⅳ』

大阪文化財研究所2012、『中之島蔵屋敷跡発掘調査報告』

北壁地層断面  
(東から)



西壁地層断面  
(東から)



南壁地層断面  
(北から)





第6層上面遺構全景  
(南東から)



SK602・605断面  
(南東から)



第6層中粘土壁断面  
(南東から)





第5層上面遺構全景  
(南東から)



第3層中・上面遺構全景  
(南東から)



SK306(南東から)







第2a層上面遺構  
(南東から)



SX05(南東から)



SX21(南東から)





北区大深町1-26の一部における建設工事に伴う  
大深町遺跡発掘調査(OC22-1)報告書

調査個所 大阪市北区大深町1-26の一部  
調査面積 約350㎡  
調査期間 令和4年8月16日～10月7日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋 工、趙 哲済、飯田真理子、岡村勝行、  
南 秀雄

### 1) 調査に至る経緯と経過

大深町遺跡は大阪市の北部、天満砂州(天満砂堆)の東側の大阪海岸低地に位置する近世の遺跡である。遺跡の地名が由来する「フカタ」「フケタ」「フケ」は一般に湿田や沼田を指し、明治20年の仮製地形図に示された遺跡周辺にひろがる水田がそのような深田であったとみられ、近世以前に遡ることが窺える。JR大阪駅の北側の旧梅田貨物駅のあった区域が遺跡の主要範囲を占め、都市再生プロジェクトの「うめきた」開発に伴い、2011年度に最初の調査(OC11-1)が実施された。1,700遺体を超える土葬埋葬跡が検出された「梅田墓」の発掘(OC19-1)も一連の調査のひとつである[大阪市文化財協会2022](図1)。

調査地周辺の古地理は、古墳時代前期頃と古代前半頃、中世前半頃が復元されている[趙哲済・中

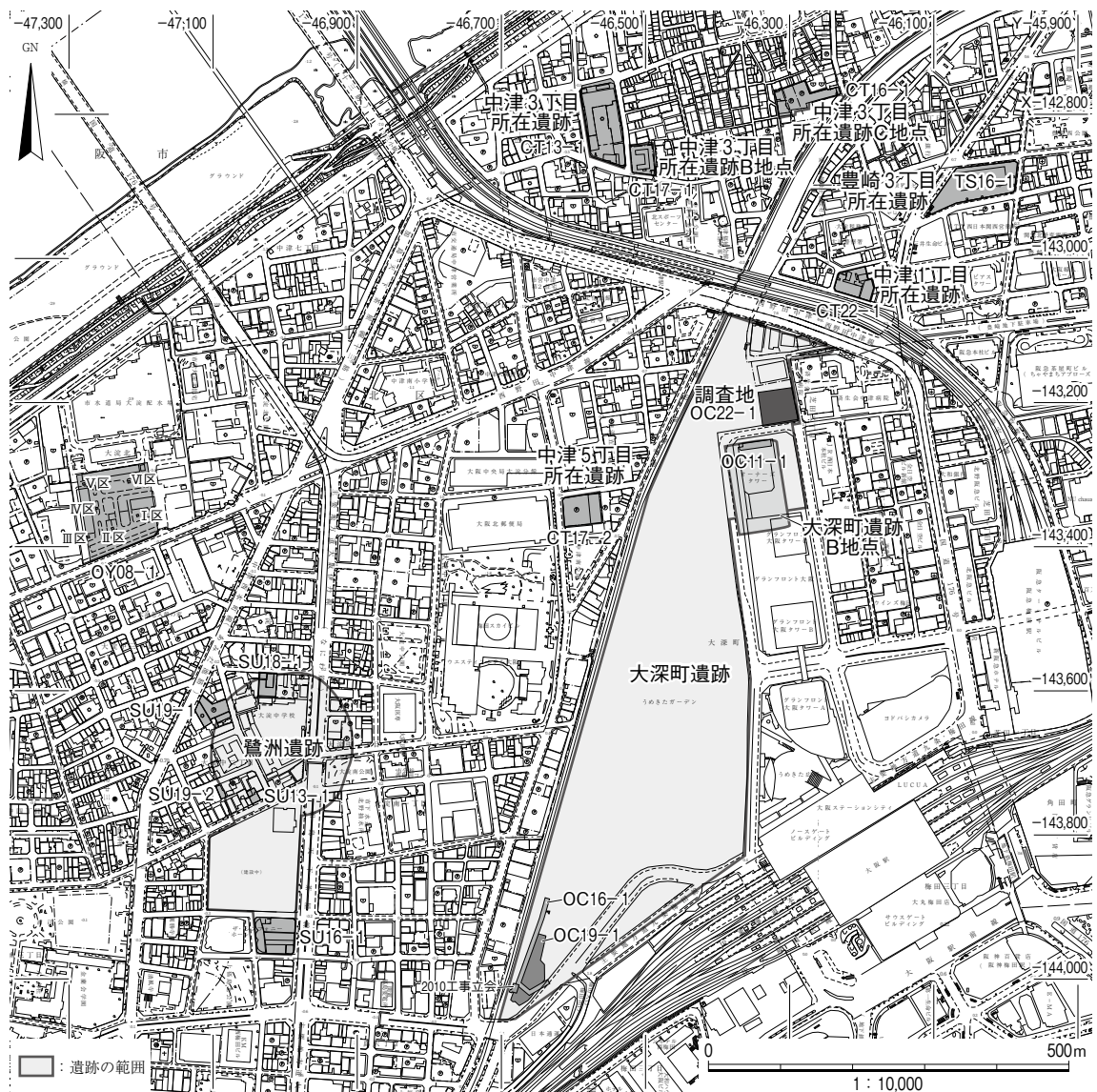


図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

CT13-1・17-1次調査地などで確認される[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015a、大阪文化財研究所2018a]。それ以前は流路の中にあり、古墳時代前期頃の中津川に当たるとみられている。飛鳥～奈良時代の水田は氾濫により埋没し、奈良時代後半頃に新たに耕起される。その後、平安末～鎌倉時代に富島庄の荘園開発に伴い、条里に沿う水田区画が展開している。

その東方、大阪メトロ御堂筋線の東側にある豊崎3丁目のTS16-1次調査地では、奈良時代の氾濫堆積層を基盤にする平安時代後期～室町時代の中世遺構が多数見つかっており、中世の集落跡が近接すると考えられている。上述の富島庄にかかわるものであろう。本調査地から北東へ約200mにあるCT22-1次調査地では、古墳時代前期頃の中津川はおおむね東から西に流れ、河川が遷移した後の水路跡は湿地となり、その後遅くとも中世後半には耕作地となった。本調査地の南面道路を挟んで接するOC11-1次調査地でも、無遺物の基盤河成層上面の近世遺構に12世紀前半頃の瓦器碗が含まれ、当該地の開発が中世に遡ることが示唆されていた[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013a]。

「うめきた」開発エリアの西側、本調査地の西南西約300mの中津5丁目にあるCT17-2次やその先0.8～1km南西に続く鷺洲遺跡SU13-1・16-1・18-1・19-1・19-2などの調査では、近隣に12-13世紀と14世紀後半～16世紀代の中世集落の存在が推定されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015b・2018a・2019a、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2020・2021a・2021b]。

本調査地は「うめきた」開発の北端部にあり(図2)、1902(明治35)年～1931(昭和6)年までは府立北野中学校の校庭であったという。「うめきた」開発に係る建設工事に伴い、2022年1月18日に大阪市教育委員会が当該地で実施した試掘調査により、地表下1.4m以下の深さで近世以前の遺構面や遺物包含層が検出されたという報告を受け、本格的な発掘調査を実施することになった。調査は現代盛土・攪乱層を重機掘削したのち人力により掘り下げ、遺構や地層の記録と出土遺物の採取に努めた。地表下3.5m以深は小面積を掘り下げて地層の確認調査を実施した。最下層からは貝類化石が出土した。なお、調査区西部の約120㎡はほぼ全面に攪乱され、かつ地盤強化のための薬液注入により固化していたため平面調査を行える状況ではなく、トレンチによる断面観察等の部分的な調査のみ行った。

条武司2017、趙2023]。これらに基づけば、古墳時代前期頃の中津川は豊崎6丁目付近で現中津川方向より南に外れて南西を向き、本調査地の阪急線より北側の中津3丁目付近をデルタの先端として分岐する。分岐流路は少なくとも南東・南・南西の3方向を向き、本調査地は中央の分流路の中にあっている。その後、南西向きの分流路が主流路となって河口は西南へ遷移し、古代前半頃には本調査地付近は離水して蛇行原となっている。

蛇行原となった中津3丁目付近での明確な開発は、飛鳥～奈良時代の水田耕作が最初であり、

現地調査終了後、室内で遺構や地層断面図のトレース、出土遺物の整理・実測などを行い、本報告書を作成した。また、遺物の観察と記載は、小田木富慈美と大庭重信が担当した。

本報告で用いた方位は、街区多角点を用いて測位した世界測地系座標であり、座標北を基準とした。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP±〇mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 微地形と層序

当該地における地下水の過剰揚水による大正期～1962(昭和37)年までの累積地盤沈下量は1.6m余りである。調査地が南面する東西道路はTP+0.3～0.4m、東面する南北道路はTP+0.3～0.6mで、周辺地域は北西から南東へごく緩く傾斜しており、調査前の造成された調査区の地表はTP+0.4～0.6mであった。地表からTP-4.9mまでの地層を第0～6層に区分した。なお、地層の層厚は微妙な変化が大きいため煩雑さを避けるために5cm刻みの概数で示す(図3～5、図版1)。

第0層は地表下70cmまでの煉瓦・コンクリート塊・炭・材・粘土偽礫・泥質砂等が混在する現代

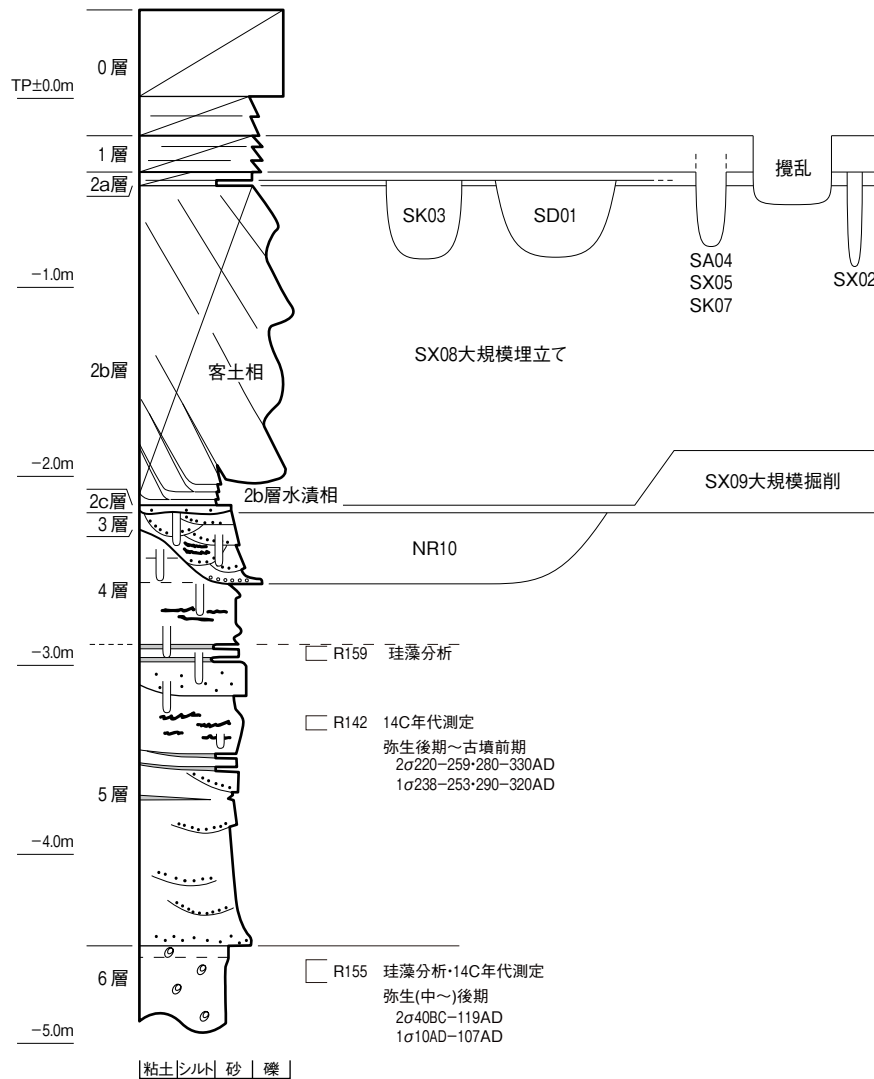


図3 地層と遺構の関係図

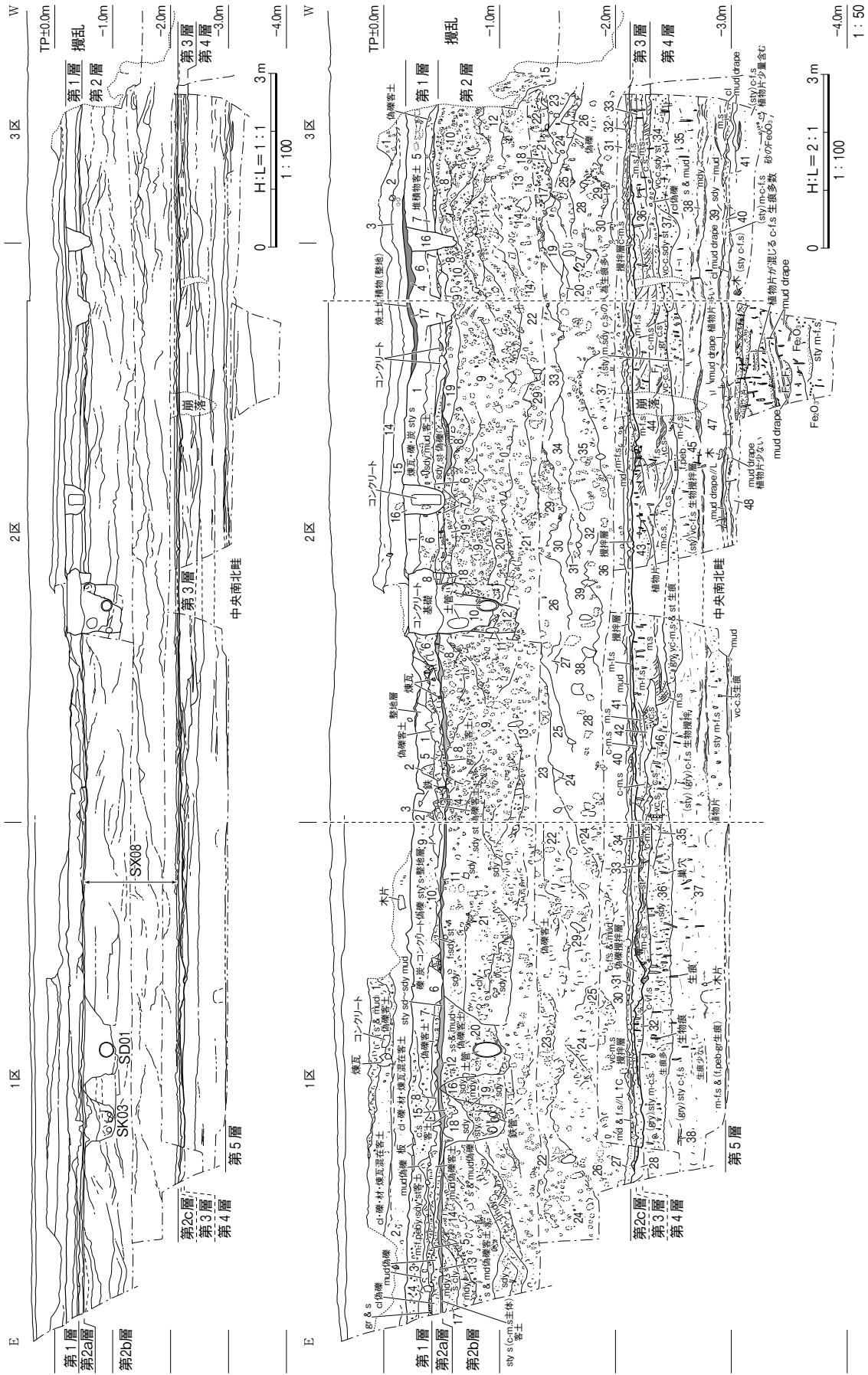


図4 南壁地層断面図



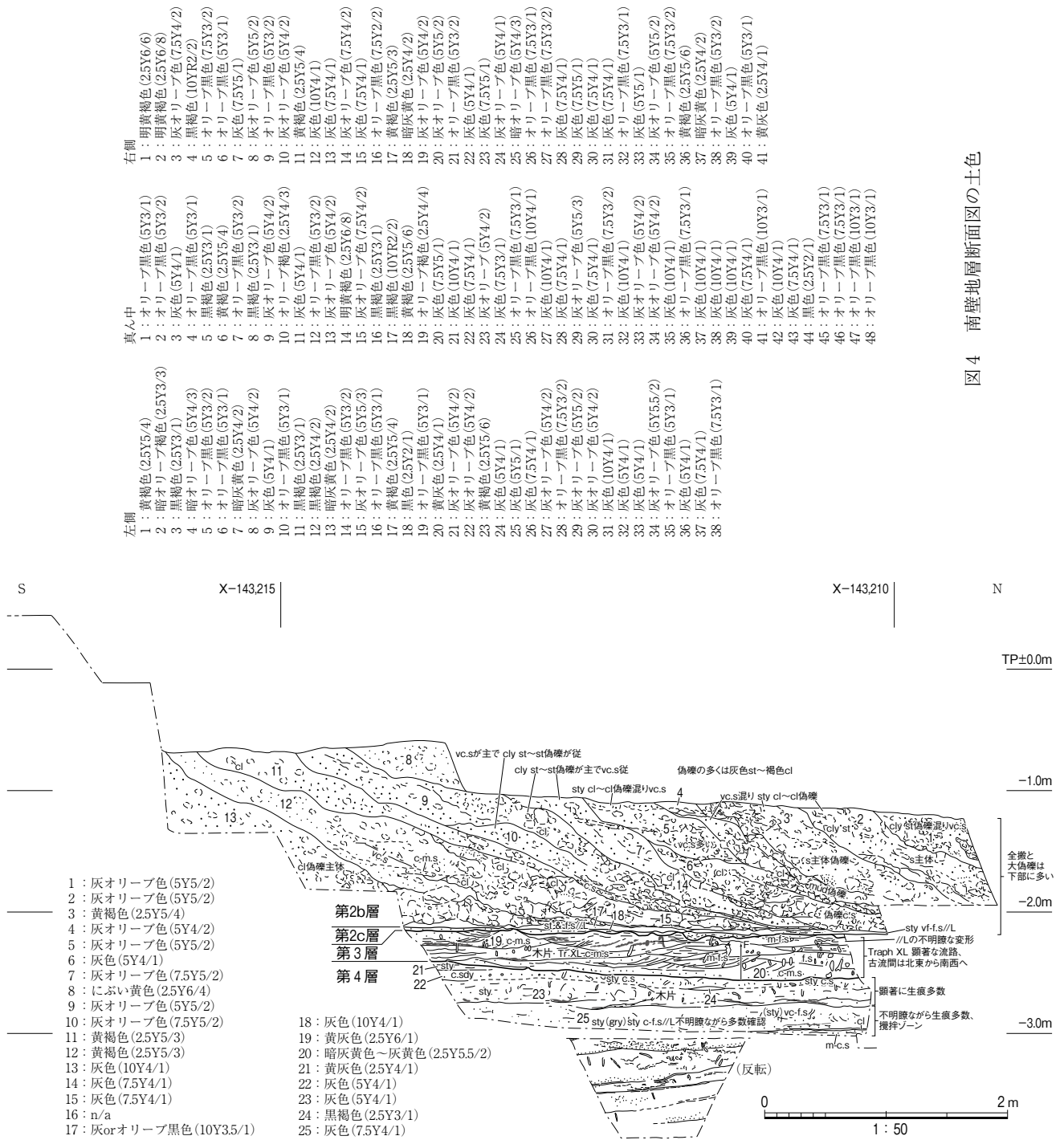


図4 南壁地層断面図の土色

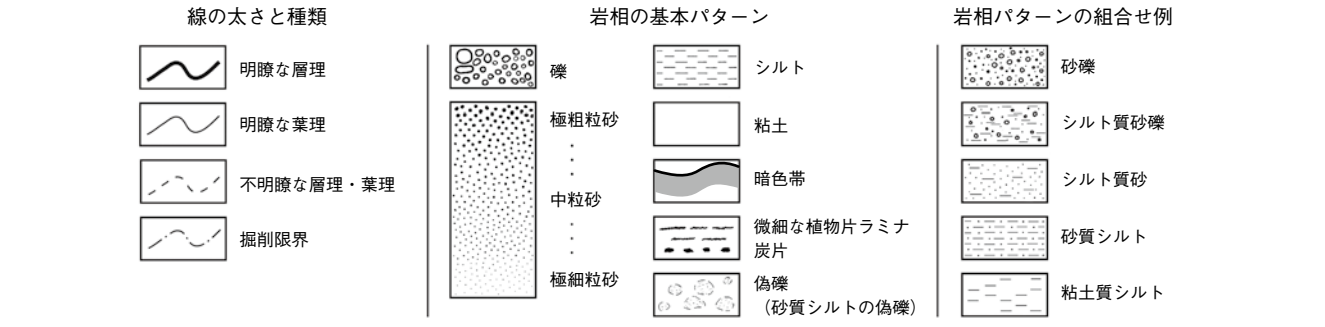


図5 中央南北畦地層断面図

客土層と、主として駐車場の造成前に存在した建物の解体時の攪乱である。

第1層は現代の整地客土層であり、層厚は25～40cmである。中粒～細粒中礫混り砂質シルト層や礫・コンクリート塊を含むシルト質砂層の整地層、細粒砂質シルト偽礫・泥偽礫層、細礫～粗粒砂層などの客土層が断続的に積み重なる。

第2層は近代の大規模造成土層であり、層厚は175cm前後である。3層に区分できる。

上部の整地客土層である第2a層は泥偽礫・泥質砂の細互層であり、層厚は5 cm以下であった。

中部の第2b層は泥偽礫と泥質砂の盛土客土層と、これと同時に異相で基底部に数cmの厚さで上方粗粒化する水漬き泥～細粒・中粒砂細互層からなり、全体の層厚は厚く155～170cmであった。以下、同一層内で指交関係にある両層を岩相により、客土相と水漬相とに呼び分ける。客土相の偽礫の多くは灰色系(例えば灰色7.5Y4/1)のシルトと褐色系(たとえば黄褐色2.5Y5/4)の粘土からなり、基質は極粗粒砂が主体である。客土相は多数の客土単位からなり、偽礫の多い単位や砂の多い単位が不規則に累積した。客土相単位面の最大傾斜角は35°前後であった。客土層中の偽礫径は各客土相単位の下部に大きくなる傾向があった。一方の水漬相も多数の上方粗粒化単位からなり、(a)客土層単位がダウンラップして水漬相単位を覆い、(b)上位の水漬相単位が客土相単位にオンラップして客土相単位を覆い、さらに新たな(a)・(b)が繰り返す(図3の柱状図に累積状況の模式図を示す)。

第2b層の出土遺物は、中世・近世の土師器・陶磁器(図9・11)のほか、煉瓦、ガラス片、コンクリート塊、タイルなど近代の遺物が含まれるが、第2a層内の一生活面から掘られたSD01の土管が明治前半期の特徴を持っていることから、第2層は明治前半(19C末)頃の造成土と推定され、SX02の貫入からみても、遅くとも1945年3月の大阪空襲より古いと考えられる。

下部の第2c層は灰色(10Y4/1)粗粒～細粒砂と泥偽礫からなる攪拌層であり、層厚は5 cm以下である。本来第3層の上位に累積していた地層を掘り出した際の、第3層上限付近が乱された加工時の攪拌層とみられる。

第3層は灰色(10Y4/1)極粗粒～細粒砂層で、北西から南東へ流れたトラフ型クロスラミナが発達する流路NR10の堆積層である。層厚は最大40cmで下位層を侵食している。植物片が薄いラミナを成して多数挟まれるとともに、ところどころに分厚いレンズ状～団子状に密集して挟まれる。団子状のものは水中を歩いた人間の足跡を植物片が埋めた跡の可能性がある(図版2下)。また、直径0.7～1.3 cmの巣穴の生痕が多数認められ、特に上半部はラミナが不明瞭になる程度に攪拌されている。第3層には弥生時代後期の土器や古墳時代前期の土師器などの小破片が含まれる。土器のいずれも2次堆積で、土師器の摩耗は小さくはないが、遺物年代のまとめからみて、第3層は古墳時代前期頃の流れと思われるが、今後の調査次第で古代にまで下がる可能性もある。

第4層はオリーブ黒色(5Y3/1～7.5Y3/2)のやや細礫質の粗粒～細粒砂からなる河口干潟堆積層である。層厚は65～75cmであった。西側北壁の最上部に第3層に酷似した層厚5 cmの灰色砂層を挟在し、その上に層厚3～4 cmの暗灰色砂質泥層を載せる。シジミの殻を含むほか、全般に生物攪拌が顕著であり、特に上半部に直径1 cm前後の巣穴が多数認められ、その中のいくつかはアナジャコ類とみられる *Ophiomorpha* であった[趙ほか2019](図版4)。下半部には植物片が薄いラミナを成して2～3層

挟まれたが、生物攪拌により断続的であった。第4層には古墳時代前期の土師器が多く含まれるほか、弥生時代後期の土器が少量含まれる。土器のいずれも二次堆積で、土師器の摩耗は小さくはないが、遺物年代のまとまりからみて、第4層は古墳時代前期の堆積であったと推定できる。

以下の第5・6層は下位の遺物包含層の有無を確認するための深掘りトレンチで確認した。考古遺物は未確認である(図6)。

第5層は植物片混りシルト質中粒～細粒砂からなる河口干潟の堆積層である。層厚は160cm前後である。直径数mmの巣穴などの生物擾乱が顕著で、マッドドレイプとみられる泥薄層を複数挟む。下部には波長の長いトラフ型クロスラミナが認められ、洪水層とみられる。古流向は北北西から南南東へであった。TP-3.4m付近のヒシの実(R142)の<sup>14</sup>C年代は220-259(36.2%)・280-330AD(59.2%)(2σ: PLD-49895)であり、弥生時代後期～古墳時代前期頃の堆積と推定される(註1)。

第6層は貝殻を含むシルト質極細粒～中粒砂層であり、最上部はやや粗粒化する。堆積相の詳細な観察はできていないが、多数の貝化石が出土し、その生息環境から潮間帯～潮下帯の堆積層と推定される。層厚は40cm以上で、下限は未確認である。TP-4.6m付近の植物片の<sup>14</sup>C年代は40-11BC(12.4%)・1-119AD(83%)(2σ: IAAA-221484)であり、弥生時代(中期～)後期の堆積と推定される。

## ii) 遺構と遺物

### a. 弥生時代の貝化石

第6層から出土した貝化石を表1に示す(註2)。全般にハマグリやカガミガイなどの潮間帯～潮下帯生息種が多く、堆積相から見た環

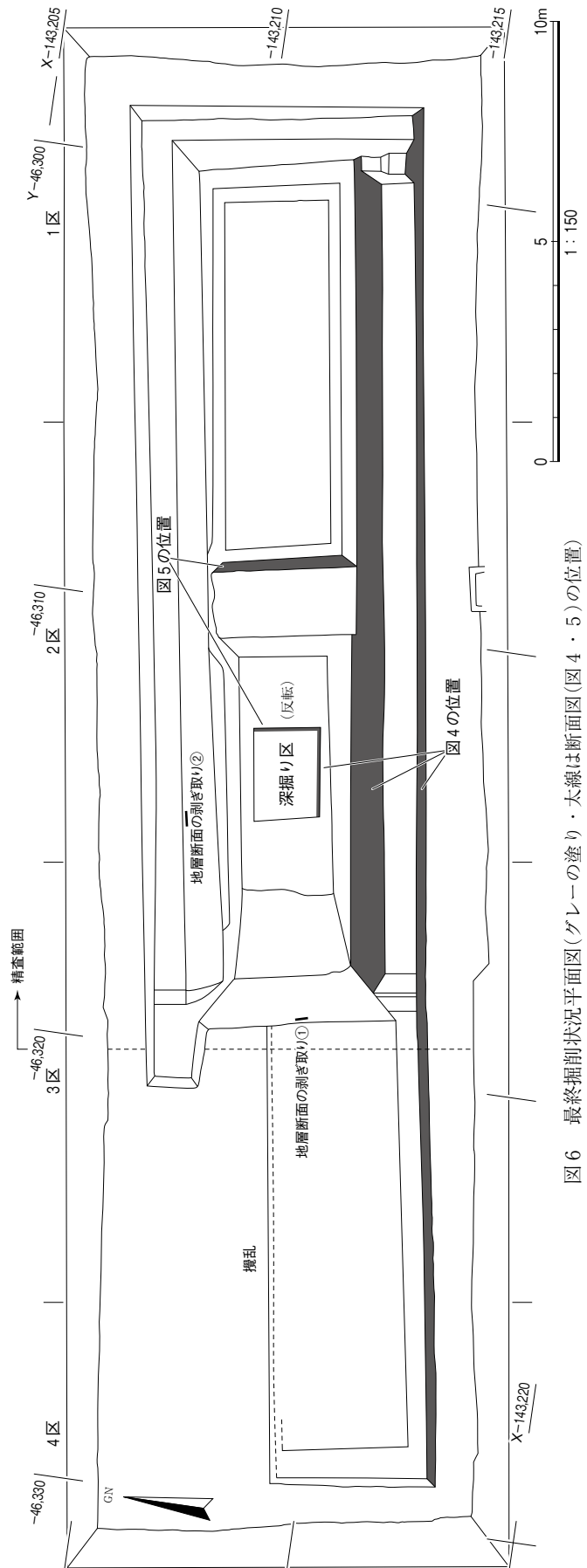


図6 最終掘削状況平面図(グレーの塗り・太線は断面図(図4・5)の位置)

表1 大深町遺跡(OC22-1次)出土の貝化石

層序	考古遺物	放射性炭素年代	貝類の生息環境	貝化石											巢穴化石			
				シジミ属	ヤマトシジミ	カキ類	テリザクラ	マテガイ	ハマグリ	ユウシオガイ	シオフキ	ツメタガイ	カガミガイ	ヒメシラトリ		イヨスタレ	イタヤガイ	ムラサキガイ
			河口	砂礫			泥											
			潮間帯(干潟)			岩泥	泥	砂	砂泥	砂泥	砂泥	砂	砂泥	泥				泥
			潮下帯			岩泥						砂	砂泥	泥	砂泥	砂泥		
3層	土師器(古墳前期)			○														○
4層	土師器(古墳前期)			○	△													○
5層																		○
6層(R154)				○				○	◎	○	○	○	○				△	○ (未確認)
6層(R155)		40BC-119AD(2σ:弥生(中期~)後期)		○				○	◎	○	○		○	○	○			
6層(R156)				○				○	○	○	○		○		○			
6層(R157)						○	○	○		○		○		○				

◎:特に多い、○:ある、△:破片少数

境とも矛盾しないことから、<sup>14</sup>C年代も踏まえると、第6層は弥生時代後期前半頃の潮間帯～潮下帯で堆積したと考えられる(表1)。

b. 古墳時代前期の遺構と遺物

NR10 第4層を削剥して第3層で埋まる北東から南西へ流れた流路である。下端の最深部は2区内にあるが、上端はSX09により削剥されて未詳である。図8は第3層を少し掘り下げた段階で作図したものであり、幅は15m以上、深さは50cm以上ある。中位に植物片の密集部が一部レンズ状に、一部は団子状に分布する。団子状のものは人間が水中を歩いた際に足跡の凹みが植物片で埋まった跡の可能性があると(図8、図版2)。

第4層の河口干潟層と第3層のNR10の堆積層からは、多数の古墳時代初頭～前期の土師器片と少数の弥生時代後期の土器片が出土している(図7、図版4)。2・4・6・9は第4層から、1・3・5・7・8は第3層から出土した土師器である。1は小型丸底壺で、体部は小さく、口縁部は内湾して広がり、端部はわずかに内側へつまむ。調整は摩滅のため不明である。2は高杯の口縁部とみられる。3～9は甕である。3は口縁端部を上方へつまみ上げており、庄内形甕である。4～6は口縁部が「く」字状に屈曲して端部を外反させる。7～9は布留形甕で、7・8は口縁端部内面を肥厚させている。9は口縁部が内湾し、体部は球形に近いと思われる。体部外面には右上がりのハケ、内面には横方向のヘラケズリを施す。内面削りが肩から下がった位置から始まるのは新しい要素であり、古墳時代前期の布留中相である。

c. 近代の大規模土砂採取と大規模造成

SX09 第2層と第3層の境界は明瞭な不連続面であり、第3層より上位の地層が大規模に削剥され(掘り出され)、搬出されたと考えられる。調査範囲を越えて行われたこの土砂搬出により形成された加工面をSX09と呼ぶ。SX09により掘り出された地層は、最寄りのOC11-1と22-1との対比か

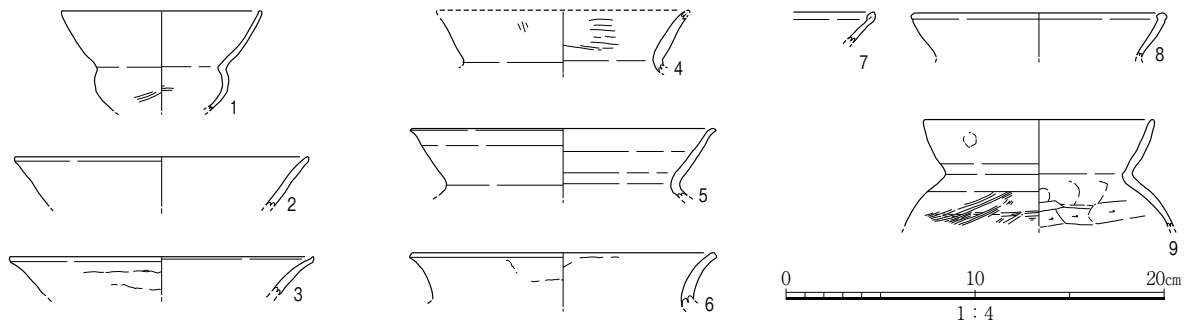


図7 古墳時代の出土遺物実測図

ら、古墳時代前期の河成層～中世の湿地堆積層～近代初頭の作土層の1.6m前後の厚さであったと推定される(図13-⑱)。第3層上限が掘り出しの際に浅く攪拌されてできたのが第2c層である。

**SX08** 第2b層の大規模造成SX08は、SX09の広い凹地にできた浅い水域に土砂が南側から断続的に客土されたものである(図5、図版1)。一方の砂泥の細互層は、水底に堆積していた砂泥や、客土斜面から転動・滑落した砂泥が、土砂の水中への客土により攪拌されて浮遊し、再沈積したものであり、細互層はその繰り返しのより形成されたものである。細互層の上方粗粒化は土砂の投入地点が徐々に前進することにより、粗粒相も前進したことによる。客土層へオンラップする細互層の到達点の高さから、水深は20～30cm程度あったと推定できる。

客土の第2b層からは多時期の遺物が出土している(図9・11)。後述するように、これらの遺物の多くは、当該地周辺に存在した中世集落に由来するものと考えられる。中世の遺物には、土師器・瓦器・瓦質土器・備前焼・瀬戸美濃焼がある。10～12は土師器皿である。10は小皿で口縁部は内湾する。11は浅く、口縁部を軽くつまんでいる。12は口縁部が外反気味で、外面には2段のヨコナデを施す。13は羽釜である。口縁部は内湾し、端部を短く外反させて丸く収める。14・15は瓦器椀である。14は器高が比較的高く、底部内面には平行線状のヘラミガキを施す。15は底部である。高台は高く外方向へふんばる。16～20は瓦質土器である。16は甕で口縁部は直立ののち外反し、外面には粗い平行タタキ

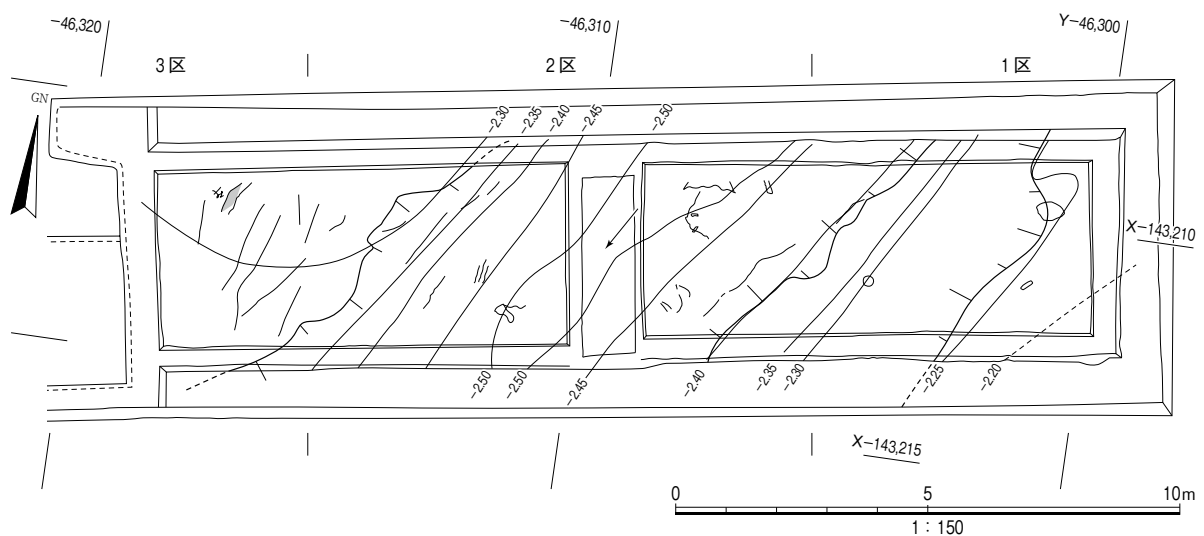


図8 第3層内NR10平面図

細線はトラフ形クロスラミナの側線を示す。

上端は第3層を少し掘下げた段階で計測、等高線図は壁面で計測した標高値から作成した。

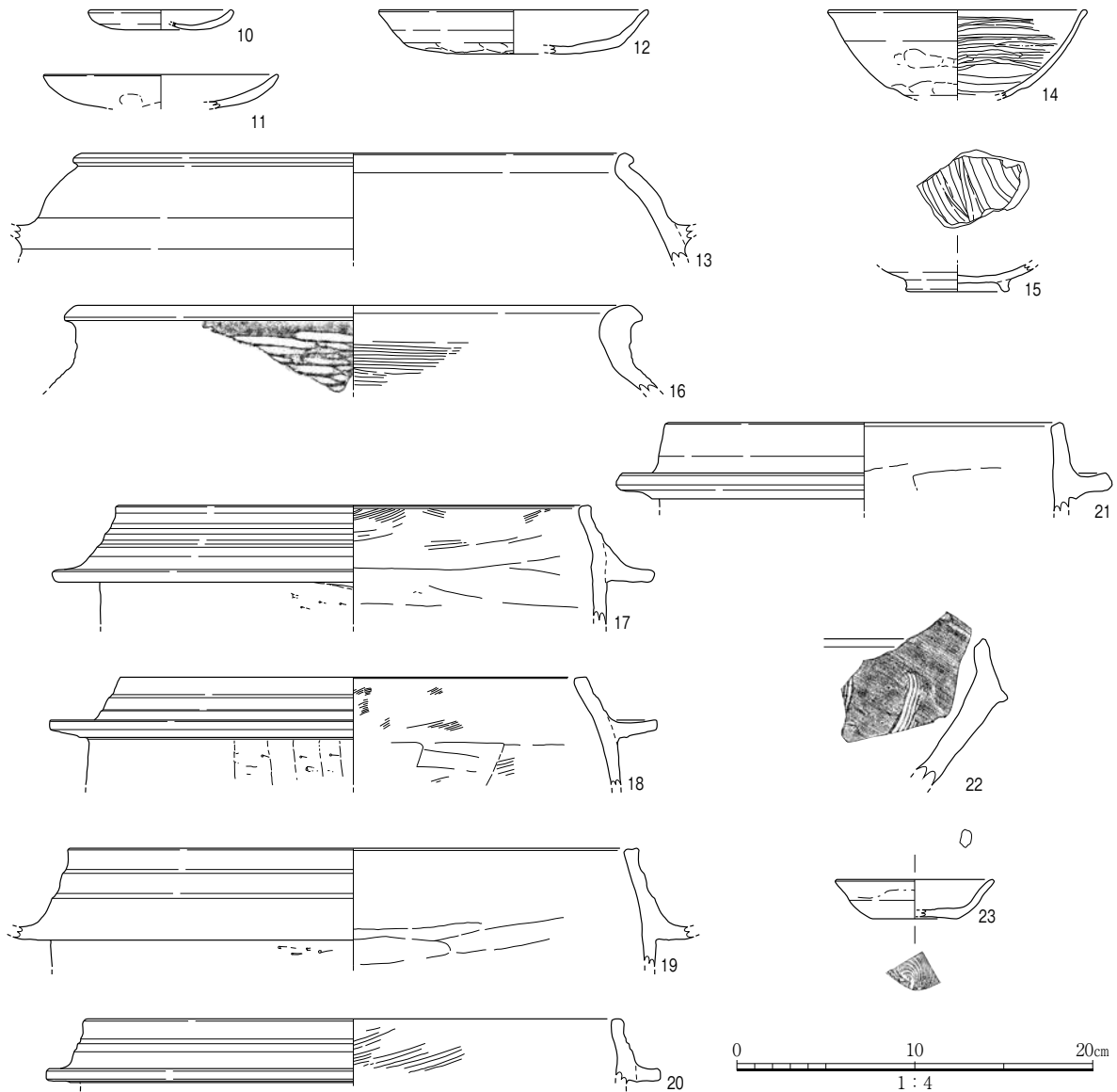


図9 平安～室町時代の出土遺物実測図

を施す。17～20は羽釜である。17は口縁部が比較的長く、直立から内傾気味となる。18・19は口縁部が17よりも短く、内傾が強い。20は口縁部・鏝部ともに短いものである。21は土師器の羽釜で、口縁部は直立し、外面に凹線は見られない。22は備前焼の挿鉢である。23は瀬戸美濃焼の皿で、底部を糸切する。以上は10～15が12世紀、16～23が15世紀後半～16世紀前半に属する。

第2b層出土の近世～近代の遺物には、国産陶磁器・土器類、中国産磁器、土製品がある。24は瀬戸美濃焼志野の皿で、鉄釉で笹文を描く。17世紀初頭であろう。25は中国産青花の碗で、見込みには馬を描き、高台内には「道光年製」と書くことから、1821～1850年の生産であることが知られる。26～30は瀬戸美濃焼磁器である。26・27は色絵の蓋と碗である。28は隸書体の文字を記す染付端反碗である。29・30は合成コバルトの型紙刷で文様を描く碗と段重の蓋である。31は肥前陶器の大甕である。32は土製の鳩笛である。以上は明治時代初頭～10年代に属するものであろう。

d. 第2a層内～上面の遺構

SD01は第2a層内の一つの生活面上に掘られた土管暗渠である。掘形幅は0.9～1.1m、深さ0.6mの

素掘りの溝に長さ70cm、直径25cmの土管で5連以上繋いでおり、検出長は2.3mであった。30cmの継ぎ目口を北向きに並べていることから、排水は南向きであったとみられる(図10・図版3)。暗渠に用いられた土管33は、体部内面中央の粘土接合部分に縞状のナデを施す。外面には「F」字状の刻印を有する。同様の口縁部形態と調整の特徴を有する土管は、1872(明治5)年開業の汐留駅で確認されており、明治時代前半の常滑焼と考えられている[小栗康寛2018]。本例もこれと同様、明治時代前半の常滑焼と考えられる(図11)。

SK03は第2a層内の一つ的生活面上に掘られた土壙である。長径1.9m以上、短径1.0m、深さ0.6mの歪な形状である。土壙内には長径に沿って鉄さびにまみれた直径5~10cmの鉄管が乱雑に並び、鉄管を埋めるように多数の豆炭が廃棄され、さらに炭灰が厚く覆っていた。出土物は何らかの燃焼にかかわったものと思われるが、土壙下底面に燃焼の痕跡はなく、これらを廃棄した土壙であろう(図10、図版3)。

SX02は第2b層の掘削途中で検出した被熱した管状の中空鉄である。直径は約10cm、長さ50cm以上あり、錆が著しく、元の器形は不詳だが、垂直に近く立っており、上方から貫入した焼夷弾の可能性はある。

#### e. 第1層内の遺構

SA04は東西9.5m以上、南北4.0m以上で南西角が折れる塀である。一辺20~30cmの歪な隅丸方形の柱穴が約40cm間隔で密に並ぶ(図10、図版3)。

SK07は東西1.4m、南北1.3mで深さ0.3m以上の土壙であり、内部に35cm四方の施設がある。この施設は方形に打たれた4本の角杭の外側を板材が囲んだもので、簡易な会所の可能性があ

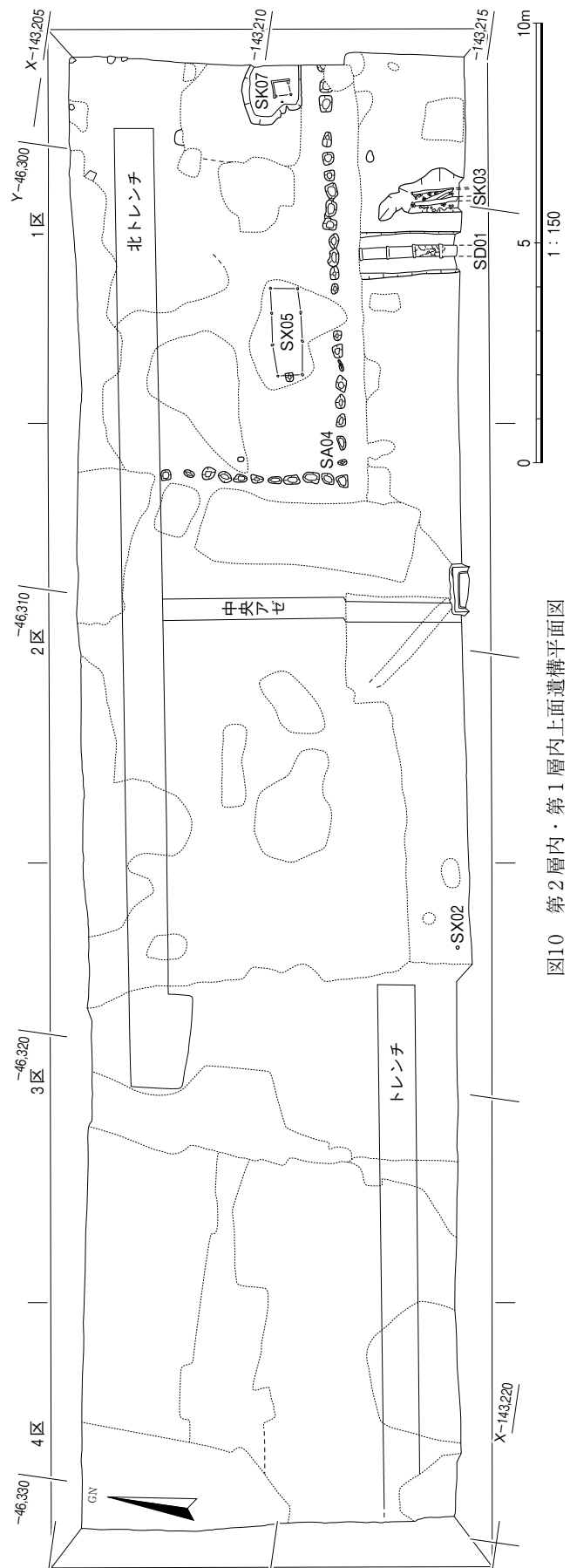


図10 第2層内・第1層内上面遺構平面図

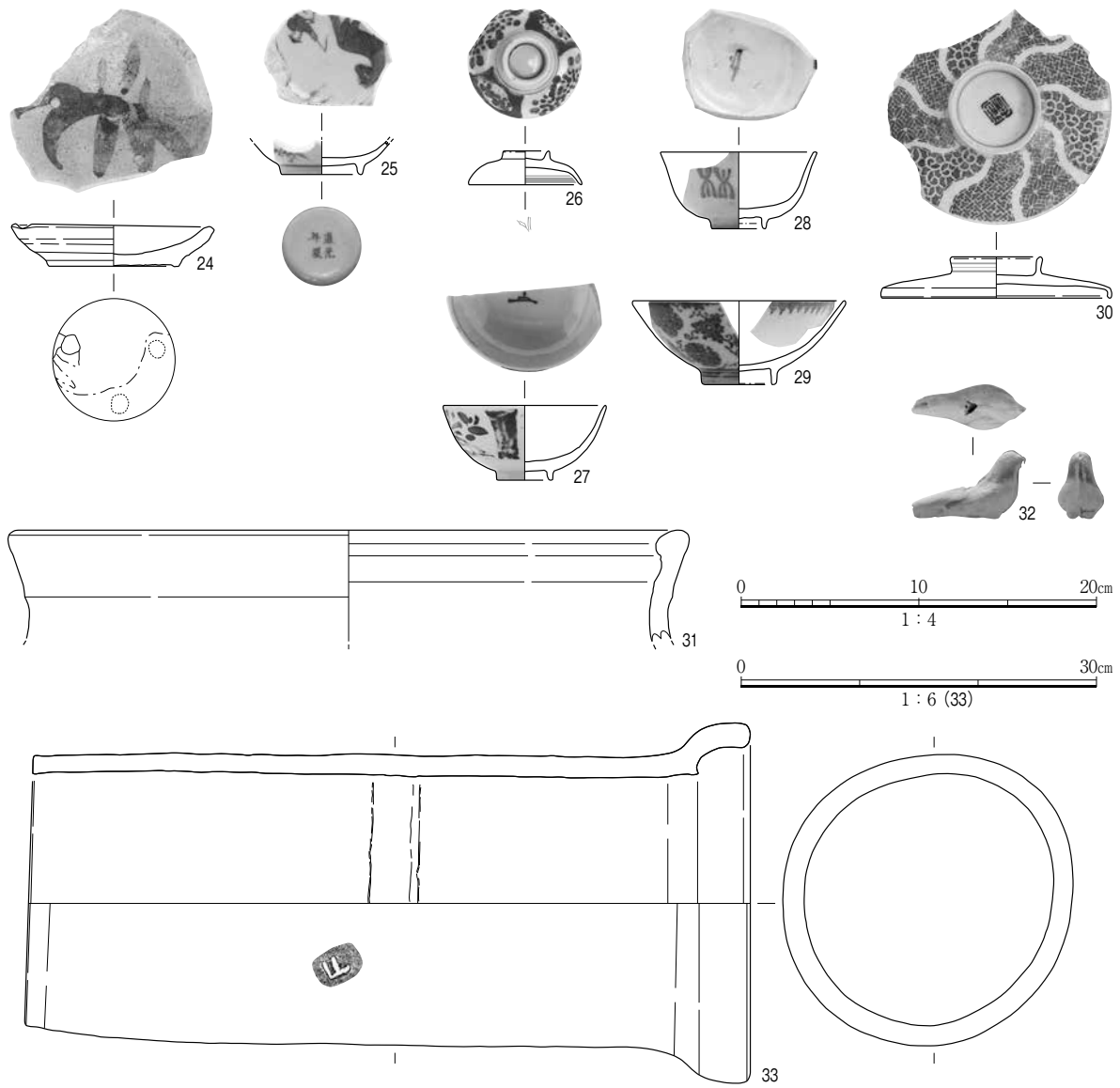


図11 江戸～明治時代の出土遺物実測図

る(図10、図版3)。

**SX05** 東西2.0m、南北1.1mの方形の施設である。掘形はなく、東西列に4本の角材が柱として打ち込まれている。用途は未詳だが、**SX07**と東西筋が揃い、関連施設であった可能性がある(図10、図版4)。

### 3)自然科学分析

当該地の歴史の変貌を復元する一環として、本調査地の地層の堆積年代および水域環境を知るために、 $^{14}\text{C}$ 年代測定と珪藻分析を実施した。

$^{14}\text{C}$ 年代測定は第5層最上部出土のヒシの実(**R142**)と第6層出土の植物片(**R155**)である。珪藻分析は第5層最上部の泥薄層を複数挟む植物片混りシルト質中粒～細粒砂(**R159**)と、第6層の貝殻を含むやや上方粗粒化するシルト質極粗粒～中粒砂(**R155**)である。珪藻分析と**R155**の年代測定はパリノ・サーヴェイ株式会社(管理者：松元美由紀氏、担当者：伊能智仁氏、分析者：田中義文・井上・堀内



誠示の各氏)に委託した。また、R155の年代測定は株式会社加速器分析研究所に委託した(註2を参照)。なお、各測定・分析の方法は『浪速東遺跡発掘調査報告』[大阪市文化財協会2023]に掲載の方法と同じであり、省略する。

i)放射性炭素年代測定

結果を表2に示す。R155(第6層)の測定年代(補正年代)は、 $1980 \pm 24$ BPであり、R142第5層上部の測定年代(補正年代)は、 $1790 \pm 20$ BPである。

ii)珪藻分析

分析結果を表3・図12に示した。分析した2試料のすべてから珪藻化石は産出した。

R159 第5層最上部からは、104個体産出した。保存状態は、完形の殻もあるが、壊れた殻が多く、普通～不良である。産出した分類群は、淡水生種および海水生種を主として、海水～汽水生種および汽水生種を低率に伴う種群で構成される。

本試料から特徴的に産出した種は、海水生種の*Grammatophora macilenta*、*Paralia sulcata*、海水～汽水生種の*Cyclotella striata*、淡水生種で止水生種の*Aulacoseira praeislandica*、流水不明種の*Eunotia spp.*等である。

R155 第6層からは、110個体産出した。保存状態は壊れた殻が多く、不良である。産出した分類群は、淡水生種を主として、海水生種、汽水生種、淡水～汽水生種を低率に伴う種群で構成される。

本試料から特徴的に産出した種は、海水生種の*Paralia sulcata*、淡水生種で止水生種の*Aulacoseira praeislandica*、流水不明種の*Eunotia spp.*、*Pinnularia spp.*等である。

iii)考察

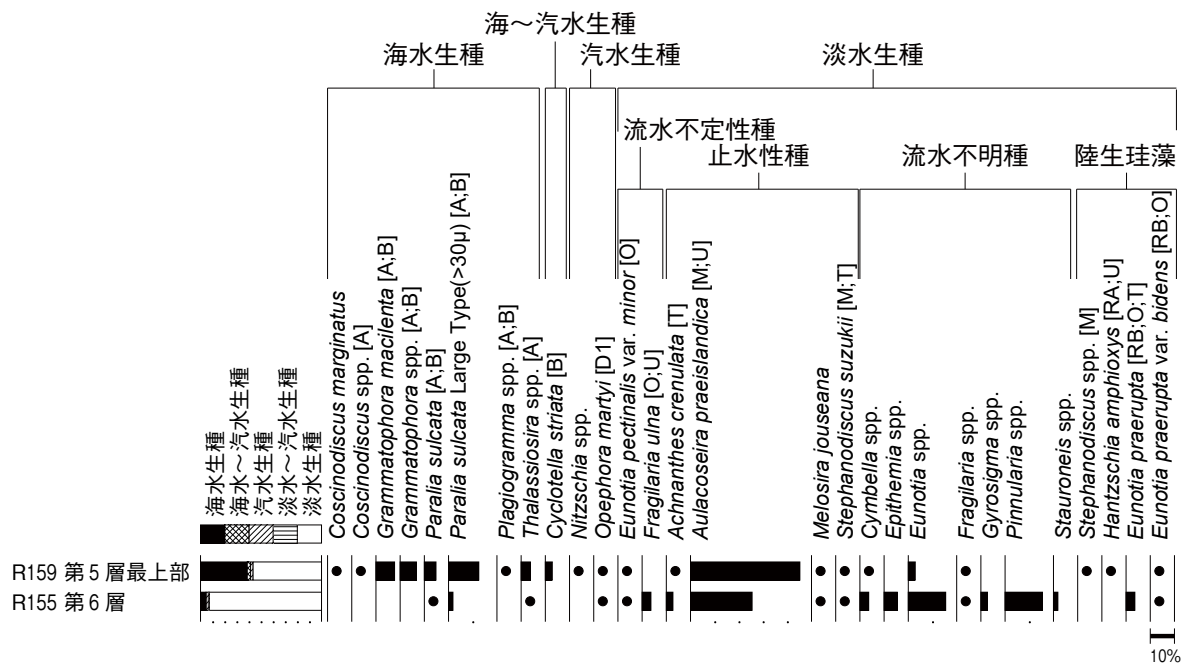
R159 第5層最上部は、内湾～沿岸域に生育する海水生種の*Grammatophora macilenta*、*Paralia sulcata*、*Cyclotella striata*、古琵琶湖層群などから産出する淡水生種で止水性種で湖沼性を示す*Aulacoseira praeislandica*、淡水の湿地等に生育する流水不明種の*Eunotia spp.*の3つの生育環境が異なる混合群集が検出された。

以上の産出した種の生態性と群集の特徴から、堆積時の環境を推定すると以下のように考えられる。まず、淡水生種で止水性種の*Aulacoseira praeislandica*が多く産出したが、本種は古琵琶湖層群から見いだされている[Tanaka et al., 1984、田中・松岡1985]ほか、大阪層群(古琵琶湖層群からの再堆積)

表2 放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	分析方法	測定年代 yrBP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用	暦年較正年代				Code No.	Code No.
						年代値			確率		
R142 第5層上部	種実 (ヒシ)	AAA 1M	1790±20	-27.19±0.12	1790±20	σ	cal AD 238 - cal AD 253	1713 - 1698	calBP 0.233	pal- 14762	PLD- 49895
							cal AD 290 - cal AD 320	1660 - 1630	calBP 0.450		
						2σ	cal AD 220 - cal AD 259	1731 - 1691	calBP 0.362		
							cal AD 280 - cal AD 330	1670 - 1620	calBP 0.592		
R155 第6層	植物片	AAA	1980±20	-30.61±0.26	1976±24	σ	cal AD 10 - cal AD 79	1940 - 1871	calBP 0.644	AAA- 221484	
							cal AD 101 - cal AD 107	1849 - 1843	calBP 0.039		
						2σ	cal BC 40 - cal BC 11	1990 - 1961	calBP 0.124		
							cal AD 1 - cal AD 119	1949 - 1831	calBP 0.830		

- 1) 暦年の計算には、Oxcal4.4を使用。
- 2) yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4) AAAは、酸、アルカリ、酸処理、AaAは、アルカリの濃度を薄くした処理を示す。
- 5) 暦年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 6) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 7) 統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。



海水-汽水-淡水生産産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

環境指標種

- A: 外洋指標種 B: 内湾指標種 C1: 海洋藻場指標種 C2: 汽水藻場指標種 D1: 海水砂質干潟指標種 D2: 汽水砂質干潟指標種 E1: 海水泥質干潟指標種 E2: 汽水泥質干潟指標種 F: 淡水底生種群(以上は小杉,1988) G: 淡水浮遊性種群 H: 河口浮遊性種群 J: 上流性河川指標種 K: 中~下流性河川指標種 L: 最下流性河川指標種群 M: 湖沼浮遊性種 N: 湖沼沼沢湿地指標種 O: 沼沢湿地付着生種 P: 高層湿原指標種群 Q: 陸域指標種群(以上は安藤,1990) S: 好汚濁性種 T: 好清水性種 U: 広適応性種(以上はAsai & Watanabe,1995) RI: 陸生珪藻 (RA: A群, RB: B群;伊藤・堀内,1991)

図12 珪藻化石群集

からの産出も報告されている[京都市1999]。いずれにしても、本種は古い地層からの再堆積であり、堆積時の環境を示している種では無いと考えられる。次に、海水あるいは海～汽水生種等の内湾に生育する種群は、産出率が高い上に、比較的、保存状態が良好であった。以上のように再堆積の種群と内湾に生育する種群の混合群集であることから、本試料は、河口付近に堆積した堆積物である可能性が示唆される。

R155 第6層は、産出数が低い上に、全体的に保存状態が悪く、また内湾～沿岸域に生育する種が産出した。このような群集は、経験的には、潮間帯の環境であったと考えられる。潮間帯のような不安定水域の場合は、珪藻は分解して、産出数が低く、保存状態が悪いことが多い。元々の潮間帯に生息していた珪藻は、汽水生種を主として、海水生種、海水～汽水生種および淡水生種を伴った種群で構成されるが、汽水生種は特に殻が弱く、堆積する時点で分解されてしまう。結果的に、潮間帯の珪藻群集は、保存状態が極めて悪く、堆積物に含まれる珪藻化石が少なく、若干認められる珪藻化石群集は海水～汽水生種等の海域の種類と淡水生種の混合群集である。また、本層からは、淡水生種が産出したが、それらは保存状態の良いEunotia属と、保存状態の悪いEunotia spp.およびPinnularia spp.で構成されている。これらは湿地性種であることから、一見すると湿地環境のようにも見える。しかし湿地環境の場合は、Eunotia属に加えて、保存状態の良いCymbella属、Pinnularia属やStauroneis属などの湿地性種が複数種特徴的に産出する。以上の潮間帯の群集の特徴と湿地環境の群集の特徴から、基本的には潮間帯の環境であると考えられる。保存状態の悪い湿地性種は、潮間帯の環境下で堆積して溶解・分解した殻も、流れ込んできた殻も混ざっている可能性があり、すべての殻が同じ時期、場所から流れ込んできたとは言えないが、少なくとも保存状態の良い淡水生種の殻は、近接した周辺の

表3 珪藻分析結果

種 類	生態性			環境 指標種	Range Age/NPD Zone	R159	R155
	塩分	pH	流水			第5層最上部	第6層
<i>Cerataulus</i> spp.	Euh			A,B	long range(? Neogene~)	-	1
<i>Coscinodiscus marginatus</i> Ehrenberg	Euh				long range	1	-
<i>Coscinodiscus</i> spp.	Euh			A	long range(? Neogene~)	1	-
<i>Grammatophora macilenta</i> W.Smith	Euh			A,B	long range(? Neogene~)	8	-
<i>Grammatophora</i> spp.	Euh			A,B	long range(? Neogene~)	7	-
<i>Paralia sulcata</i> (Ehr.) Cleve	Euh			A,B	long range	5	1
<i>Paralia sulcata</i> (Ehr.) Cleve Large Type (>30μ)	Euh			A,B	long range	13	2
<i>Plagiogramma</i> spp.	Euh			A,B	long range(? Neogene~)	1	-
<i>Thalassiosira</i> spp.	Euh			A	not diagnostic	4	1
<i>Cyclotella striata</i> (Kuetz.) Grunow	Euh-Meh			B	long range(? ≡ Neogene~)	3	-
<i>Nitzschia granulata</i> Grunow	Meh			E1	long range(? ≡ Neogene~)	-	1
<i>Nitzschia</i> spp.	Meh				not diagnostic	1	-
<i>Opephora martyi</i> Heribaud	Meh			D1	long range(? ≡ Neogene~)	1	1
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.) W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	long range(? ≡ Neogene~)	-	1
<i>Achnanthes crenulata</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	long range(? ≡ Neogene~)	1	3
<i>Aulacoseira praeislandica</i> Jouse	Ogh-ind	unk	l-ph	M,U	Neogene(≡Pleist.?)	47	28
<i>Aulacoseira praeislandica</i> var. <i>tenuissima</i> Jouse	Ogh-ind	unk	l-ph	M,U	Neogene(≡Pleist.?)	-	1
<i>Cocconeis placentula</i> var. <i>lineata</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	long range(? ≡ Neogene~)	-	1
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		not diagnostic	1	4
<i>Epithemia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		not diagnostic	-	6
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	long range(? ≡ Neogene~)	1	1
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>undulata</i> (Ralfs) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	long range(? ≡ Neogene~)	-	1
<i>Eunotia praerupta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	long range(? ≡ Neogene~)	-	4
<i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O	long range(? ≡ Neogene~)	1	1
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		not diagnostic	3	17
<i>Fragilaria ulna</i> (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	long range(? ≡ Neogene~)	-	4
<i>Fragilaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		not diagnostic	1	1
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	long range(? ≡ Neogene~)	-	1
<i>Gyrosigma</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		not diagnostic	-	3
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	long range(? ≡ Neogene~)	1	-
<i>Luticola mutica</i> (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	long range(? ≡ Neogene~)	-	1
<i>Melosira jouseana</i> Moiss	Ogh-unk	unk	l-ph		long range(? ≡ Neogene~)	1	1
<i>Neidium</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		long range(? ≡ Neogene~)	-	1
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		not diagnostic	-	1
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		long range(? ≡ Neogene~)	-	17
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> var. <i>signata</i> Meister	Ogh-ind	ind	l-ph	O	long range(? ≡ Neogene~)	-	1
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		long range(? ≡ Neogene~)	-	2
<i>Staurosira construens</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	long range(? ≡ Neogene~)	-	1
<i>Stephanodiscus suzukii</i> Tuji et Kociolek	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,T	long range(? ≡ Neogene~)	1	1
<i>Stephanodiscus</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	M	long range(? ≡ Neogene~)	1	-
海水生種						40	5
海水～汽水生種						3	0
汽水生種						2	2
淡水～汽水生種						0	1
淡水生種						59	102
珪藻化石総数						104	110

凡例塩分：塩分濃度に対する適応性      pH：水素イオン濃度に対する適応性      流水：流水に対する適応性  
 Euh：海水生種      al-bi：真アルカリ性種      l-bi：真止水性種  
 Euh-Meh：海水生種-汽水生種      al-il：好アルカリ性種      l-ph：好止水性種  
 Meh：汽水生種      ind：pH不定性種      ind：流水不定性種  
 Ogh-Meh：淡水生種-汽水生種      ac-il：好酸性種      r-ph：好流水性種  
 Ogh-hil：貧塩好塩性種      ac-bi：真酸性種      r-bi：真流水性種  
 Ogh-ind：貧塩不定性種      unk：pH不明種      unk：流水不明種  
 Ogh-hob：貧塩嫌塩性種  
 Ogh-unk：貧塩不明種

環境指標種

A：外洋指標種 B：内湾指標種 C1：海水藻場指標種 C2：汽水藻場指標種  
 D1：海水砂質干潟指標種 D2：汽水砂質干潟指標種  
 E1：海水泥質干潟指標種 E2：汽水泥質干潟指標種 F：淡水底生種群（以上は小杉,1988）  
 G：淡水浮遊性種群 H：河口浮遊性種群 J：上流性河川指標種 K：中～下流性河川指標種  
 L：最下流性河川指標種群 M：湖沼浮遊性種 N：湖沼沼沢湿地指標種 O：沼沢湿地付着生種  
 P：高層湿原指標種群 Q：陸域指標種群（以上は安藤,1990）  
 S：好汚濁性種 U：広適応性種 T：好清水性種（以上はAsai and Watanabe,1995）  
 R：陸生珪藻（RA：A群, RB：B群, RI：未区分、伊藤・堀内,1991）

Rangeの時代表記の凡例

Rec. :Recent, Pleist. :Pleistocene  
 E.Plio. :Early Pliocene, L.Plio. :Late Pliocene,  
 E.Mio. :Early Miocene, M.Mio. :Middle Miocene, L.Mio. :Late Miocene,  
 Oligo. :Oligocene, Eo. :Eocene, Creta. :Cretaceous

湿地から流れ込んできたものである可能性が高い。

#### 4) 遺構と遺物の検討

##### i) SX09・08の形成時期

近代以降、当該地周辺の大規模な土木工事としては、1874(明治7)年の大阪駅と梅田貨物駅の開業に伴う造成や、1902(明治35)年の府立北野中学校の敷地造成、1908(明治41)年の大阪市立工業学校の開設、1910(明治43)年の阪急梅田駅と宝塚本線の開業などがある。

SX09・08の形成にかかわる地層の特徴をみると、第2c層の分布は平坦であり、第2b層の少なくとも調査面積をはるかに超えることから、SX09の土砂搬出は大規模な土木工事にかかわって行われたと考えられる。ただし、第3層上限の加工面は明瞭だが、第2層の大規模造成SX08の土砂供給が水中であったにもかかわらず、それまでに新たな地層の堆積が確認できなかったことから、第3層の掘削から第2b層の客土までの時間間隙は短かったと推測される。SX08の客土(第2b層)の出土遺物が明治10年代であり、第2a層内のSD01が明治前半期の土管を用いていることを踏まえると、第2層に係るSX09・08の造成やSD01の敷設は、鉄道開設に係る可能性がある。また、明治前半期を耕作期に含むとみられるTC22-1の第3層作土とOC11-1の第3層作土のそれぞれ上面標高から、本調査地の掘削前の標高はTP-0.8m前後であったと推定でき、掘りあげた土砂の約1/3の厚さが第3層の砂層であったと考えられる。上半分の作土や土壌が埋め戻されていることからみて、掘削の目的は、第3層の白さが際立つ極細粒～細粒砂の採取であった可能性もある。

##### ii) 調査地周辺の地層対比と環境の変遷

2つの地質柱状対比図に基づいて検討する。柱状対比図⑱⑳の○番号は、[趙2014・2018・2023、趙・中条2017]で継続して用いてきた番号で、新情報をその都度追加し、柱状対比図のデータベースとして充実させてきたものである。○番号に続く日付が作成時期を示し、㉑が今回の新規作成である。

柱状対比図⑱ 長柄西から海老江までを東西に繋いだ地質柱状対比図⑱の豊崎から西側の大阪海岸低地に7地点を新たに加えたものである。本調査地の大深町遺跡OC22-1の第6層は<sup>14</sup>C年代と珪藻分析、貝化石の生態から弥生時代(中期～)後期の潮間帯～潮下帯(前浜～上部外浜)で堆積し、第5層が珪藻分析と<sup>14</sup>C年代から弥生時代後期～古墳時代前期の潮間帯であり、さらにトラフ型クロスラミナのある層相からは河口干潟と考えられる。第5層の堆積初期には洪水流が粗い砂を堆積したと推定できるが、第5層上半部では潮汐によるマッドレイプが顕著に認められ、古墳時代前期の遺物が多い第4層では巣穴化石ほかの生物擾乱が著しい。

一方、西方に2.0km離れた海老江遺跡EE16-1では、OC22-1とよく似た累重関係を示すが、OC22-1よりだいたい1時期遅く変化している。潮間帯(前浜干潟)の第9層は<sup>14</sup>C年代が(弥生時代後期末～)古墳時代前期であり、直下の潮下帯(上部外浜)の第10層は弥生時代後期と考えられている。流路が流れた第8層は古墳時代中期頃と思われ、河口干潟の第7層は巣穴の生痕化石が顕著に認められる。

OC22-1の第3層は中津の豊崎遺跡TS16-1から大深町のOC11-1まで連続して追跡できる流

路堆積層である。古流向は概ね北東から南西へであるが、各地点毎に向きの振れが大きいため、蛇行や分岐していた可能性がある。遺物に古墳時代中期以後のものが含まれないことから、前期か中期初頭に流れていたと思われる。基本的に泥の基質はなく、細粒砂～極細粒砂が卓越し、砂粒は灰白色である。この砂層が西へどのように繋がるかはよくわからないが、海老江遺跡EE16-1の第8層下部の流路堆積層が同時期に堆積した可能性はある。

対比図⑱のルートでは、中世前・後期の湿地堆積層や土壌A層がよく追跡できる。TS14-1の第5a層・CT22-1の第7・8層・OC11-1の第5層・CT17-2の第4層・SU19-2の第5層・EE16-2の第10～7層・EE16-1の第7～4層などであり、EE16-2・1では間層を挟んで2分される。大淀中にある鷺洲遺跡以東では、これらの地層の上位層にしばしば遺構面を挟むことから、中世前期には鷺洲遺跡の集落をはじめとして、人間活動が積極的に開始されたことがわかるが、海老江遺跡では一時的な遺構面はあるが、湿地が優勢で、安定した陸地は近世以降となる。また、OC22-1の第2b層が、古墳時代前期の河成層から近代初頭の作土層までを甚だしく剝削しては埋め戻していることがわかる。

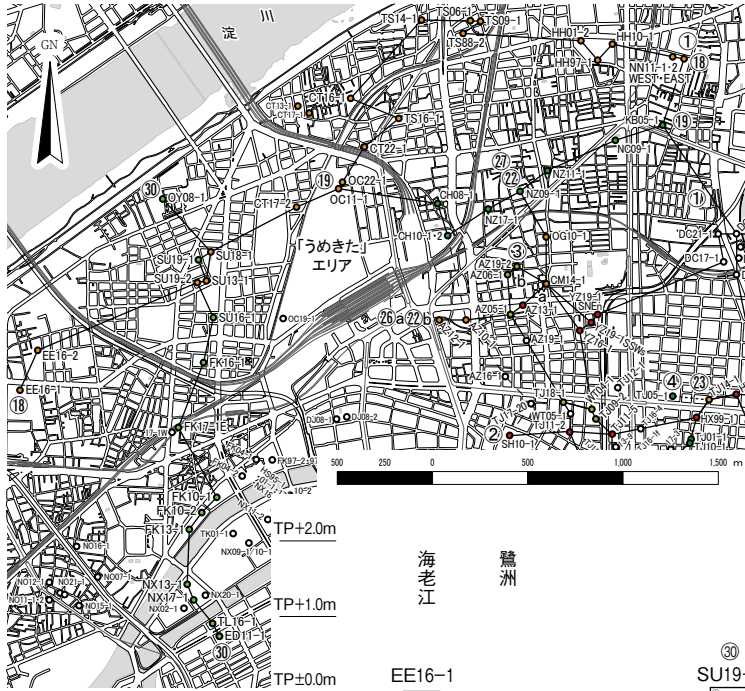
**柱状対比図⑳** 淀川河岸に近い大淀北から大淀中、福島、中之島、江戸堀までの15地点を繋ぐ地質柱状対比図であり、途中、旧蜷川(曾根崎川)と堂島川、土佐堀川を渡る。旧蜷川の南北で地層の様相が一変する。

蜷川の北側には2か所に中世以前の微高地がある。ひとつは福島5丁目所在遺跡のFK17-1付近にある微高地であり、比較的細粒な砂泥が主体の地層からなる。基盤層をなす第9層は細礫質砂層であるが、これとは対照的に、第8層は細粒～シルトの細互層が特徴的であり、泥質で巣穴の生痕が目立つ古墳時代前期頃の潮間帯(干潟)であったと考えられる。第7層も巣穴の生痕がある砂層であるが、砂質シルトの偽礫を含むことから堆積中に洪水が発生したと考えられ、その時期は7世紀後半～8世紀とみられる。直上の作土層は16世紀後半であり、離水時期はその間であるが、次に述べるように、中世より古いと推定される。

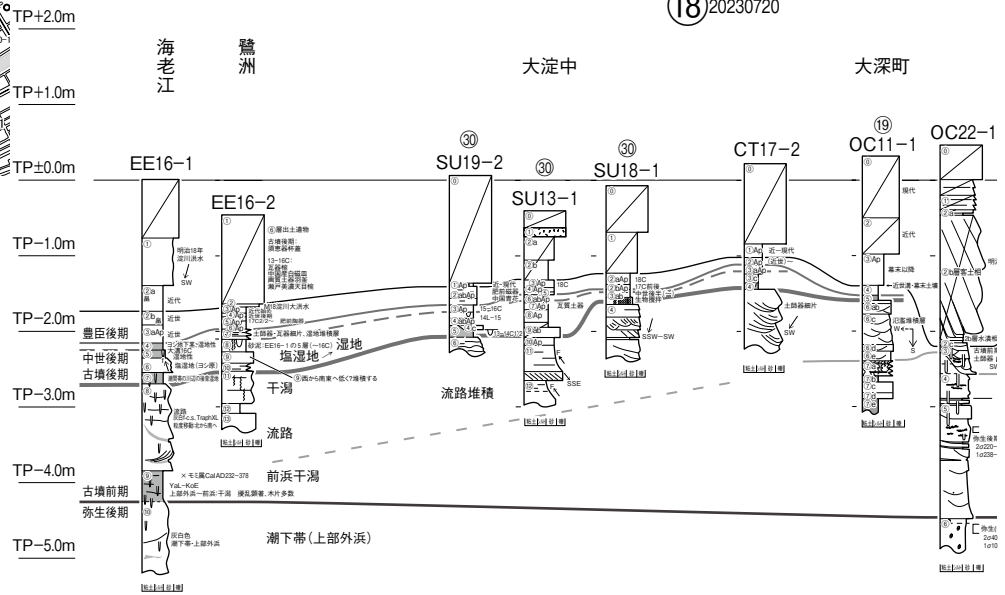
もう一つの微高地がある鷺洲遺跡SU13-1・18-1・19-1・19-2は、対比図⑱の追跡により、古墳時代の河成堆積層で、その後期、遅くとも古代前期までには陸化した微高地であり、中世前期には集落が形成されている。

両微高地に挟まれたFK16-1・SU16-1の地域も河成層であるが、やや低く、中世前期の遺物を含む流路も見つかっていて、土地の安定は両微高地よりやや遅い可能性がある。

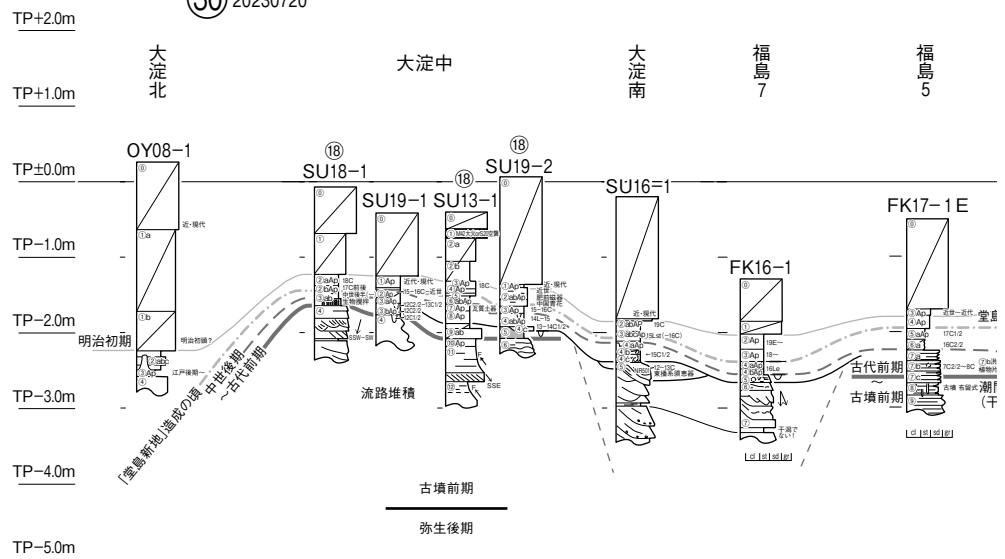
一方、蜷川の南側には蜷川の前身や堂島川の河道が流れ、河道の周囲や中之島や堂島川南岸側には湿地(塩湿地)が広がっていた。中之島地域の河道や湿地が埋め立てられて嵩上げされるのが徳川期の17世紀前半以降であり、深い蜷川付近が埋め立てられるのは、17世紀後半のいわゆる「堂島新地」の造成期(1684～88年)である。中之島の西部で豊臣期以前の遺構や遺物の確実なものは見つかっていないことを踏まえれば、当該地は河道と湿地が16世紀代末まで存続していたと考えられる。なお、当地域は甚だしい累積地盤沈下を被っているが、中之島付近の沈下量は1.2～1.4mであり、近接地点間の比較には大きな支障はないと思われる。



⑱ 20230720



⑳ 20230720



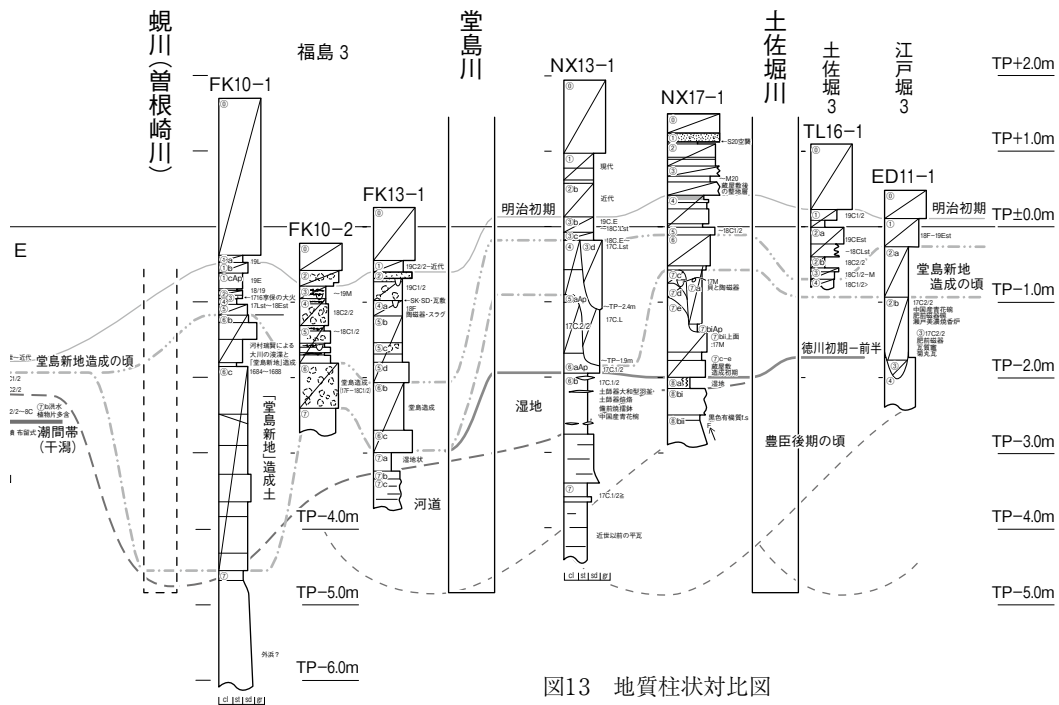
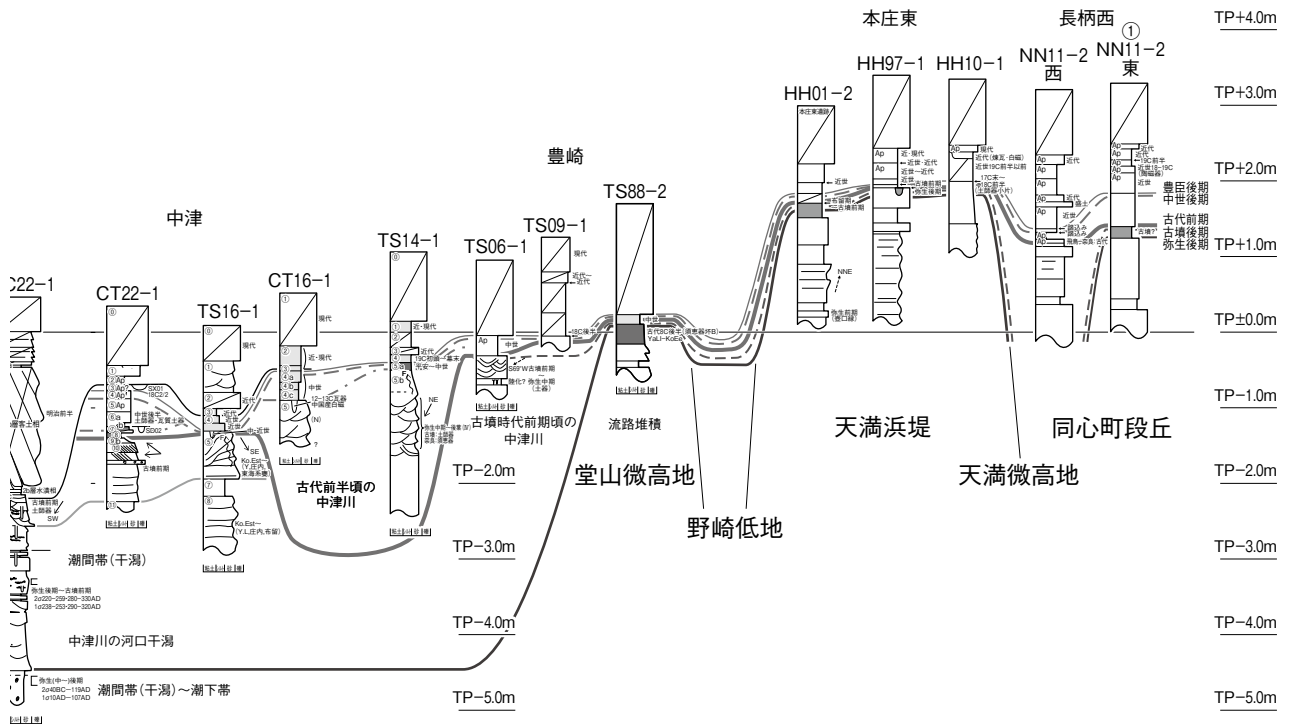


図13 地質柱状対比図

ところで、埋め立てられた湿地面は北の蜷川側が深く、南の土佐堀川側が浅く、この傾斜は大川の堆積地形を反映していると考えられる。[趙2006]は、南から京町堀川・江戸堀川・土佐堀川・堂島川・蜷川がポイントバー(蛇行州)のスウェイル(細長い凹地)に当たり、中之島がスクロールバー(円弧上の堤防上の高まり)のひとつにあたりとイメージしている。対比図③⑩にはそのようすを模式的に描いてみた。

以上を概観すると、古墳時代前期には、大深町から海老江に至る地域は、潮間帯にあり、その後半か中期のはじめ頃に河口が一時的に前進したが、河口干潟はその後にも存続した考えられる。しかし、古代前期頃までには三角州帯が前進して、河口が遠のいたようである。

## 5)まとめ

本調査では、次の諸点が明らかとなった。

- ・ 弥生時代後期には大阪湾岸の潮下帯～潮間帯にあり、古墳時代前期には淀川分流路のひとつである中津川の三角州帯を流れる流路の河口干潟になった。
- ・ 隣接するOC11-1やCT17-2の調査地やCT22-1次調査地を参考にすれば、河口干潟はやがて離水して湿地となり、遅くとも中世後半には水田に耕起されたと推定される。水田耕作は近世末まで継続された。
- ・ 近代になると、当該地を含む一帯で、地表下1.6m前後の大規模な土砂掘削が行われ、TP-2.1m(累積地盤沈下量を復旧すればTP-0.5m)付近まで掘り込まれたが、直後に客土され、TP+0.5m(累積地盤沈下量を復旧すればTP+2.1m)付近まで嵩上げされた。

また、周辺地域の地層対比により、旧蜷川を挟んでその南北で地形形成が異なることが明らかとなった。北側は中津川三角州帯に属し、南側は徐々に北上する大川の流域に属すると考えられる。これにより[趙・中条2017]の古地理図は概ね支持されるとともに、より詳細な古地理復元への改訂の具体的な課題が明確になってきたといえる。

## 註)

- (1) <sup>14</sup>C年代測定のうちR155には、(独)日本学術振興会による科学研究費助成事業基盤研究(C)「大阪中心部における5～17世紀の治水・水防遺構と都市形成過程の研究」(JSPS19K01102研究代表者：南秀雄)の2022年度補助金の一部を使用した。
- (2) 貝化石の同定は、大阪市立自然史博物館学芸員の石田惣氏に行っていただいた。記して謝意を表す。

## 引用・参考文献

- 安藤一男1990、「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」：『東北地理』42、pp.73-88
- 伊藤良永・堀内誠示1991、「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」：『日本珪藻学誌』6、pp.23-44
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「福島区福島3丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(FK10-2)報告書」：『平成22年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2010)』、pp.73-82
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013a、「大深町遺跡B地点発掘調査(OC11-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化



- 財包蔵地発掘調査報告書(2011)』、pp.35-42
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013b、「江戸堀蔵屋敷跡発掘調査(ED11-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)』、pp.411-424
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015a、「中津3丁目所在発掘調査(CT13-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)』、14ps.
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015b、「鷺洲遺跡発掘調査(SU13-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)』、pp.23-30
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015c、「福島蔵屋敷跡C地点発掘調査(FK13-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)』、pp.61-72
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018a、「鷺洲遺跡発掘調査(SU16-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2016)』、pp.15-24
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018b、「土佐堀3丁目所在遺跡発掘調査(TL16-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2016)』、pp.401-418
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018c、「福島7丁目所在遺跡発掘調査(FK16-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2016)』、pp.133-140
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2019a、「中津5丁目所在遺跡発掘調査(CT17-2)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2017)第1分冊』、pp.1-6
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2019b、「福島5丁目所在遺跡発掘調査(FK17-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2017)第1分冊』、pp.111-118
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2020、「鷺洲遺跡発掘調査(SU18-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2018)第1分冊』、pp.25-30
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2021a、「鷺洲遺跡発掘調査(SU19-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2019)』、pp.35-44
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2021b、「鷺洲遺跡発掘調査(SU19-2)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2019)』、pp.45-52
- 大阪市文化財協会2008、「用品倉庫用地における埋蔵文化財試掘調査(OY08-1)報告書」、2ps.
- 大阪市文化財協会2022、『大深町遺跡発掘調査報告Ⅱ—梅田墓の調査—』、268ps.
- 大阪市文化財協会2023、『浪速東遺跡発掘調査報告』、55ps.
- 大阪文化財研究所2011、『福島蔵屋敷跡発掘調査報告』、68ps.
- 大阪文化財研究所2015、『中之島蔵屋敷跡発掘調査報告Ⅱ』、172ps.
- 大阪文化財研究所2018a、『中津3丁目所在遺跡B地点発掘調査報告』、19ps.
- 大阪文化財研究所2018b、『中之島蔵屋敷跡発掘調査報告Ⅲ』、92ps.
- 小栗康寛2018、「近世・近代における土管の様相—常滑を中心に—」：『遺物にみる幕末・明治』江戸遺跡研究会第31回大会発表要旨、pp.85-114
- 京都市1999、「三方・花折断層帯(桃山断層)に関する調査成果報告書」：『平成10年度地震関係基礎調査交付金』、28ps.
- 小杉正人1988、「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」：『第四紀研究』27、pp.1-20
- 田中正明・松岡敬二1985、「滋賀県甲賀・阿山地域の鮮新世淡水生珪藻化石」：『瑞浪化石博物館研究報告』12、pp.57

- 趙哲濟2006、「船場・道修町、その土地の成り立ちに迫る」：『第13回道修町文化講演会(記録)』道修町保存会、pp.9-43
- 趙哲濟2014、「難波砂州北部～天満砂州南部の表層地質に関する覚え書」：『大阪上町台地の総合的研究』、pp.23-36
- 趙哲濟2018、「大阪上町台地と周辺低地の古地理復元(2014春～2018夏)」：『古墳時代における都市化の実証的比較研究-大阪上町台地・博多湾岸・奈良盆地』資料集、pp.1-14
- 趙哲濟2023、「西大阪平野における遺跡の地層対比」：『大阪中心部における5～17世紀の治水・水防遺構と都市形成過程の研究』大阪市文化財協会、pp.105-120
- 趙哲濟・中条武司2017、「大阪海岸低地における古地理の変遷-「上町科研」以降の研究-」：『ヒストリア』264号、pp.3-23
- 趙哲濟・渡部哲也・高田良二・山西良平2019、「大阪海岸低地の津守新田に干拓された古代に遡る干潟」日本堆積学会2019年大阪大会プログラム・講演要旨、pp.61-62
- Asai, K. and Watanabe, T.,1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, pp.35-47
- Bronk, R. C., 2009, *Bayesian analysis of radiocarbon dates*. *Radiocarbon*, 51, pp.337-360
- Cholnoky, B. J., 1968, *Die Oekologie der Diatomeen in Binnengewässern*. Verlag Von J. Cramer, 699ps.
- Desikachary, T. V., 1987, *Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean*. Madras science foundation, 1-13, Plates, pp.401-621
- Hustedt, F., 1930, *Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7. Leipzig, Part 1, 920ps.*
- Hustedt, F., 1937-1938, *Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III*. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, pp.131-809, pp.1-155, pp.274-349
- Hustedt, F., 1959, *Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7. Leipzig, Part 2, 845ps.*
- Hustedt, F., 1961-1966, *Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas Sowie der angrenzenden Meeres- gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7. Leipzig, Part 3, 816ps.*
- Krammer, K. and H. Lange - Bertalot,1985, *Naviculaceae. Bibliotheca Diatomologica,9*. Gustav Fischer Verlag, 250ps.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1986, *Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(1)* : Gustav Fischer Verlag, 876ps.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1988, *Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(2)* : Gustav Fischer Verlag, 596ps.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1990, *Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(3)* : Gustav Fischer Verlag, 576ps.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1991, *Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(4)* : Gustav

Fischer Verlag, 437ps.

Lange – Bertalot, H., Witowski, A., and Metzeltin, D., 2000, *ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA Annotated diatom micrographs*. Diatom Flora of Marine Coasts, 1, 925ps.

Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann – Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S., 2020, *The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP)*. Radiocarbon, 62, pp. 1 – 33

Stuiver Minze and Polach A Henry, 1977, *Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data*. Radiocarbon, 19, pp. 355 – 363

Tanaka, M., Matsuoka, K. and Takagi, Y., 1984, *The Genus Melosira (Bacillariophyceae) from the pliocene Iga Formation of the Kobiwako Group in Mie Prefecture*, Central Japan. Bulletin of the Mizunami Fossil Museum, 11, pp. 55 – 68



南壁地層断面(北東から)



中央畦断面(東から)

第2層

第3層

第4層



第2b層の客土相と  
水漬相の指交構造  
(中央畦の部分拡大；  
東から)  
矢印のラミナ群が  
向かって左方向で  
2群に分かれ、  
間に客土を楔状に挟む。





NR10西半部検出状況  
(第3層上面から少し下がる；  
北東から下流側を望む)



NR10東半部(人間の足跡の可能性ある団子状の植物片が並ぶ；南から)





SD01(北から)



SK03(北から)



SA04とSK07(東から)





SX05(西から)



布留式土器9出土状況  
(第4層内;南から)



ヤマトシジミ出土状況(第4層内)



Ophiomorpha 産出状況(第5層内)



中央区北浜東 1 - 1・3・4・5、2 - 1・4 における建設工事に伴う  
大坂城跡発掘調査(OS22-1)報告書

調査個所 大阪市中央区北浜東1-1・3・4・5、2-1・4  
調査面積 約160㎡  
調査期間 令和4年4月6日～5月11日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋工、南秀雄、飯田真理子

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地が大川に接するところに位置している。京阪電鉄天満橋駅の南西で、土佐堀通と熊野街道とされる南北道(お祓い筋)の交点の南西角地である(図1・2)。南の敷地との境界は崖になっている。

調査地付近は5世紀以降、難波堀江の南岸になり、平安時代には台地上に摂津国府の存在が推定されている。また、東大寺を再興した重源の浄土堂などが12世紀以降、調査地から西方に存在し、大坂本願寺期(1496~1580年)には周辺は「楼の岸」と呼ばれていた。豊臣期(1580~1615年)になると大川沿いに土佐堀通が設けられ、調査地は大坂城惣構の最北の街区として整備された。周辺の調査成果からすると、現在と同様に敷地は土佐堀通に間口を面して南北に割られ、徳川期に引き継がれている。土佐堀通の北は徳川期には大川の護岸となっていた。

周辺では数多くの発掘調査が行われており、西隣のOS90-20次調査では豊臣前期(1580~1598年)の礎石建物3棟、穴蔵3基、竈などが検出され、大型の桐文軒平瓦、刻印のある大型瓦などが出土した。西約50mのOS88-113次調査では、穴蔵と推定される遺構から良好な豊臣前期の陶磁器の一括資料が出土し、豊臣後期(1598~1615年)の礎石建物・塀・溝などが検出された[大阪市文化財協会2003]。この西隣のOS20-4次調査では、豊臣前期の礎石・粘土壁・溝と豊臣後期の礎石建物・穴蔵などの5時期にわたる遺構面が検出された。ここではTP+0.6m以下に大川の水成層があり、その直上(第2c層)が文禄3(1594)年の惣構建設時の盛土で、その上層の盛土(第1b層)を慶長3(1598)年の「町中屋敷替え」に伴うと推測している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2022]。

また、土佐堀通に面した東側で地層や遺構変遷がよく捉えられた調査に、東100mのOS13-29次が

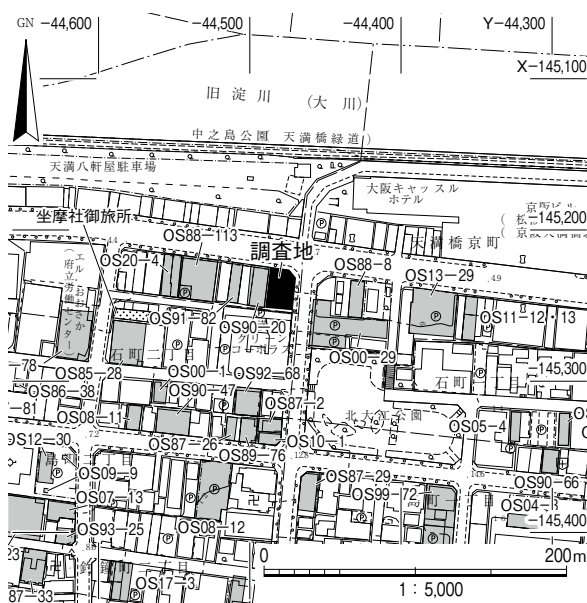


図1 調査地位置図

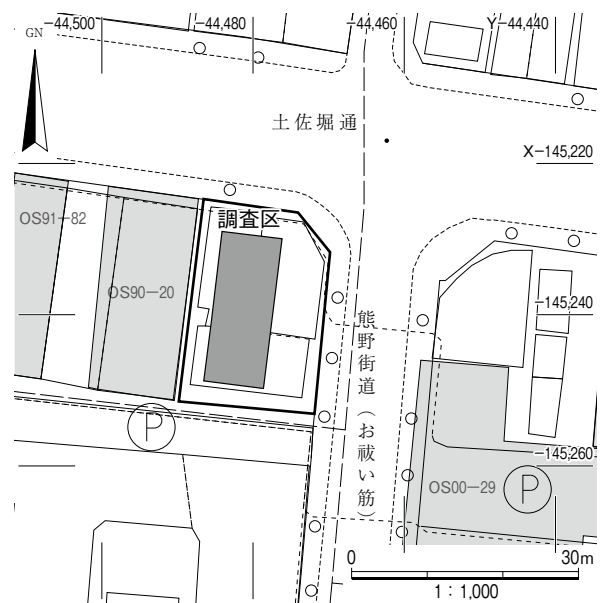


図2 調査区配置図

ある[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015]。通りから約10m離れて南側を発掘しており、中位段丘層の急崖の一部を検出し、古代の土師器を含む盛土と15世紀の陶磁器を含む盛土を介し、TP+2m前後に豊臣前期の遺構面があった。通り側の遺構面はこれより一段、低くなっていたと推測される。この上層の厚さ2m以上の盛土が1598年の「町中屋敷替え」に伴うと推定された。今回の調査地とOS13-29次の間にはOS88-8次調査があり、豊臣後期の建物や付札木簡が出土した[大阪市文化財協会1988]。

この地域は台地の崖面に近い傾斜地であり、城下町として造成が始まる時期から大坂夏ノ陣までの豊臣期の遺構の変遷過程や、大坂本願寺期以前の遺構面の有無などが目下の調査の要点となる。

大阪市教育委員会の試掘では南側で豊臣期の地層や遺構面が確認され、北側は旧建物の基礎を撤去した後、再度試掘が行われた。その結果、工事杭を避けた南北20m・東西8mを対象とし、南北2区に分けた反転掘りの調査計画となった。大坂夏ノ陣の焼土層近くまでを工事側で掘削した後、4月6日より南区から本調査に着手した。南区は上端で南北11mを確保し、豊臣前期の建物などの調査を4月27日に終えた。4月28日に埋戻し、北区の調査を開始した。南区と同様の遺構面までの調査を終えた後、1.7m×1.4mのトレンチにより大坂本願寺期以下の地層を観察し、5月11日に調査を終了した。本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成して得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はTP値(東京湾平均海面値)を用いてTP±〇mと表記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

敷地は傾斜地にあり、前面歩道で南がTP+5.9m、北がTP+4.0mである。現代盛土を除いた第1層以下に層名を付した。北区では第4層の上半より上層は残っていない。豊臣期の中の6~7段階の遺構変遷を把握しやすいよう、地層と遺構の出土遺物は合わせて報告した。

第1層：オリブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂質シルト層の盛土で層厚は10~15cmである。17世紀中~後

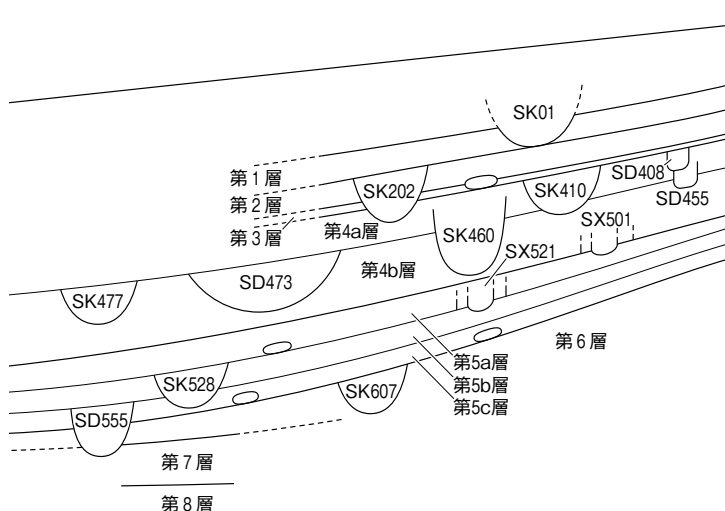


図3 地層と遺構の関係図

葉と推定される。第1層上面より上で妙知焼(1724年)に伴う可能性のある廃棄土壌SK01を検出した。

第2層：調査区南東に分布する、第3層由来の焼土を多量に含んだ盛土である。本層段階でも下層のSD408付近の敷地境を踏襲していると推定され、西の敷地では黄褐色(2.5Y5/5)シルト質中粒~粗粒砂層の盛土が相当する。層厚は15~25cmである。1615年の大坂夏ノ陣後の17



世紀前葉と推定される。上面でSK202などを検出した。

第3層：大坂夏ノ陣に伴う焼土・炭層で層厚は3～8 cmである。



図4 地層断面図

第4層：黄褐色(2.5Y5/3)シルト質極粗粒砂層の第4a層と、シルト偽礫混り浅黄色(2.5Y7/3)中粒～粗粒砂層などの第4b層から成る盛土である。西約3分の1の第4a層は、オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒～粗粒砂などの薄層をていねいに積んでいた。層厚は第4a層で15～45cm、第4b層で40～65cmであり、西側の方が厚い。時期は豊臣後期である。第4a層上面で大坂夏ノ陣で焼けたSB412、第4b層上面でSD473などを検出した。西隣のOS90-20次調査の第3層に相当する(註1)。

第5層：第5a～5cの3層に区分できる盛土である。第5層上面は南から北へ緩やかに低くなり、東から西へも傾斜していた。南区東端の標高はTP+2.8m前後、西端はTP+約2.2mであった。また、北区東端の標高はTP+約2.3m、西端はTP+2.1m前後であった。

層相が東西で異なり、南区東壁で代表させると、第5a層は浅黄色(2.5Y6/4)極粗粒砂層で最大層厚15cmである。第5b層は暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質中粒砂層で炭が混じり、層厚は10～20cmであった。第5c層は灰黄色(2.5Y6/2)極粗粒砂層で層厚は5～35cmであった。西壁際では薄い地層を重ね、第5b～5c層には木片などのごみがかかなり含まれていた。第5層は豊臣前期と推定される。第5a層上面で竈SX501、第5b層上面で竈SX521や壁が残存したSB532、第5c層上面でSD555などを検出した。OS90-20次調査の第4層に相当する。

第6層：10～20cmの暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト偽礫や、明黄褐色(10YR6/6)極粗粒砂～細礫などを斜めに積んだ盛土である。積み方は不規則であるが、表層や窪みには後者の砂礫層を積んでおり、上面は固い。上面にSB605・608があった。層厚は南東で厚く70cm以上、北西では薄く10cm内外であった。第6層上面は第5層上面と同様に南から北へ低くなり、かつ東から西へ傾斜していた。南区南東端の標高はTP+2.5m、北区北端でTP+1.6～1.9mであった。豊臣前期と推定される。OS90-20次調査の第5層が相当する。

第7層：有機物を含む、4枚ほどのオリーブ黒色(7.5Y3/2)シルト質中粒砂層と、灰色(7.5Y6/1)中粒～粗粒砂層などから成る水平に堆積する盛土を第7層とした。層厚は55cmである。上面から5cm下に炭層が挟在し、下面から約10cm上に遺構面の可能性のある固い層界があった。遺物は出土していないが、大坂本願寺期以前と推定される。炭層は1580(天正8)年の本願寺大坂退去時の火災の可能性もある。

第8層：第7層と異なり、北の大川側へ傾斜して堆積していた盛土を第8層とした。層厚は65cm以上である。灰色(10Y4/1)極細粒砂の偽礫などからなり、部分的にラミナもあることから最下層は水漬きの状態での盛土と観察された。北区深掘り部での第8層上面の標高はTP+1.2mである。本層からも遺物は出土していない。底はTP+0.55mで、ここまでは大川による水成層は検出していない。

## ii) 遺構と遺物

### a. 第6層上面の遺構と遺物(図5～6)

北区で礎石建物SB605、南区でSB608を検出した(図5)。SB605の方向はN3°E、SB608の方向はほぼ真北と異なっており、西辺はそろろうが両者は別の建物であろう。これらは、層序などから西隣のOS90-20次の第5層上面SB501・502と同時期と推定される。OS90-20次SB501・502が周辺の土佐堀通の方向(N7°E)に一致しているのに対し、SB605・608はやや西に振っており、SB608の方

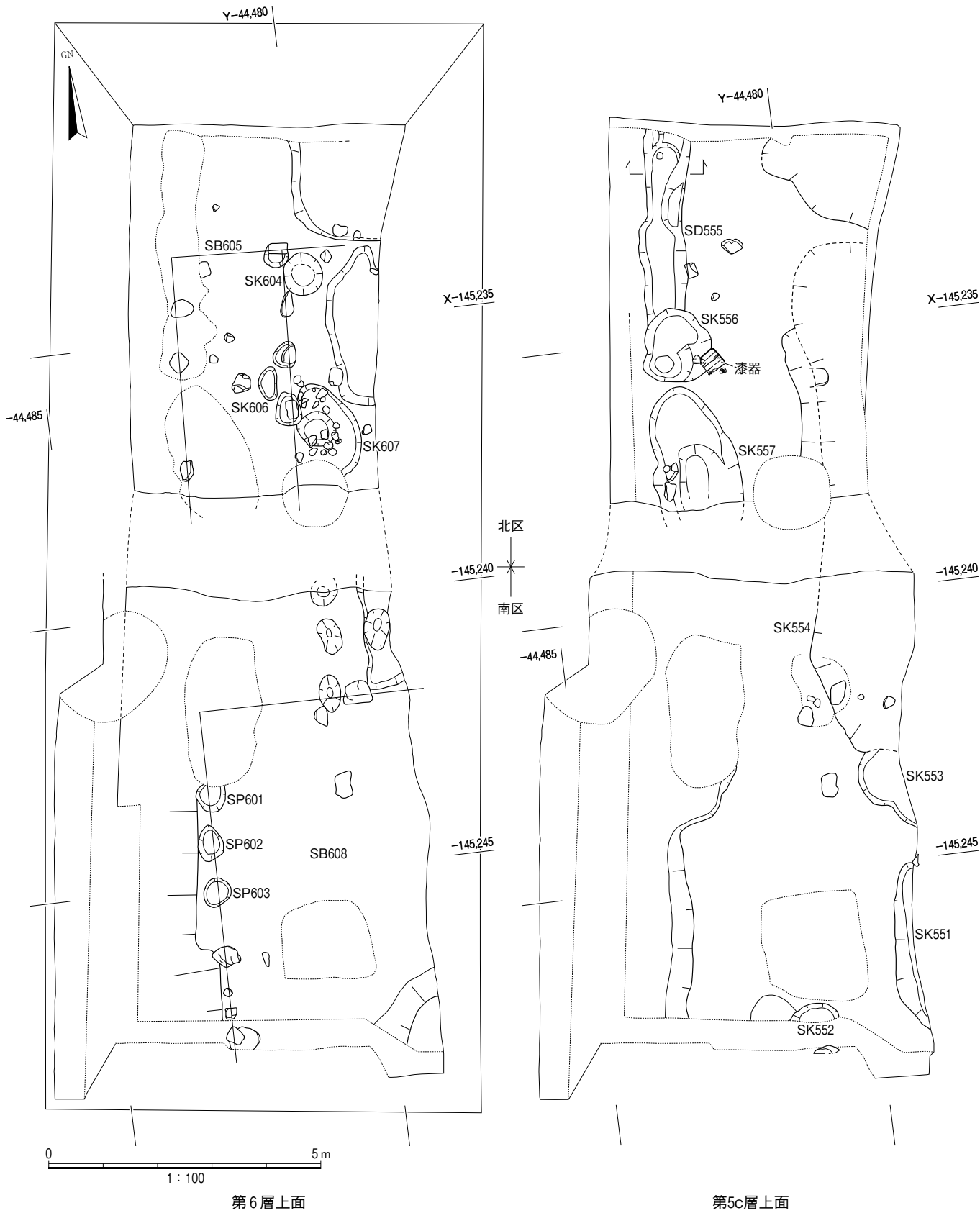


图5 第6層上面遺構平面図、第5c層上面遺構平面図

が振り幅が大きい。通りに面しない奥は旧地形の影響などを受けたのであろう。SB605・608の西はやや低くなっていき、遺構の空白があることから屋敷境の可能性が高い。OS90-20次調査でも屋敷境が検出されており、今回の調査地の境までが一つの敷地であれば間口6間(約12m)となる。

正確なプランは不明だが、SB605は南北4m以上、東西3m以上である。桁行方向は半間間隔に礎石があった。内側に礎石が点々とあることから床張りの建物と推定される。SB608は南北6m以上、東西3m以上である。SP601~603は礎石を据えた浅い穴と考えられ、石は抜かれていた。深さ0.05~0.1mで、埋土は3個とも黄褐色(10YR5/4)中粒~極粗粒砂層であった。SB608の西側柱は半間間隔である。SB608には長さ0.5mに及ぶ大きな石も使われていた。

北区SK607は長さ1.8m、幅1.3m、深さ0.15mで、0.1~0.15m程度の石が数多く捨てられていた。

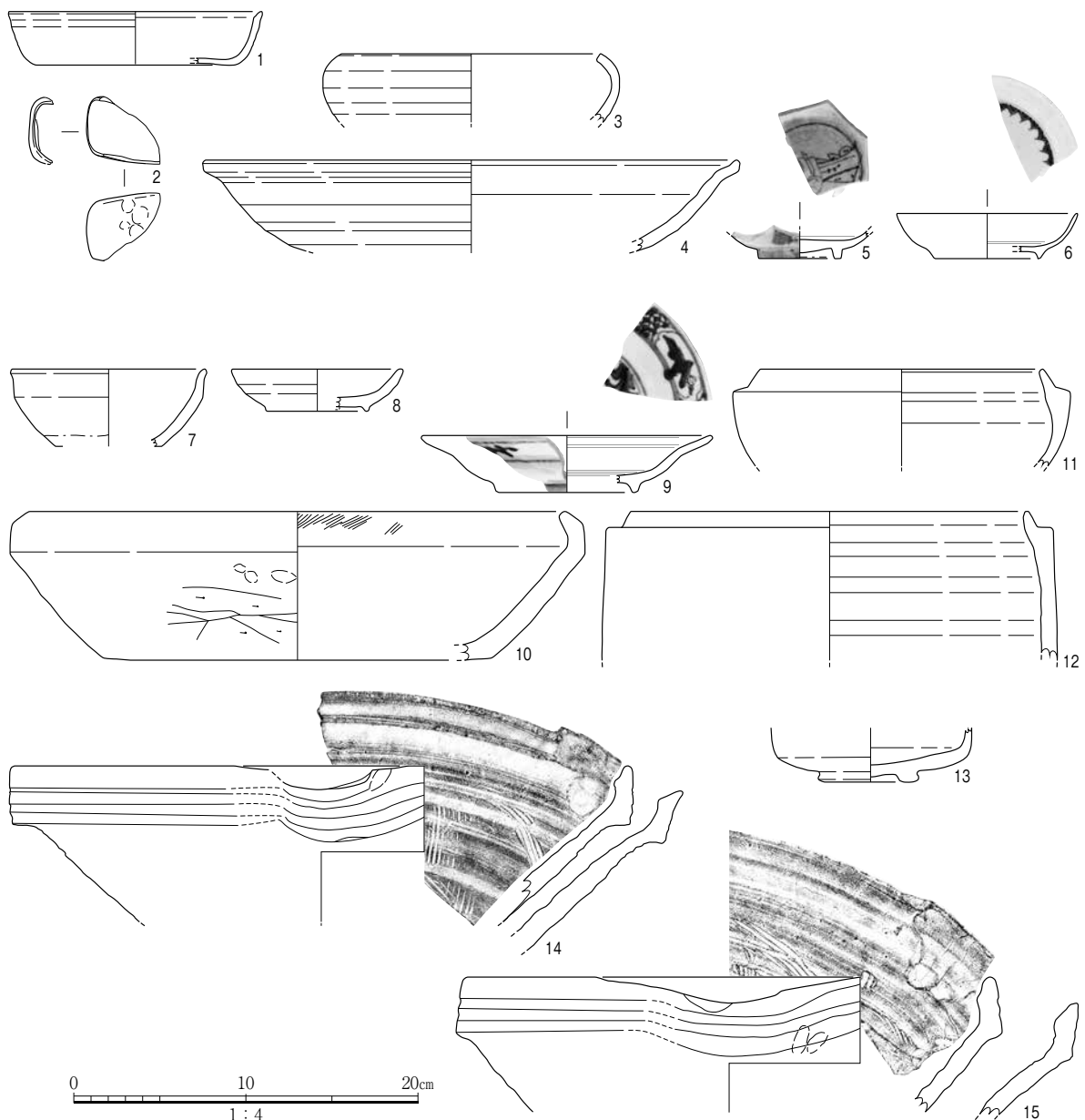


図6 出土遺物実測図(1)

第5b層(1)、第4b層(2)、第6層(3~6)、第5c層(7~14)、SD555(15)

第6層からは中国産青花碗5・同皿6、備前焼鉢3、瀬戸美濃焼大皿4が出土した(図6)。これらからSB605等は豊臣前期と推定される。図6の1は古代の土師器杯、2は中世の土師器耳皿である。

b. 第5c層上面～5a層上面の遺構と遺物(図5～9)

第5c～5a層の間は小刻みに屋敷の様式替えが行なわれている。

第5c層上面には北区にSD555、SK556・557があった(図5)。SD555は幅0.65～0.85m、長さ3.7m以上、深さ0.35～0.4mであった。水が流れた痕跡は確認できなかった(図8)。上下の遺構面との比較から屋敷境に当たると考えられる。SD555からは図6の15の備前焼播鉢が出土した。SD555の東には散発的に礎石があり、本来は建物が存在した可能性が高い。

SK556・557は屋敷境近くに設けられた廃棄土壌である。SK556は直径1.35mの円形で、深さは0.25mである。底に薄い水成のシルト層があり、黄褐色(2.5Y5/3)シルト質粗粒～極粗粒砂層で埋められていた。SK557は長さ2.2m以上、幅1.45m、深さ0.55mで、埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)極粗粒層などであった。

SK556が埋まった後の東肩付近で、37cm角のほぼ完形の漆盆が出土した(図版2・図8)。角を落とした八角形で、表が赤漆、裏が黒漆であった。底板は4枚である。深さは約3cmで、外縁の口縁部が外に張り出すように復元できる。

南区では南端のSK552以外に確実な遺構はなかった。東壁際のSK551、SK553・554は、調査区外へ広がる窪みである。SK551の埋土は炭混り暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質中粒砂層、SK553は偽礫混り灰黄色(2.5Y6/2)中粒砂層であった。SK554は底に粘土～シルトの水成層や炭層があり、浅黄色(2.5Y7/3)中粒～粗粒砂などで埋められていた。平面図にある南区の石は、下層のSB608の礎石の頭が見えているものである。

第5c層からは瀬戸美濃焼の天目碗7・丸皿8、中国産青花皿9、土師器火入10、瓦器土器火入11・12、備前焼播鉢14が出土した(図6)。13の黒釉の軟質施釉陶器は漆盆と近接して出土した。これらは豊臣前期である。

次に、第5b層上面では西壁が残存するSB532、南区の竈SX521などを検出した(図7)。

SB532は南北5.8m以上で、東側に疎らに分布する礎石まで建物があつた可能性が高い。残存した西壁の基部は、厚さ10～14cmの灰オリーブ色(5Y6/2)シルトであった。西壁の礎石は本来、半間間隔に据えられていたと考えられる。また、SP530はSB532の壁を切る細い杭跡である。

SX521(図8)は北に焚口があり、竈を構築したにぶい黄色(2.5Y6/3)粘土の広がりから西側にも焚口があつたと推定される。焚口の内法は幅0.43m、奥行き0.34m、基部の残存高0.12mであった。竈は土間に築かれ、焚口付近から北と東は約1.2mの範囲で炭が広がっていた。SX521は屋内にあつたであろうが、周囲に礎石などは残っていなかった。また前後関係は不明だが、北西のSK528とは共存しない。SX521からは図9の20の中国産色絵磁器皿が出土した。

SK528は長さ2.8m、幅1.4m、深さ0.7mで、埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)中粒～粗粒砂層などであった。第5c層上面SK557と同様の廃棄土壌と推定される。SK528からは瀬戸美濃焼折縁皿21・向付22、中国産陶器の天目碗23が出土した(図9)。22は型作りで、全形はよくわからない。

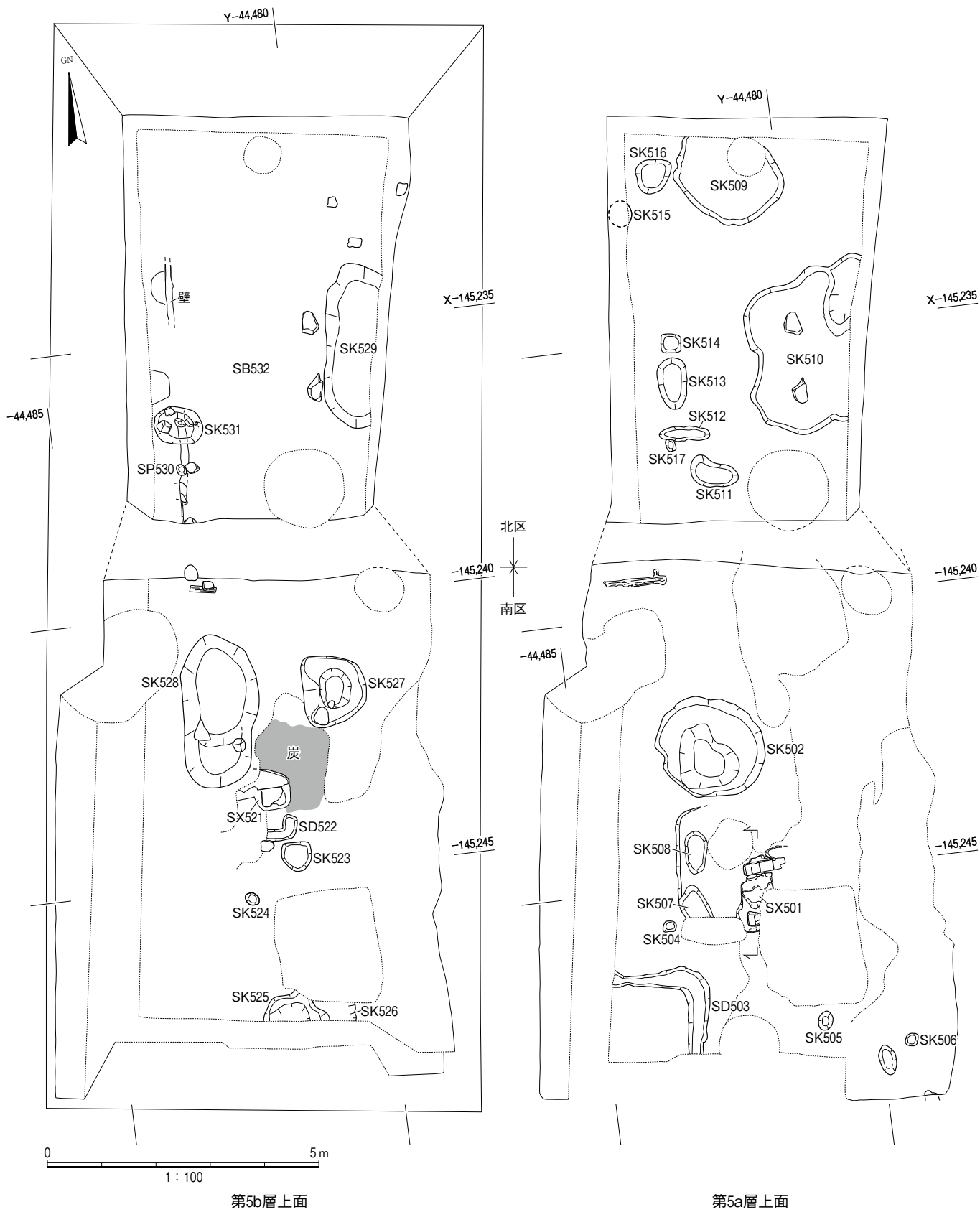


图7 第5b層上面遺構平面図、第5a層上面遺構平面図

この東のSK527は南北1.3m、東西1.15m、深さ0.35mで、埋土は粘土偽礫混りにぶい黄褐色(2.5Y5/4)シルト質細粒～粗粒砂層であった。南端のSK525は東西1.2m、深さ0.45mで、埋土は偽礫混りにぶい褐色(2.5Y5/3)中粒～粗粒砂層であった。

第5b層からは中国産青花碗16・皿17、産地不明の陶器碗18、朝鮮半島産白磁皿19が出土した(図9)。これらとSK528出土遺物などから第5b層上面遺構は豊臣前期と推定される。

次の第5a層上面では竈SX501などを検出したが、それに伴う建物の礎石はほとんどなかった(図7)。北区のSK510内の石は下層の礎石が頭を出しているものである。竈の位置、土間の広がり、地面の傾斜などから、建物の配置と屋敷境の場所は第5b層上面と類似していたと推定される。

SX501は東に二つの焚口をもつ竈である(図8)。北側は底に3枚の平瓦を敷き、両袖に石を立て並べ、明黄褐色(10YR6/8)シルトで壁体を築いていた。内法で幅0.20m、奥行き0.78m、残存高約0.2mであった。南側の焚口にも底に瓦が敷かれ、基部に平瓦を置いて壁体が構築されていた。内法で幅0.26mである。壁は赤色によく焼けていた。二つの焚口とも炭が溜まっていた。SX501からは図9の27の瀬戸美濃焼天目碗が出土した。

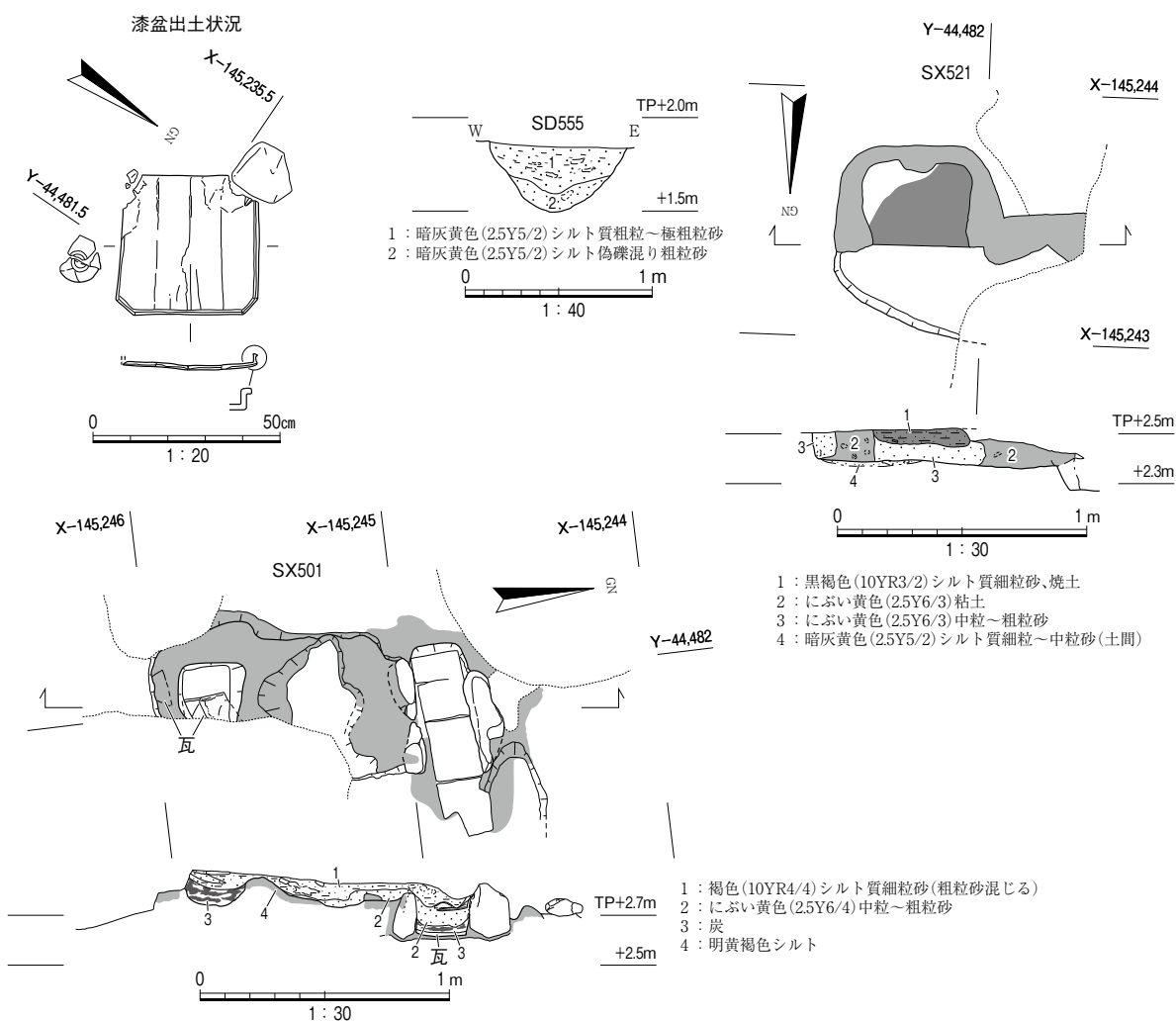


図8 遺構平面図・断面図

第5c層上面漆盆出土状況・SD555、第5b層上面SX521、第5a層上面SX501

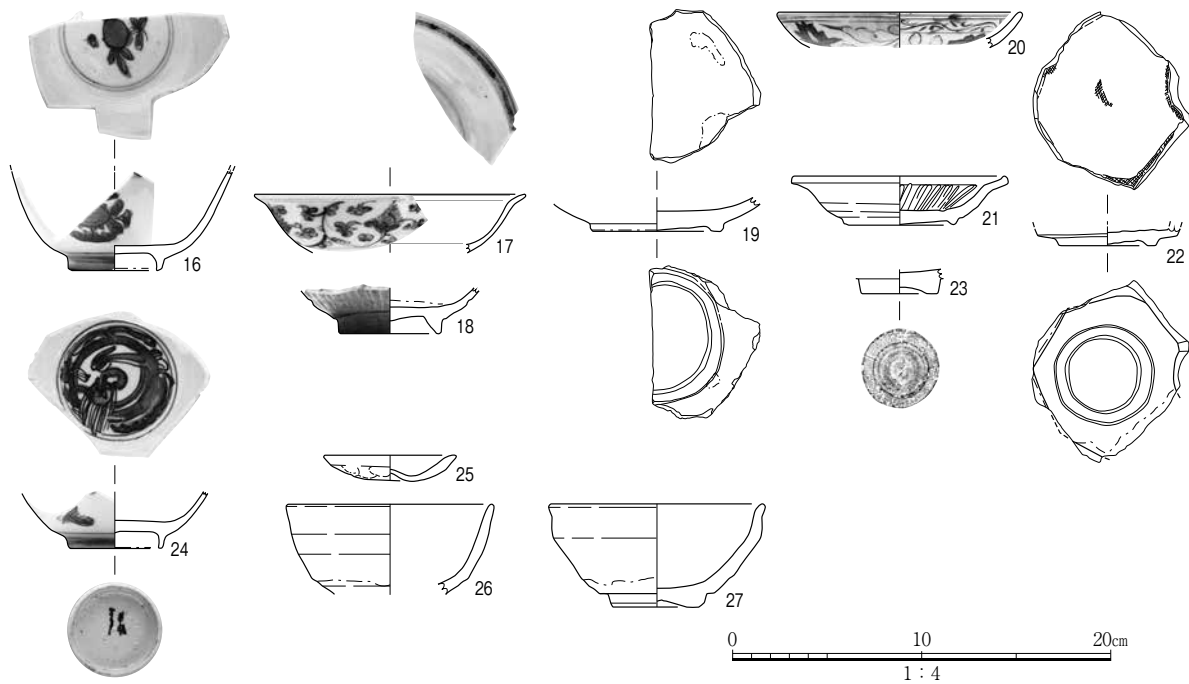


図9 出土遺物実測図(2)  
第5b層(16~19)、SX521(20)、SK528(21~23)、第5a層(24~26)、SX501(27)

SX501の西には砂の入った長方形の浅い窪みがあり、竈の構築と関係があるかもしれない。南には直角に曲がる深さ0.1mのSD503があった。SD503の南北溝の位置は屋敷境付近になる。また竈の北西のSK502は直径1.8~2.0mの円形の土壇で、深さ0.65mであった。

その他に南区の北西では、東西方向に長さ1.05mの材が横たわっており、盛土に伴う土留の可能性はある。調査区の南西角では、南・西壁で板を杭で止めた遺構を確認した。第5a層の盛土の際の土留か板壁の溝の可能性はある。

第5a層からは土師器皿25、瀬戸美濃焼丸碗26、中国産青花碗24が出土した(図9)。第5a層と上面遺構ではSK504の小片1点以外は肥前陶器が皆無で、豊臣前期と推定される。

c. 第4b層上面~4a層中の遺構と遺物(図10・12・13)

第4b層上面と第4a層中で、大坂夏ノ陣より前の2段階の遺構があった(図10)。北区は第4層上半より上の地層が失われているために各遺構の正確な遺構面はわからないが、出土遺物から矛盾しないものを第4b層上面の遺構として平面図に表した。

第4b層上面では南北方向のSD473があった。SD473は幅3~3.5m、深さ0.5~0.6mの平面形がはっきりしない溝である。北区では輪郭が不分明になり、傾斜に則して西に振れながら続いていたとみられる。底は凹凸が目立ち、北区でSK478・479とした不整形な窪みはSD473の底面の特徴と類似していた。SD473は底に灰黄色(10YR4/2)シルトやシルト質細粒~中粒砂層の水成層があり、中・上部は偽礫混りの地層で埋められていた(図12)。南区では埋土中に、礎石に使われていた可能性のある長さ0.4~0.6mの石があった。SD473からは図13の35の肥前陶器碗が出土した。

SD473は、大雨などにより斜面を削って流れた水流の跡を埋め戻したものとする。溝底は調査区



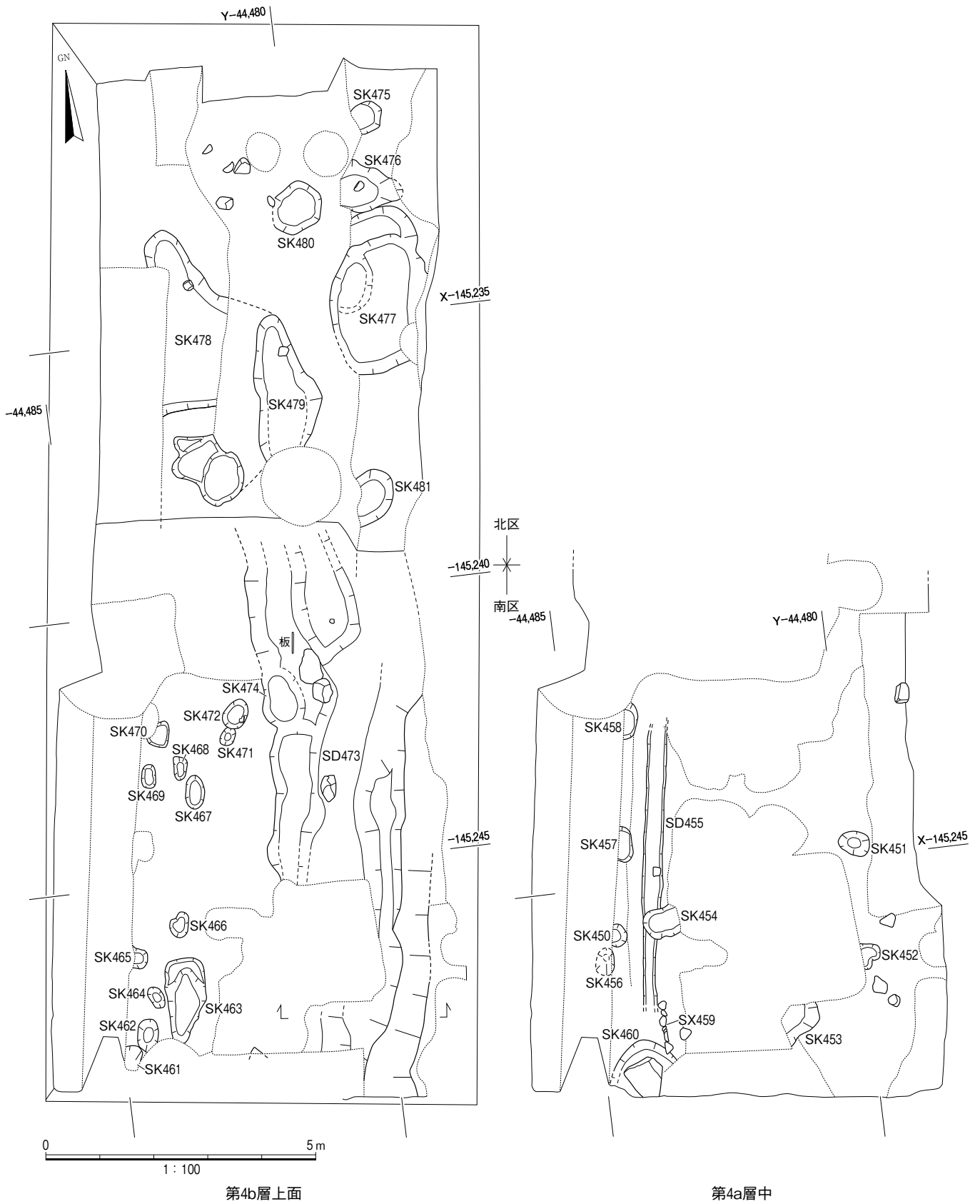


图10 第4b層上面遺構平面图、第4a層中遺構平面图

南端でTP+2.8m、南区北端でTP+2.2mであった。SD473の影響の及んでいないところでは、北区北東側に礎石の可能性のある石や廃棄土壌SK476・477があり、南区南西側に小穴などが分布していた。

SD473以外の第4b層上面の主な遺構には以下があった。

北区にあるSK476は東西1.2m以上、南北1.0m、深さ0.3mで、埋土はにぶい黄色(2.5Y6/3)シルト質中粒～粗粒砂層と黄褐色(10YR5/6)シルト質中粒砂層であった。その南のSK477は長さ3.1m、幅1.8m以上、深さ0.6mで、埋土はにぶい黄色(2.5Y6/4)中粒～極粗粒砂層とオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂層などであった。SK477からは土師器皿32、瀬戸美濃焼丸皿33、志野向付34が出土した(図13)。

第4b層からは土師器皿28、中国産白磁皿29、同青花碗31、備前焼鉢30が出土した(図13)。第4b層やその上面遺構は豊臣後期と推定される。

次の第4a層中の遺構は、西側では個々の薄層の上面から掘られた溝や土壌、東側では大坂夏ノ陣以前であるのは確実だが、第4a層の間としか遺構面を把握できなかった小土壌などである(図10)。

西側の南北溝SD455は幅0.2～0.35m、深さ0.2mで、壁は板を杭で止めていた痕跡があった。敷地境の排水溝で、少し西にずらして第4a層上面のSD408に造り替えられている。南端は不分明になり、東肩の延長には西に面をもつ石列SX459があった。

SK460は大きな花崗岩を埋めた土壌で、第4a層中の薄層上面から掘られ、第4a層上面には石の頭は出ていない。石は長さ0.9m、幅0.7mの大きさがある。大坂城などの大きな造作のための石材が使われずに処分されたものであろう。

西壁際のSK458・457・450・456も第4a層中の薄層上面から掘られていた。SK458・457は直径0.6～0.65mの円形で、深さは0.35mと0.6mであった。SK450・456は直径0.4～0.5mの円形で、SK450は深さ0.1mであった。敷地境の溝に平行することから掘立柱の塀の可能性もあるが、柱痕跡は確認していない。西壁の類似の層準にも同様の大きさの遺構があった。

第4a層からは土師器焼塩壺36、肥前陶器碗37・38、同皿39・40、中国産青花碗41、同大皿42が出土した(図13)。これらは豊臣後期である。

#### d. 第4a層上面～3層上面の遺構と遺物(図11～13)

第4a層上面と大坂夏ノ陣の焼土層である第3層の上面の遺構(網掛け)を図11左にまとめた。平面形は不分明だが、礎石の分布などから試掘坑の東側周辺には夏ノ陣で焼けたSB412が推定できる。SB412は南北6m以上であろう。南端のSP406・407は礎石の抜き穴で、SK405南縁から石が並び、SP406で直角に折れて小さな段差があった。

西側には敷地境のSD408があった。SD408は幅0.2～0.4m、深さ0.2mで、壁は板を杭で止めていた。埋土はにぶい黄色(2.5Y6/4)細粒～粗粒砂の水成層で、西側に溢れた痕跡があった。SD408からは図13の49～51の土師器皿、52の焼塩壺蓋が出土した。

SD408の西に接して6個の石を敷いたSX413があり、敷地境に関係する構造物の基礎かもしれない。また西壁際には石列があった。SD408の西側は、東敷地とは異なって遺構が稀薄であった。

この他に東敷地にはSK401・409・410・411があった(埋土は図12参照)。SK401は東西2.4m以上、

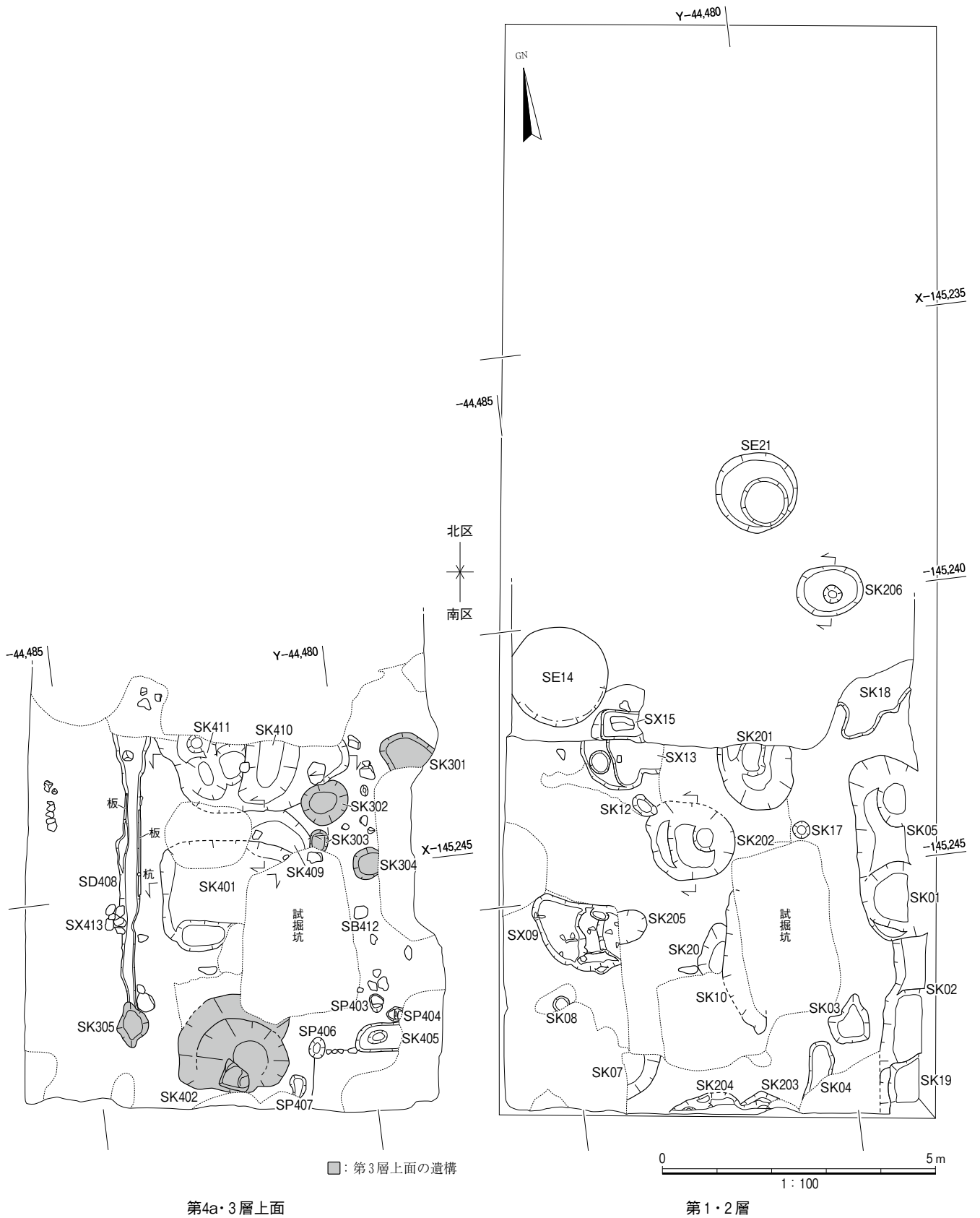


図11 第4a・3層上面遺構平面図、第1・2層遺構平面図

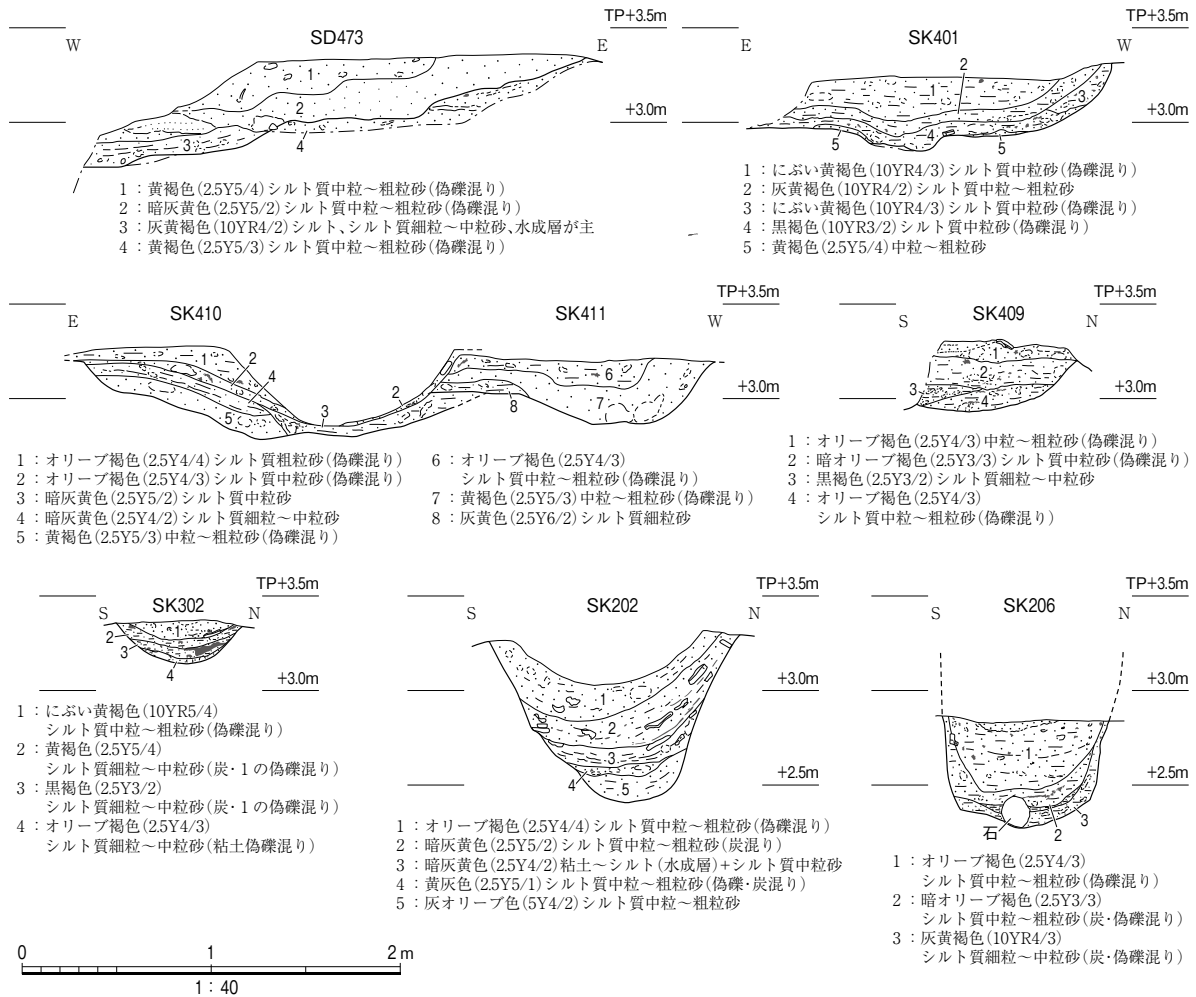


図12 遺構断面図

南北2.0mで、南側が一段深くなっており、深さ0.75mである。SK409はSK401より古く、東西1.1m以上で、深さ0.35mである。SK410・411は近接した時期に掘って埋められており、SK410が深さ0.5m、SK411が深さ0.35mであった。これらは廃棄土壌の類であろう。SK410からは土師器皿43、肥前陶器の碗46・47、皿44・45、鉢48が出土した。

次に、大坂夏ノ陣直後の第3層上面の遺構にSK301～305があった。SK302は直径0.7～0.85mの円形で、深さ0.2mであった。底に炭が溜まった小規模な廃棄土壌である(埋土は図12参照)。SK402は遺構面を明確に把握できていないが、第3層上面～第2層上面にかけての遺構と推定され、SK460と同様に巨石を処分するための土壌である。

e. 第2層上面～第1層上面以上の遺構と遺物(図11～13)

第2層上面の遺構にはSK201～206があった(図11)。SK202は直径1.5～1.6mの円形で、深さ0.9mの廃棄土壌である(埋土は図12参照)。SK202からは土師器皿58、肥前陶器碗59・60、備前焼大甕62、軒平瓦61が出土した。62には「□石五斗入捨土」という刻字があった(図13)。また図13掲載の第2層出土遺物は、土師器皿53、肥前陶器碗54、肥前磁器碗55、中国産青花皿56・57である。

中央東側にあるSK206は東西1.2m、南北0.9mの楕円形である。上部は壊されており、深さはSK202と同様に0.9m近くあったと推測される(埋土は図12参照)。これも廃棄土壌の類であろう。

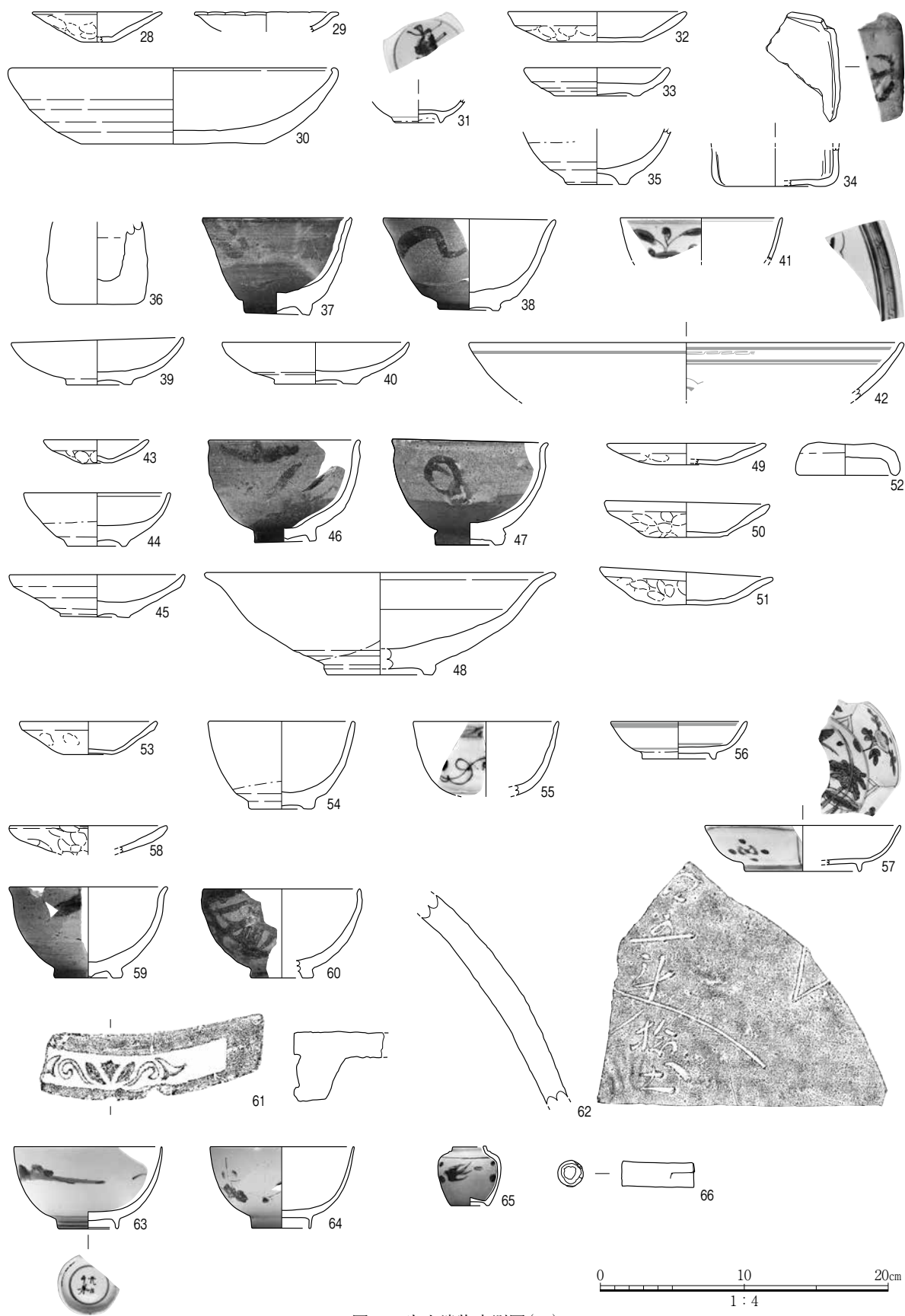


图13 出土遺物実測図(3)

第4b層(28~31)、SK477(32~34)、SD473(35)、第4a層(36~42)、SK410(43~48)、SD408(49~52)

第2層(53~57)、SK202(58~62)、第1層(63・64)、第1層より上(65)、SK05(66)

図11の遺構番号が二桁のものは、第1層上面以上の遺構である。特徴的なものを取り上げると、南東のSK01は焼け瓦などを捨てた火事後の片付けである。火災は出土陶磁器から1724年の妙知焼の可能性がある。

南西のSX09は東西1.6m以上の不整形な浅い穴である。焼土が密に分布していることと焼けた面があることから竈の残骸と推測したが、構造はわからなかった。中ほどのSE14・21は18世紀後半～19世紀で、井戸瓦が使われていた。SE14の東のSX15は、長さ0.4mの上面が平らな石を据えた穴で、19世紀頃に下る。これと組み合わせるような遺構はなかった。

図13掲載の遺物は第1層出土の肥前磁器碗63・64、第1層より上の層準から出土した中国産磁器の五彩小壺65である。66の円筒形の骨製品はSK05出土で、用途はわからない。

### 3)まとめ

今回の調査では第6層上面と第5c～5a層上面で豊臣前期(1580～1598年)と推定される遺構を、第4b層上面～4a層上面で豊臣後期(1598～1615年)と推定される遺構を調査した。この間、南北方向の敷地割による6～7段階の遺構変遷があり、第4a層上面のSB412などは大坂夏の陣で焼亡していた。当敷地の造成の区切りとなる盛土は第6層と第4層である。城下町の整備過程と対比すると、第4層が慶長3(1598)年の「町中屋敷替え」に伴い、第6層が豊臣前期の間のいずれかの周辺の造成の可能性が考えられる。第6層上面から第5層の間の遺構の変遷を短期間とみれば、第6層の形成は文禄3(1594)年の惣構建設に伴う可能性もある。また、大坂本願寺期と推定される第7層から第6層の移行がスムーズなことなどから、大川南岸と台地崖面の間の狭い場所にも、本願寺期以前や豊臣初期の遺構が存在する可能性が考えられる。

註)

(1)層序・層相・時期・遺構面とも具合よくOS90-20次調査と符合するが、報告書の断面図(図25)の標高は誤っていると考えられ、約1m低くすると今回の調査と合ってくる。

### 参考文献

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015、「中央区天満橋京町における建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS13-29)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)』、pp.327-344

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2022、「中央区北浜東2-13・14における建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS20-4)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2020)』、pp.153-170

大阪市文化財協会1988、『(仮称)松下興産天満橋ビル建設に伴う大坂城跡発掘調査(OS88-8)略報』

大阪市文化財協会2003、『大坂城跡』Ⅶ、pp.27-37

地層断面(第4b～第8層、  
北区深掘り部周辺西壁、  
東から)



北区第6層上面全景  
(南から)



南区第6層上面全景  
(南から)







第5c層上面漆盆の  
出土状況  
(北区、北東から)



北区第5b層上面全景  
(南から)



南区第5b層上面全景  
(東から)





第5b層上面竈SX521  
(南区、南から)



南区第5a層上面全景  
(東から)



第5a層上面竈SX501  
(南区、東から)





第4b層上面SD473など  
(南区、北から)



南区第4層上面・  
第3層上面全景  
(東から)



南区第2層上面全景  
(東から)





中央区本町橋11-1、10-1、10-3他13筆における  
建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS22-2)報告書

調査個所 大阪市中央区本町橋11-1、10-1、10-3他13筆  
調査面積 116.5㎡  
調査期間 令和4年4月7日～5月6日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋 工



## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣氏大坂城惣構の南西部、東横堀川の東、農人橋の北東に当り、松屋町筋の西側に面している(図1)。地形的には、上町台地西斜面を下りきった傾斜変換点に位置する。一般に、松屋町筋は縄文海進時の海蝕崖の位置に概ね一致するとされ、当地もその近辺ということになる。

調査地周辺は(図2)、大坂城跡の中ではさほど調査密度が高くはないが、直近では、北隣の敷地でOS19-6次調査が行われている。同調査では豊臣後期の大型土壇状遺構、17世紀の大型のごみ捨て穴(SX201)が発見されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2021]。地層は本調査地の層序と一部対照が可能で、それについては後述する。西50mにはOS10-11次調査地があり、TP+1m(地表下約4m)以下まで18世紀後半の遺物を含む客土層が続くことがわかっている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012]。南東100mのOS15-2次調査では、豊臣後期の土採り穴、徳川期の井戸・土壇などが発見されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017]。

調査地の東方は台地の高所へ向い、後世の攪乱・削平を被って地層の遺存状況は全般に良くない。それでも代表的な成果を挙げれば、OS87-18次調査で奈良時代後半の建築部材を井戸側に転用した井戸、OS87-14次調査で、東西に延び石垣を伴う豊臣後期の堀が検出されている[大阪市文化財協会2003a]。

調査地の北および北東は多くの発掘調査が行われており、地層の遺存状況も比較的良好である。調査地の北200余mの大阪府教委調査地では、石山本願寺期・豊臣期の町屋、徳川期西町奉行所の遺構が発見されている[大阪府教育委員会1986]。松屋町筋の東に面するOS89-41・89-149・91-53次調査地では、豊臣前期の南北石垣、豊臣後期の礎石建物、徳川期の穴倉などが発見されている[大阪



図1 調査地位置図

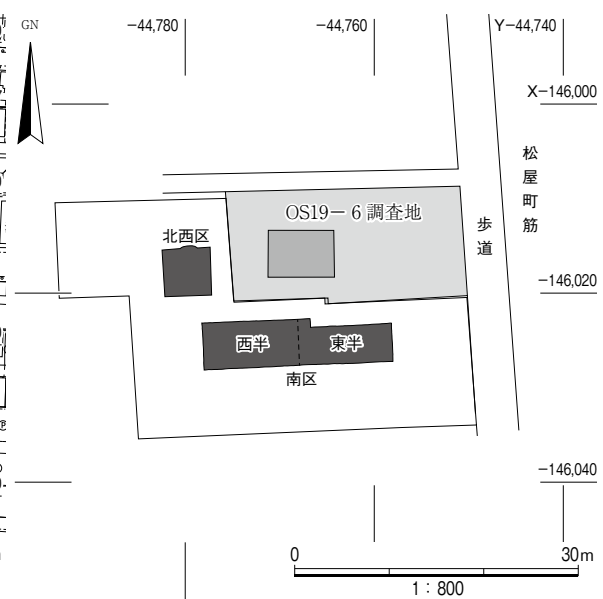


図2 調査区位置図

市文化財協会2003b]。2層の分厚い整地層があり、それぞれが1594(文禄3)年の惣構造営と1598(慶長3)年の大坂町中屋敷替に対比可能とし、本格的な宅地利用が進むのは豊臣後期とした指摘は重要であろう。この他にも豊臣期・徳川期の遺構・遺物の発見は数多い。

以上のような遺跡の環境下にある当地において、建築工事が計画され、大阪市教育委員会によって事前に試掘調査が行われた。その結果、地表下2mで本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面と遺物包含層が発見された。これを受けて、こうした地層の年代や遺構・遺物の分布状況など、この地域の歴史の変遷の基礎資料を得ることを目的として本調査が行われることとなった。

発掘調査は、先に事業主側で土留めを打設し、現地表面から1.9mまで掘削した状態から着手することとなった。当初、調査地南側に東西20m、南北5mのトレンチ(南区)、北西側に5m×5mのトレンチ(北西区)を設け、合計125㎡を調査する予定であったが、土留めの掘形で攪乱された部分を避け、かつ、土地置き場を確保するために南区東半の南北幅を4mに減じ、頭書の調査面積となった。南区は東半・西半で反転調査とし、南区東半→北西区併行・終了→南区東半終了→同西半の順で調査を進めた。令和4年4月7日に機材等を搬入して調査を開始し、地表下1.9m以下はすべて人力によって掘り下げた。地層の掘下げ、遺構検出、遺構掘下げを繰り返し、遺物の捕集に努め、適宜に写真撮影と実測図によって記録保存を行った。本報告で用いた方位は、現地で作成した街区図を大阪市デジタル地図(S=1/2500)に合成することで世界測地系座標に乗せており、座標北を基準とする。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文中では「TP+○m」と略記している。

## 2) 調査の結果

### i) 層序と各層出土の遺物

#### 層序(図3・4、図版1)

敷地内の現地表面の標高は概ねTP+6m前後で平坦であった。調査対象部分は事業者側によって掘り下げられていて、TP+4m弱の高さであった。第0層以下約2mまでの地層を以下の8層に大別した。南区の南壁地層断面で代表して各層の特徴を報告する。

第0層：褐色(10YR4/4)細粒～中粒砂からなる攪乱された地層で、事業者側により上掘り時に形成されたものである。層厚は最大で10cmであった。

第1層：褐色(10YR4/3)～にぶい黄色(7.5Y6/4)細粒～中粒砂からなる盛土層で、主に南区東半に分布し、西半では削平されて残っていなかった。調査開始前の掘削で上部を削平され、層厚最大10cm

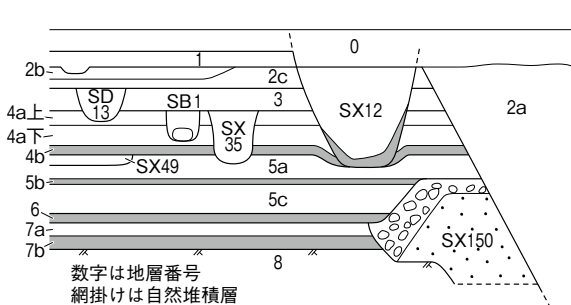
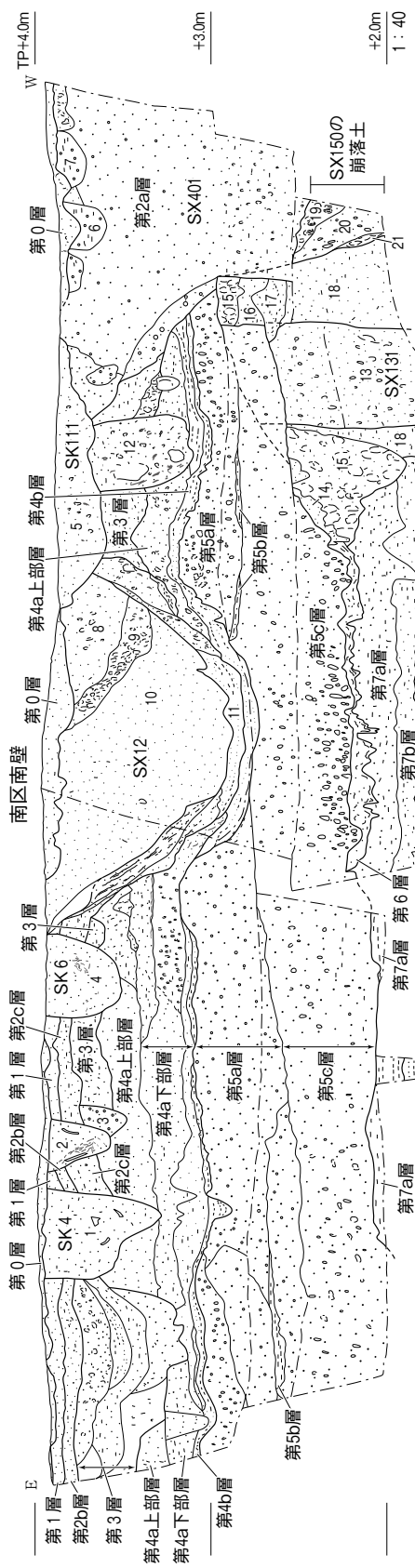


図3 地層と遺構の関係図

が残っていた。大阪市教育委員会による試掘結果と照合すると、本来、層厚は約40cmであったことがわかる。本層と第2a・2c層の上面では、SX12など17世紀中葉から19世紀までの時期の遺構が検出されたが、これは本層以上に掘込み面をもつ遺構を同じ検出面で捉えた結果である。最も古い遺構は17世紀中葉なので、本層はその頃には形成さ



- 1 : 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質砂
- 2 : オリーブ褐色(2.5Y4/3)炭混り砂
- 3 : 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)礫混り砂
- 4 : 暗褐色(10YR3/4)炭混り砂
- 5 : 暗褐色(10YR3/3)細粒～中粒砂
- 6 : にぶい黄褐色(10YR3/4)細礫混りシルト
- 7 : にぶい黄褐色(10YR3/4)細礫混りシルト
- 8 : 黄褐色(10YR5/8)シルト偽礫混り細粒～中粒砂
- 9 : 褐色(10YR4/6)砂混りシルト偽礫
- 10 : にぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂

- 11 : 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト～極細粒砂(自然推積)・オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト偽礫混り細粒～中粒砂(流入)など
- 12 : 暗褐色(10YR3/4)焼土・炭混りシルト質砂
- 13 : にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト偽礫混りシルト質細粒砂
- 14 : 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂
- 15 : 黒褐色(2.5Y3/1)わずかに細粒砂質粘土
- 16 : 灰色(5Y4/1)シルト質砂
- 17 : にぶい黄褐色(10YR4/3)わずかに細粒砂質粘土質シルト

- 18 : にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質細粒～中粒砂
- 19 : 黒灰色(2.5Y4/1)砂混り粘土偽礫
- 20 : オリーブ褐色(2.5Y4/3)礫混り砂
- 21 : 黒褐色(2.5Y3/2)粘土偽礫

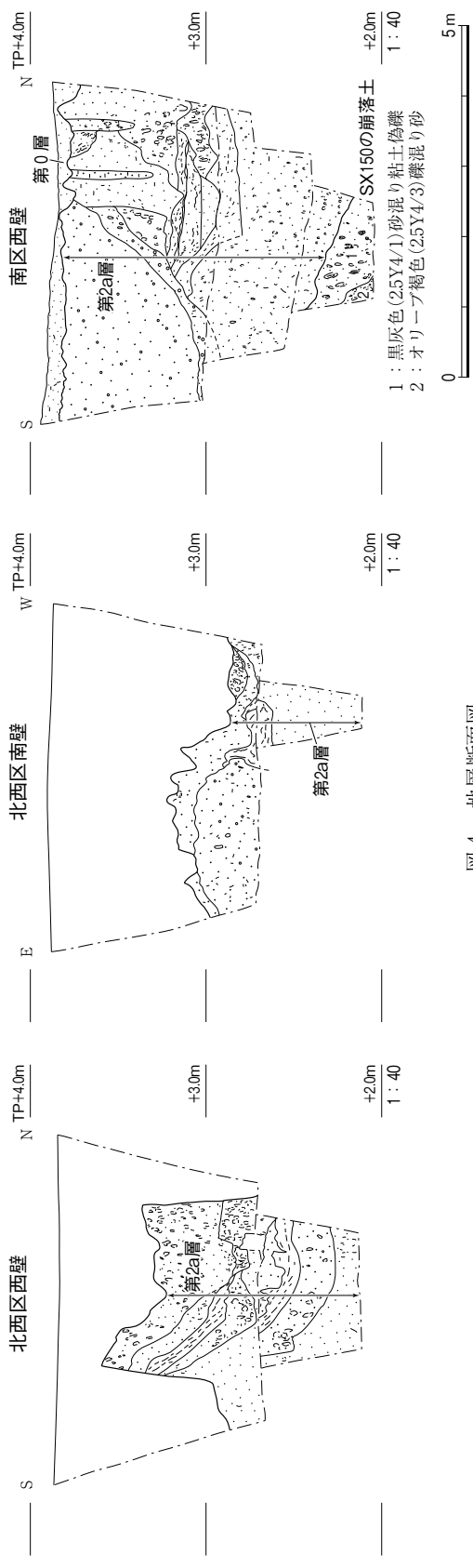


図 4 地層断面図

れていたことになる。

第2層は徳川期の地層で、第2a～2c層の3層に細分された。

第2a層：オリブ褐色(2.5Y4/4)細礫混り粗粒砂や褐色(10YR4/4)シルト～中粒砂などからなり、南区西半西部にのみ分布する。層厚は165cm以上である。概ね東から西へ向って投入された客土で、所々にシルトの薄層が見られたが、平坦な面をなすようなものではなく、客土の休止時に堆積したものとみられた。北西区は第0層直下からTP+2.2mまで同様な堆積が続いており、同一層準と考えた。南区西端部以西の深い落込みSX101を埋め立てた際の堆積層であろう。遺物は箸などの木製品のみで、時期を示すものはないが、南区西半の本層上面で検出された遺構は18世紀以降のもので、この頃には形成された地層である。

第2b層：暗オリブ褐色(2.5Y4/3)からなる作土層で、東半東部にのみ分布していた。層厚は最大で10cmほどであった。上面で畝間とみられる遺構が検出された。時期がわかる遺物は出土しなかった。

第2c層：暗オリブ褐色(7.5Y4/3)～にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルトからなる整地層である。層厚は10～17cmである。本層からは、瀬戸美濃焼小杯37、高取焼茶入38、肥前磁器皿39、三巴文軒丸瓦40が出土し(図14)、39などから地層の年代は17世紀中葉頃とみられる。顕著に焼土が混じることから大坂ノ陣の焼土層を一部母材とした可能性がある。

第3層：褐色(10YR4/4)炭混り砂質シルト～暗褐色(10YR3/4)炭混りシルトからなる整地層で、層厚は10～30cmである。西端部で西へやや下がって尖滅し、前述した落込みSX101の斜面を形成していた。上面ではSD13、SK17など豊臣後期の遺構が検出された。本層からも肥前陶器碗24、同円盤状加工品25(図11)が出土していて、豊臣後期の地層である。北隣OS19-6次調査の第2層に比定できる。

第4層は客土層である第4a層と自然堆積層の第4b層に分けられ、第4a層は上部・下部に細分される。第4a上・下部層(一括)からは土師器皿5が出土している(図9)。第4a上部層上面では豊臣前期・後期の遺構が検出され、両期を分かち頃の地層である。

第4a上部層：灰黄褐色(10YR4/2)砂からなる整地層で、層厚は25cm前後であった。上面ではSB401・SX35・SX131などの遺構が検出された。遺構の年代は豊臣前期を中心としながら同後期の遺構もあった。

第4a下部層：暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂混り砂質シルトなどからなり、炭が混じる盛土層で、層厚は約30cmであった。部分的に径3～5cmの円礫が混ざっていた。上面で遺構は検出されなかった。

第4b層：オリブ褐色(2.5Y4/3)炭混り粘土質シルト～暗褐色(10YR3/4)細粒砂からなる自然堆積層である、層厚は最大で8cmであった。下位の第5層による客土の後に、一時的に低湿な環境下にあったことを示している。

第5層は豊臣前期の地層で、全体で層厚100cmに及ぶ分厚い客土層である。自然堆積層である第5b層を挟んで上下の第5a・5c層に細分される。第5a・5c層は円磨度の高い中・大礫を含む特徴があり、1594(文禄3)年の惣構造営時に西80mに位置する東横堀川を掘削した際の排土を土地造成に用いたのではないだろうか。東横堀川は上町台地と縄文時代には形成されていた浜堤の間の低地を掘削したも

のとされており、円磨度の高い礫は海浜に由来することが考えられる。

第5a層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)径5 cmまでの中礫混り砂からなり、層厚は15～50cmである。上面で豊臣前期のSX49が検出された。

第5b層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質シルトからなる泥質の自然堆積層である。層厚は最大で5 cmであった。

第5c層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)径8 cmまでの大礫・細礫混り粗粒砂からなり、層厚は25～60cmである。

第6層：黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトからなる湿地性の堆積層で、上・下面ともに凹凸が激しく、踏み荒らされた印象がある。後述の下位層上面の土手状遺構SX150の斜面上にも分布し、同遺構の構築後に堆積していることがわかる。

第7a層：黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂質シルトからなり、層厚は25cm前後である。おそらく作土層で、下位層を母材とする。土師器・須恵器の破片や東播系須恵器捏ね鉢の破片を含み、中世前半の地層である。西半西部では本層上面で土手状遺構SX150が構築されていた。OS19-6次調査の第5層に比定できる。

第7b層：黄灰色(2.5Y4/1)シルト質細粒～中粒砂からなる湿地性の堆積層で、層厚は10数cmである。遺物は出土しなかった。OS19-6次調査の第6層に比定できる。調査地の西方は前述のように堤間低地に当るので、その縁辺部の堆積層と捉えられるのではないだろうか。

第8層：ぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂質シルトからなり、上町台地を作る中位段丘構成層である。西半側溝底で検出され、層厚は5 cmまで確認した。OS19-6次調査の第7層に比定できる。

## ii) 遺構と遺物

北西区は第2a層の堆積がみられたのみで遺構は検出されず、以下は南区を中心に報告する。

### a. 第7a層上面(図5、図版2)

土手状遺構SX150 南区西半の西端部付近で検出された土手状を呈する遺構である。第7a層の上面を東西幅4.4m以上、深さ0.4m以上にわたって南北方向の溝状に掘り下げて掘形とし、その中央にシルト質細粒～中粒砂(図4の18)を用いて幅3.0m以上、高さ0.9m以上の高まりを盛り上げている。次に、高まりをパッキ掘形を埋め戻すかたちで、粘土質シルトなど泥質の堆積物(図4の15～17)を盛っている。盛土中からは遺物は出土しなかった。本遺構の西は第2a層で埋め立てられる落込みSX101になっていて、遺構西側の一部がその落込みに崩れ落ちている状況がみられた(図4の19～21)。上位の分厚い客土層第5c層の上面は本遺構の上面と揃うように盛られており、第5a層の西端は本遺構とともに落込みSX101の斜面を構成している。これらのことから、本遺構は西側の深い落込みに面する位置にあり、第5層による土地造成を行う際に客土が西側へ流出しにくくするために、土手状の土留めとして構築されたものと考えられる。したがって、構築の時期は第5層と同じ豊臣前期ということになる。SK151はSX150の東部を破壊して掘られた平面円形の土壇で、径約1.8m、深さ0.3mで、粗粒砂質粘土質シルトの偽礫で埋められていた。

### b. 第5a層上面(図6)

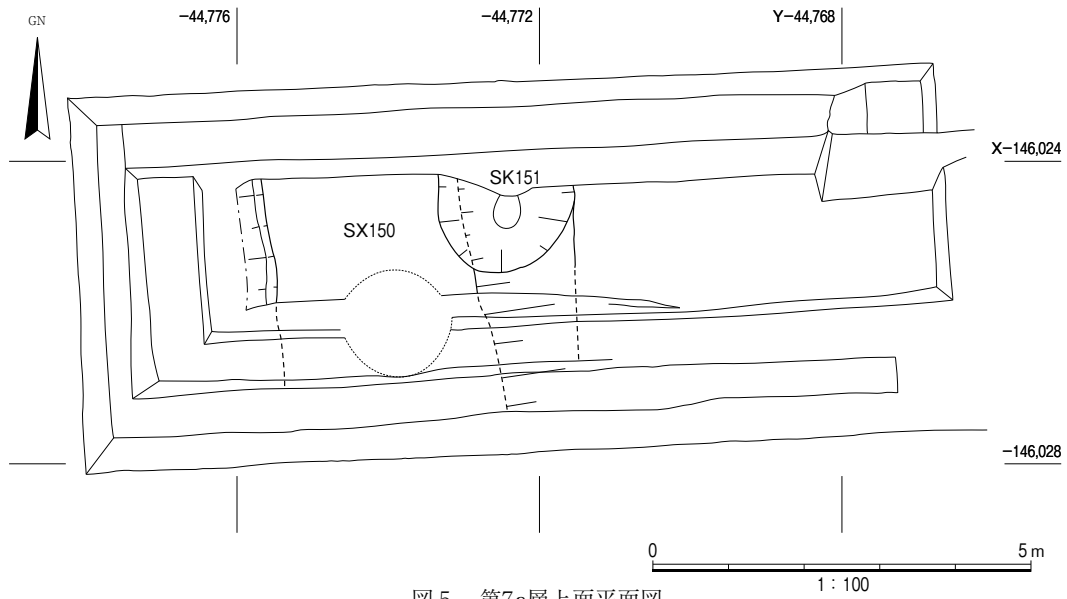


図5 第7a層上面平面図

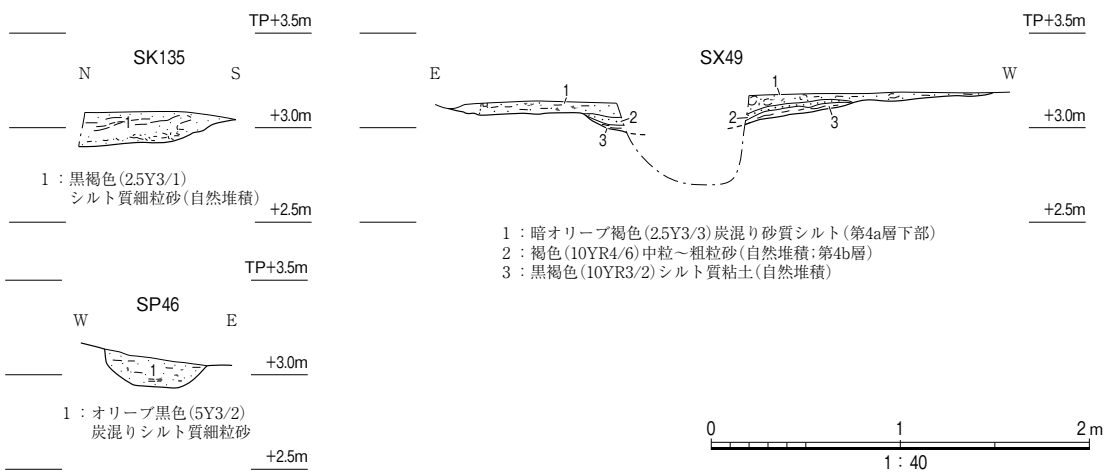
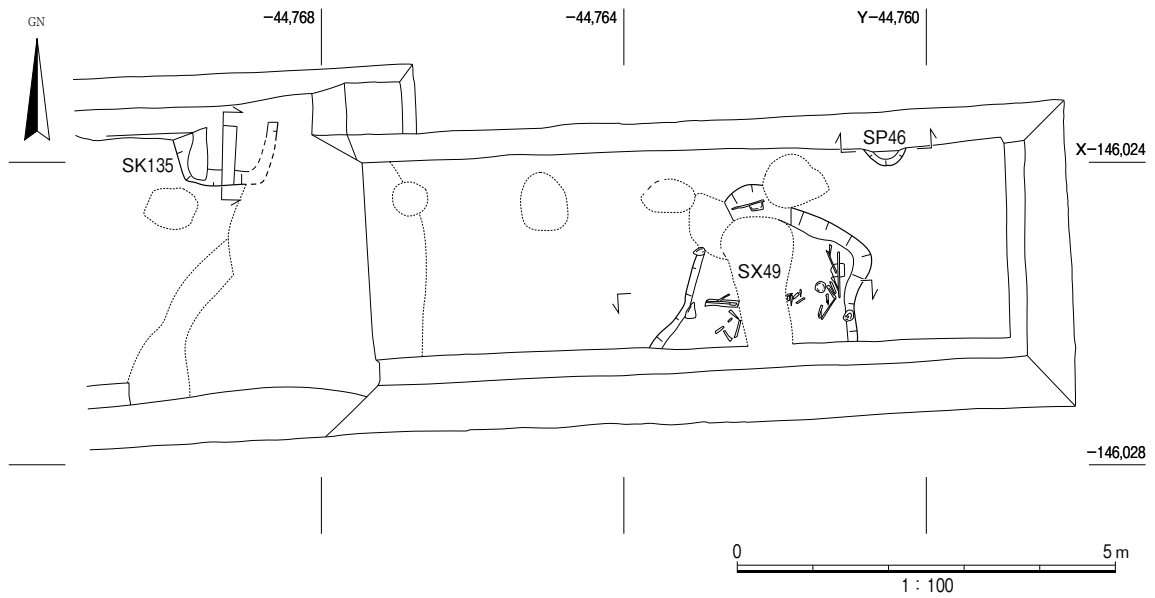


図6 第5a層上面の平面図・遺構断面図

SX49は南区東半で検出された不整形な落込みで、東西2.3m以上、南北2.6m以上、深さ0.15mであった。下部にはシルト質粘土が堆積しており、上部には第4b・4a下部層が堆積して埋まっていた。出土遺物には土師器皿4(図9)のほかに木製品(桶底板・同側板・建築廃材の破片)があった。豊臣前期の遺構である。ほかの遺構は小穴SP46、SK135があるが、いずれも深さ20cm程度のもので、SK135からは箸などの木製品断片が少量出土した。

c. 第4a上部層上面(図7～9、図版2・3)

SB401は南区を東西に延びる掘立柱建物で、9個の柱穴が並んで検出された。方位は東で2°北に振る。柱穴は長径が0.5～0.8mほどの円形ないし楕円形で、深さはよく残るもので0.5mほどであった。0.2～0.3mほどの根石が据えられていた。柱痕跡が残るものはなく、柱抜取りの際に破壊されたとみられる。東西長14.7mを測り、東端で南に折れてSP45に続くのは確実であるが、この部分が建物の北東隅になるのか、あるいは南北性の塀に接続する塀であるのかは不明である。推定柱間寸法は1.63mで、5.5尺に近い。柱穴から出土した遺物には時期が知れるものはなかったが、柱穴SP122を切るSX129は豊臣前期であるので、豊臣前期の建物とみられる。SB402は南区西半で検出された掘立柱建物で、北で3°西に振る方位で柱穴が3個並んでいた。柱穴の長径は0.5m、深さ0.3mほどである。柱間寸法は約1.5mで、5尺相当である。SB401との切合いはなく先後関係はわからないが、同様にSX129に切られるので豊臣前期の建物である。他の柱穴としては、南区の南壁沿いにSP128・25～31があるが、大きさは不一で、柱痕跡や根石もなく、組み合っただけの建物を復元できるものはなかった。SP26からは瀬戸美濃焼志野鉢3、SP29からは土師器皿1、SP31

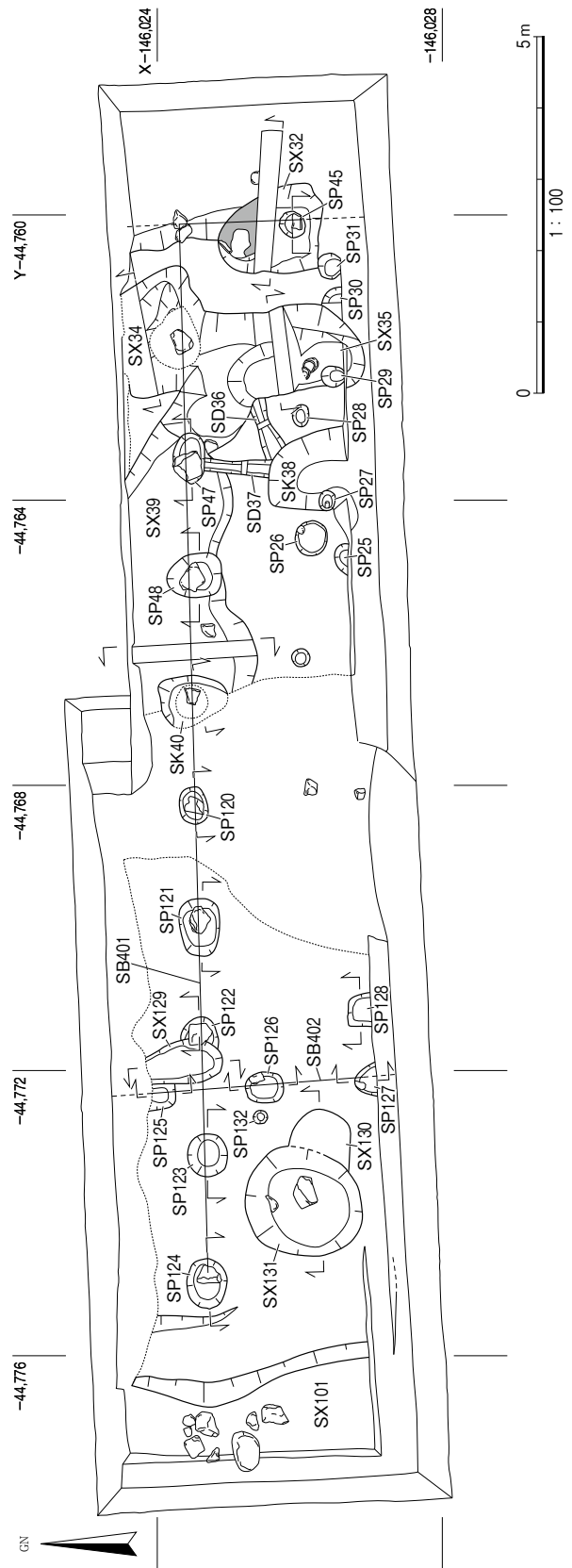


図7 第4a上部層上面平面図

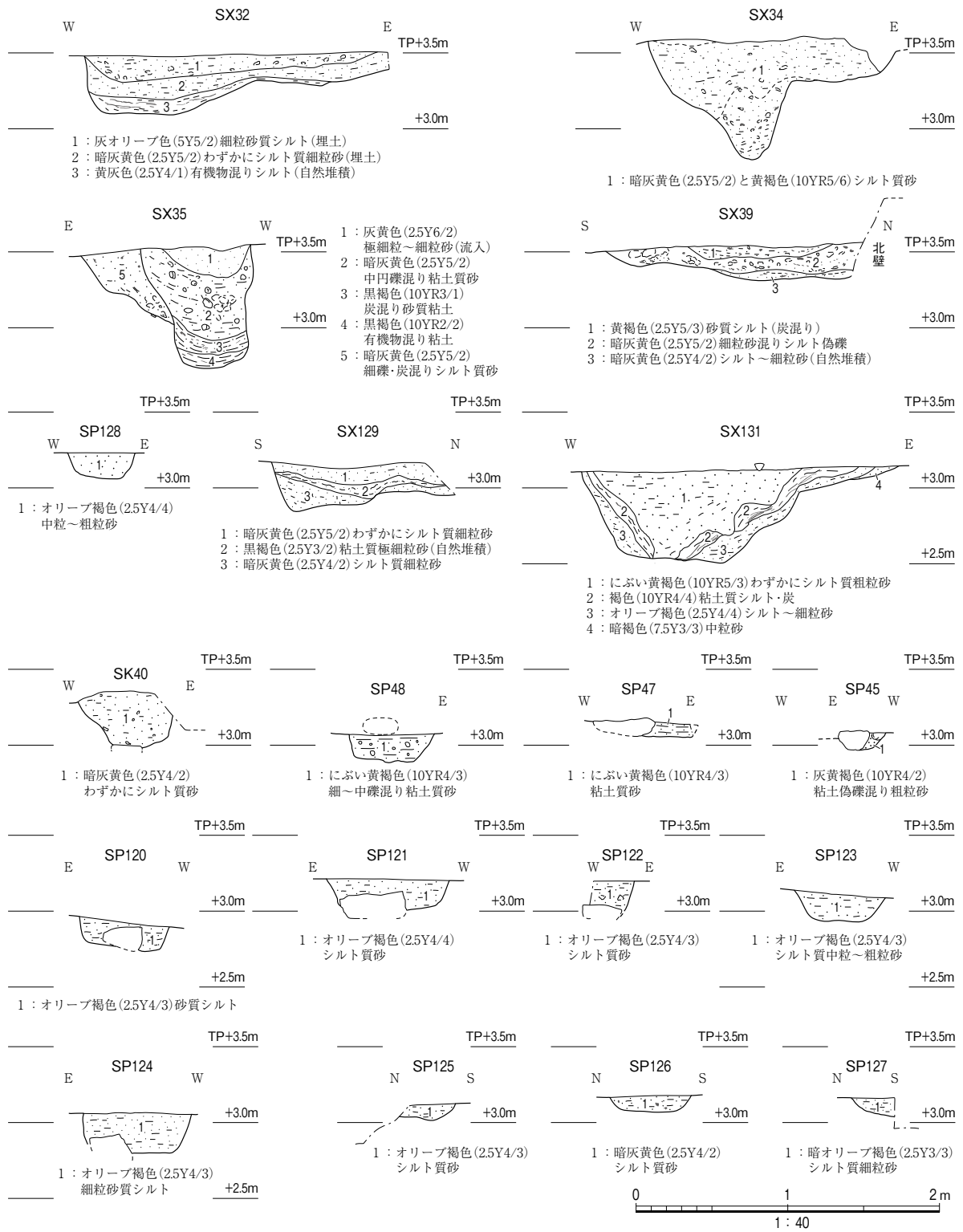


図8 第4a上部層上面遺構断面図

からは瀬戸美濃焼皿2が出土した(図9)。志野が出土したSP26は豊臣後期、他は同前期であろう。

SX32は南区東端の落込みで、東西2.3m以上あり、深さは0.35mで、西部が一段深くなる。下部にはシルトが流入して堆積し、上部は細粒砂質シルトなどで埋められていた。出土遺物には瓦質土器・瀬戸美濃焼・備前焼・中国産青花などがあり、瀬戸美濃焼天目碗10を図示した。豊臣前期の遺構である。

SX34は不整形な落込みで、東西2.5m、南北3.4m以上、深さ0.8mである。シルト質砂で埋められ



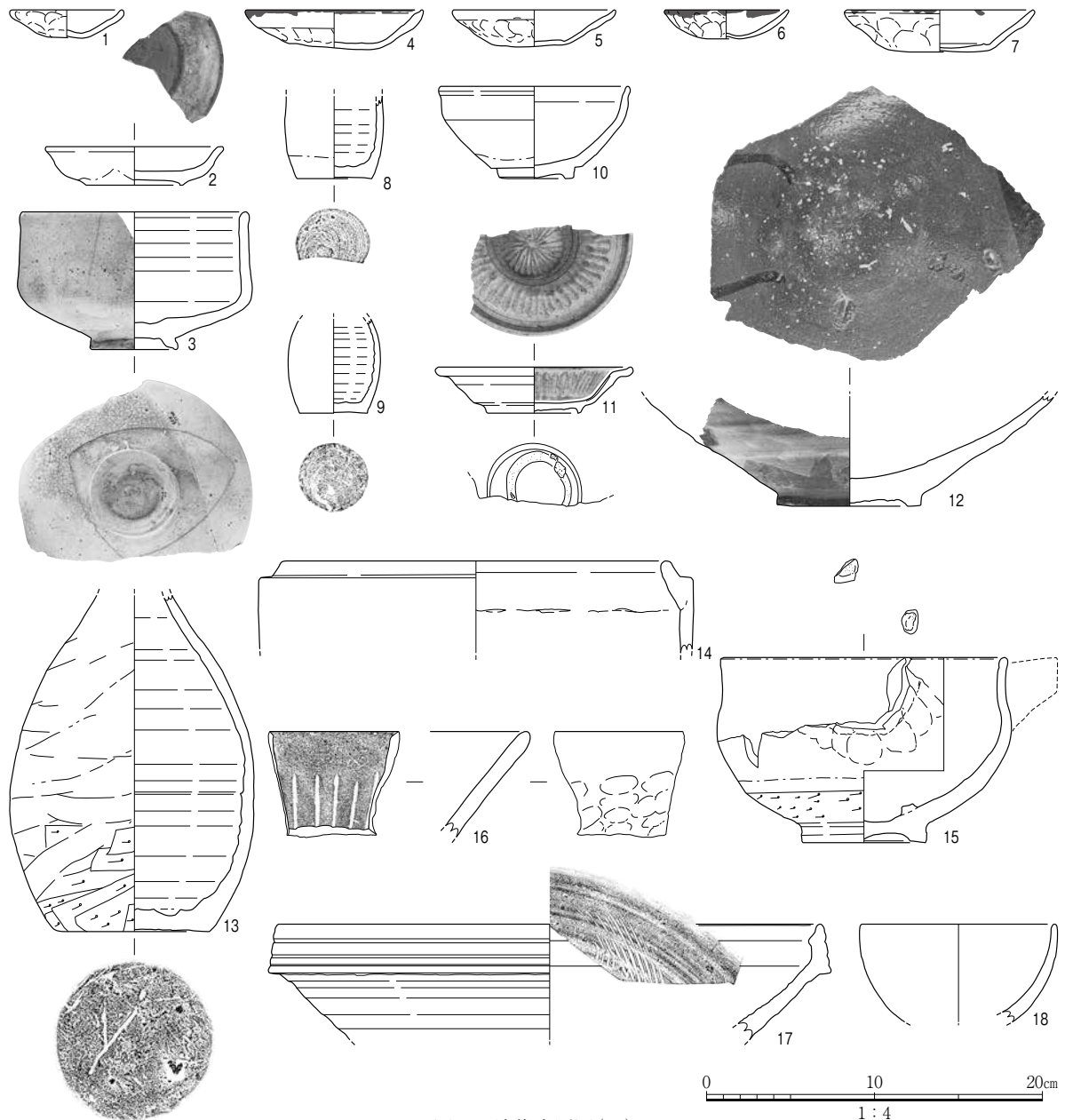


図9 遺物実測図(1)

SP29(1)、SP31(2)、SP26(3)、SX49(4)、第4層(5)、  
SX35(6~9・12~15・18)、SX32(10)、SX131(11・16・17)

ていた。SX35はSX34を切って掘られており、南北1.9m、東西0.8m、深さ0.8mである。下部は泥質な堆積物が流入し(図8の3・4)、その後、人為的に埋められていた(同2)。埋め残りの窪みには砂(同1)が流入して埋っていた。小規模な井戸であろうか。主に埋土2から遺物が出土した。特に、片口鉢15、徳利13、茶入8、小壺9は、小型のものを大型のもの内部に「入れ子」にして埋められており、破損した陶器類をまとめて廃棄した状況とみられた。出土遺物には、土師器・瓦質土器・瀬戸美濃焼・肥前陶器・備前焼などがあり、そのうち土師器皿6・7、瓦質土器火鉢14、瀬戸美濃焼茶入8、肥前陶器片口鉢15、同小壺9、同皿12、同碗18、備前焼徳利形瓶13を図示した。肥前陶器を含み、遺構は豊臣後期に属する。

SX39は不整形な落込みで、東西4.1m以上、南北1.7m以上、深さ0.25mで、SX34に切られる。下

部はシルトや細粒砂が流入し、上部は人為的に埋められていた。出土遺物はわずかで土師器皿などがある。SX129は長楕円形の落込みで、東西0.6m、南北1.2m以上、深さ0.35mである。SB401・402の柱穴を切る。泥質の流入土を挟みながら人為的に埋められていた。土師器皿・瀬戸美濃焼壺・備前焼播鉢などが出土した。豊臣前期の遺構である。SX131は東西2.1m、南北1.6m、深さ0.8mで、西側が深くなる。粘土質シルトやシルト～細粒砂が流入し、その後、中粒砂で埋められている。土師器・瀬戸美濃焼・丹波焼・備前焼・中国産青花などが出土し、瀬戸美濃焼折縁皿11、丹波焼播鉢16、備前焼播鉢17を図示した。豊臣前期の遺構である。SK38は東西1.2m、南北1.1m以上、深さ0.3mで、シル

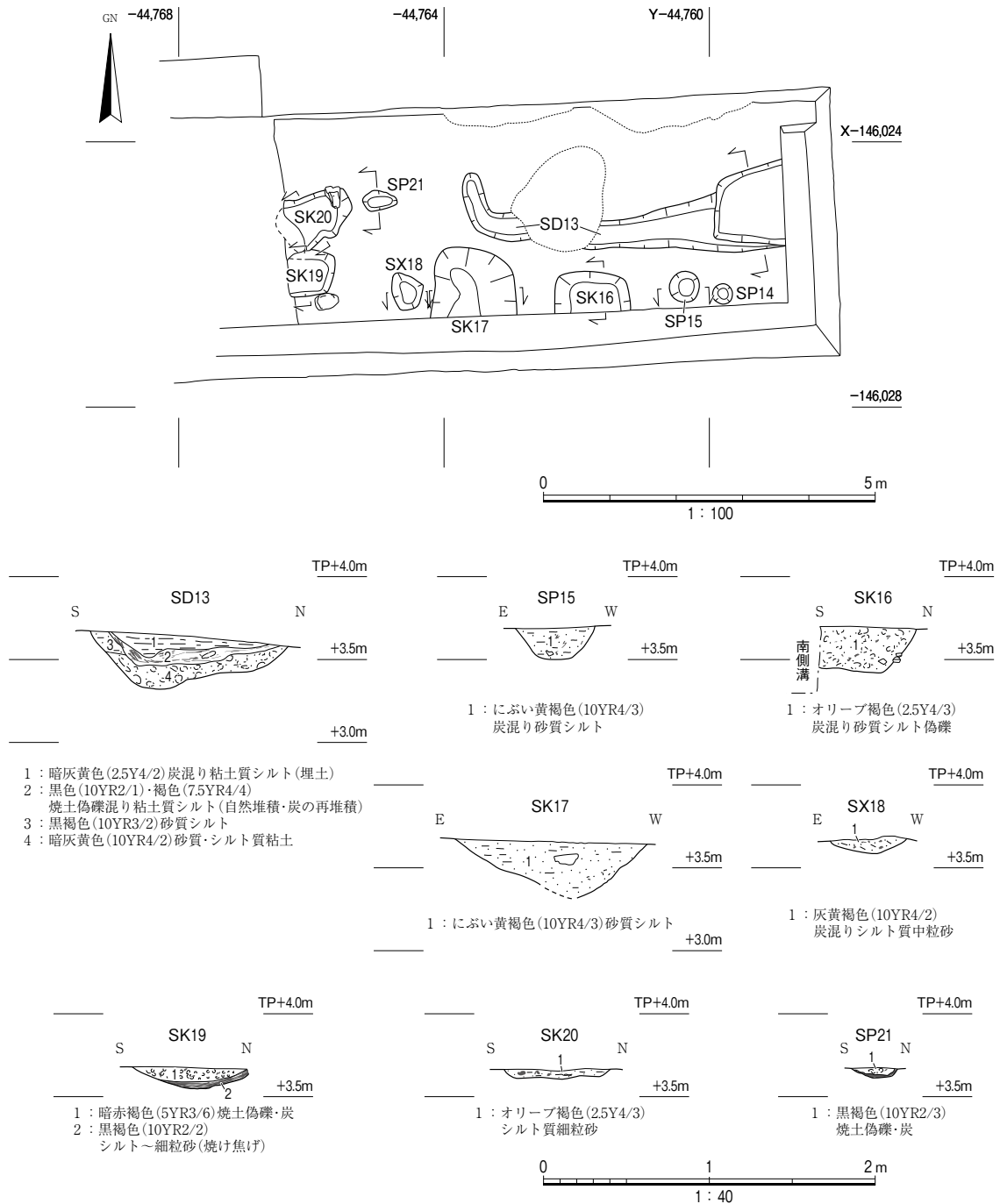


図10 第3層上面平面図・遺構断面図

ト質細粒砂で埋められていた。年代がわかる遺物は出土しなかった。

以上のように、第4a上部層上面の遺構は豊臣前期のものを主体とするが、SX35のように豊臣後期のものもあり、両期の端境期に構築されたものとみてよい。

d. 第3層上面(図10・11)

南区東半で小穴・溝・土壙などが検出された。

SD13は東西性の溝で、幅0.3~1.2m、深さ0.3mほどである。西端で北へ短く屈曲して終わる。下部は人為的に埋めるが、上部は炭を含む粘土質シルトで埋っていた。土師器・瓦質土器・中国産青花・肥前陶器・備前焼などが出土し、肥前陶器皿22、瓦質土器挿鉢23を掲載した。22は底部内面に胎土目をもつ。23は1cm当り4本の摺目を底部から放射状に施している。豊臣後期の遺構である。

小穴はSP14・15・21がある。いずれも径0.2~0.4m、深さ0.2m未満の浅いもので、柱痕跡は見られなかった。時期がわかる遺物も出土していない。

SK16・17は南壁際に並んで検出された土壙である。全体は検出されていないが、一辺1.2m前後で、深さは0.2~0.3mである。いずれも砂質シルトで人為的に埋められていた。SK16からは土師器・肥前陶器・備前焼などが、SK17からは中国産青花・瀬戸美濃焼・肥前陶器・備前焼などが出土し、このうちSK17出土の瀬戸美濃焼碗21を掲載した。いずれも豊臣後期の遺構である。SK19・20は西部を上位層の遺構によって破壊されている。一辺1m弱で、深さは0.1mほどである。いずれも人為的に埋められており、SK19の底は被熱して赤変していた。どちらからも時期がわかる遺物は出土しなかった。

SX18はSK17の西にある小規模な落込みで、深さは0.1mほどである。土師器・中国産青花・同白磁などが出土し、青花皿19、白磁香炉20を図示した。19は漳州窯の産、20は短い獣脚状の脚をもつ。

以上、第3層上面の遺構は豊臣後期に属するものとみられる。

e. 第2b層上面(図12)

南区東半東部でSD10・11、SX7~9が検出された。SD10・11は幅0.3m未満、深さ0.05mほどで、

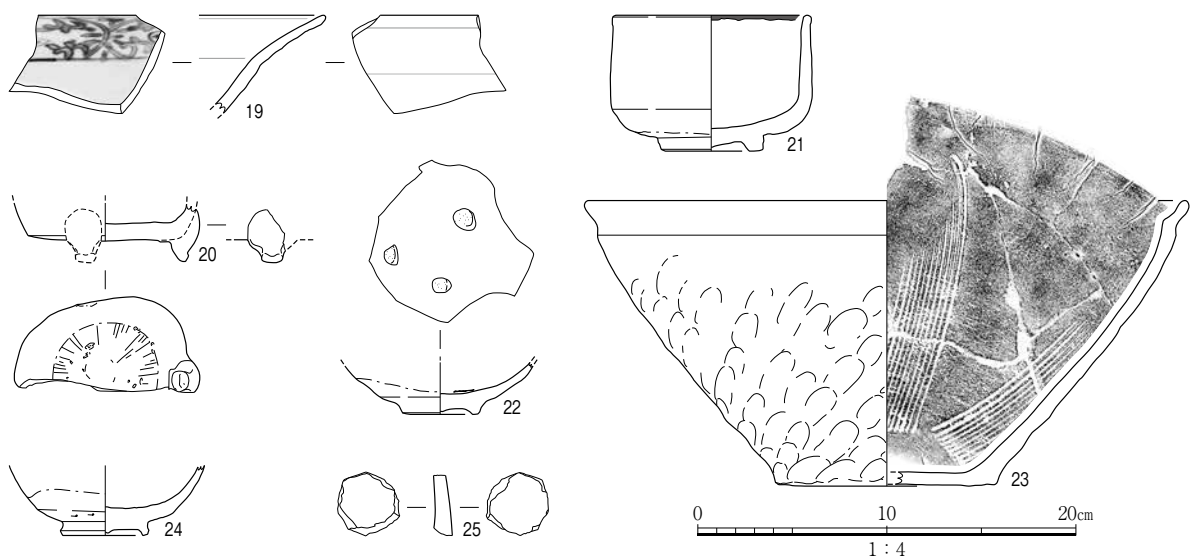


図11 遺物実測図(2)

SX18(19・20)、SK17(21)、SD13(22・23)、第3層(24・25)

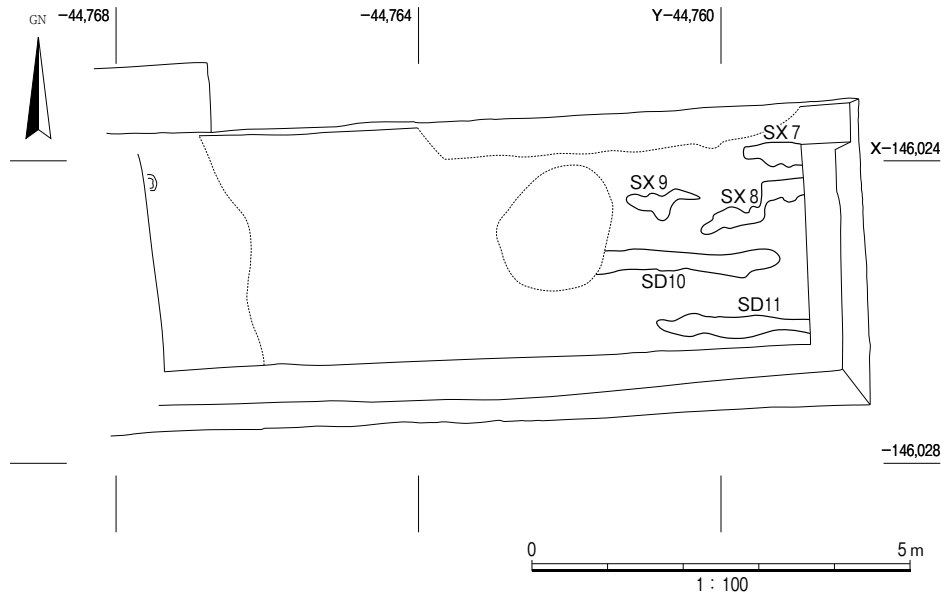


図12 第2b層上面平面図

第1層の砂で埋められていた。畝間である。SX7～9の規模・埋土もこれと同様で、畝間の崩れたものであるだろうか。これらの遺構はこの西側には広がらず、畝地というよりは屋敷内の空き地で畝作を行った感がある。

f. 第1・2a・2b層上面(図13～15)

南区で第0層を除去すると、東部では第1層、西部では第2a層、その間では第2b層が現れ、それらの上面で建物、土壇、溝、その他の遺構が検出された。

SB101は南区西半北部で検出された礎石建物で、径0.2mほどの礎石が東西に並んでいた。柱間寸法は0.5～1.0mほどで、方位は東で1°北に振っていた。東で南に折れる可能性があり、塀かもしれない。SD113はSB101の東にある溝で、幅0.6m、深さ0.1mである。極細粒砂で埋められていた。土師器・瀬戸美濃焼・肥前陶器・丹波焼・備前焼などが出土した。17世紀中葉頃の遺構であろうか。土師器41は播鉢の破片である。

SK1～6は東半部で検出された。SK1・6は深さ0.2m前後、その他は同0.4～0.6mであった。SK2～4からは関西系陶器・関西系磁器・瀬戸美濃焼磁器などが出土し、18～19世紀に属する。

SK104は円形の土壇で、直径約0.9m、深さ0.35mで、中に自然堆積の中粒砂層を挟んでその上下は砂質な堆積物で埋められていた。土師器・瓦質土器・瀬戸美濃焼・肥前陶器・高取焼・肥前磁器などが出土し、土師器皿26・28～31、肥前陶器器具手碗32、高取焼とみられる掛け分けの向付33、肥前磁器皿34を掲載した。これらから遺構の年代は17世紀中葉～17世紀後葉とみられる。

SK105は東西1.1m、南北0.9m、深さ0.5mで、炭層を挟みながら人為的に埋められていた。土師器・瓦質土器・瀬戸美濃焼・肥前陶器・肥前磁器・丹波焼などが出土し、土師器皿27、肥前磁器皿35、丹波焼播鉢36を図示した。17世紀後葉の遺物である。

SK103・SK106～108・110は径0.5m前後、深さ0.2m程度である。SK106からは関西系陶器が出土し、18世紀以降の遺構である。SK110からは17世紀中葉以降とみられる瀬戸美濃焼皿が出土した。

SK109～112は平面形が長楕円形ないし不整形で、深さは0.3m内外である。SK111からは瀬戸美濃



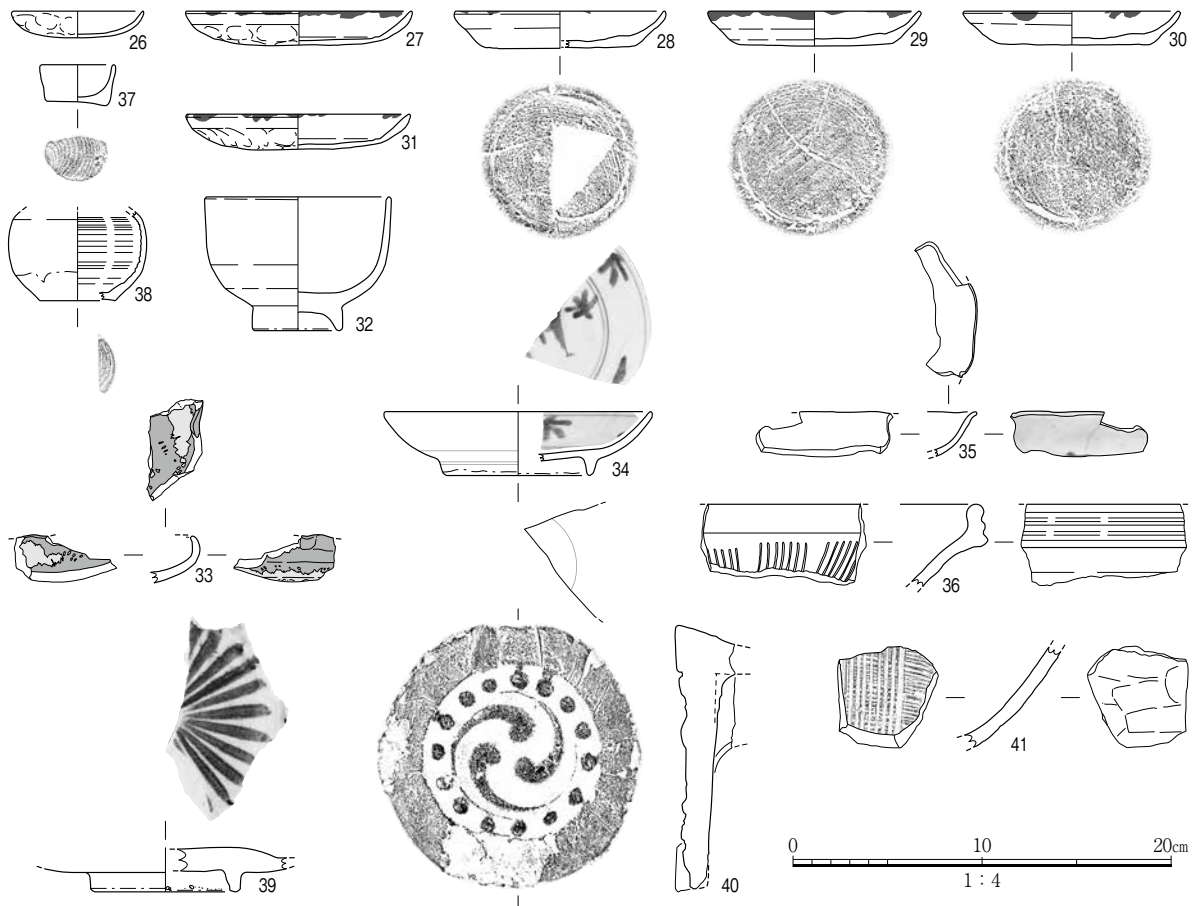


図14 遺物実測図(3)

SK104(26・28~34)、SK105(27・35・36)、第2c層(37~40)、SD113(41)

焼鉢が出土し、18世紀後葉以降に下る。

SX12は南区の中央で検出された大規模な落込みで、東西5.0m以上、南北3.9m以上、深さ0.8mである。下部はシルト偽礫混り細粒~中粒砂が斜面に沿って流入、堆積し、上部は細粒~中粒砂で人為的に埋められていた。規模や埋土の堆積状況はOS19-6次調査でゴミ穴と推定されたSX201によく似ている。主に下部の堆積層から多くの遺物が出土し、代表的なものを図15に掲載した。42は土師器皿である。50~52は中国産磁器青花で、50は碗、51は小杯、52は皿である。43~48・53・54は瀬戸美濃焼である。43・47は茶入の蓋、44~46・48は茶入で、44は瓢形を呈する。53は菊皿、54は黄瀬戸皿である。49・56・58~61は肥前陶器で、56・58は碗、59は水指、60は鉢、61は向付である。55は産地不明陶器の天目形碗で鉄釉を施し、白泥で梅文を描く。62は備前焼水指である。57・63~66は肥前磁器染付碗である。67は産地不明の磁器で赤・青・黄に彩色する。古染付であろうか。68は三つ葉唐草文軒平瓦である。69~71は金属器(銅製)で、69・71は用途不明、70はなにかの把手であろう。72・73は笹塔婆である。72は下部を欠損し、上端部はわずかに圭頭を呈する。左右の切込みはない。片面に墨書があり、「南無妙法蓮華」と題目を記し、以下は欠損する。73は上・下を欠損し、片面に墨書があるが判読できない。以上の遺物は徳川初期から17世紀中葉に属するものである。

SX101は南区西端で検出された落込みで、深さ1.65mまで確認できたがまだ下へ続く。埋土は第2a層とした埋立て土で、岩相からみて、北西区全域で検出された客土層(自然堆積層を挟在)も同一層準

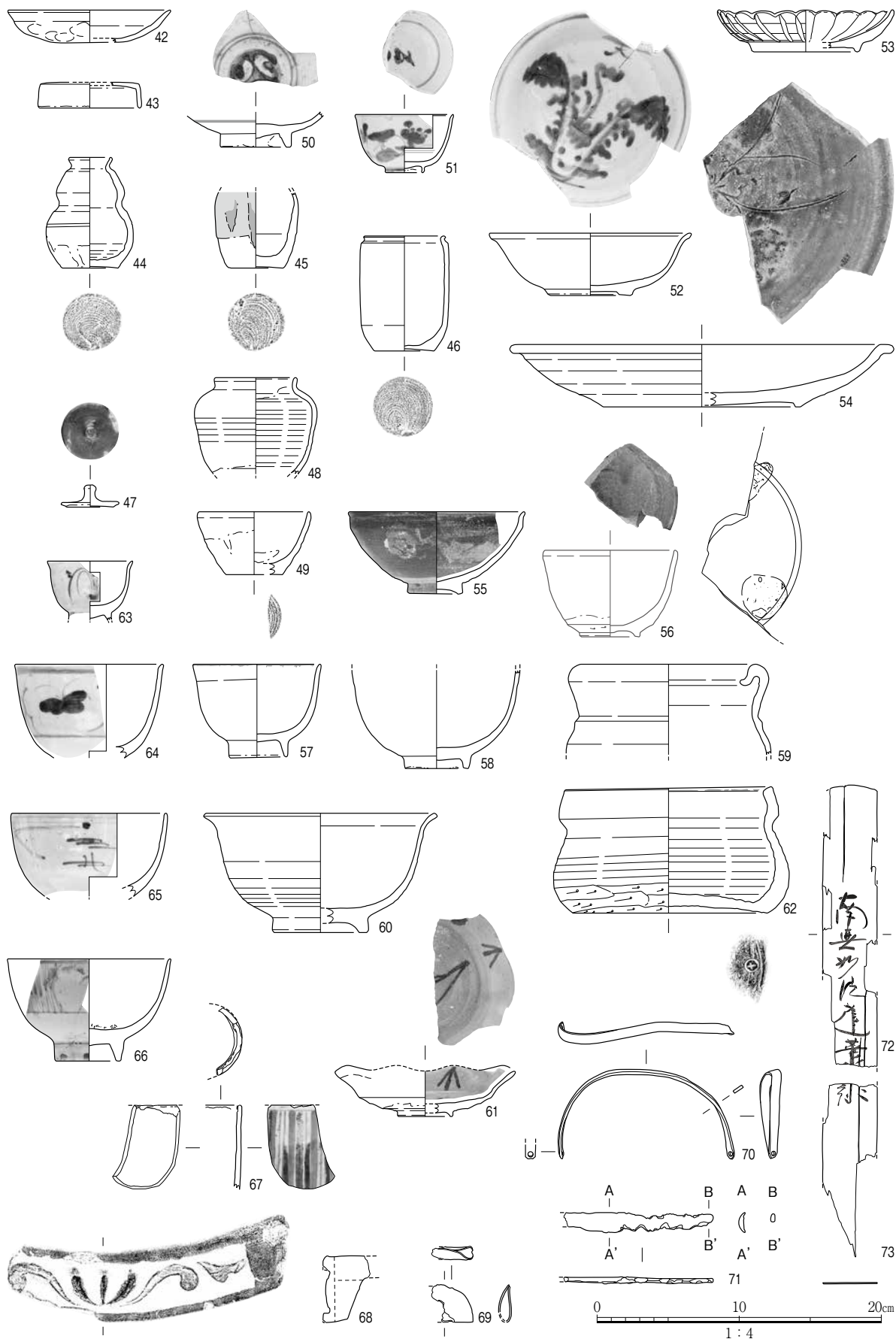


图15 SX12出土遗物实测图

である(図4)。したがって、本調査地西部には広い範囲にわたって本遺構が続いていることになる。年代のわかる遺物は出土しなかったが、本遺構上に掘られたSX104は17世紀後葉に下るので、それまでには埋立てが行われたことになる。落込みが掘削された時期については、既述のように、土手状遺構SX150が西側の斜面に対する土留めとして築かれたと考えられること、同遺構の西部が下方へ崩れ落ちていることを考えると、SX150の構築、第5a・5b層の客土が行われた時点(豊臣前期)では、すでにSX101が存在したとみられる。

### 3)まとめ

今回調査の結果は当地の地形変遷、特に人為による地形改変の過程をよく表していると考えられる。以下、各時代ごとに今回調査の成果からわかった地形や土地利用のあり方を記す。

- ・中世前半以前は湿地性の堆積層(第7b層)がみられ、当地は、上町台地と縄文時代後期には形成されていた浜堤1[趙哲済・中条武司2017]の間の堤間低地の縁辺部にあった可能性がある。

- ・中世前半には湿地性堆積層を耕起して耕作が行われたとみられる(第7a層)。当地での人間による土地開発の始まりである。

- ・豊臣前期に、層厚約1mに及ぶ盛土(第5a・5c層)を行う大規模な土地造成が行われた。当地より西はおそらく大きく掘り下げられ(SX101)、西向きのひな壇状の造成が行われたのではないだろうか。当地はその段の縁部にあり、SX101から掘り上げた土を用いて嵩上げを行った。その際、盛土が西へ流出するのを防ぐ目的で土手状遺構SX150が構築された。土留めである。豊臣前期に行われた大きな土木工事としては1594(文禄3)年の惣構造営があり、この時に東横堀川が開削されているので、当地の土地造成もこれに連動しているとみてよいであろう。ただし、土地造成は行われたものの、この時期での居住はあまり進まなかったようで、盛土上面では浅い落込みであるSX49がみられるに留まった。こうした状況は、冒頭に述べた調査地北方地域(OS89-41次調査地周辺)の開発状況と符合している。

- ・第4a上部・下部層は層厚50cmに達し、これも大規模な土地改変があったことを示している。上面では建物(SB401・402)などの遺構が増加し、屋敷地になったことがわかる。その時期は豊臣前期を主としながらも同後期(SX35)にまで続いていた。豊臣前期・後期の遺構が混在することは、この土地改変が行われたのが両時期の端境期にあることを示している。1598(慶長3)年の大坂町中屋敷替こそがその開発であろう。

- ・豊臣後期にも居住は続いたようで、第3層上面でこの時期の遺構が発見された。大坂ノ陣は市中を壊滅させたが、その顕著な痕跡は見られなかった。上位層の第2c層(盛土)には焼土・炭が含まれるので、焼土層を削って客土が行われたのではないだろうか。

- ・徳川期に入ると第1・2a・2b層上面で遺構が発見され、再び屋敷地として利用されていたことがわかる。17世紀中葉から後葉の時期である。茶道具の出土は居住者の性格の一端を表している可能性がある。

- ・17世紀後葉以降には調査地西方の落込みSX101が埋められた。西50mのOS10-11次調査では、同



様に西へ向って埋立てを行った形跡があった。しかし、その時期は18世紀後半とされ、当地とは異なる。この頃を通じて西側のひな段下が平地化され、整備されていった可能性がある。また、それは東横堀川の護岸の整備とも係わっているはずであるが、その解明・復元は今後の課題である。

#### 引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「大坂城跡発掘調査(OS10-11)報告書」：『平成22年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2010)』、pp.259-263
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017、「大坂城跡発掘調査(OS15-2)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2015)』、pp.161-170
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2021、「大坂城跡発掘調査(OS19-6)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2019)』、pp.217-224
- 大阪府教育委員会1986、『大坂城惣構・西町奉行所発掘調査概要』
- 大阪市文化財協会2003a、「OS87-14次およびその周辺の調査」：『大坂城跡Ⅶ』、pp.299-320
- 大阪市文化財協会2003b、「OS85-36次およびその周辺の調査」：『大坂城跡Ⅶ』、pp.291-298
- 趙哲済・中条武司2017、「大阪海岸低地における古地理の変遷」：『ヒストリア』第264号、大阪歴史学会、pp.3-23



南区西半南壁地層断面  
(北東から)



南区西半南壁地層断面  
(北から)



北西区地層断面  
(北東から)





南区西半第7a層上面  
土手状遺構SX150  
(南から)



南区西半南  
第4a上部層上面  
(南西から)



南区西半  
第4a上部層上面  
SB401・402(西から)





南区東半SB401礎石



南区東半  
第4a上部層上面  
(東から)



南区西半  
第1・2a・2c層上面  
SX12(北東から)







天王寺区大道一丁目9-24他10筆における建設工事に伴う  
大道1丁目所在遺跡発掘調査(DA22-1)報告書

調査個所 大阪市天王寺区大道1丁目9-24他10筆  
調査面積 243㎡  
調査期間 令和4年7月6日～8月8日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋 工、積山 洋

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地が所在する大阪市天王寺区大道1丁目は、摂河泉最古の古代寺院として知られる四天王寺の南隣に位置している(図1)。調査地の南には、和気清麻呂が大和川の付替え工事を行ったと伝承される河内川堀江推定地や北河堀町所在遺跡などが隣接している。西隣には熊野街道が南北に走り、さらに「茶臼山古墳」に連なっている。また四天王寺とその周囲は古代都市難波京の南端付近に当たっている。

地形からみると、調査地は南北に連なる上町台地の稜線付近に位置するが、南側には、東に開く谷(河内川堀江推定地)があるため、南と東へ降る地形となっている。

調査地の周辺では、過去に数多くの発掘調査が行われ、古代から近世にいたるさまざまな遺構、遺物が濃密に検出されている。

当該地で大阪市教育委員会が行った試掘調査では、地表下約0.7m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面および遺物包含層が検出された。今回の発掘調査はこの所見に基づいて実施された。

調査範囲は東西9m、南北27mであるが、残土の置き場が十分に確保できないため、北区、南区に二分して調査を行うこととなった(図2)。2022年7月6日、北区(南北17m)の調査に着手し、7月22日より南区(南北10m)の調査に取りかかった。調査の終了は8月8日である。それぞれ重機による掘削を経て人力による掘下げ、遺構検出、写真撮影、実測などを行ったが、調査範囲の東半部は深い攪乱により調査は西半部に限られ、南区南端のみ、東半部まで調査を行った。

以下の本文等に示す標高値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、 $TP \pm \bigcirc m$ と記した。また本報告で用いた国土座標値は現場で作成した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより世界測地

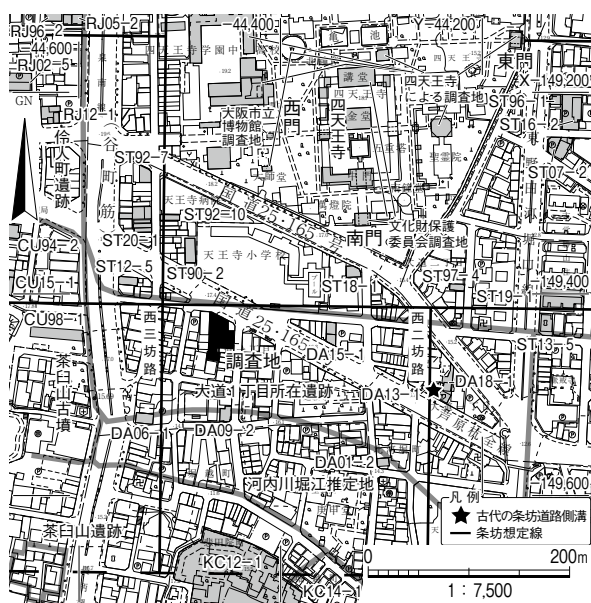


図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

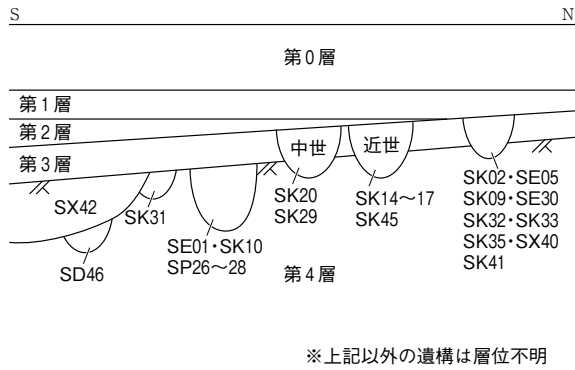


図3 地層と遺構の関係図

系座標に乗せたものであり、方位は座標北を基準とした。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

調査地の現地表面の標高は北端でTP+17.0m、南端でTP+16.5mと、緩やかに南へ低く傾斜している。人力による調査の対象となったのは、後述

する第4層上面であるが、北区では西壁沿いに限定して第2・第3層の調査を行った。

第0層：現代の盛土や攪乱層である。現地表面下0.15~0.7mに堆積しているが、南端では2.2mよりさらに深く及んでいた。

第1層：近代以後とみられる様々な整地層を一括した。レンガ組の建築の壁や床面なども含む。調査の対象外であり、重機で掘削した。

第2層：暗灰黄色砂礫混りシルト層で、層厚は最大0.25mを測る。本層の下面は北端でTP+16.05m南端でTP+15.4mと、南に降る堆積状況である。偽礫等は明確ではないが、整地層であろう。出土遺物(図6)は中国産青花碗3、肥前陶器碗4、土師器焙烙C1類5などであり、17世紀第2四半期[積山洋1999]であるが、点数が少ないので、本層の年代はそれより新しい可能性もある。

第3層：オリブ褐色砂・礫混りシルト層で、層厚は最大0.2mを測る。調査区南端には第2層の下位に暗灰黄色シルト混り砂礫層が分布しており、第3層相当層と考える。本層の下面は北端でTP+16.05m南端でTP+15.05mと、やはり南に降下している。本層も整地層であろう。出土遺物は少なく、備前焼壺2では年代が判りづらいが、土師器皿1は京都では14世紀後半~15世紀に属するタ

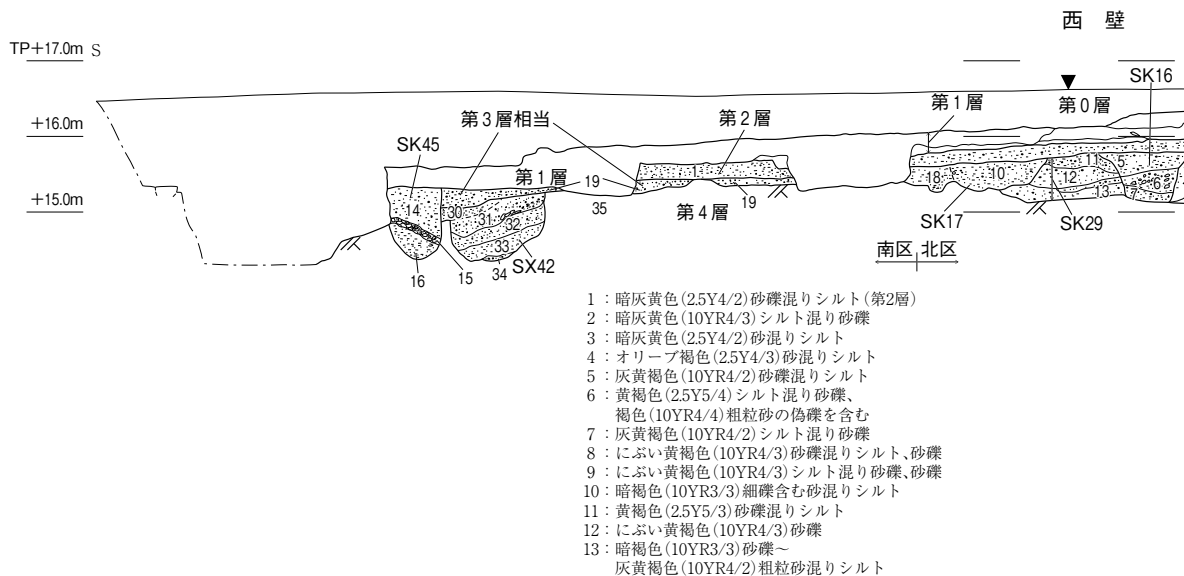


図4 西壁地層断面図

イブ[平尾政幸2019]である。本層の下位で検出される遺構には15世紀後半に埋められるSX42があり、本層の上面で検出される中世の遺構にも15世紀頃に位置づけられるSK20・29がある。よって本層の年代は15世紀後半であろう。一方、第3層上面で検出された遺構のうち、重複関係から最新のSK16などには初期の肥前磁器を含んでいる。本層上面の生活面の年代は中世後半の15世紀後半から江戸時代(おそらく17世紀前半)に及ぶとみられる。

第4層：褐色～にぶい黄褐色砂礫層で、地山の上町層である。ラミナが明瞭に認められ、比較的柔らかい。

ii) 遺構と遺物

a. 中世の遺構と遺物(図5・7～19)

中世の遺構は第4層上面のSE01・SK10・SP26・SP27・SX42、および第3層上面のSK20・SK29などであるが、遺構の多くは第4層上面まで機械掘削が及んだため、帰属する層位が不明なものも多い。ここでは重複関係からSX42より古いSK31・SD46のほか、出土遺物から中世とみられる遺構も報告する。

SK10：北区の西壁に沿って検出された東西0.6m以上、南北約1.8m、深さ0.7mの土壌である。埋土は下部にラミナが観察される水成層(図4-24・25層)がみられ、上部(20～23層)はシルト混り砂礫などで埋まっていた。出土遺物(図8)は瓦器椀6～9と平瓦10である。瓦器椀は内外面にヘラミガキを密に施す6・7と、ヘラミガキがやや粗略化し高台が小型化する8・9からなり、新しい傾向の后者は和泉型Ⅱ-1～Ⅱ-2期で12世紀前半[尾上実・森島康雄・近江俊秀1995]頃に位置づけられる。平瓦は凹面に布目をとどめ、凸面に格子タタキが施されている。

SE01：北区の西壁に沿って検出された東西2.5m以上、南北約2.6mの規模であるが、TP+14.6mまで掘り下げた段階で2基の井戸が重複していることがわかった。西側をSE01W、東側をSE01Eと呼

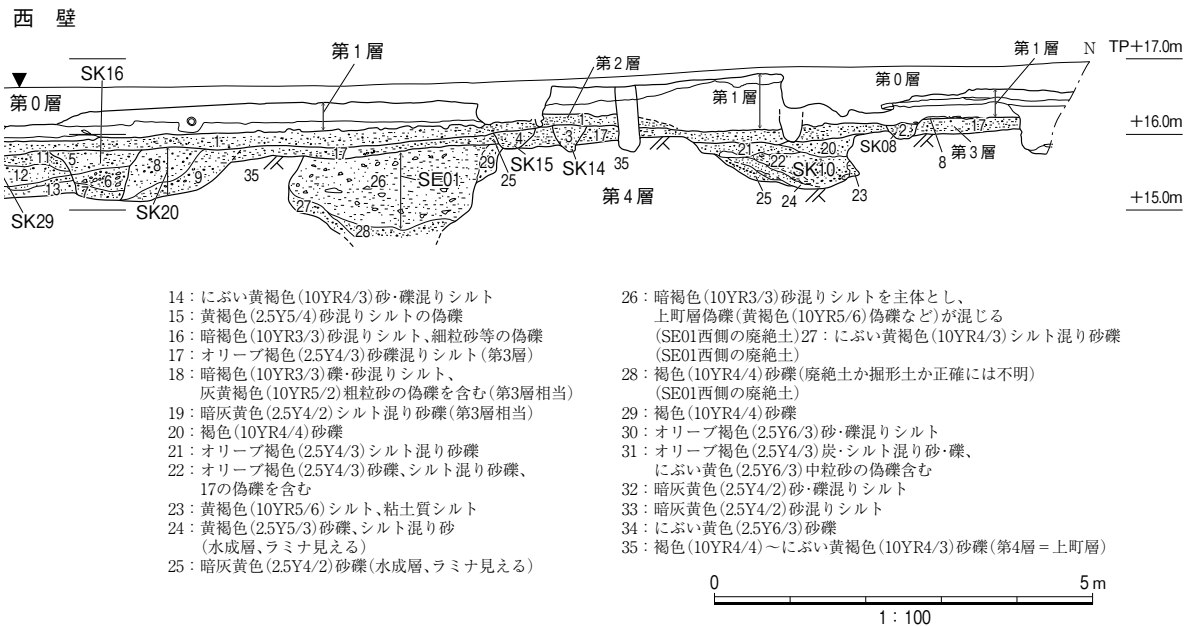


図4 西壁地層断面図

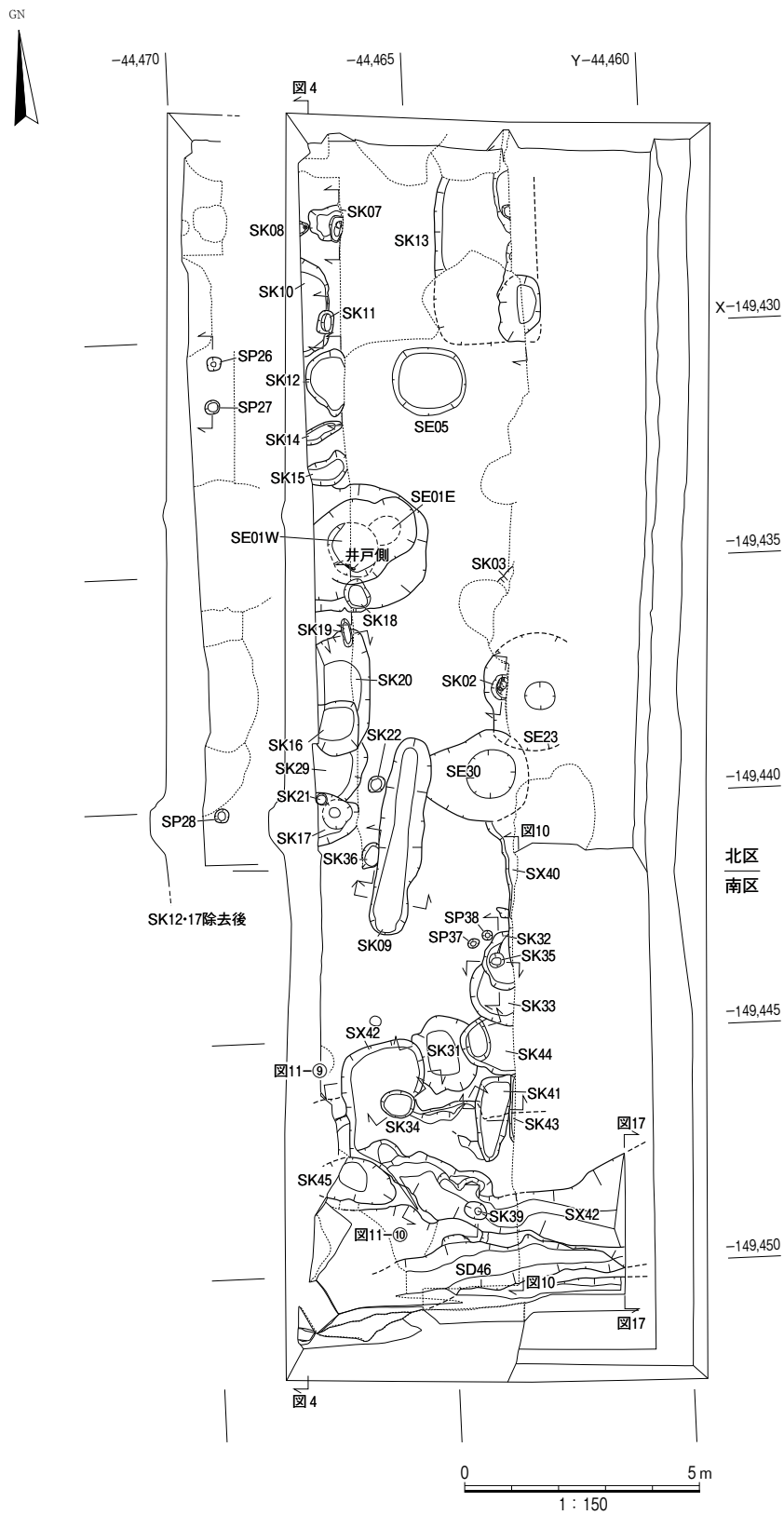


図5 中世・近世の遺構平面図

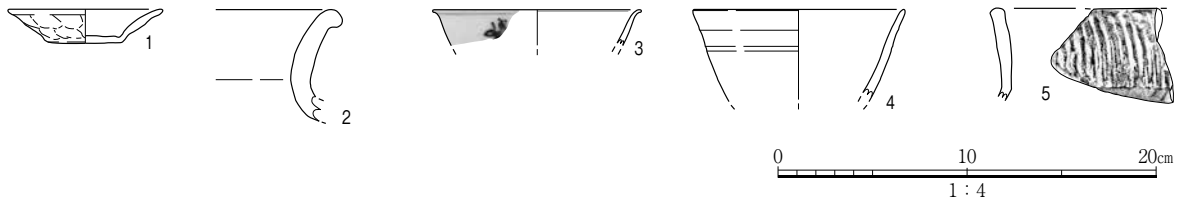


図6 第3層・第2層出土遺物実測図  
第3層(1・2)、第2層(3～5)

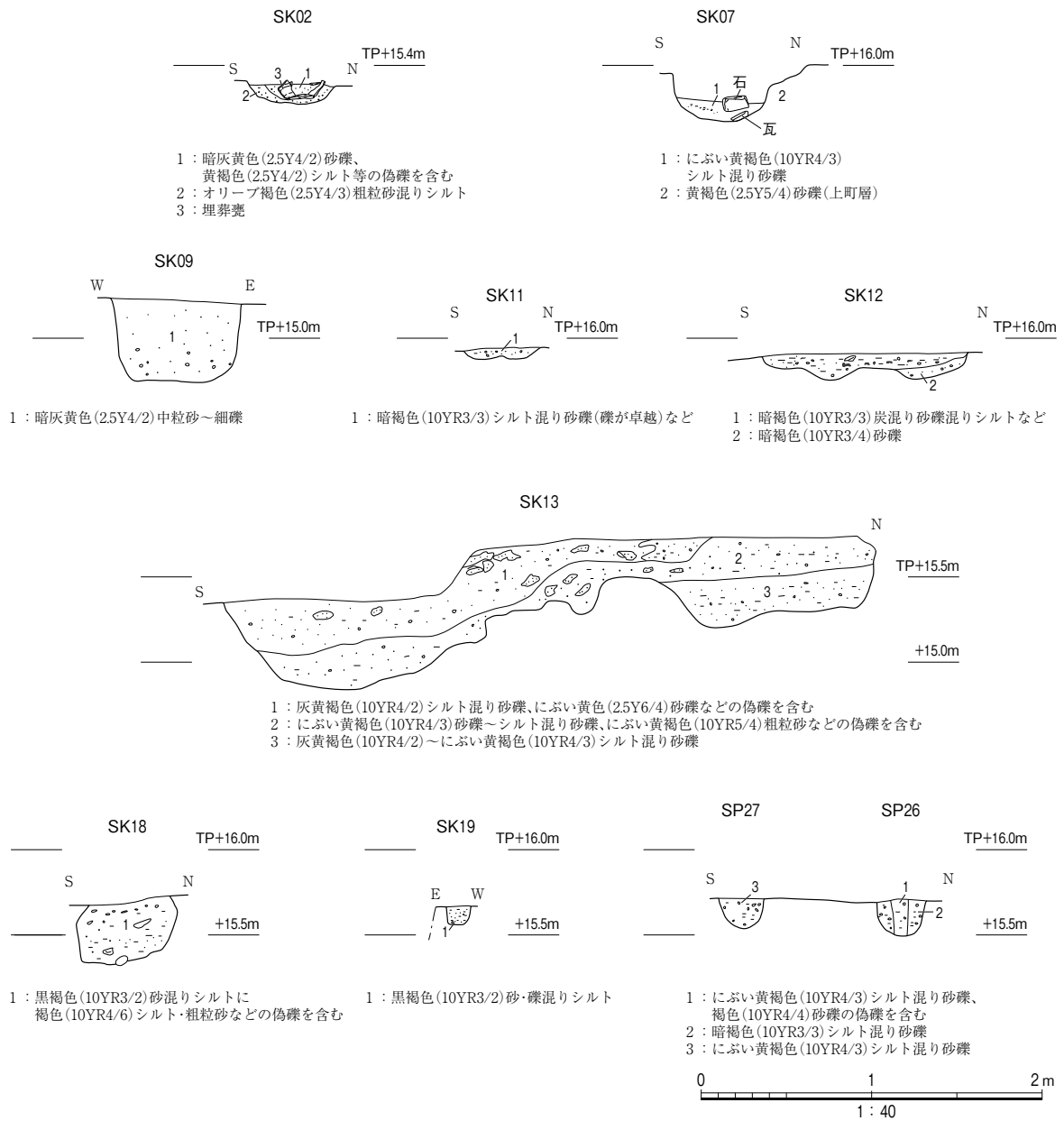


図7 北区遺構断面図

ぶ。前後関係としてはSE01Wが新しい。この段階で判明したSE01Wは掘形が東西1.6m以上、南北約1.75mで、その内側の井戸側の痕跡は東西0.9m、南北1.1mの楕円形を呈しており、南西部で桶の側板を用いた井戸側の一部を検出した(図版4下段)。SE01Eは掘形が東西1.0m以上、南北約1.2mで、井戸側の痕跡は東西約0.7m、南北約0.55mで、そこからやはり桶材を用いた井戸側の一部を検出した

が、湧水が著しく、これ以上深く調査することはできなかった。出土遺物(図8)は土師器皿11、17・18、東播系須恵器片口鉢12・21、瓦器椀13、中国産青白磁皿14、同白磁碗15・16、瓦器皿19、瓦質土器鍋20、瓦質土器井戸側22、備前焼播鉢23・24などのほか、SE01Wの井戸側25・26、SE01Eの井戸側27・28などである。このうち西壁際で取り上げた11～16はSE01Wのものとみられる。それらは12～14世紀の中国産磁器14～16、高台が消失した13世紀後半～14世紀前半の瓦器椀13であるが、重複関係で新しいSE01Wの廃絶年代は、SE01Eと同時に掘り下げて取り上げた遺物17～24の最新のものが見出すことになる。瓦質土器鍋20と備前焼播鉢23・24は16世紀前半に位置づけられている大坂城跡OS93-47次SM1101[佐藤隆1996・大阪市文化財協会2003]に類例があり、備前焼の編年[乗岡実2017]では6a期(16世紀初頭)かその前後に収まる。SE01Wの廃絶年代は、おそらくその頃であろう。先行したSE01Eは、井戸側が同じ桶材なので、おそらくその少し前かと推測する。なお、井戸側の桶材25～28は4点中3点に幅が広くごく浅い凹みがみられる。その位置に相応しいのはタガであろうが、幅が広いのでその材が竹とは考えにくい。しかしそれ以上は不明である。

SK20：北区の西壁際で検出した東西1.2m以上、南北2.4m以上、深さ0.7mの土壌である。SK16・19と重複し、それらより古い。SK29とも重複し、それより新しい。砂礫混りシルトや砂礫で埋まっていた。出土遺物は土師器皿29～31、瓦質土器甕32・羽釜33・播鉢34のほか平瓦・丸瓦などである。瓦質播鉢の存在により、遺構の年代は15世紀頃とみられる。類例は、15世紀第2～第3四半期とされているST94-7次SD102第5層である[佐藤1996]。

SP26・27：北区で第3層除去後の地山上面で検出した小柱穴である。いずれも東西・南北0.3m、深さはSP26が0.25m、SP27が0.2m弱であった。柱痕跡は、SP27は不明瞭であったが、SP26では直径0.1m不足であった。両者は一連の遺構である可能性があるが、柱間寸法は0.9m内外であり、建物としては1間の規模が小さすぎる。柵のようなものであったかもしれない。出土遺物はない。

SP28：北区の第3層上面遺構SK17の下位で検出した小穴で、東西・南北とも0.3m、深さ0.05mの規模である。柱痕跡は見られなかったが、小柱穴だった可能性がある。出土遺物はない。

SK29：北区の西壁際で検出した東西0.95m以上、南北1.55m以上、深さ0.6mの土壌である。SK16・17・20と重複し、それらより古い。砂礫、粗粒砂混りシルト、砂礫混りシルトなどで埋められていた。出土遺物は瓦質土器播鉢35のほか、土師器皿、瓦質土器羽釜・火鉢・甕、丸瓦(凹面布目)、平瓦などがある。遺構の年代は15世紀頃であろう。

SK31：南区で検出した東西1.2m、南北1.65m、深さ0.3m不足の土壌である。SX42、SK44と重複し、いずれよりも古い。埋土は下部に砂混り粘土質シルトやシルトなど、上部は砂・礫混りシルトなどであった。出土遺物は平安時代の灰釉陶器皿36や黒色土器、凸面縄タタキの平瓦などがあるが、凹面布目の丸瓦37は凸面を縄タタキ後のナデで仕上げ、ヘラ先のような工具で短い直線的な記号風のを刻んでおり、古代まで遡るとは考えにくい。また土師器皿の細片に中世とみられるものもあり、遺構の年代は中世であろう。

SX42：調査地南端の埋没谷を埋めたSX42は南北規模が6.5m以上で、SD46より新しい。地山の落込みは北辺のTP+15.3mから最深部で13.6mと、1.7mほどである。北辺西部には平面半円形の土壌



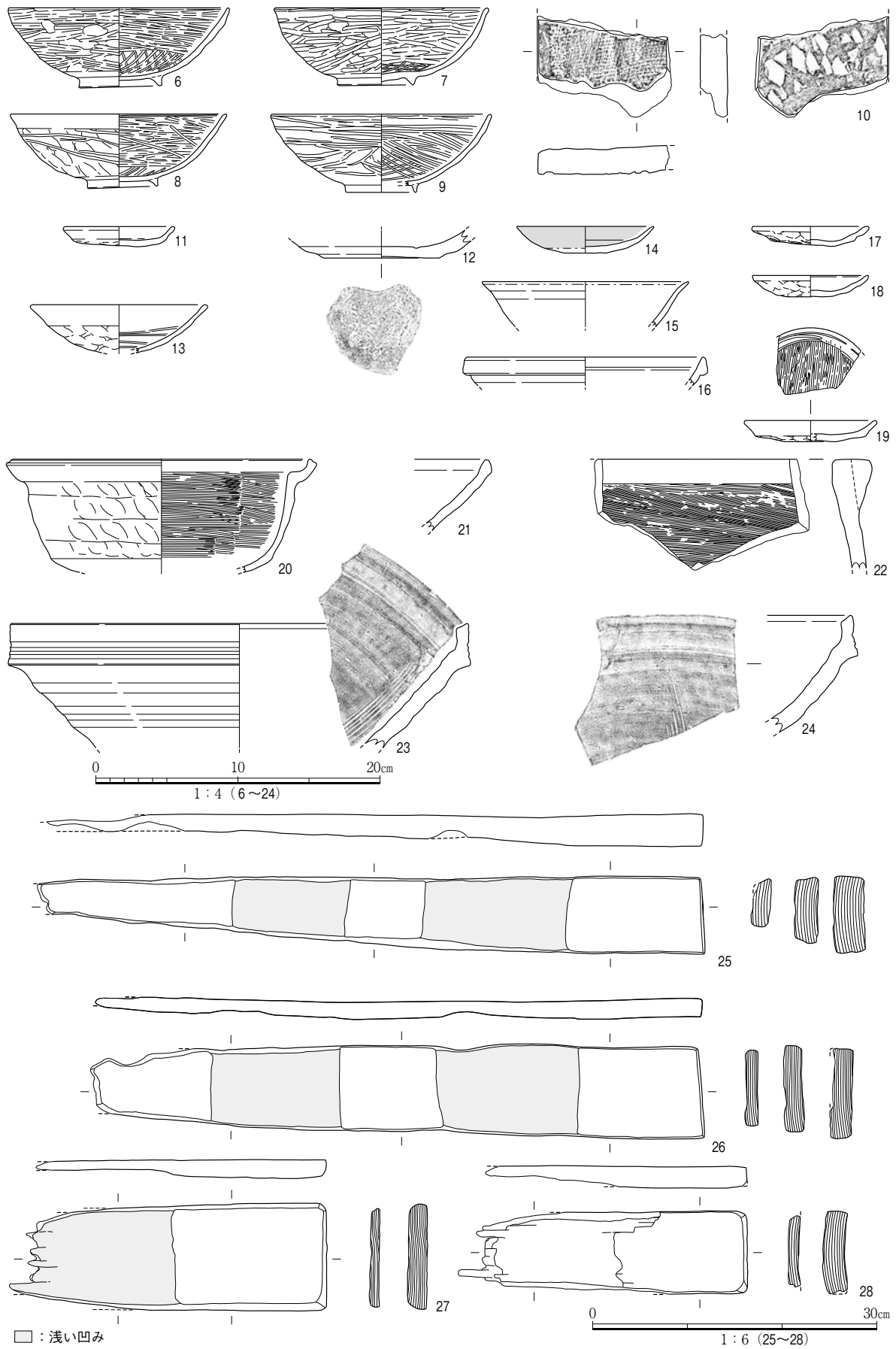


図8 中世の出土遺物実測図(1)  
 SK10(6~10)、SE01W(11~16・25・26)、SE01(17~24)、SE01E(27・28)

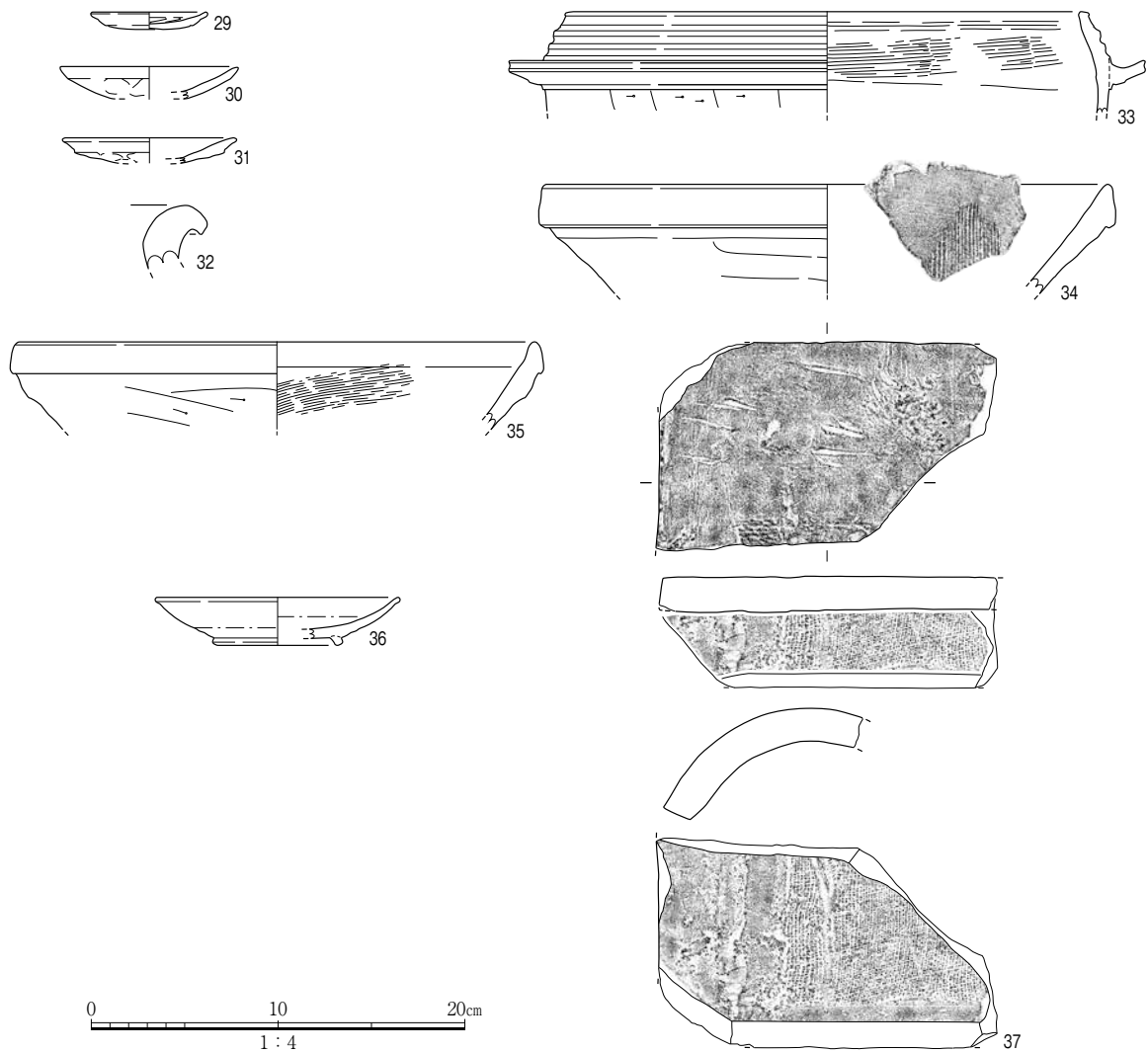
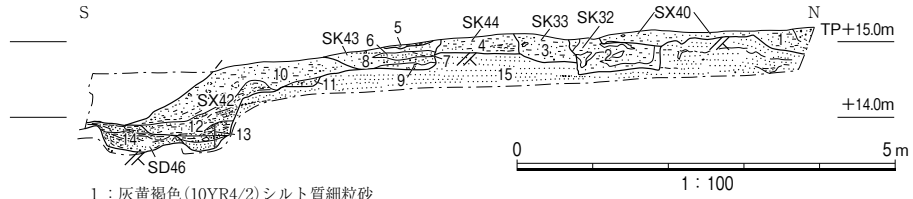


図9 中世の出土遺物実測図(2)  
SK20(29~34)、SK29(35)、SK31(36・37)

状を呈する部分(SK34の北側)があり、独立した遺構となるか精査したが、南半分の遺構ラインは明瞭に確認できなかった。一応その部分もSX42の一部としておくが、SX42より古い遺構であった可能性もある。埋土は、図10では南端の10層が明瞭な埋め土で、12・13層は砂を主体として地山(上町層)に由来する偽礫を含む、或いは砂の水成層などからなる。10層をSX42上部層とし、12・13層を下部層とした。図11-⑨では1~3層が上部層、図11-⑩でも1~3層が上部層で4・5層が下部層、図17では1層が上部層、2~6層が下部層にあたり、そのうち3層が水成層であった。

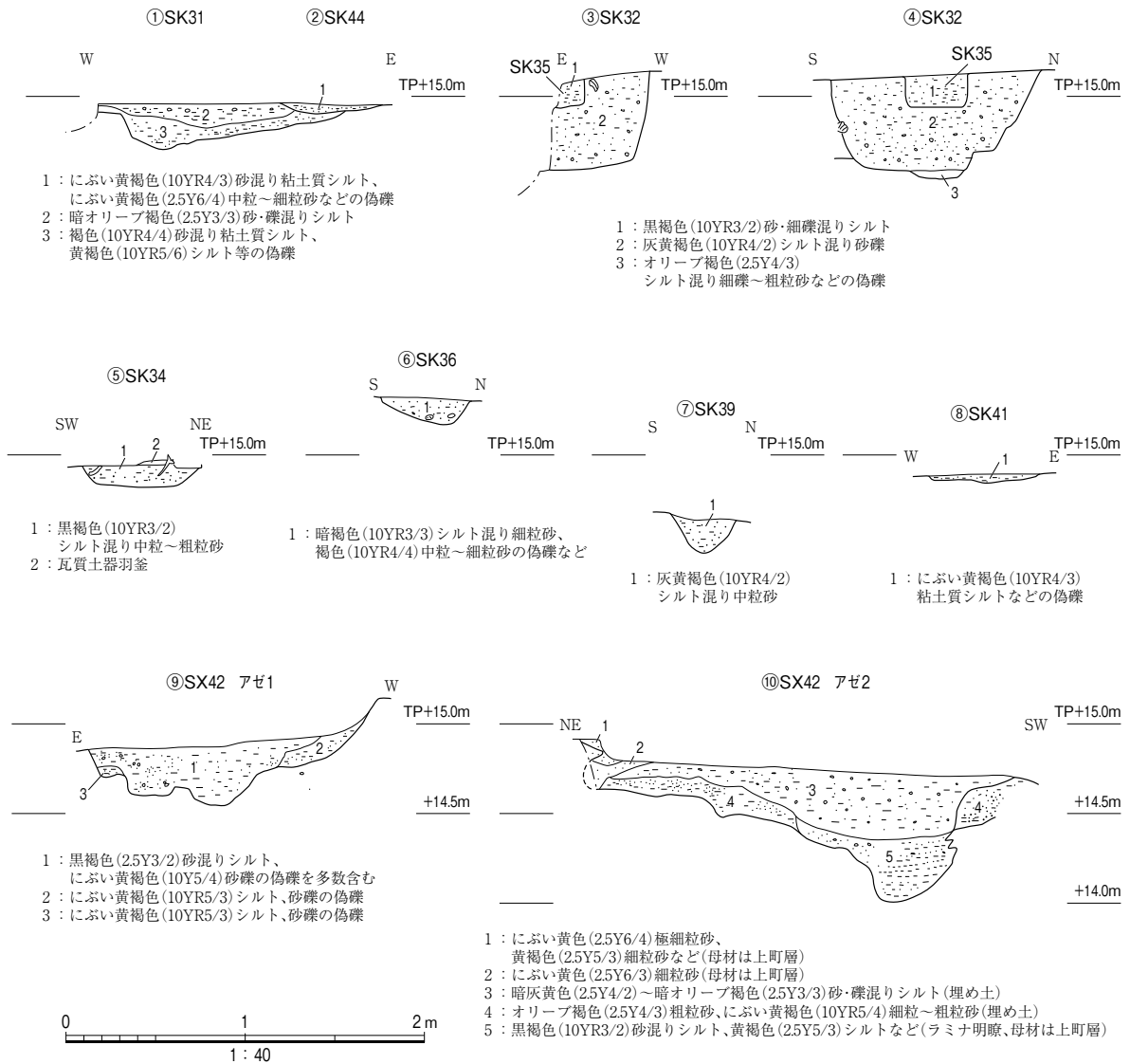
出土遺物は下部層、上部層に分けて報告する。いずれも遺物量は多く、選別して報告する。

下部層(図12)では土師器皿38、瓦器椀39・40、瓦質土器鉢41・同羽釜42~46、東播系須恵器片口鉢47~49、中国産青磁碗50、常滑焼甕51、丸瓦52・53などのほか、鉄滓、獣骨などがある。39・40は高台が消失したIV期中~後半のものである。42は羽釜の脚部、43は京都型とされる薄手で鏝の短いタイプである。44~46は河内・和泉系の羽釜で、口縁部が内傾しているのでおおむね15世紀までに位置づけられる[鋤柄俊夫1995]。47~49は直線的な体部に端部を上下に拡張した口縁部がつく第II~III期の片口鉢で、13世紀を中心とする。50は内面に花文を刻む龍泉窯系碗(13世紀前半)である。51は口縁



- 1: 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細粒砂
- 2: 黒褐色(2.5Y3/2)10層のBL多く含む細礫混りシルト質中粒～細粒砂(上町層の偽礫を多く含む)
- 3: 黒褐色(2.5Y3/2)細礫混りシルト質細粒～粗粒砂
- 4: 暗灰黄色(2.5Y4/2)細礫混りシルト質極細粒砂
- 5: 黄褐色(10YR5/6)シルト(砂混りシルトの偽礫、炭が混じる)
- 6: にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト質極細粒砂(上町層の偽礫を含む)
- 7: 黒褐色(2.5Y3/2)極細粒砂
- 8: 灰黄褐色(10YR4/2)砂・礫混りシルト(オリブ褐色(2.5Y4/4)砂混りシルト偽礫を含む)
- 9: 黄褐色(2.5Y5/3)極細粒砂
- 10: 黒褐色(10YR3/1)細礫少し混り混りシルト質極細粒砂～極細粒砂質シルト(シルトの偽礫を含む)
- 11: 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂
- 12: 暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒砂
- 13: 暗灰黄色(2.5Y5/2)地山BL含む細礫混り極細粒砂シルト(ラミナ・中粒～粗粒砂)
- 14: 黒褐色(10YR3/1)上部は暗色化した中粒砂質シルト、下部は細礫混りシルト～極細粒砂ラミナ
- 15: 黄褐色(10YR5/8)・灰オリブ(5Y6/2)シルト質極細粒砂(上町層)

図10 南区SX42ほか断面図



- 1: にぶい黄褐色(10YR4/3)砂混り粘土質シルト、にぶい黄褐色(2.5Y6/4)中粒～細粒砂などの偽礫
- 2: 暗オリブ褐色(2.5Y3/3)砂・礫混りシルト
- 3: 褐色(10YR4/4)砂混り粘土質シルト、黄褐色(10YR5/6)シルト等の偽礫

- 1: 黒褐色(10YR3/2)砂・細礫混りシルト
- 2: 灰黄褐色(10YR4/2)シルト混り砂礫
- 3: オリブ褐色(2.5Y4/3)シルト混り細礫～粗粒砂などの偽礫

- 1: 黒褐色(10YR3/2)シルト混り中粒～粗粒砂
- 2: 瓦質土器羽釜

- 1: 暗褐色(10YR3/3)シルト混り細粒砂、褐色(10YR4/4)中粒～細粒砂の偽礫など

- 1: 灰黄褐色(10YR4/2)シルト混り中粒砂

- 1: にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルトなどの偽礫

- 1: 黒褐色(2.5Y3/2)砂混りシルト、にぶい黄褐色(10Y5/4)砂礫の偽礫を多数含む
- 2: にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト、砂礫の偽礫
- 3: にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト、砂礫の偽礫

- 1: にぶい黄色(2.5Y6/4)極細粒砂、黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂など(母材は上町層)
- 2: にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂(母材は上町層)
- 3: 暗灰黄色(2.5Y4/2)～暗オリブ褐色(2.5Y3/3)砂・礫混りシルト(埋め土)
- 4: オリブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂、にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒～粗粒砂(埋め土)
- 5: 黒褐色(10YR3/2)砂混りシルト、黄褐色(2.5Y5/3)シルトなど(ラミナ明瞭、母材は上町層)

図11 南区遺構断面図

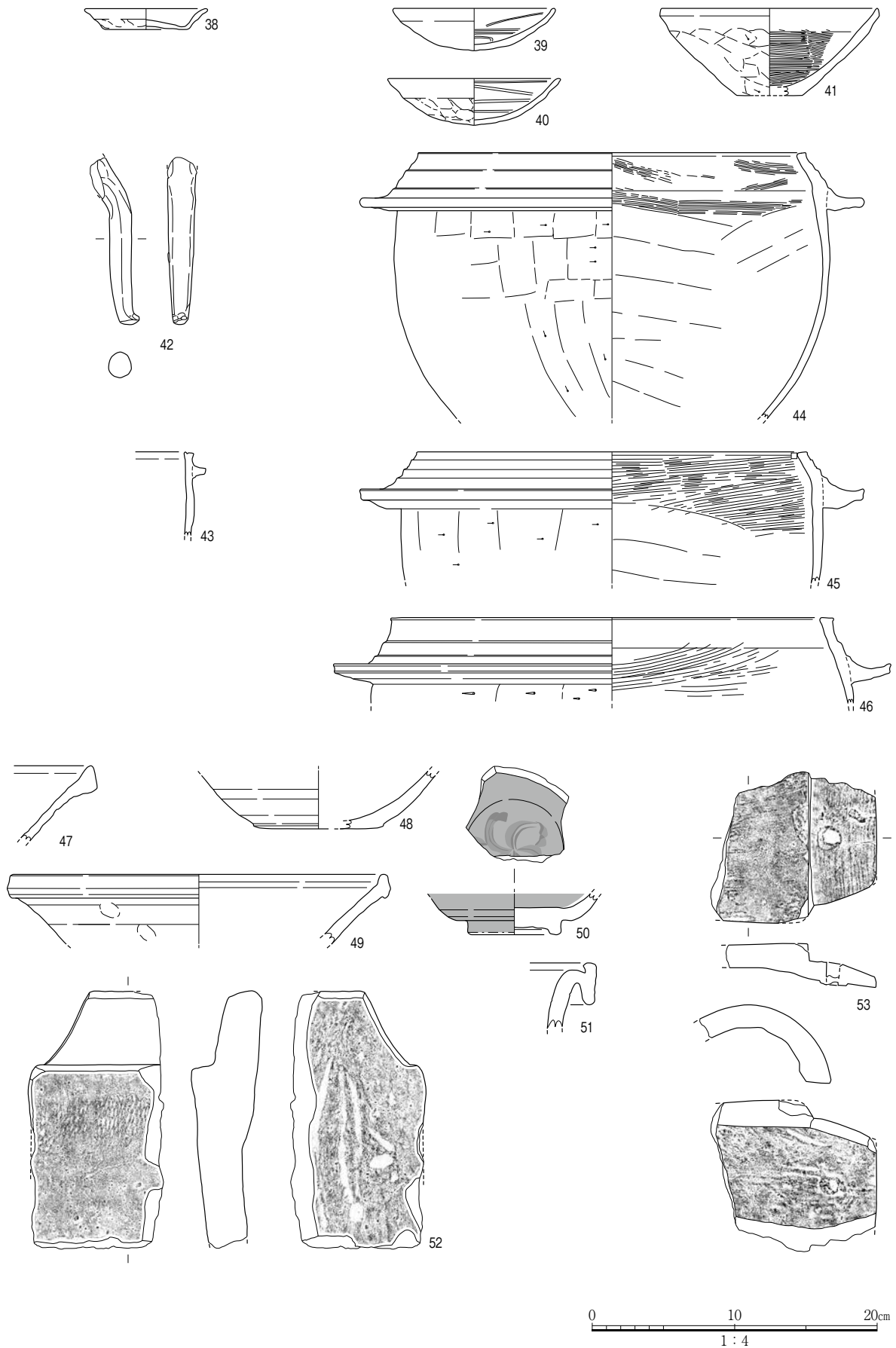


図12 中世の出土遺物実測図(3)  
 SX42下部層(38~53)

部がいわゆるN字状を呈する甕で13～14世紀頃のものである。52は凸面に縄タタキ、その後不徹底なナデを施す、凹面は摩耗により調整等不明ながら、縦方向の工具痕らしきものが2～3条みられ、焼成は不良である。53は、凸面はナデで、凹面には布目がみられ、玉縁には釘穴があるが、孔は貫通していない。焼成不良である。鉄滓は椀形滓とみられるものが3点ある。獣骨はイヌの頭蓋骨、下顎骨、大腿骨、寛骨、肩甲骨などで、同一個体かとみられる。

上部層(図13～16)では、土師器54～60・62～67、瓦器61・68・69、瓦質土器70～91、中国産青磁92・93、瀬戸美濃焼94～97、常滑焼甕98・99、同片口鉢100・101、不明陶器102、轆羽口103、瓦104～107などがある。54～60、62～65は皿で、京都では15世紀が中心であり、63・64のタイプも15世紀に位置づけられている四天王寺旧境内遺跡SD102第5層に類例がある[佐藤1996]。60は内面に多方向の短いハケメを施しており、堺に類例があり、15世紀とされている[土山健史1989] 61の瓦器

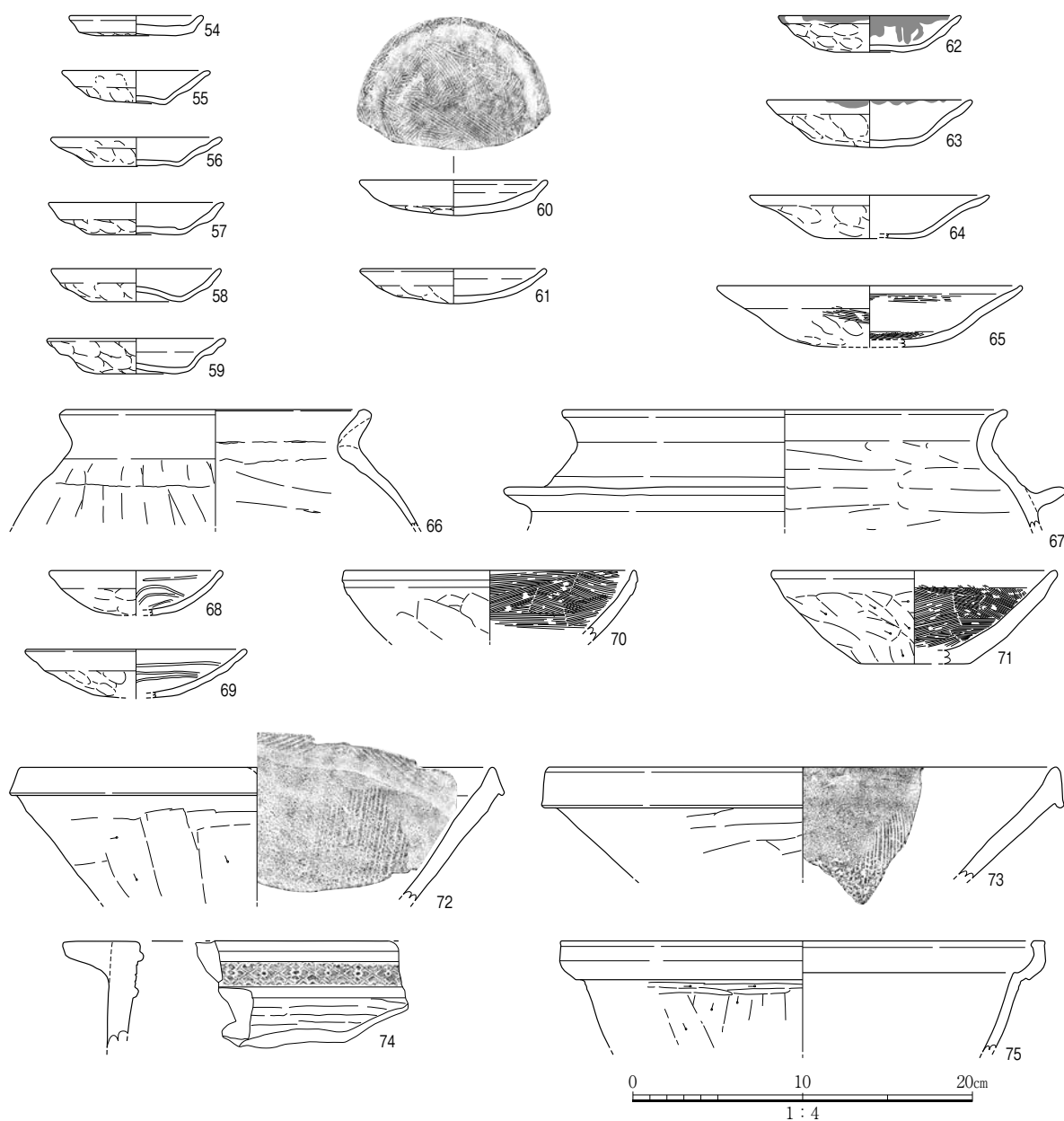


図13 中世の出土遺物実測図(4)  
SX42上部層(54～75)

皿も堺に類例がある(内面に粗いミガキあり)。66・67は平安時代のものである。68・69は終末期の瓦器碗である。瓦質土器は多様である。70・71は内面ハケメの鉢、72・73は搦鉢、74は平面形が方形の奈良火鉢である。75は鍋、76・77は京都系の羽釜、78～87は河内・和泉系の羽釜、88は肩部に耳がつく茶釜、89・90は甕、91は井戸側である。これらは15世紀に位置づけられる。92・93は中国産青磁碗で、博多遺跡群 I 期の類例から15世紀後半に位置づけられている[水澤幸一2014]。瀬戸美濃

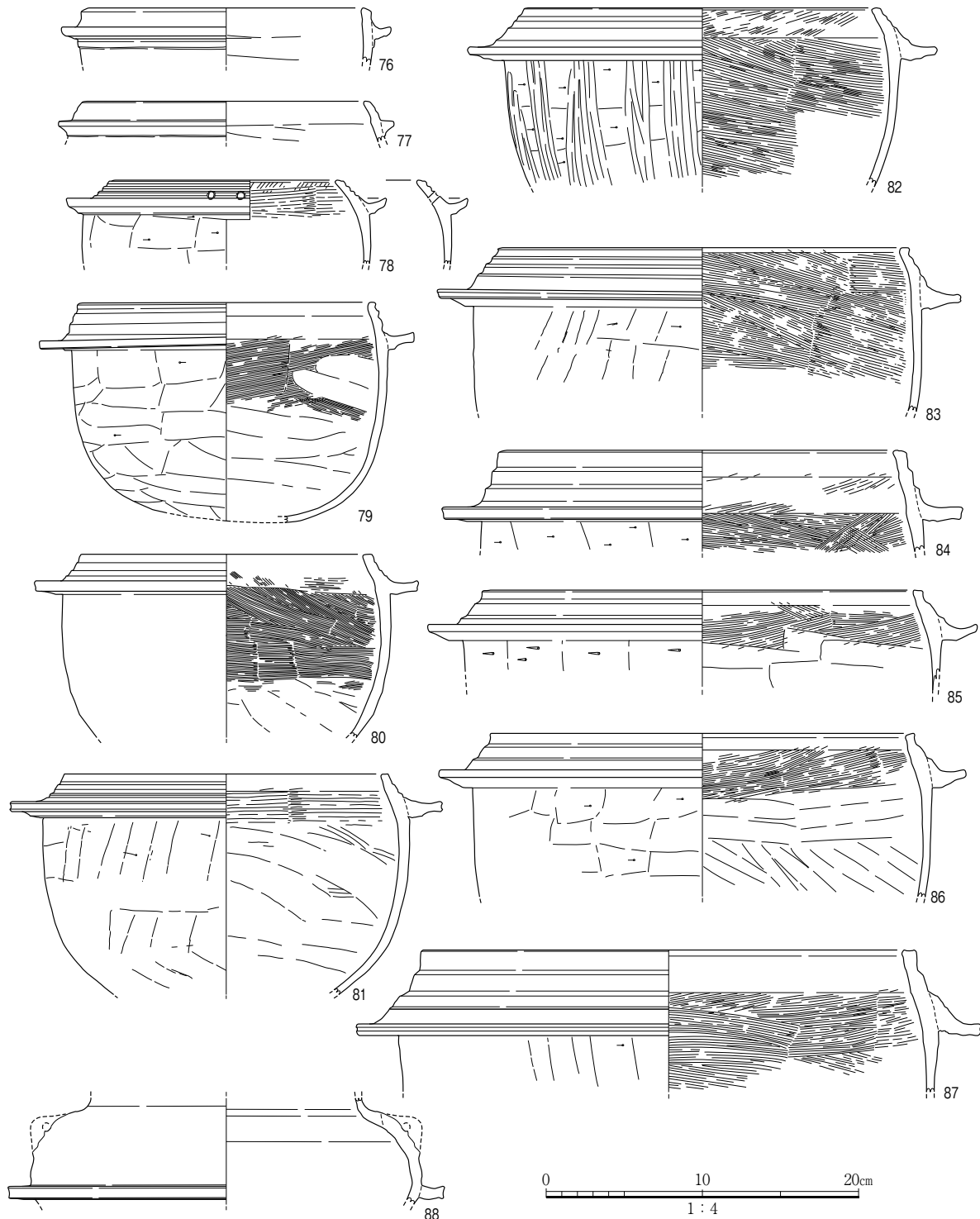


図14 中世の出土遺物実測図(5)  
SX42上部層(76~88)

焼は、いずれも糸切り成形で、94がおろし皿、95・96は香炉であり、97は香炉または鉢である。95・97には緑色釉、96には濃い褐色の鉄釉がかけられている。常滑焼98・99はいずれも甕であるが、口縁部から98は13世紀後半と古く、N字状の99が14世紀以後で新しい。101は外面を粗く回転ヘラケズリし、高い高台も回転ナデで貼り付けている。全体に極めて粗雑な作りで胎土に径0.4cm以下の砂礫を含む。

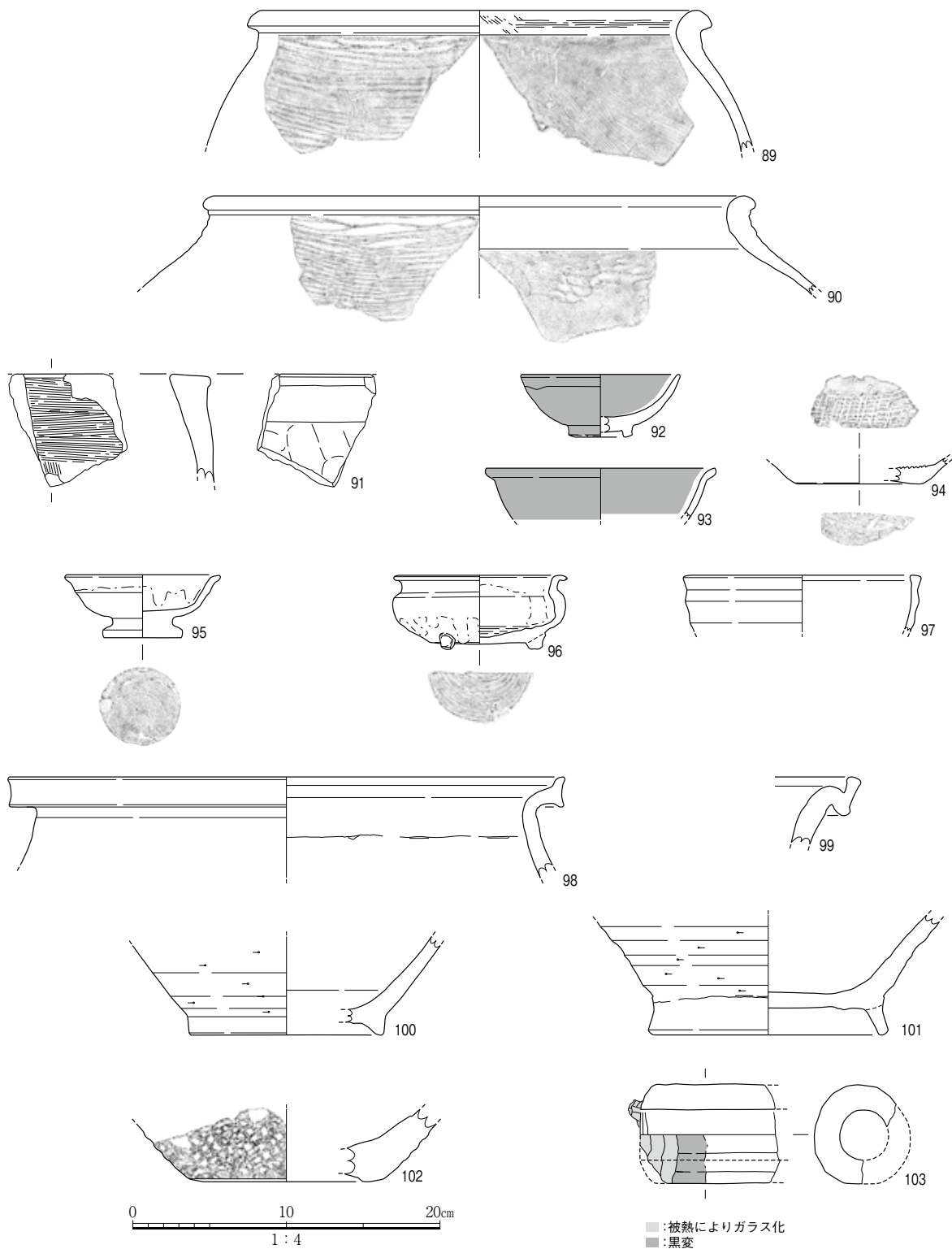


図15 中世の出土遺物実測図(6)  
SX42上部層(89~103)

102は、外面は格子タタキ、内面は雑なナデ、外底面は不調整で凹凸が残る雑な作りである。産地不明だが、西日本のどこかであろう。103の羽口は、炉に送風する孔が直径3.3cmと大きい。先端(図の左端)約2.5cmが被熱によりガラス化しており、その右側1.8~2.0cmほどの黒色化した部分までが炉内に設置されていたとみられる。104は小型の連珠文軒平瓦で、瓦当は天地2.8cmである。珠文は現状で密接して9個残っている。凹面にはわずかだが布目と縦方向のナデがみられる。平瓦105は凹面に布目、その上から側縁沿いと幅狭部端に雑なナデがみられ、凸面は格子タタキである。他の平瓦より薄い。同106は凹面の布目を雑なナデで消すが不徹底で、凸面は縄タタキである。同107は凹面の布目の上から工具による斜めのナデ、その後側縁沿いにナデを施す。凸面は縄タタキである。全体が火を受けたようで凹面には煤が付着している。

以上、SX42の遺物は、主に12世紀以後の遺物を多量に含んでいる。年代上の下限は下部層、上部層とも15世紀であり、上部層はその後半かとみられる。

SD46：南区の南部は大きく南へ落ち込む谷状の地形となっており、この埋没谷がSD46→SX42の順に埋まっていた。SD46は南区の南端で検出された谷底の自然流路で、底のレベルからみた流向は西→東である。流路の幅は西端で約2.0m、東端で0.55m、最深部のレベルはTP+13.3mで、SX42北辺の地山(上町層)との比高はほぼ2.0mである。大部分がSX42に覆われていたため、残っていた埋土

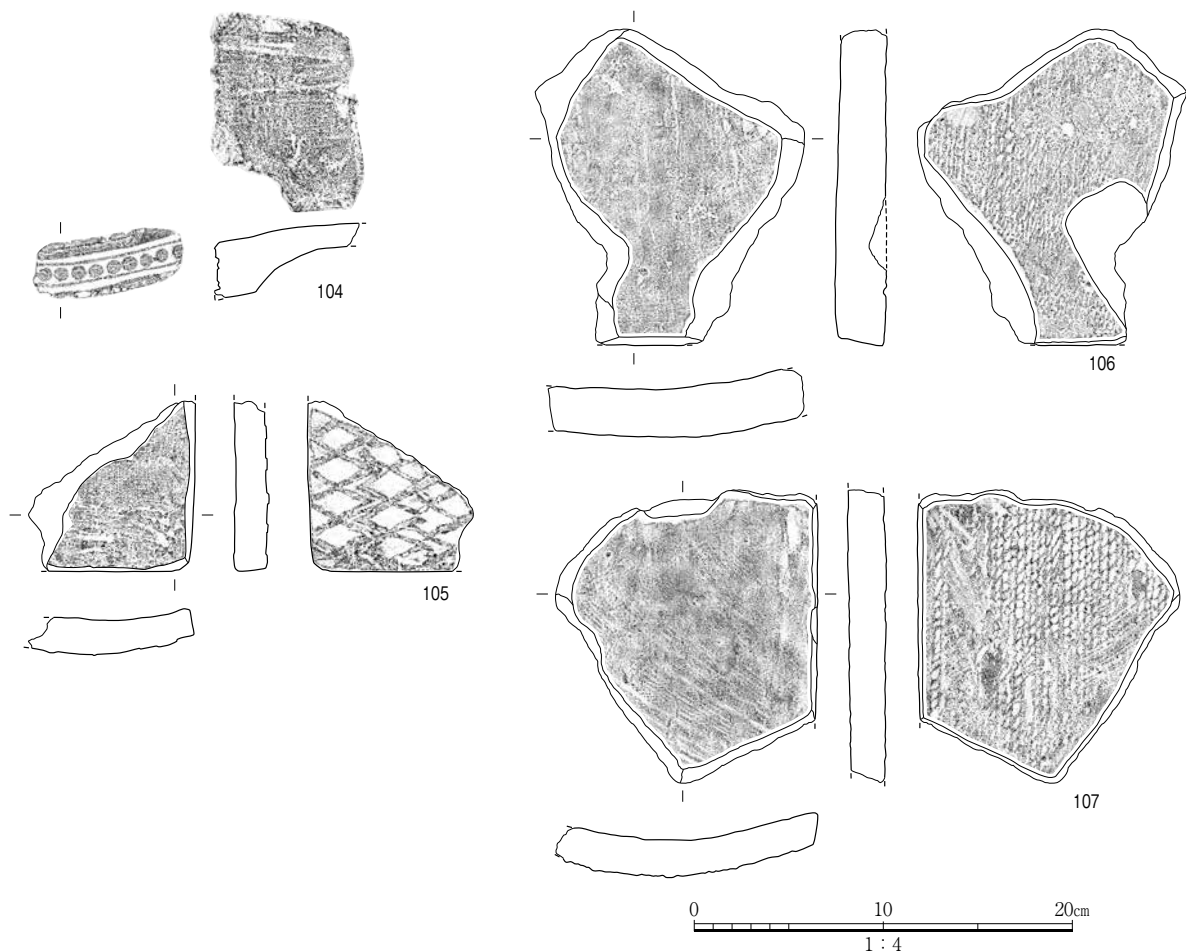


図16 中世の出土遺物実測図(7)  
SX42上部層(104~107)



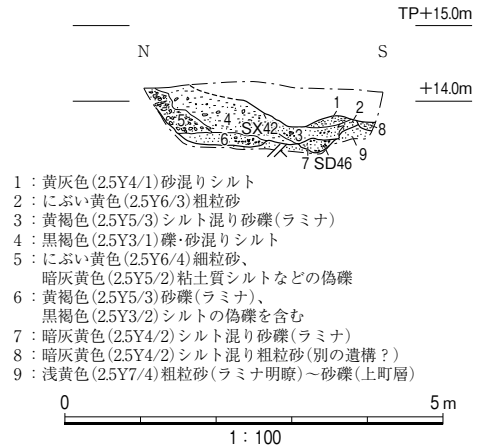
は最下部のシルト混り砂礫(ラミナが明瞭にみられた)のみであった。

出土遺物は土師器108~111・115、瓦器112・113、瓦質土器114・116・118~120、滑石製石鍋117などである。108~111は土師器皿で、108や111は京都では15世紀頃に類例がある。同羽釜115は肩部にヘラ先で記号または文字(判読できず)が刻まれている。肩部の調整は雑である。112は皿、113は高台が消失した椀で13~14世紀のものであるが、堺では15世紀まで瓦器の皿が残るといふ[土山1989]。117は13世紀頃のものである。瓦質土器はミニチュアの羽釜114、体部外面に菊文のスタンプを有する火鉢116、井戸側118、播鉢119、甕底部120などがある。SD46が埋まった年代は15世紀と考えられる。大坂では15世紀第2~第3四半期とされる四天王寺北縁のSD102第5層[佐藤1996]に共通点がみられる。

次に述べるSK44、SK34は帰属層位が不明であり、确实とはいえないが中世の遺構である可能性が高いと判断した。

SK44:南区で検出した東西1.1m以上、南北1.15m以上、深さ0.25mの土壌である。西端はさらに0.05

南東隅東壁



- 1 : 黄灰色(2.5Y4/1)砂混りシルト
- 2 : にぶい黄色(2.5Y6/3)粗粒砂
- 3 : 黄褐色(2.5Y5/3)シルト混り砂礫(ラミナ)
- 4 : 黒褐色(2.5Y3/1)礫・砂混りシルト
- 5 : にぶい黄色(2.5Y6/4)細粒砂、暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルトなどの偽礫
- 6 : 黄褐色(2.5Y5/3)砂礫(ラミナ)、黒褐色(2.5Y3/2)シルトの偽礫を含む
- 7 : 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト混り砂礫(ラミナ)
- 8 : 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト混り粗粒砂(別の遺構?)
- 9 : 浅黄色(2.5Y7/4)粗粒砂(ラミナ明瞭)~砂礫(上町層)

図17 南区南東隅東壁断面図

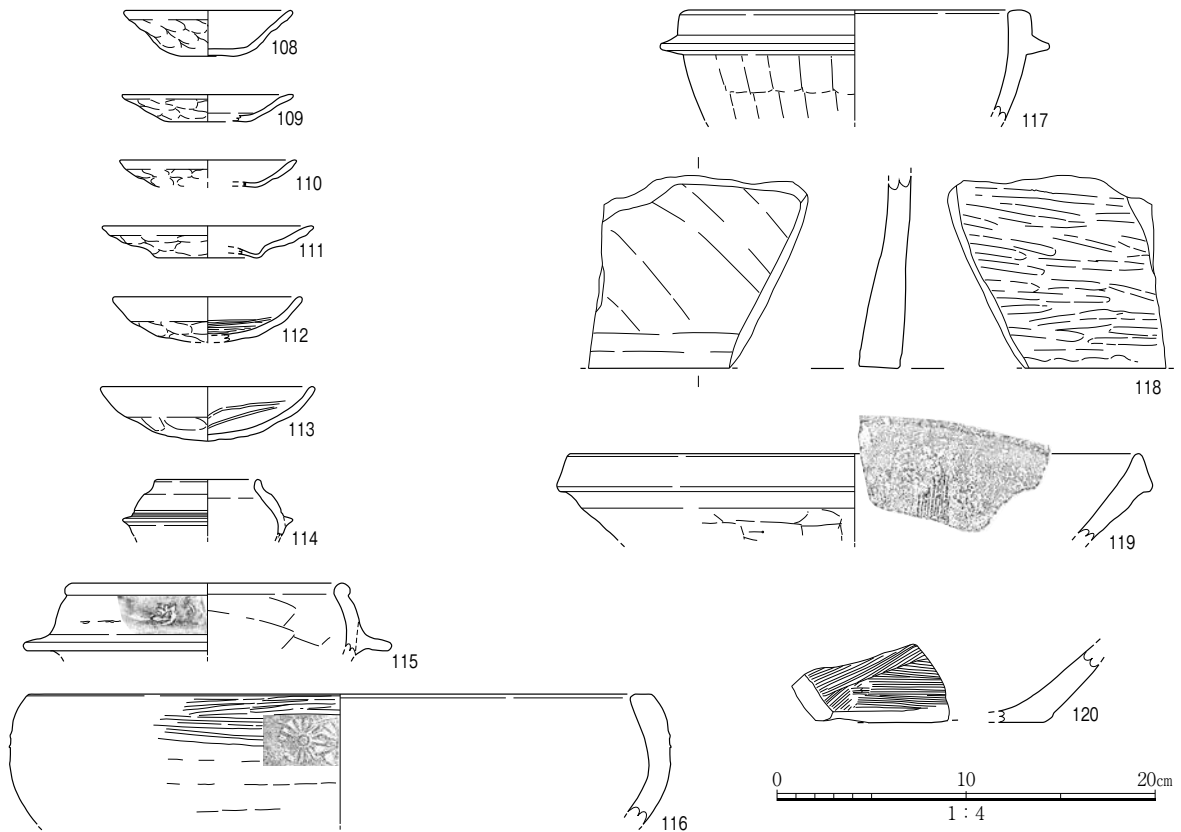


図18 中世の出土遺物実測図(8)  
SD46(108~120)

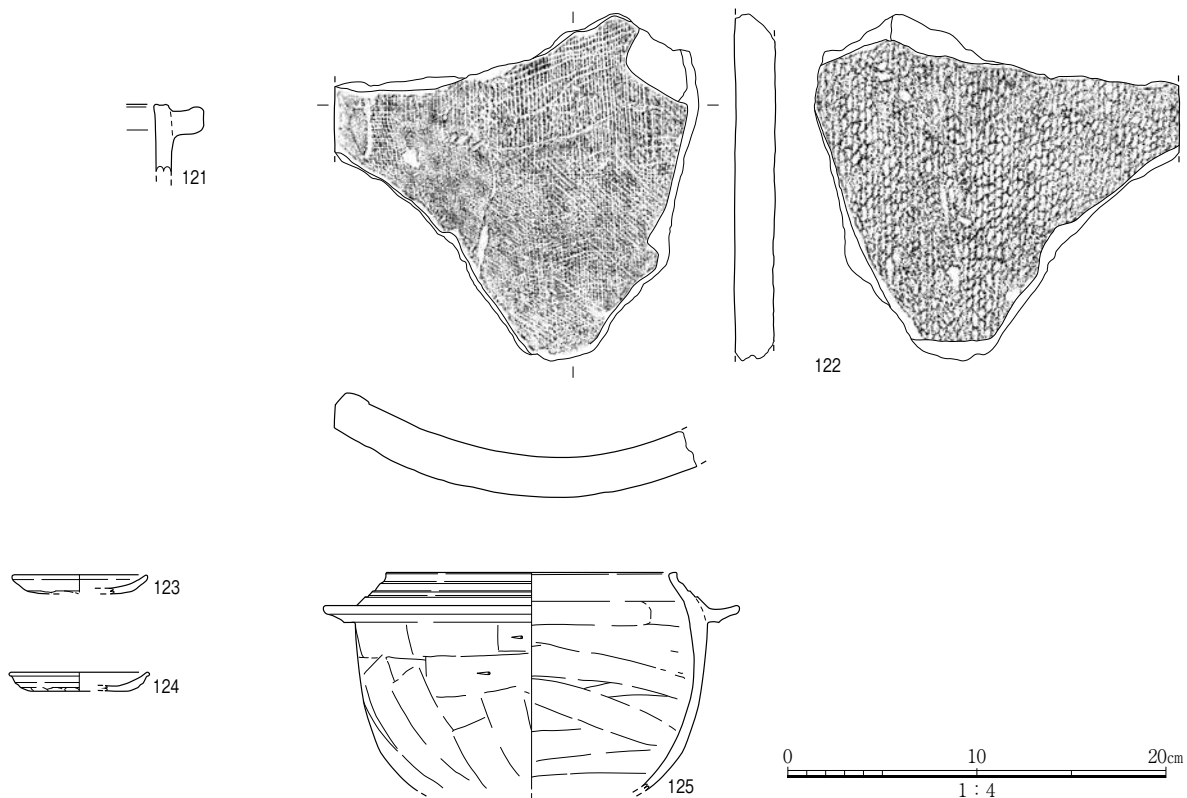


図19 中世の出土遺物実測図(9)  
SK44(121・122)、SK34(123~125)

mほど低く窪んでいた。SK33・43と重複し、それらより古い。SK31と重複し、それより新しい。埋土は細礫シルト混り極細粒砂である。遺物は平安時代の土師器羽釜121や凸面縄タタキの平瓦122のほか、瓦器椀などがある。瓦器椀は細片なので年代の詳細は不明であるが、本遺構は中世に属する可能性が大である。

SK34：南区で検出した東西0.7m、南北0.6m、深さ0.1m余の土塋である。SX42と重複し、それより新しい。埋土はシルト混り中粒～粗粒砂であった。土師器皿123・124、瓦質土器羽釜125などが出土している。これらの土器は15世紀頃とみられる。

b. 近世の遺構と遺物(図5・20・21)

近世の遺構は第3層上面のSK16・SK17・SK45などであるが、それ以外にも出土遺物や重複関係から近世に属する遺構は多く、併せて報告する。なお、本報告では豊臣期(1583～1615年)以後を近世としている。

SK02：北区で検出した東西0.35m以上、南北0.55m、深さ0.15mの埋甕土塋で、焼締陶器の甕底部が部分的に遺存していた。甕は遺構の底から0.04m上に外底面が位置していた。SE23と重複し、それより新しい。掘形の埋土は粗粒砂混りシルト、甕内部はシルトなどの偽礫を含む砂礫である。据えられていた甕126は、体部外面に鉄泥を塗布し、内面も上部に塗布していた鉄泥が垂れてきている。確実ではないが、近世の丹波焼かと考える。ほかにての字状口縁の土師器皿127が出土したが、甕と年代が合わないので混入したものであろう。

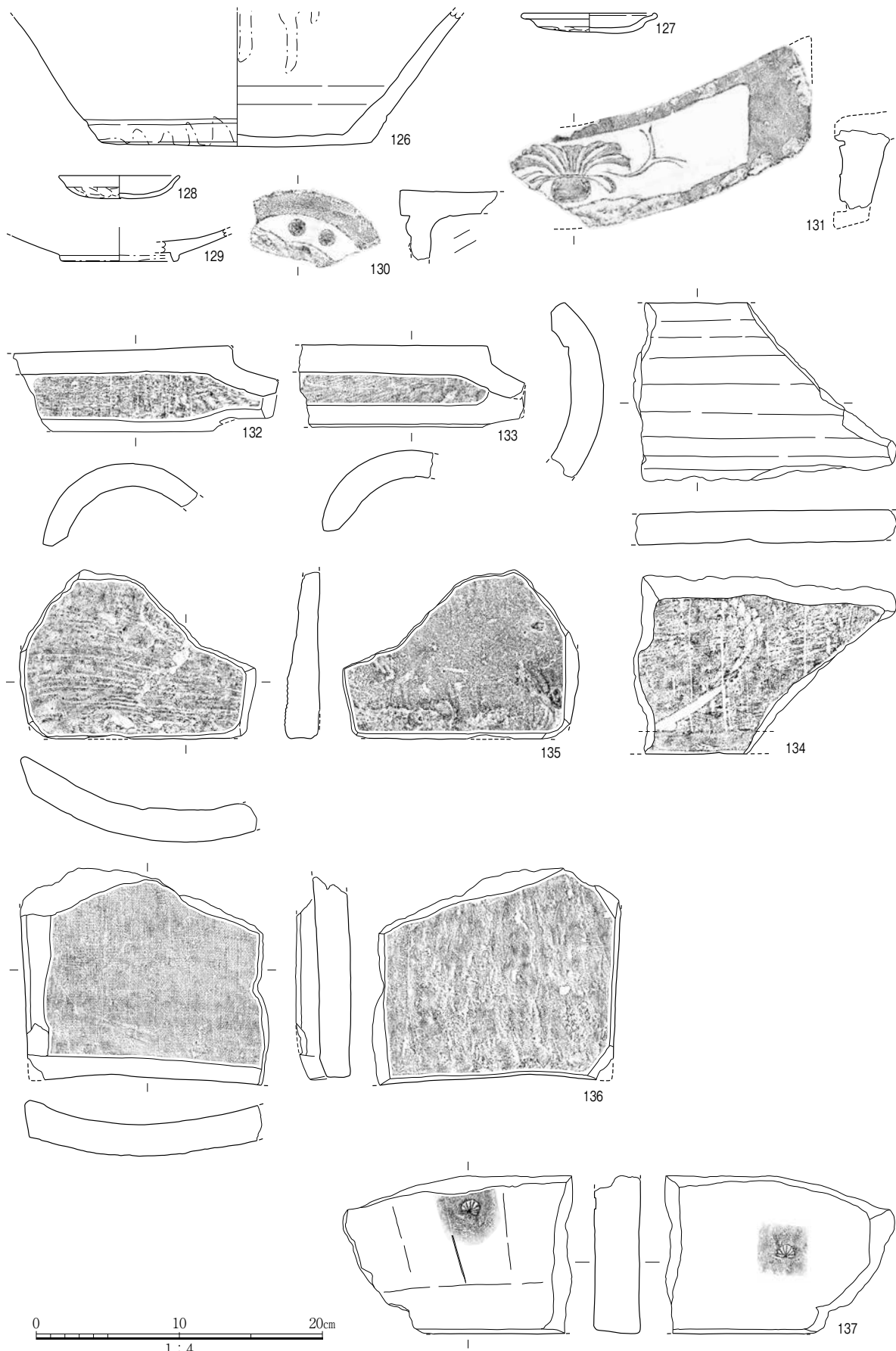


図20 近世の出土遺物実測図(1)  
SK02(126・127)、SE05(128~137)

SE05：北区で検出した東西1.6m、南北1.45mの井戸である。深さは0.5m以上であるが、湧水により底および井戸側は検出できなかった。遺物は土師器皿128、肥前磁器皿129、軒丸瓦130、軒平瓦131、丸瓦132～134、平瓦135・136、瓦塼137などがある。大ぶりの131は脇区が広く、中心飾りは砂金袋をモチーフとし、唐草の反転は二回までしかない。四天王寺で同文の瓦が出土しており(註1)、近世Ⅲ-1期(1592～1600)と位置づけられている[山崎信二2008]ので、豊臣期である。132・134の凹面にはコビキBの鉄線切がみられる。134には吊紐痕もみられる。137は図の左側が縦・横のナデであるのに対して右側は不定方向のナデまたは不調整であり、丁寧な仕上がりの左側がおもて面であろう。表裏両面に半菊文の刻印がみられる。刻印は非常に似ているが、子細に見ると異なる原体である。SE05の年代は豊臣期から徳川期の17世紀前半までのいずれかであろう。

SK08：北区北端の西壁際で検出した東西0.2m以上、南北0.3m以上、深さ0.2mの小土壌である。第2層上面で検出したので、近世でもかなり新しく、近代に降る可能性もある。シルト混りの砂礫で埋められていた。遺物は出土していない。

SK09：北区から南区にかけて検出した幅0.95m、長さ4.2m、深さ0.45mの細長い土壌である。SE30、SK36と重複し、それらより新しい。中粒砂、細礫などで埋まっていた。遺物は肥前陶器皿138・同碗139のほか、同碗(絵唐津)、土師器皿、瓦質土器播鉢、丸瓦(コビキBを含む)、平瓦などである。138の目積跡は砂目である。遺構の年代としては豊臣期より新しく、17世紀前半であろう。

SK13：北区北端で検出した東西1.6m以上、南北3.7m以上の土壌である。底面にかなり凹凸があり、深さは一定しないが南東のもっとも深い部分で0.9mほどである。遺物には棧瓦や丸瓦、硯などを含み、近世でもかなり新しい。遺構の年代には関わらないが、土師器皿140や、平瓦141・142が出土している。平瓦は凸面に格子タタキを施しており、141の凹面には刻印があり、147の例から「左寺」である。「左寺」は京都の東寺を指すが、大坂では四天王寺(註2)、茶臼山遺跡に出土例がある[趙哲済1986、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017]。

SK14：北区の西壁際で検出した東西0.8m以上、南北0.35m、深さ0.35mの細長い土壌である。砂混りシルトで埋められていた。出土遺物はない。

SK15：北区の西壁際で検出した東西0.85m以上、南北0.7m、深さ0.25mの土壌である。砂混りシルトで埋められていた。出土遺物はない。

SK16：北区の西壁際で検出した東西0.85m以上、南北1.15m、深さ0.65mの土壌である。SK20・29と重複し、それらより新しい。砂礫混りシルト、シルト混り砂礫や上町層に由来する粗粒砂の偽礫などで埋められていた。出土遺物は瓦器皿143、土師器皿144があり、中世的ではあるが、細片ながら肥前陶器(碗?)や肥前磁器などが出土しており、遺構の年代は江戸時代に降る。ただし、本遺構の上位の第2層(17世紀前半)が年代の下限である。

SK17：北区の西壁際で検出した東西0.85m余、南北1.1m余、深さ0.35mの土壌である。SK29と重複し、それより新しい。細礫・砂混りシルトで埋められていた。出土遺物には瓦器碗145のほか、細片ながら中国産青花やコビキBの丸瓦などがあり、遺構の年代は豊臣期かそれ以後で下限は上位層である第2層の17世紀前半となる。

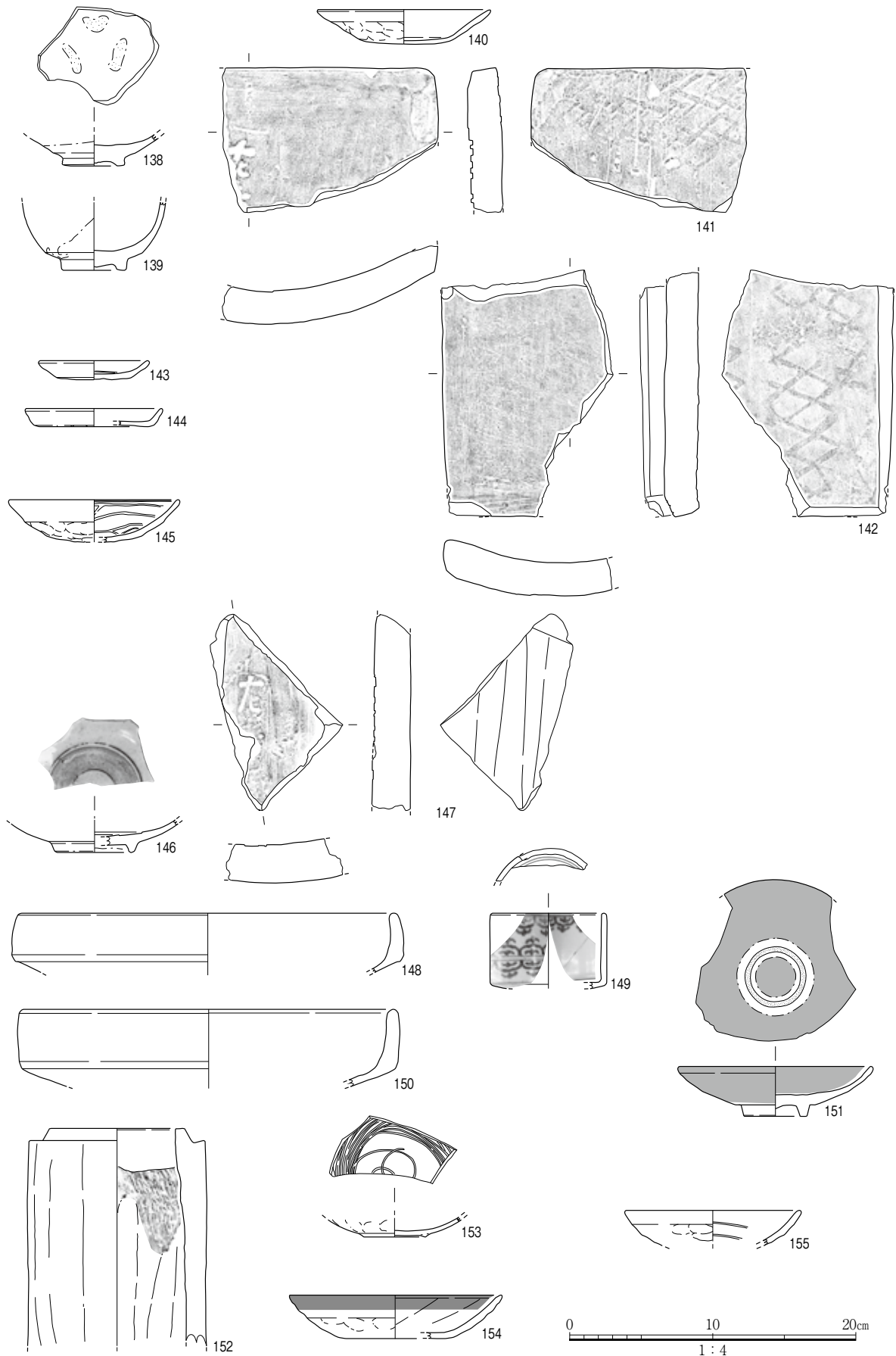


図21 近世の出土遺物実測図(2)

SK09(138・139)、SK13(140~142)、SK16(143・144)、SK17(145)、  
SE30(146・147)、SK32(148・149)、SK33(150・151)、SK41(152) SK03(153)、SE23(154)、SK43(155)

SE30:北区で検出した東西1.6m以上、南北約2.0mの井戸である。湧水で底まで調査できなかったが、深さは0.5m以上である。重複関係ではSE23より新しく、SK09より古い。東西、南北とも1m足らずの井戸側の痕跡を確認したが、湧水により掘下げられなかった。遺物は肥前磁器色絵皿146、平瓦147などがある。146は蛇の目に釉剥ぎし、その露胎部分を水色、その内縁と外縁を赤茶色の細線で上絵付しており、この絵付けは17世紀後半かそれ以後のものである。147には縦方向の粗いナデの上から「左寺」の刻印がある。このほかに肥前磁器染付碗、肥前陶器京焼風大鉢、丸瓦などがあり、遺構の年代としては17世紀末から18世紀前半と考えられる。

SK32:南区で検出した東西0.55m以上、南北1.25m、深さ0.5mの土壌である。重複関係としてはSK35・SX40より古く、SK33より新しい。埋土は上町層の偽礫を多く含む細礫シルト混り中粒～細粒砂である。土師器焙烙148、肥前磁器染付碗149などが出土した。149は筒形碗であり、遺構の年代は18世紀第3四半期頃である。

SK35:南区で検出した東西・南北とも0.3m、深さは0.15mの小土壌である。SK32と重複し、それより新しい。埋土は砂～細礫混りシルトである。SK32出土の肥前磁器碗149と接合する破片のほかに丸瓦などが出土している。

SK33:南区で検出した東西0.95m以上、南北1.1m以上、深さ0.4mの土壌である。重複関係ではSK32より古く、SK44より新しい。埋土は細礫シルト混り細粒～粗粒砂である。土師器焙烙150、肥前磁器青磁皿151などが出土した。18世紀でも後半まで降らない年代であろう。

SX40:北区から南区にかけて検出した東西0.7m以上、南北2.3m以上の規模で、遺構の西端のみ検出された。底は凹凸が著しく深さは最大で0.45mである。SE30と重複し、それより古く、またSK32より新しい。埋土はシルト質細粒砂である。コビキB手法による丸瓦などが出土している。

SK41:南区で検出した東西0.7m以上、南北1.8m、深さ0.15mの土壌である。SX42より新しく、SK43より古い。埋土は砂混り粘土質シルトを主体とする偽礫であった。遺物は内面に布目が残る瓦質の土管152のほか、肥前陶器碗、肥前磁器染付碗(一重網目文)、平瓦などがある。肥前磁器碗は17世紀の中頃～後半のタイプである。

SK45:南区南端で第3層相当層上面で検出した東西1.5m以上、南北0.95m、深さ0.9m余の土壌である。SX42と重複し、それより新しい。埋土は下から砂混りシルト、細粒砂の偽礫、砂混りシルトの偽礫、砂・礫混りシルトであった。出土遺物はない。

#### c. 中世～近世の遺構(図5)

調査開始時の機械掘削が地山上面までであったため、以下では帰属する層位が不明で、また出土遺物が少なく年代が確定できない遺構について報告する。そのうちのいくつかは中世に属するかもしれないので、該当する遺構にはその旨を付記しておく。

SK03:北区で検出した東西0.3m以上、南北0.55m以上、深さ約0.1mの遺構であるが、大部分が攪乱により失われており、全貌は不明である。細片ながら13世紀の瓦器碗153が出土している。

SK07:北区北端で検出した東西0.8m以上、南北0.7m、深さ0.15m余の土壌である。東側に深さ0.3mのより深い部分があり、底から0.15mほどのレベルで上面を平坦にして花崗岩が置かれていた。花

崗岩は長径17cm、短径12cmで、火を受けた形跡がみられた。礎石であった可能性があるが、周囲に組合う礎石はみられなかった。埋土はシルト混り砂礫で、花崗岩の下位でも、特に叩き締めたような形跡はなかった。遺物は平瓦が主体で、わずかに土師器皿の細片を含む。

SK11：北区で検出した東西0.35m、南北0.5m、深さ0.1m弱の土壙である。SK10と重複し、それより新しい。シルト混りの砂礫で埋められていた。遺物は出土していない。

SK12：北区で検出した東西0.75m以上、南北1.45m、深さ0.15m弱の土壙である。SP26・27と重複し、それより新しい。炭・砂礫が混りシルトや砂礫で埋められていた。遺物は平瓦の細片が出土したのみである。

SK18：北区で検出した東西0.55m、南北0.6m、深さ0.4m弱の土壙である。SE01と重複し、それより新しい。埋土は砂混りシルトで、シルト、粗粒砂などの偽礫を多く含んでいた。遺物は瓦器碗、土師器皿、瓦質土器羽釜などが出土した。瓦質土器羽釜からは中世後半の遺構となるが、これらは細片であり、遺物相互の時間幅が大きいことから、年代決定は躊躇される。

SK19：北区で検出した東西0.2m、南北0.6m、深さ0.25m弱の細長い小土壙である。SK20と重複し、それより新しい。埋土は砂・礫混りシルトである。遺物は土師器皿、瓦質土器羽釜の細片、平瓦などが出土したが、SK18と同じく年代決定は困難である。

SE23：北区で検出した東西0.45m以上、南北1.65m以上の井戸である。湧水で底まで調査できなかったが、深さは1.1m以上である。SK02、SE30と重複し、それらより古い。遺構の大部分は東側の攪乱で失われていたが、東西0.65m、南北0.6mの井戸側の痕跡を確認できた。遺物には掘形から出土した土師器皿154・同甕、瓦質土器火鉢、黒色土器らしき碗、平瓦などがある。154は口縁部内外面に煤が付着した灯明皿である。あまり精製されていない胎土でやや厚手に作り、内面に工具痕を留める。近世には降らないので、中世の遺構かもしれない。

SK22：北区で検出した東西・南北とも0.35m、深さは0.1m弱の小土壙である。埋土は細礫・砂混りシルトである。遺物は出土していない。

SK36：北区で検出した東西・南北とも0.3m、深さは0.15mの小土壙である。SK09と重複し、それより古い。埋土はシルト混り細粒砂や中粒～細粒砂などである。遺物は出土していない。

SP37・38：南区で検出した近接する小穴である。いずれも直径0.2m余、深さはSP37が0.1m、SP38が0.15mほどである。いずれも遺物の出土はない。

SK43：南区で検出された遺構で、西端しか残っていなかったが、東西0.15m以上、南北1.55m以上、深さは0.4m足らずである。SX42、SK41・44と重複し、それらより新しい。埋土は、上部に炭や砂混りシルトの偽礫を含むシルト層、中～下部に砂、シルト混り砂(上町層に由来する偽礫を含む)などがみられた。遺物は瓦器碗155、土師器皿、平瓦(凹面布目)などがあるが、年代の絞り込みは困難である。

SK39：南区南端で検出した東西0.5m、南北0.4m弱、深さ0.2mの土壙である。SX42と重複し、それより新しい。埋土はシルト混り中粒砂であった。遺物には須恵器、土師器、瓦器などがあるが、この遺構は15世紀のSX42より新しいので、これらの遺物から年代を割り出すことはできない。

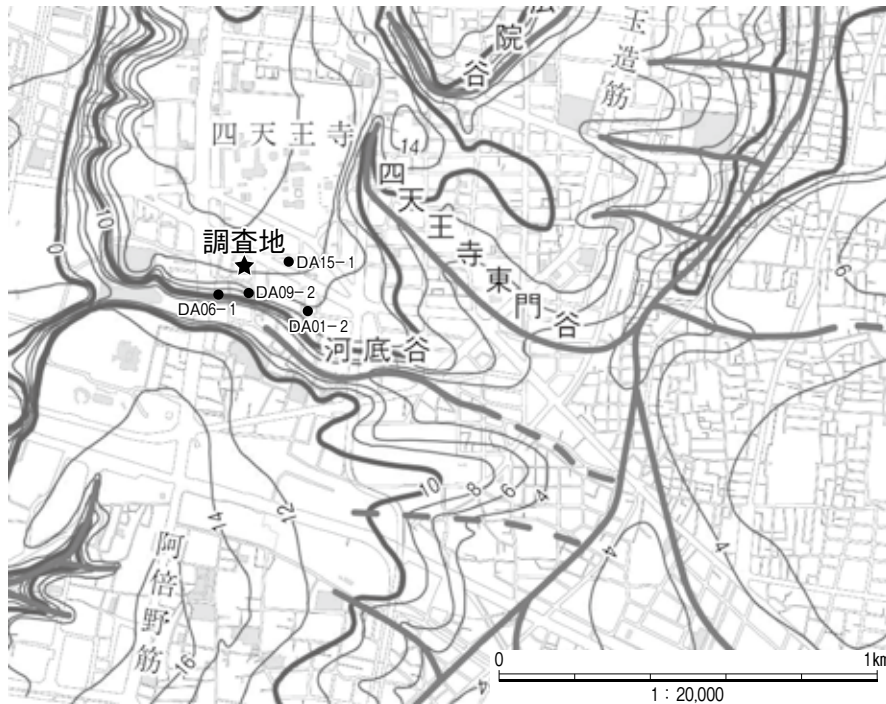


図22 更新統上面等高線図と谷および調査地点  
 ([趙ほか2014]より抜粋、加筆)

### 3)まとめ

今回の調査で得られた成果は以下のとおりである。

四天王寺の周辺では、特に東方の四天王寺旧境内遺跡において上町台地を下刻した埋没谷などが多く発見され、複雑な旧地形の様相が明らかになりつつある。四天王寺の南方にも東～東南に開く大きな谷筋(南北幅100～120m、比高5～9m)があり、「河底谷」と称されている。この谷が、冒頭で述べた和気清麻呂の大和川の付替え工事の跡と伝承され、「河内川堀江推定地」として周知されている(図1・22)。今回の調査地で検出されたSD46・SX42は東～南東へ開く埋没谷にあたとみられる。この谷は調査地の南東方面で川底谷へと連続し、その支谷であろう。調査地の南約70mのDA09-2次地点では東へ降る旧地形が検出されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011]。上に想定した支谷はこの東側に位置するのであろう。

今回の調査で検出した遺構は12世紀のSK10が最も古く、若干の空白期を経て15世紀の遺構が多く出現する。それ以後は近世まで数多くの遺構が検出された。本調査地の遺構・遺物の画期が15世紀にあることが窺える。

四天王寺の南方で行われた調査をみると、先述のDA09-2次地点では古代の整地層が見つかるが、その後は遺構の空白期となり中世後半の井戸以後は各時期の遺構が発見されている。調査地の南西100m弱のDA06-1次地点も河底谷の北辺に位置しており、ここでは15世紀に埋まる井戸が検出され、その後の整地層も15世紀であり、その上位で達磨窯の痕跡が発見されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]。DA01-2次地点も河底谷の北辺に位置し、年代の詳細は不明ながら中世後半の井戸が見つまっている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003]。さらに調査地の東約100



mのDA15-1次地点でも15世紀の井戸、次いで16世紀の井戸が発見されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017]。

以上からわかるように、四天王寺の南方エリアでは15世紀を画期として人々の集団的な居住が始まっている。『大乘院社寺雑事記』明応八(1499)年に「天王寺ハ七千間在所」とあり、15世紀末には大きな門前町が形成されていたようである。「七千軒」には誇張があるとしても、それはおそらく西門と寺域西方エリアを中心としつつも、南方エリアが門前町の新興開発区域として形成されてきた結果ではないかと考えられる。

四天王寺周辺に形成された門前町の考古学的研究は少ない(註3)。現在のところ、寺域西方では遺構・遺物が認められるが、南方についてはほとんど触れられてこなかった。今回はこのエリアが門前町に組み込まれる画期を15世紀と捉えることとなった。

註)

(1) [四天王寺文化財管理室編1986]のNO.490・493。

(2) [四天王寺文化財管理室編1986]のNO.668。

(3) 代表的な研究に[松尾信裕2020]があるが、四天王寺の南方についてはあまり触れられていない。

## 引用文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003、「大道1丁目所在遺跡発掘調査(DA01-2)報告書」：『平成13年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.49-50

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「大道1丁目所在遺跡発掘調査(DA06-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)』、pp.271-280

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011、「大道1丁目所在遺跡発掘調査(DA09-2)報告書」：『平成21年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.37-44

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017、「茶白山古墳発掘調査(CU15-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2015)』、pp.253-270

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017、「大道1丁目所在遺跡発掘調査(DA15-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2015)』、pp.271-276

大阪市文化財協会2003、「OS93-47次およびその周辺の調査」：『大坂城跡Ⅶ』、pp.175-198

尾上実・森島康雄・近江俊秀1995、「瓦器碗」：『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社、pp.315-337

佐藤隆1996、「中世後期の陶磁器・土器について」：『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』I 大阪市文化財協会、pp.81-92

四天王寺文化財管理室編1986、『四天王寺古瓦聚成』 柏書房

鋤柄俊夫1995、「各地の瓦質土器」：『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社、pp.448-456

積山洋1999、「大坂の土師質土器」：『関西近世考古学研究』IX、関西近世考古学研究会、pp.41-53

趙哲濟1986、「茶白山古墳」の発掘調査」：『葦火』4号 大阪市文化財協会、pp.1-6

趙哲濟・市川創・高橋工・小倉徹也・平田洋司・松田順一郎・辻本裕也2014、「上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要」：『平成21~25年度(独)日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A)大阪上町

台地の総合的研究－東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型－』、巻頭図版1

土山健史1989、「堺環濠都市遺跡における15・16世紀の在地土器」：『中近世土器の基礎研究』V 日本中世土器研究会、pp.37-59

乗岡実2017、「戦国時代の備前焼編年」：『東洋陶磁』第46号、東洋陶磁学会、pp.5-21

平尾政幸2019、「土師器再考」：『洛史研究紀要』第12号 京都市埋蔵文化財研究所、pp.9-56

松尾信裕2020、「中世の四天王寺旧境内遺跡」：『大阪歴史博物館 研究紀要』第18号、pp.37-52

水澤幸一2014、「戦国期武家の日常使用の貿易陶磁の実像」：『国立歴史民俗博物館研究報告』第182集、pp.53-54

山崎信二2008、『近世瓦の研究』 奈良文化財研究所、pp.229-231



北区西壁断面及び全景(南東から)



南区西壁断面(北東から)





北区全景(南から)



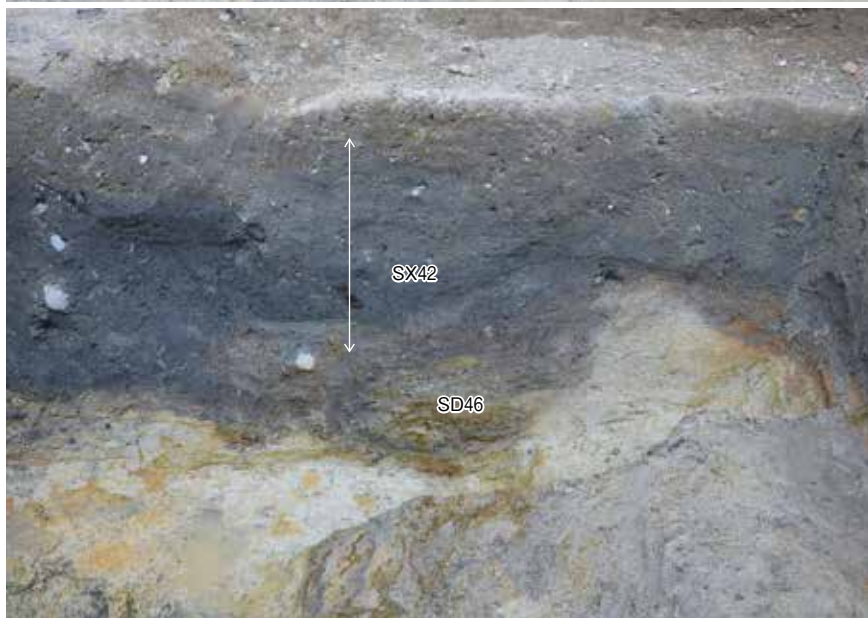
南区全景(南から)



南区SX42とSD46  
(南から)



南区東壁南端SX42と  
SD46断面  
(西から)



北区SK10と瓦器  
出土状況  
(東から)







北区SE01と断面  
(東から)



北区SE01の井戸側  
(東から)



北区SE01Wの井戸側  
(東から)





北区SP26とSP27  
(東から)



南区SK34西半部  
(南から)



北区SE23 深掘り  
(東から)





南区SK32・33・35など  
(東から)



北区SE30(左)とSK09(右)  
(北から)



北区SK07  
(東から)





天王寺区勝山二丁目202・大道二丁目352-1における建設工事に伴う  
四天王寺旧境内遺跡・上本町遺跡発掘調査(ST22-1)報告書

調査個所 大阪市天王寺区勝山2丁目202・大道2丁目352-1  
調査面積 530㎡  
調査期間 令和4年10月18日～令和5年1月11日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋 工



## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は四天王寺東門の南約230mにあり、西は上町筋(東野田河堀口線)に面する(図1)。上町台地の東縁部に当り、台地と解析谷が入り組んで起伏の激しい地形が展開する。調査地は台地高所にあるが、北側には南東方向に開く「四天王寺東門谷」が延びている。この谷は現況地形からも容易に認識することができるが、東のUH09-4次調査では谷北側の落ちが検出され、谷内は奈良時代には低湿な環境であったものが15世紀に埋め立てられており、古地形の名残であることがわかっている[大阪文化財研究所2011]。現況で、本調査地は北側の谷底から約6m上がった高所に当り、平坦な地形を経て南へも緩やかに降っていく。

調査地点は四天王寺旧境内遺跡のほぼ南東隅にあり、西に四天王寺五重塔を、北に同東門を彼我の距離に望む。伽藍地の外ではあるが、寺域の中に当るとみられる。つまり、四天王寺の寺域について11世紀初頭前後の成立とされる『四天王寺御朱印縁起』には「東西撥町、南北陸町」とあり、[豆谷浩之1996]ではその東辺・西辺をそれぞれ難波京中心大路推定線、現在の谷町筋西側に求めている。古代寺院では周辺に寺に仕える人達の住居や執務施設、工房、菜園などが展開するのが一般的であり、そうした空間の範囲が「寺域」である。これらの位置関係からみて、調査地点が寺域内であることは間違いないであろう。また、周辺には難波の古代史に重要な意味をもつ遺跡が展開している。東は難波京条坊の痕跡をとどめる上本町遺跡の最南部に隣接し、その東は難波宮の宮城南門に発し難波京の中心道路の跡と想定される「難波京朱雀大路跡」である。

周辺で行われた主な発掘調査の成果を挙げると、東隣のST22-2次調査では、11世紀後葉と13世紀~18世紀の建物・井戸・土採り穴などが検出されている[大阪市文化財協会2023]。本調査地の南ではST13-5・19-1次調査が行われていて、12~15世紀の土壙・溝、16世紀・豊臣期の土壙・井戸などが発見されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015a・大阪市文化財協会2021]。南東のUH13-2次調査でも14世紀の井戸などが発見されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015b]。また、四天王寺東方で行われたその他の調査でも、主に中世の遺構が発見されている。その中でも13~15世紀頃の直線的に掘られた溝については、防御用の濠、土地区画溝などの機能が考えられているが定説はなく、重要な課題とされている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]。

如上の環境下にある当該地において建築工事が計画されたため、大阪市教育委員会文化財保護課による事前の試掘調査が令和4年9月7日に行われた。その結果、地山層が浅い深度で検出され、遺跡も残っている可能性が高いと判断されたため、本調査が行われることとなった。調査目的は地層の年代や遺構・遺物の分布状況を調べて本地域の歴史の変遷の基礎資料を得ることとし、頭書の期間で行った。調査地の北半部は旧建物解体工事の際の盛土が最大で厚さ約1m施されており、まずこの盛土を除去してから調査区の設定と表土の掘削を行った。調査区は2個所に分けて設定し、それぞれ北区・南区とした。北区の調査面積は324㎡、南区は206㎡である。排土置場の制約から両区を同時に調査

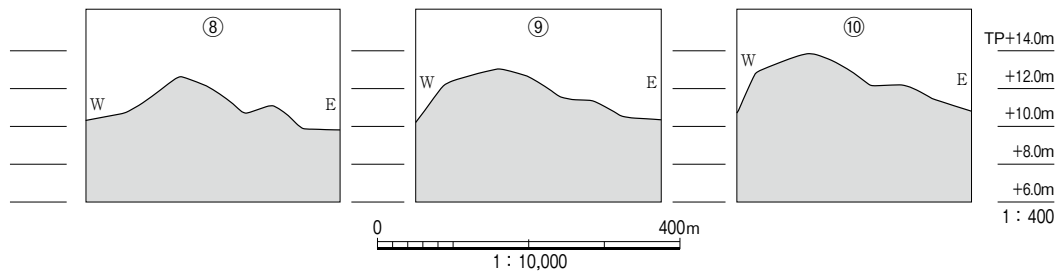
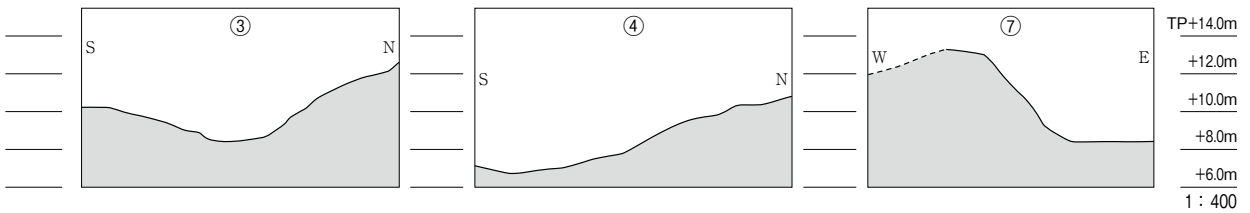
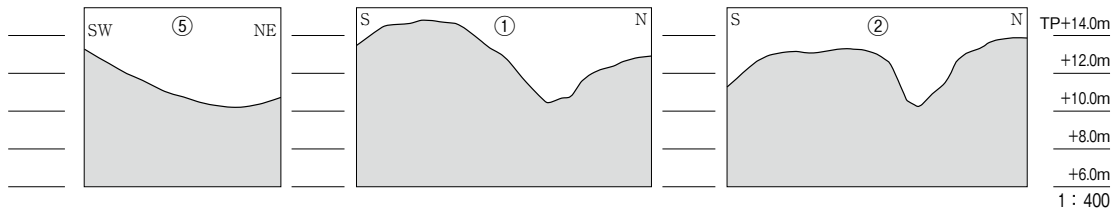
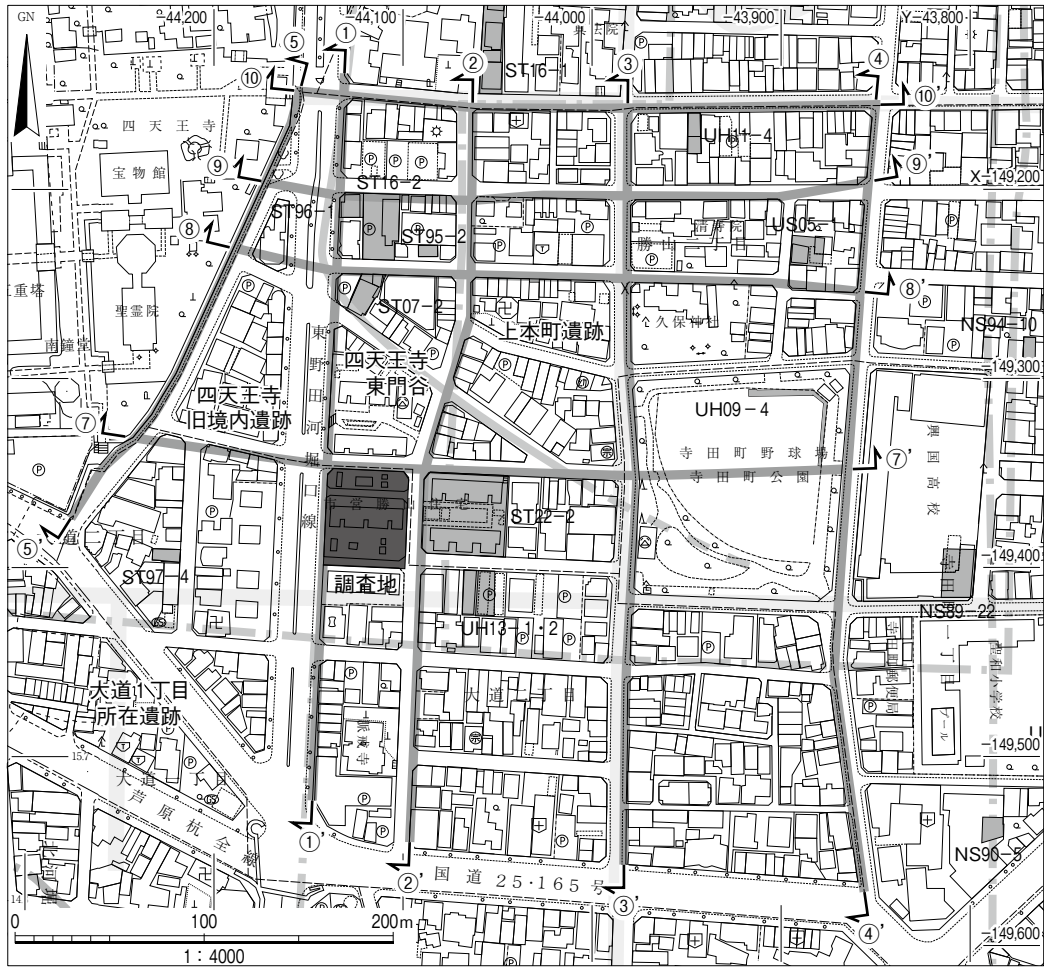


図1 調査地周辺の地形と既往の調査

することは困難であったため、北区→南区の順で調査をすすめた。表土の除去は重機を用いて行い、その後の遺構検出と遺構の掘下げは人力によって行った。途中、適宜に平面図・断面図を作成し、写真撮影によって記録保存を行った。遺構は注意深く掘り下げ、遺物の捕集に努めた。本報告で用いた基準点は安西工業株式会社がスタティック測量で測位し、方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図2)

表土以下の地層を次の3層に分層した。

第0層：にぶい黄褐色(10YR4/3)瓦礫混り砂などからなる現代の整地層で、層厚は概ね120~170cmで、北区東・西の大規模な攪乱部分では250cm以上であった。解体工事の際に重機で攪拌しており、下面では重機の爪痕が無数にみられた。

第1層：褐色(10YR4/4)細礫混り細粒砂や黄橙色(10YR7/8)地山偽礫混り極細粒砂などからなる近世後半の整地層で、層厚は最大で50cmほどであった。北区の北東部付近にのみに分布していた。

第2層：暗灰黄色(2.5Y4/2)中礫混り粗粒~極粗粒砂や橙色(7.5Y6/8)細粒砂~極粗粒砂などからなる地山層で、層厚は最大で150cm以上であった。礫は長径が50mm前後までで、亜円礫から円礫が多く含まれる。また、両調査区にわたって概ね南南西から北北東方向に下る斜交層理構造が顕著にみられ(図版3・4)、同方向の水流によって堆積したものと考えられる。本層上面で中世~近世の遺構が検出された。

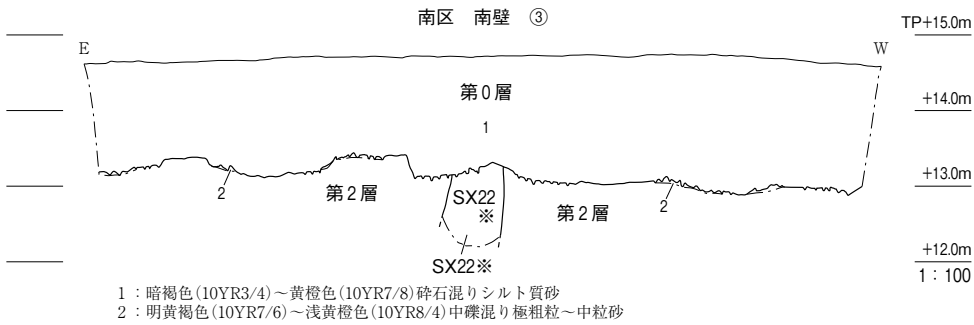
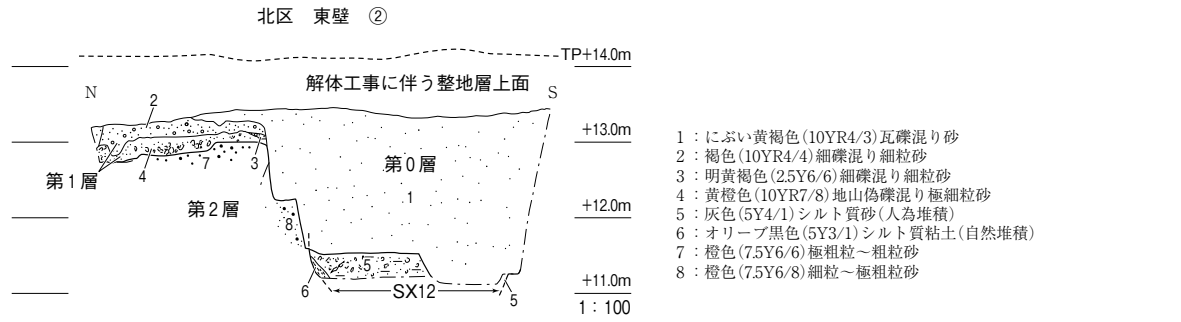
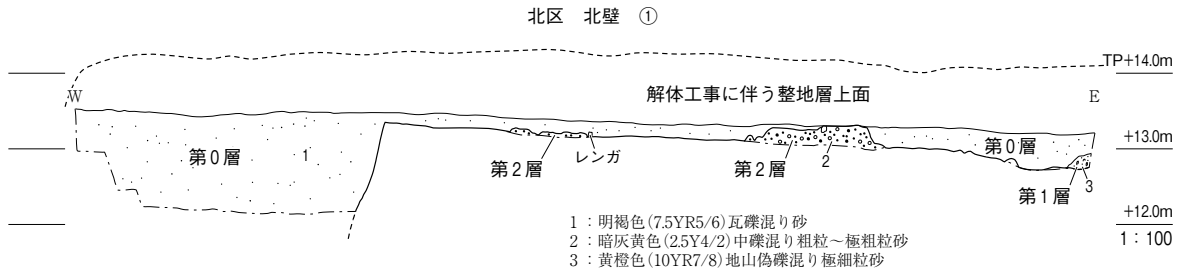
### ii) 遺構と遺物(図3~11、図版1~5)

遺構はすべて第2層上面で検出し、その時期判定は出土遺物の年代観による。以下、主要な遺構について報告する。

SP28・29・32(図3・4) 南区の北西部で検出された。平面形は円形を基調とし、長径は0.2~0.5mほどである。深さは、SP28・32が5cm前後、SP29が18cmである。SP29には柱痕跡が認められ、柱穴とみられるが建物を復元するには至らなかった。SP29からは土師器皿の細片が出土し、14世紀頃のものともみられた。

SE1(図3~5、図版2) 北区の中央部北側で検出され、平面形は長径1.0m、短径0.8mの楕円形で、深さは1.5mまで掘り下げたが底には達していない。断面形はほぼ真下に下降した後、両側方に大きく開くいわゆるフラスコ形である。図4では上端の幅が0.8mなのに対して、下方では2.3m以上に広がっていた。埋土下半部はシルト~中粒砂が山形をなして堆積しており(図4の3・7~11)、その上には上部から崩落した地山層の大型の偽礫がみられた。その後、上半部はシルト質極細粒砂で埋め戻されていた。山形の堆積は、径の狭い上端から投入された土砂が、側方が崩れて広がった遺構内部で、末広がりになったものとみられる。

埋土からは土師器・瓦器・瓦質土器・中国産白磁・瓦などが多量に出土した。1~18は土師器皿である。1は直径5.5cmと小型である。2~5は直径8cm前後、7・8は同10cm前後、9~18は同12~13cmほ



※は個別の遺構断面図参照

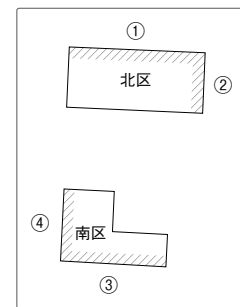
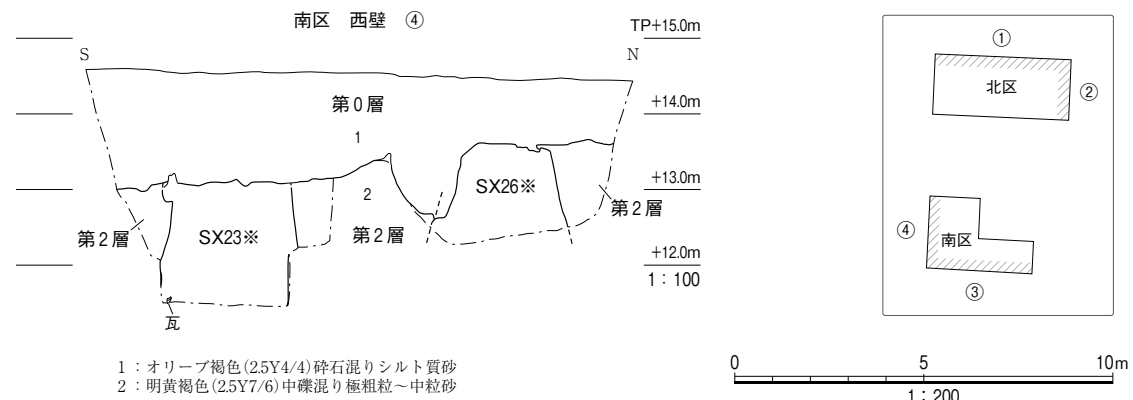


図2 地層断面図

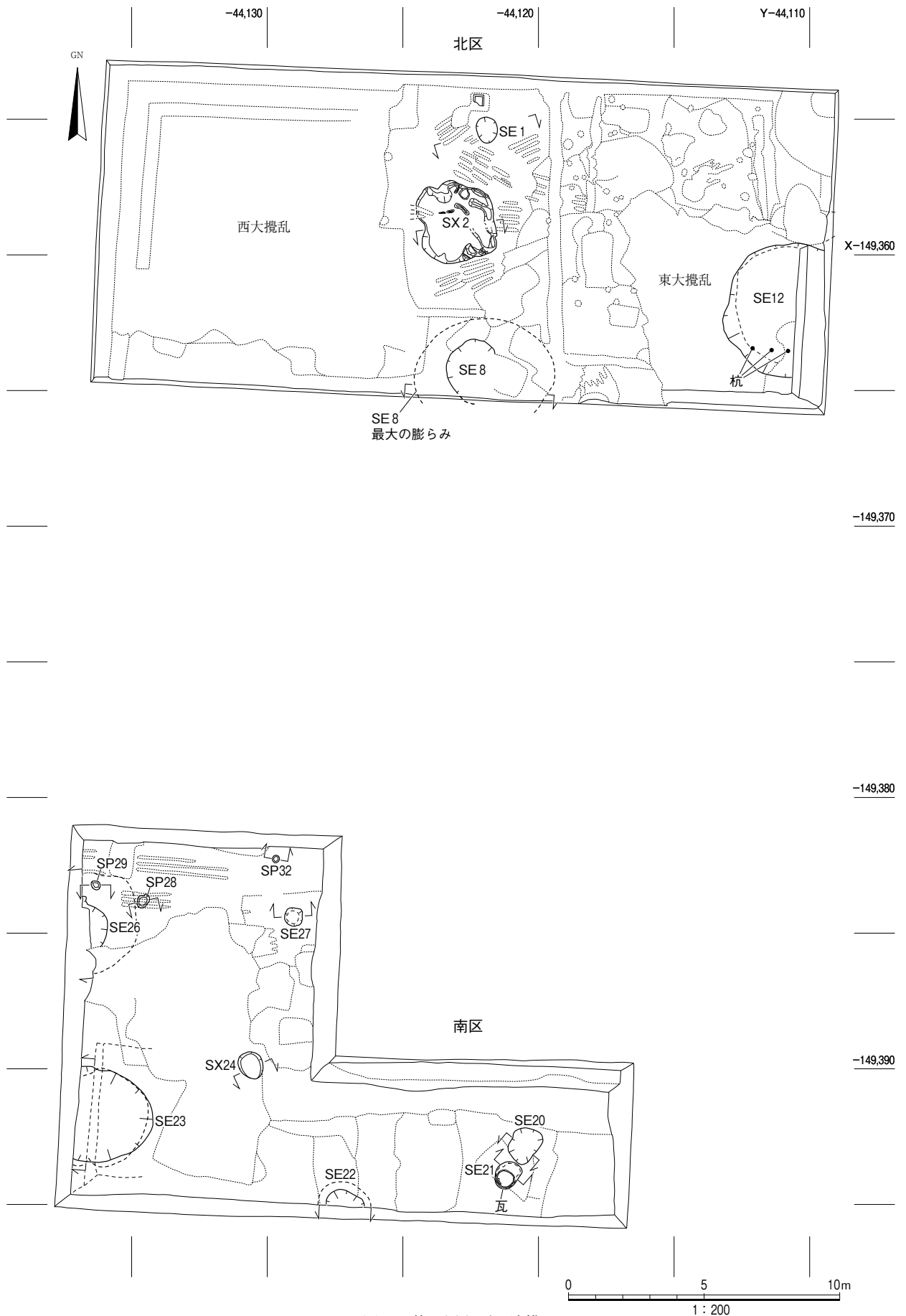


図3 第2層上面の遺構

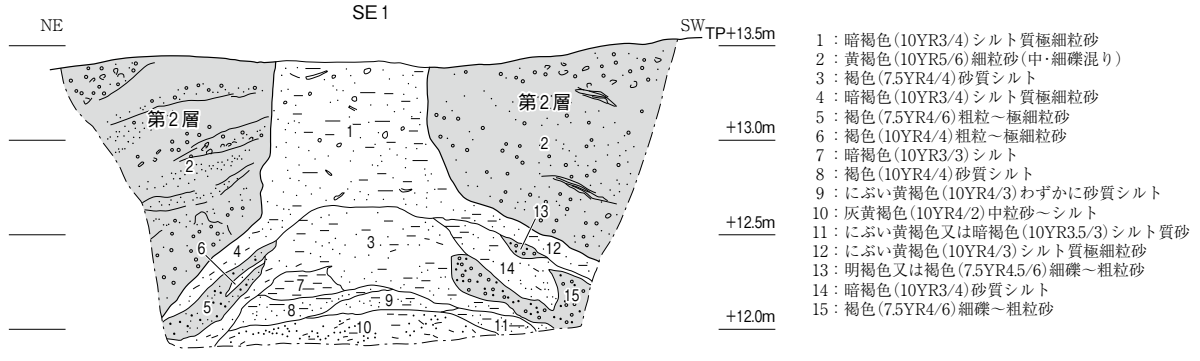
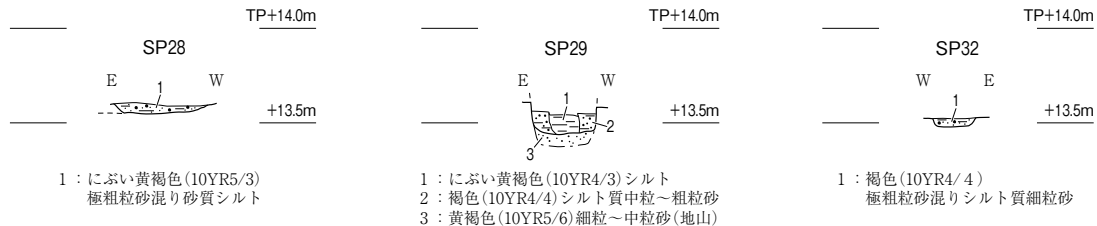
どである。1は口縁を内側へ折り曲げるコースター型を呈し、7は底部外面を深く押しくぼめる所謂へそ皿である。19～32は瓦器で、19～21は皿、22～32は和泉型椀である。22～24は粘土紐を環状に貼り付けた退化した高台をもち、器高は低く、内面の暗文も疎らになっている。22は内面にハケ調整を行うもので、堺市周辺の出土品に類例がある。これらは[佐藤重聖2022]編年(瓦器編年は以下同じ)による椀Ⅳ-2型式である。25はこれらより退化しておらず、Ⅲ-1ないしⅢ-2型式に当る。26～32は高台の消失したもので、Ⅳ-3型式である。

33は中国産青磁碗で、直口の口縁をもち、外面に蓮華を窠で刻む。龍泉窯系の製品に属する。34は土師器羽釜、35・36は瓦質の加工円板である。37は東播系須恵器のこね鉢ないし片口で、口縁端部を上方へつまみ上げ気味におさめる。38・39は軒丸瓦、40～42は軒平瓦である。38は複弁蓮華文で、[四天王寺文化財管理室1986：以下『古瓦聚成』と略す]掲載の175に近似する。39は外周に単弁蓮華文を配し、中房に「四天王寺 瓦」を刻む『古瓦聚成』の149に近い。40～42は唐草文を有する。43は銅銭で開元通宝である。

瓦器椀の形態やコースター型の土師器が残存することからみて、遺構の年代は13世紀後半でも早い段階と判断される。

SE8(図3・4・6・7、図版2) 北区の南壁際中央で検出され、南部は調査区外にあった。平面形は楕円形で、上端で東西1.8m以上、南北2.2m以上、深さは1.8mまでは掘り下げた。この遺構も下方で側方へ広がり、略測値で東西5.2mに達する。また、人力による掘下げ後に重機で断割りを行って断面で遺構底を確認し、その深さは略測値で3.2mであった。断割り時には、地山層の下部は粗粒で締まりがなく、湧水を伴って容易に崩落した。また、遺構の断面形は側方へ広がった後に下部で再びすぼまり、全体としては玉葱様の形態を呈していた。地表下1.8mまでの遺構断面は図4に示した。埋土の上部は山形に堆積した埋戻し土(6・8・11～13層)で開口した遺構上端から真下へ投入されたものである。これらには巨大な地山層の偽礫(7・9・10・18・20層)と水が流れ込んで堆積したシルト～細粒砂層(4・17・19層)が挟在していた。偽礫は1mを超えるものもあり(9層)、上位のプライマリーな地山層と岩相が共通していて、そこから崩落したことが明らかであった。水流による堆積層は埋戻し土の間、埋戻し土と地山層の間にあり、埋戻しの工程に時間的間隙があったこと、遺構内が完全に充填されなかった(あるいは埋め土が自重で下がった)ことを示している。図4断面図以下の堆積状況は、断割りトレンチ内が非常に危険な状態であったのでここには立ち入らず、目視による観察のみを行った。それによると、断面図相当個所以下は同様な埋め土が続き、底部には約20cmの厚さで暗色を呈した泥質な自然堆積層がみられた。

土師器・備前焼・瓦質土器・瀬戸美濃焼陶器・肥前陶器・中国産磁器・中国産陶器・瓦・石製品などが出土した。44～63は土師器皿で、小径の44・49を除くとすべて底部外面を押しくぼめるへそ皿の形態をもつ。底部内面に「の」字を描くようなナデを加えるものが多い。口径は9～12cm程度である。64～71は瀬戸美濃焼である。64～66は天目碗、67は水注、68・69はソギ皿、71はおろし皿である。70は香炉の底部とみられ、装飾的な脚が取り付けられている。72は土師器炮烙で、器形は深みがあり、外面に平行タタキが残る。73は瓦質土器羽釜、74は土師器羽釜である。75～78は中国産磁器で、75



■: アミかけは地山およびその崩落土

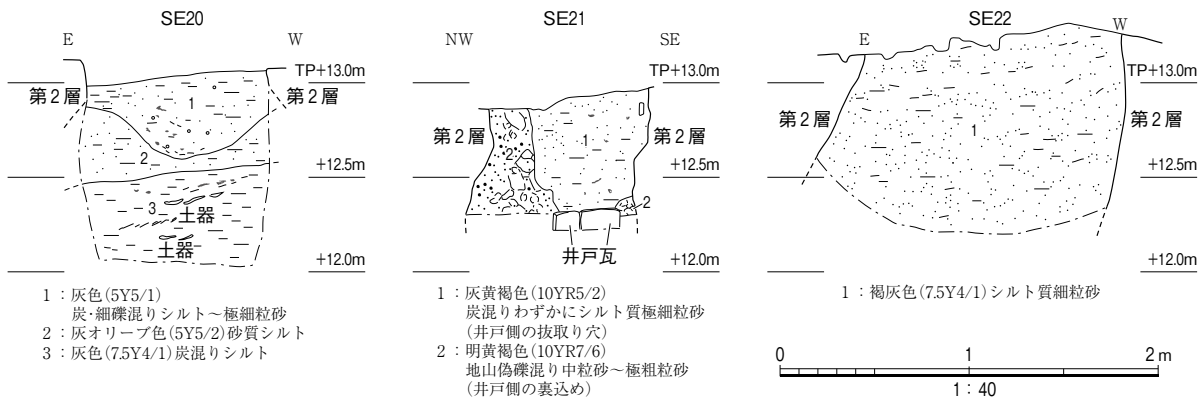
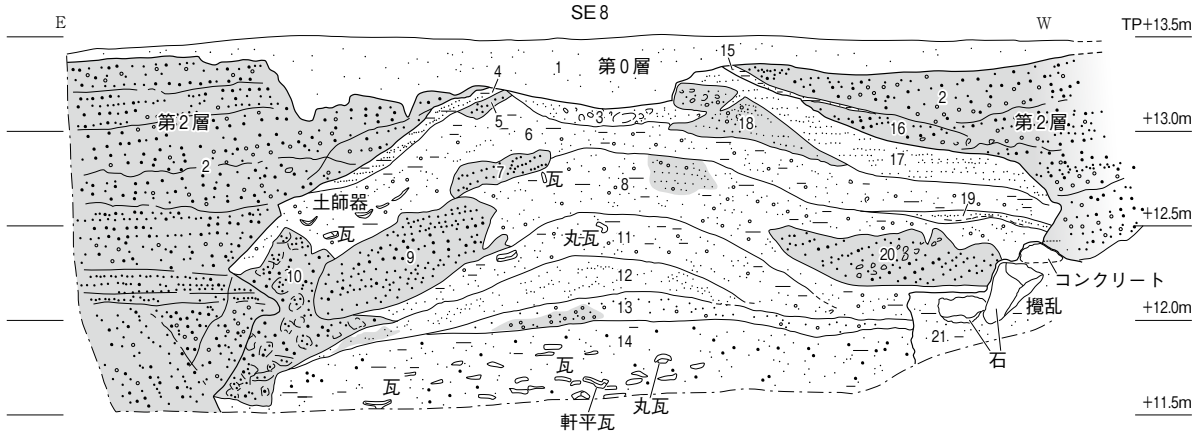


図4 遺構断面図(1)

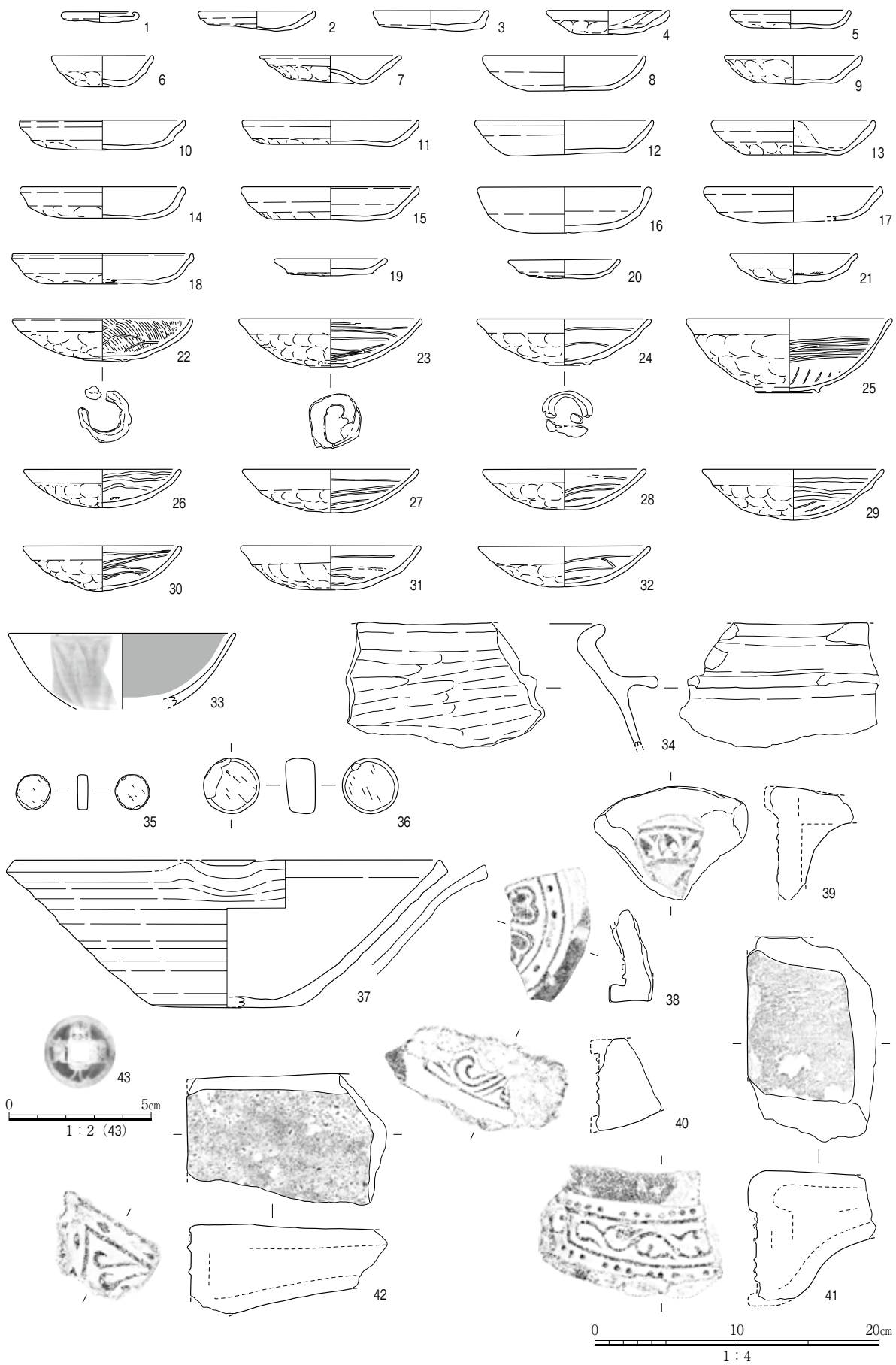


图5 SE 1 出土遺物



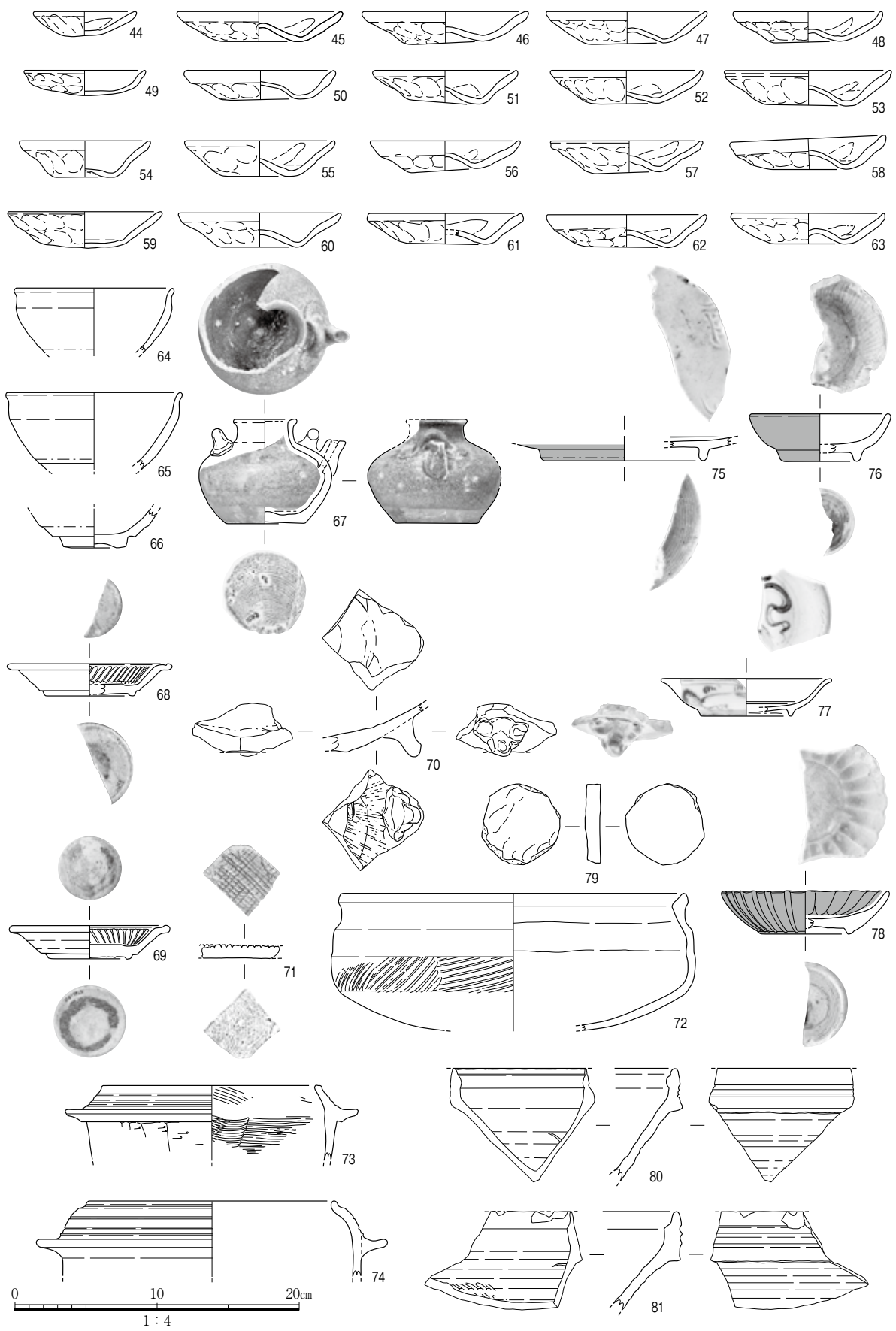


图6 SE 8 出土遗物

は青磁大皿、76は同皿で、75には文字文があるが判読できない。77は青花皿である。78は青磁皿で口縁は輪花状を呈する。青磁の75・78は景德鎮窯産で、76は龍泉窯産と思われる。79は常滑焼を加工した円板である。80・81は備前焼播鉢で、[重根弘和2022]編年のVB類に当る。82～85は瓦質土器で、82は瓦燈の身部、83は風炉、84・85は方形浅鉢型の火鉢である。86は菊花文軒丸瓦、87は三巴文軒丸瓦、88～90は唐草文軒平瓦である。

以上の遺物は大きく二つの時期に属するとみられる。つまり、へそ皿を主体とする土師器は16世紀でも初頭から前葉段階のものである。一方、瀬戸美濃焼の碗・皿、備前焼播鉢、瓦質土器瓦燈、三巴文軒丸瓦などは16世紀後半～16世紀末、豊臣前期までの特徴をもつ。これらから遺構の年代を考えると、遺構を埋め立てたのが後者の年代で、埋立て土に前者の年代の遺物が含まれていたものと考えられる。

SE12 (図2・3・7、図版3) 北区南東部の東大攪乱(深さ約2m)の底で検出した。検出面は直近の地山層上面より約1.5m下であった。遺構の平面形は円形で、東西3.9m以上、南北4.9m、深さは40cmまで掘削したが底には達していない。埋土は人為的に投入されたシルト質砂で、下位には自然に堆積したシルト質粘土がみられた。おそらく井戸の最下部付近とみられる。南に偏って木杭が3本、約70cmの間隔で打ち込まれていた。

土師器・瓦器・瓦質土器・常滑焼・中国産青白磁・中国産陶器・瓦など多量の遺物が出土した。91～93は土師器皿である。93には煤が付着していて、灯明皿として用いられたとみられる。94・95は和泉型瓦器碗で、高台が消失し、口径が小型化したⅣ-4型式である。96は瓦質土器の摂津型羽釜である。97は中国産陶器壺、98は同産鉢である。99は中国産三彩陶器片で、破断面に削った痕跡があり、二次的に円く成形したもののようである。100は中国産青磁碗で龍泉窯系に属する。101・102は木製品で、薄い羽子板状を呈する。塗師が用いる篋に似る。

瓦器碗の形態からみれば年代は14世紀前半で、瓦質土器・中国産陶器の年代観もこれに抵触せず、遺構の年代は同時期と考えられる。

SE20(図3・4・9) 南区東南部で検出された。平面形は楕円形基調で、長径1.4m、短径1.1m、深さは105cmまで掘り下げたが底には達していない。遺構の下方は側方へ大きく広がっているとみられ、側面を検出できていない。シルトなどの堆積物で埋められていた。

土師器・東播系須恵器・瓦器・瓦質土器・常滑焼・中国産青白磁・瓦などが多量に出土した。103～114は土師器皿である。103～109の口径は8cm前後、110～114は11cm前後である。107のようにへそ皿が混り始めている。112は煤が付着していて灯明皿として用いられたものとみられる。115は瓦器のミニチュア三足釜である。116～122は和泉型瓦器碗でⅣ-4型式に属し、14世紀前半頃の遺構とみられる。

SE21(図3・4・9) 南区の東部SE20に隣接して検出された。平面形は楕円形で、長径は1.1m、短径は0.9mで、深さは0.7mまで掘り下げたが底には達していない。井戸瓦を立位で円形に組んで井戸側としていた。井戸側の上部は抜き取られたようで、断面図4の1層はその際に掘られた穴の埋土である。地山層の偽礫を含む埋め土(同図の2層)は井戸側の裏込め土である。

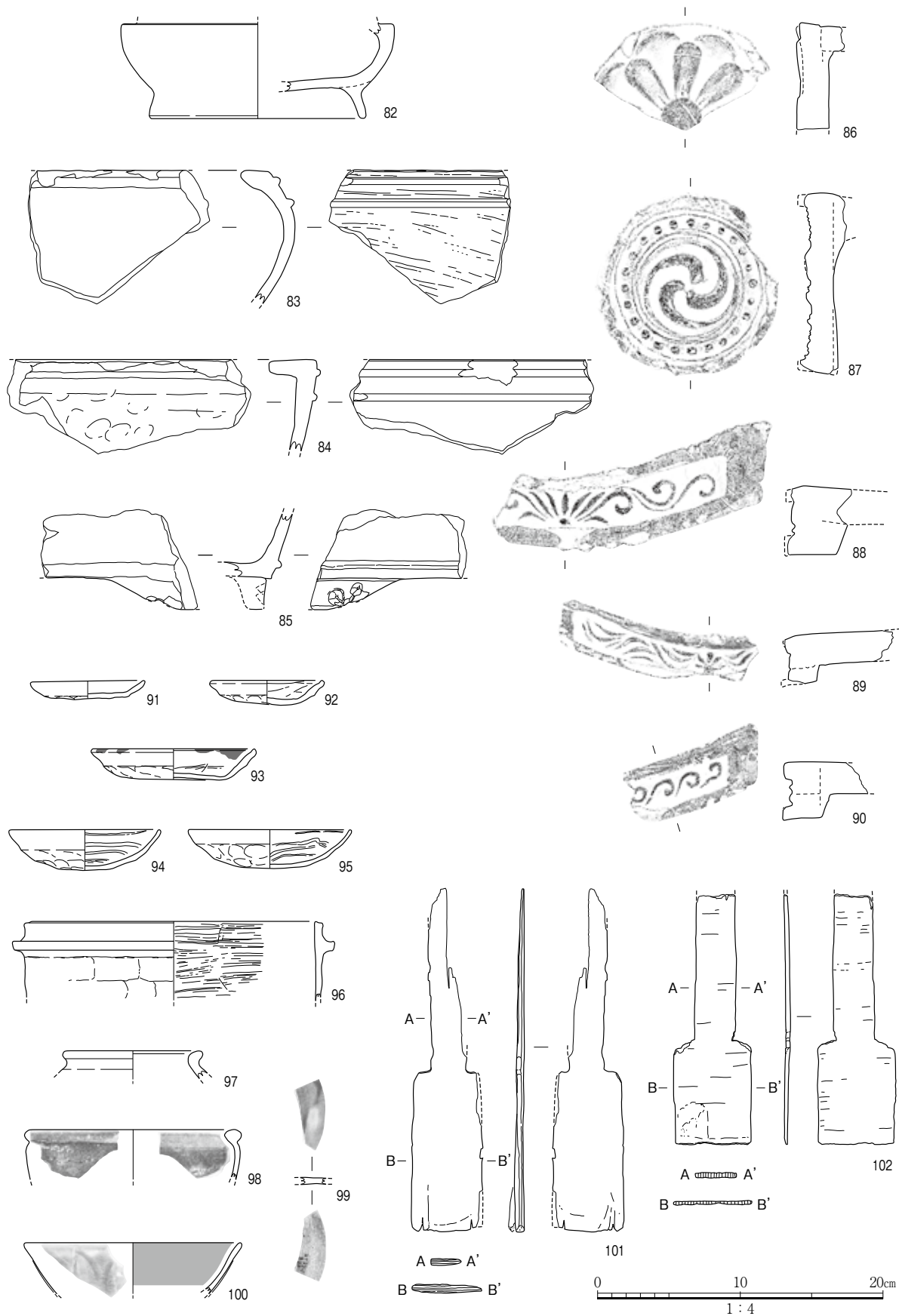


图7 SE 8·SE12出土遗物  
SE 8 (82~90)、SE12(91~102)

瀬戸美濃焼陶器・肥前陶器・肥前磁器・関西系陶器・瀬戸美濃焼磁器・丹波焼・信楽焼・堺挿鉢・軟質施釉陶器などが出土した。123は肥前磁器碗で染付で草花文を描く。124・126は関西系陶器の土瓶と行平鍋である。125は瀬戸美濃焼の灰吹である。127は複弁蓮華文軒丸瓦で、特に中房部分の摩耗が激しく、はっきりしないが『古瓦聚成』掲載の154に近い。128は花崗岩製五輪塔の空輪(宝珠形)と風

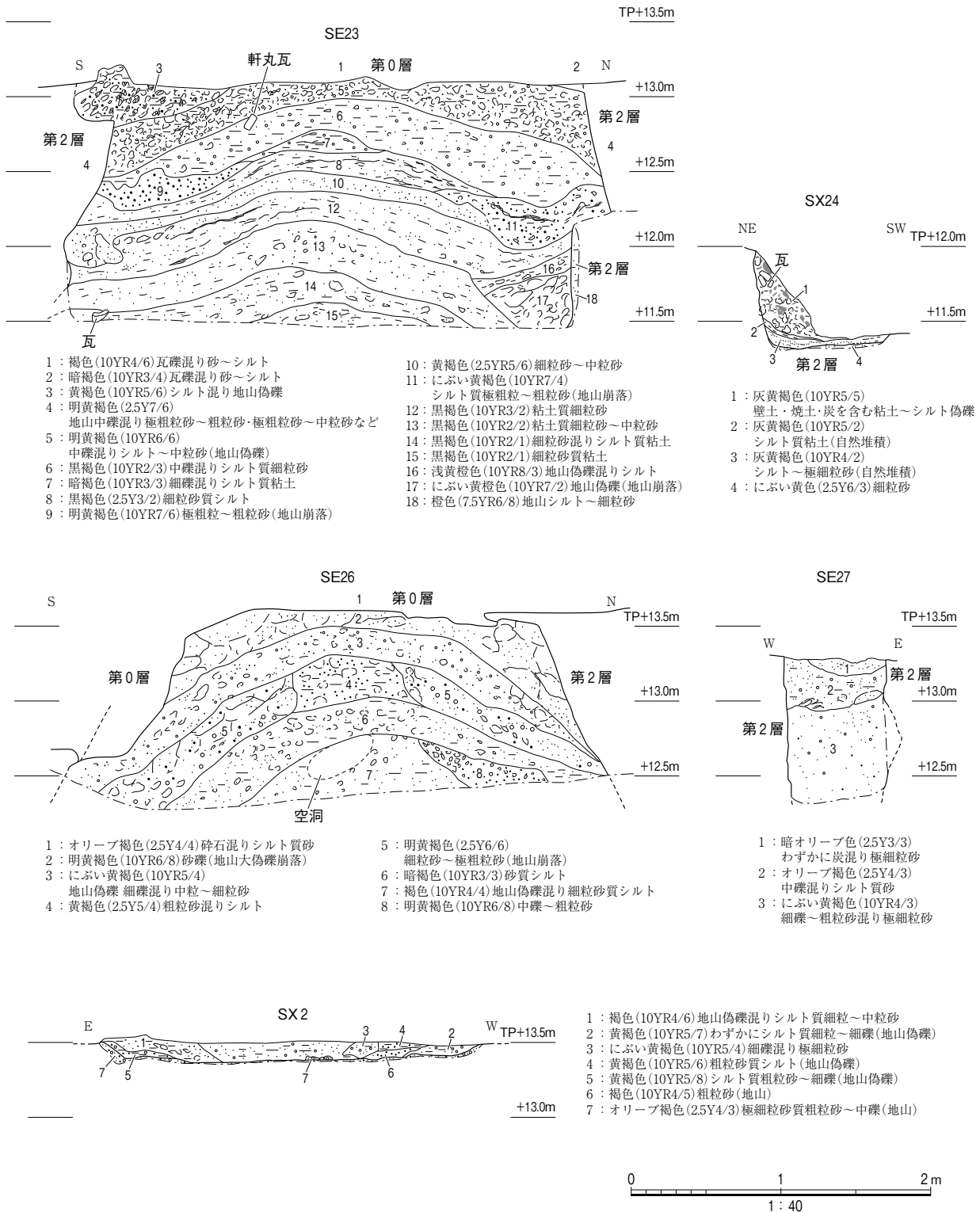


図8 遺構断面図(2)

輪(半月形)部分を一石で彫り出したものである。肥前磁器・関西系陶器の特徴から18世紀後葉～19世紀前葉頃の遺構である。

SE22(図3・4) 南区の南壁際中央部で検出され、南半は調査区外にある。平面形は楕円形基調とみられ、東西1.4m、南北0.6m以上で、深さは1.1mまで掘り下げた。シルト質細粒砂で埋められていた。

土師器、備前焼、常滑焼、瓦質土器、瀬戸美濃焼陶器、肥前陶器、中国産磁器、瓦などが出土した。129は土師器皿で灯明皿に転用されたものであろう。細片のため実測図を掲載していないが、本遺構からは肥前陶器の碗・皿が出土しており、17世紀初頭、豊臣後期の遺構である。

SE23(図3・8・10・11、図版3・4) 南区南西部で検出された。平面形は楕円形基調で、東西2.8m以上、南北3.5m、深さは1.7mまで掘り下げたが底には達していない。この遺構も下方が外側に広がっていく傾向があった。埋土は人為的な埋戻し層で、堆積状況はSE1でみられた山形の堆積が顕著であった。暗色を呈し、泥質を帯びる図8の6～8層は山形の形状で堆積し(図版4)、下位に細粒～中粒砂層(図8の10層)を介在して、さらに下には暗色・泥質の12～15層が山形に堆積していた。これらの中には地山層に由来する大型の偽礫を含む9・11・17層が挟在していて、遺構の側面から地山が崩落したものとみられた。埋土の最上部は地山層偽礫(同3・5層)で埋められていた。

土師器・瓦器・東播系須恵器・常滑焼・中国産磁器・同陶器・瓦などが多量に出土した。138～159は土師器皿である。138～148は口径が8cm前後、151～159は12cm前後である。145は灯明皿として用いられたものとみられる。154のようにへそ皿の形態をもつものが含まれるが多くはない。160は東播系須恵器播鉢である。口縁端部を上方へつまみ上げるので、13世紀頃のものではあろう。161～181は瓦器で、161は皿、162～180は和泉型椀で、181は片口である。椀162のように高台が消失したものを含む。166～180は高台が形骸化したⅣ-1型式である。182～184は瓦質土器三足羽釜である。187は中国産陶器壺の底部と思われる。185・186は巴文軒丸瓦である。188～189は連珠文軒平瓦、190は唐草文軒平瓦である。

瓦器椀は高台の消失したものが少数出現しているが、型骸化した高台が残るⅣ-1型式が主体であることから、遺構の年代は13世紀中頃を前後する時期に求めることができる。

SX24(図3・8、図版3・5) 南区中央部で検出され、攪乱によって上部を大きく破壊されていた。平面形は楕円形で、長径1.0m、短径0.9m、深さは0.7mであった。遺構底にはシルト質粘土～極細粒砂が堆積し、その上は焼土・炭・瓦片を多く含む粘土～シルトで埋められていた(図8、図版3)。焼土とみられたものはその後の整理作業で焼けた壁土であることがわかった。壁土以外の出土遺物は丸瓦・平瓦片のみで、詳細な時期が決定できるものはないが、古代・近世の瓦を含まず、中世の遺構である可能性が高い。

壁土は被熱して固化し、約7cm以下に砕けている。総重量で4.0kg分がある(図版5)。熱によって赤変したもの、半焼けで暗色化したものがある。建物が火災に遭い、火事場を片付けた際の不要物を埋めたものであろう。肉眼による断面観察によれば、スサの痕跡(パイプ状の空洞)が確認でき、壁の内側はその方向が不揃いのに対し、外側では一定方向(壁面に対して平行)の傾向がある。内側は壁土

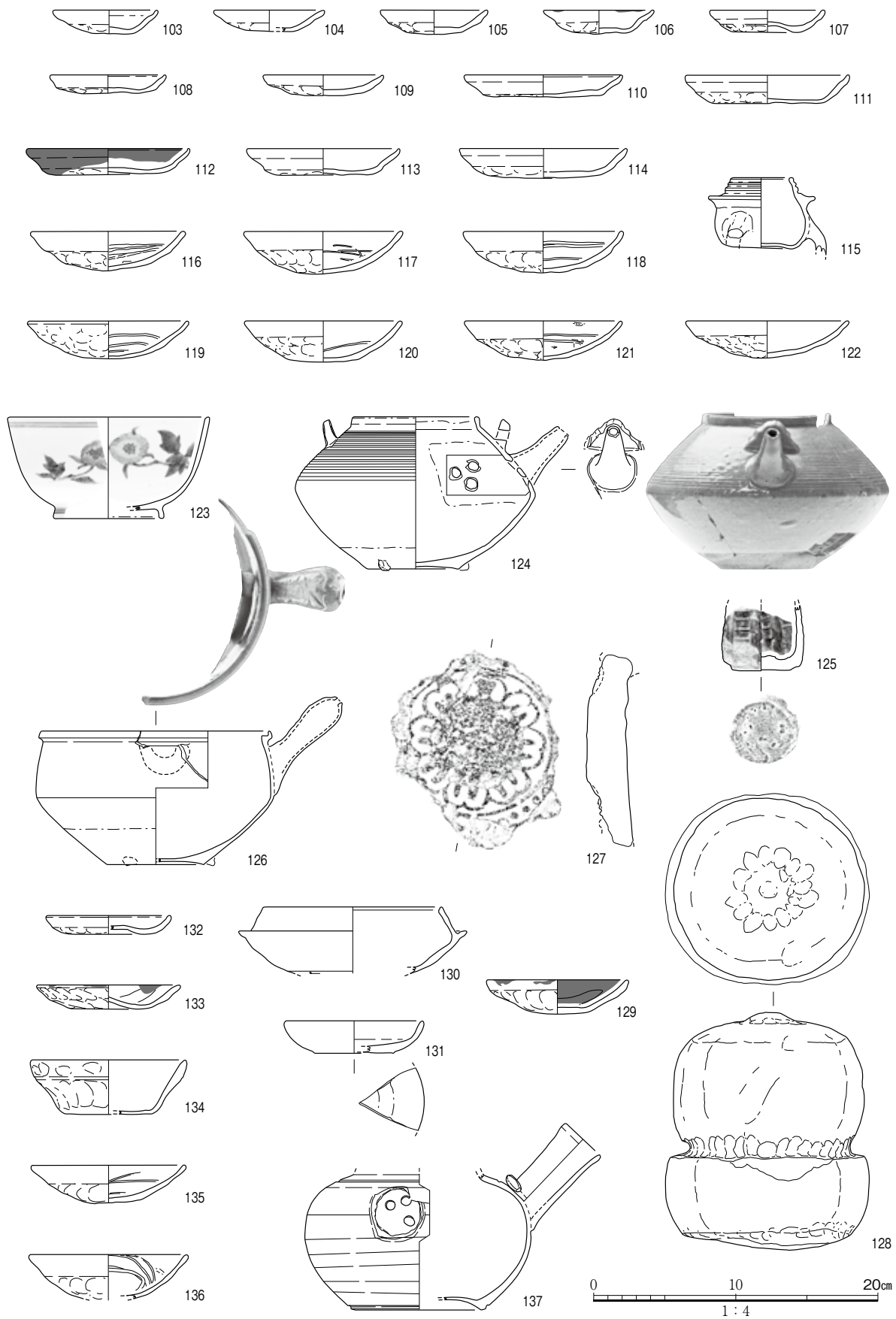


图9 遺構出土遺物

SE20(103~122)、SE21(123~128)、SE22(129)、SE26(130~136)、SE27(137)

を貼り付けて荒壁を形成し、外側は塗り付けて中塗りとしたのではないだろうか。さらに外側には白土を用いた仕上げの上塗りが施されたものがあり(191~202)、白壁をもつ建物があったことがわかる。上塗りの厚さは1~3mm程度である。壁体の支持材の痕跡とみられるものもあり、角材状の圧痕、それより細かい円管状の圧痕がみられ、両者は直交する方向をもつ。前者は間渡し、後者は木舞の痕跡であろう。また、壁面と直角をなさない剥離面をもつもの(202)は、円柱に接する壁体の可能性もある。

SE26(図3・8・9、図版4) 南区北西部で検出された。遺構西半は調査区外となり、南半は攪乱で破壊されていた。平面形は円形基調で、東西1.0m以上、南北1.8m以上で、深さは1.3mまで確認した。図8、図版4に示したように遺構の下部は側方に大きく広がり、東西2.0m以上、南北3.7m程度になるものとみられる。埋土の堆積状況はSE1・SE23と同様で、地山層の崩落土を混じながら、投入された埋戻し土が山形に堆積していた。

土師器・瓦器・瓦質土器・瀬戸美濃焼・常滑焼・備前焼・中国産白磁・瓦などが出土した。130は古墳時代後期の須恵器杯で混入品である。TK10型式に属し、6世紀代のものである。131は中国産白磁皿である。132~134は土師器皿で、134は京都系土師器にはみられない器高の高いもので、当地の地域色が発現したものとみられる。135・136は和泉型瓦器椀のIV-4型式で、器高は低く、口径も矮小化しており、瓦器椀の最終段階の所産である。瓦器椀の形態からみて14世紀前半頃の遺構である。

SE27(図3・8・9) 南区北西部で検出され、平面形は東西0.7m、南北0.7mで、深さは1.0m以上である。細礫混じりのシルト質砂や極細粒砂で埋められていた。形状からみて井戸とみられる。瀬戸美濃焼磁器やガラス製品(簀か)を含み、遺構の年代は明治時代に求められる。137は関西系陶器湯わかしの横手をもつもので19世紀前半頃に属し、遺構の年代を示すものではない。

SX2(図3) 北区の中央部で検出された。平面形は円形基調で、東西2.8m、南北3.0m、深さ0.2mである。遺構底には不整形な凹凸がみられた。埋土は主に地山層の偽礫であった。遺構底の形状から倒木痕の可能性もある。関西系陶器片が出土しており、18世紀後半以降のものである。

### 3)本調査で井戸として報告した遺構について

本調査では遺構内上部が幅狭で、下方で広がってより大きな容積をもつ遺構が検出された。SE1・8・20・23・26が該当する。これらを井戸として報告したが、その根拠を補足し、形成過程を推定する。

こうした形状をもつ遺構は、断割りで遺構底までの全体を確認したSE8を参考にすると、底部に自然堆積層があり、その上は人為の埋戻し層で、上端が高い山状に堆積していた(図版4-中)。また、埋戻し層には処々に大型の地山偽礫が挟在し、上方の基盤層から崩落したものであるとみられた。こうした特徴から、素掘りの井戸かとも考えられるが、基盤層の下方は砂質かつ軟弱で、大型の地山偽礫が示すように崩壊しやすく、井戸側を設置せずに貯水の機能を果たせなかったのではないだろうか。

掘削できた遺構の上部に井戸側が残るものはなかったが、下部を調査したSE12では南に偏って直線的に配された3本の木杭が残っていた。配置状況からみて、これは板材を方形に組んだ井戸側の抑え材であった可能性がある。

一般に、井戸を廃止する場合、その井戸側は抜き取られて再利用される。本調査地の遺構でもそれ

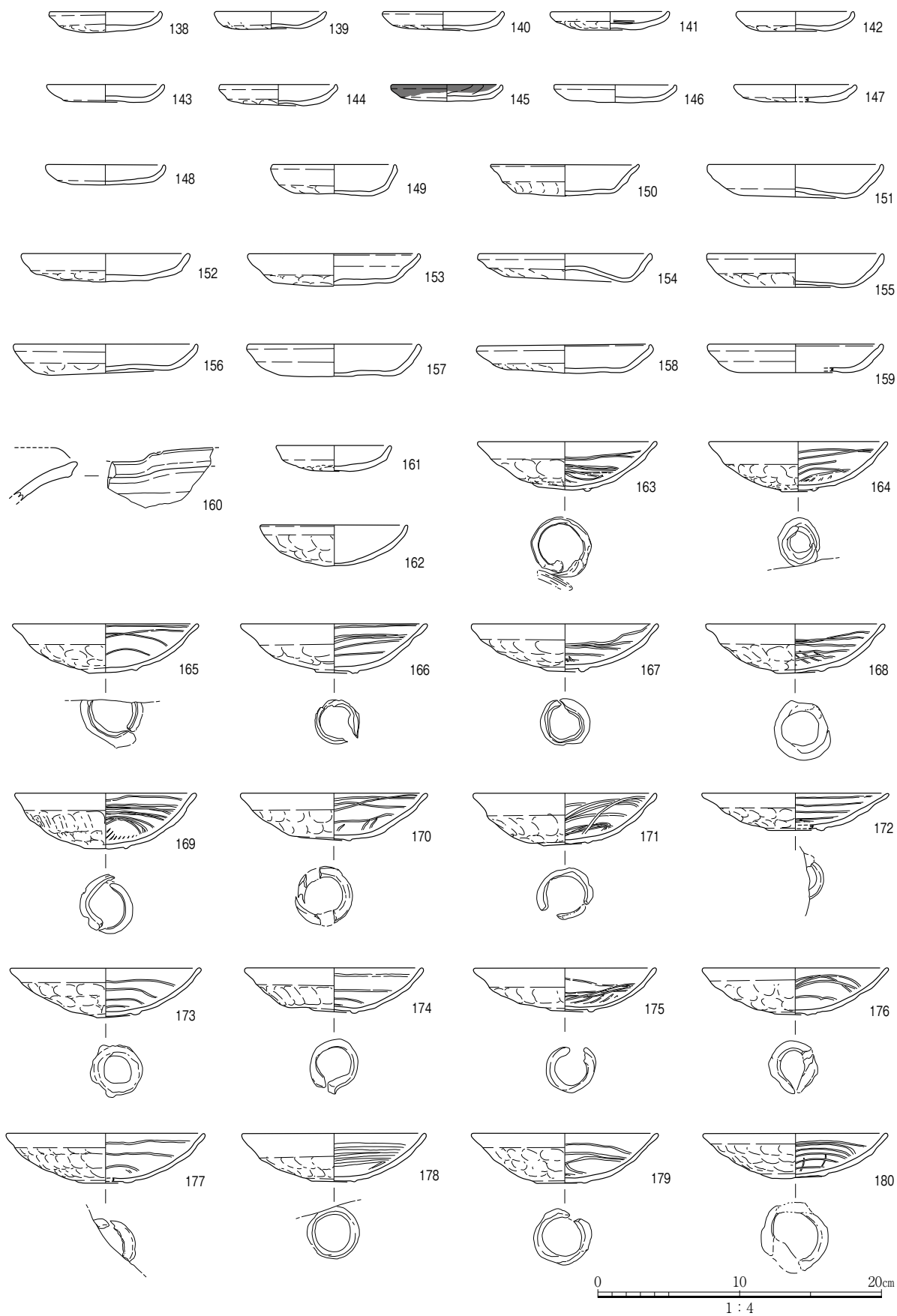


图10 SE23出土遗物(1)



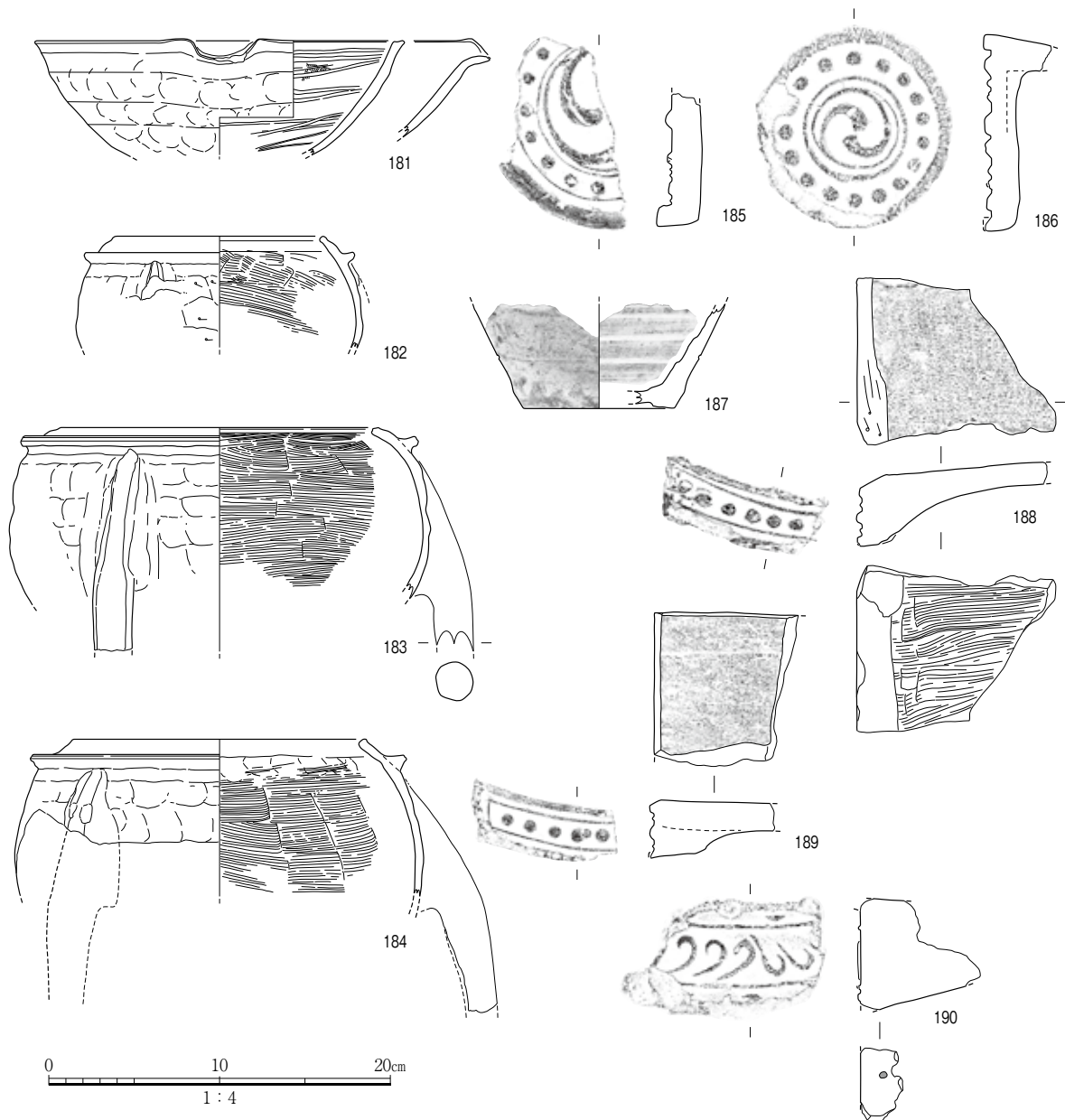


図11 SE23出土遺物(2)

が行われたとすると、抜取り用の穴が掘られるに従って水を含んだ軟弱地盤が内側へ崩落したことであろう。井戸側が抜かれた後には、側方の軟弱な基盤層が崩れて拡大し、堅固な上端付近が崩れずに残ったために下位で側方へ広がる形状の穴ができたのであろう。そこへ上端から土砂を投入して埋め戻せば、裾広がり広がる山状の堆積が重なっていくはずである。その際にも、水位の上昇に伴って度々基盤層の崩落があったことは埋土の堆積状況からも見て取れる。

以上の復元からSE1・8・20・23・26は、本来、井戸側を備えた井戸であったものが、廃止された際の状態をとどめたものと考えた。

#### 4)まとめ

本調査では中世～近世の遺構を検出した。当地の地山層は上面を激しく削剥されていて、検出された遺構は井戸などの深い遺構に限られた。遺構の時期を古い順に並べると、SE23(13世紀中頃)

→SE1(13世紀後半)→SE12・20・26(14世紀前半)→SE8(16世紀末)→SE22(17世紀初頭)→SE21(18世紀後葉～19世紀前葉)→SE27(19世紀；明治期)となる。これに近隣の発掘調査成果を加えると、11世紀後葉頃から近世までの遺構が途切れることなくあり、特に13世紀後半からその数が増加することがわかる。こうした傾向は四天王寺西側の門前町と共通していて、13世紀から四天王寺周辺の町場化が顕著となることを示している。門前町の形成と浄土信仰の流行は因果関係で語られることが多いが、[大阪市文化財協会2023]でも指摘したように、貴族階層の四天王寺参詣の流行からは遅れ、民衆層主体の西門信仰の流行と関係する可能性が考えられる。

## 引用文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「四天王寺旧境内遺跡発掘調査(ST07-2)報告書」：『平成19年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.69-74
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015a、「四天王寺旧境内遺跡発掘調査(ST13-5)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)』、pp.479-486
- 2015b、「上本町遺跡発掘調査(UH13-2)報告書」：『平成25年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.95-106
- 大阪文化財研究所2011、『上本町遺跡発掘調査報告Ⅱ』、pp.1-30
- 大阪市文化財協会2021、『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告Ⅱ』
- 2023、『天王寺区勝山二丁目202における建設工事に伴う四天王寺旧境内遺跡・上本町遺跡発掘調査(ST22-2)報告書』
- 佐藤垂聖2022、「畿内産瓦器碗」：日本中世土器研究会編『新版 概説中世の土器・陶磁器』 真陽社、pp.187-200
- 重根弘和2022、「備前」：日本中世土器研究会編『新版 概説中世の土器・陶磁器』 真陽社、pp.249-264
- 四天王寺文化財管理室1986、『四天王寺古瓦聚成』 柏書房
- 豆谷浩之1996、「四天王寺の寺域と「境内」について—調査の成果を手がかりに—」：『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』 大阪市文化財協会、pp.120-130

北区第2層上面  
(北東から)



南区第2層上面  
(東から)



南区西部第2層上面  
(南から)





北区SE 1 断面  
(北西から)



北区SE 8 断面  
(北から)



北区SE 8  
断割り後断面  
(北から)





北区SE12検出状況  
(南東から)



南区SE23・26と  
西壁地層断面  
(南東から)



南区SK24断面  
(北から)







南区SE23断面  
(東から)



南区SE23  
埋土堆積状況  
(北東から)



南区SE26  
断面と検出状況  
(北東から)





SK24 :  
白土仕上げがある壁土



SK24 :  
間渡し・木舞の痕跡が  
ある壁土



SK24 :  
壁土の断面





天王寺区勝山二丁目202における建設工事に伴う  
四天王寺旧境内遺跡・上本町遺跡発掘調査(ST22-2)報告書

調査個所 大阪市天王寺区勝山2丁目202  
調査面積 260㎡  
調査期間 令和4年10月18日～12月6日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋工・飯田真理子

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は四天王寺東門の南東約250m、同南大門の東約250mで、四天王寺旧境内遺跡の南東隅が上本町遺跡と接する境界に位置する。上町台地の東縁部に当り、台地と解析谷が入り組んで起伏の激しい地形が展開する。調査地は台地高所にあるが、北側には南東方向に開く「四天王寺東門谷」が延びている(図1)。この谷は現況地形からも容易に認識することができるが、東のUH09-4次調査では谷北側の落ちが検出され、谷内は奈良時代には低湿な環境であったものが15世紀に埋め立てられており、埋没した古地形の名残であることがわかっている[大阪文化財研究所2011]。現況で、本調査地は北側の谷底から約6m上がった高所に当り、平坦な地形を経て南へも緩やかに降っていく。

四天王寺の寺域について、11世紀初頭前後の成立とされる『四天王寺御朱印縁起』には「東西撥町、南北陸町」とあり、[豆谷浩之1996]ではその東辺・西辺をそれぞれ難波京中心大路推定線、現在の谷町筋西側に求めている。古代寺院では周辺に寺に仕える人達の住居地や執務施設、工房、菜園などが展開するのが一般的であり、そうした空間の範囲が「寺域」である。これらの位置関係からみて、調査地点は伽藍地外ではあるが、少なくとも「御朱印縁起」の時点では寺域の中であることは間違いがないであろう。

周辺で行われた主な発掘調査の成果を挙げると(図1)、本調査地の南西ではST13-5・19-1次調査が行われていて、12~15世紀の土壌・溝、16世紀~豊臣期の土壌・井戸などが発見されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015a、大阪市文化財協会2021]。南のUH13-2次調査でも14世紀の井戸などが発見されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015b]。また、四天王寺東方で行われたその他の調査でも、主に中世の遺構が発見されている。

如上の環境下にある当該地において建築工事が計画され、大阪市教育委員会文化財保護課による事

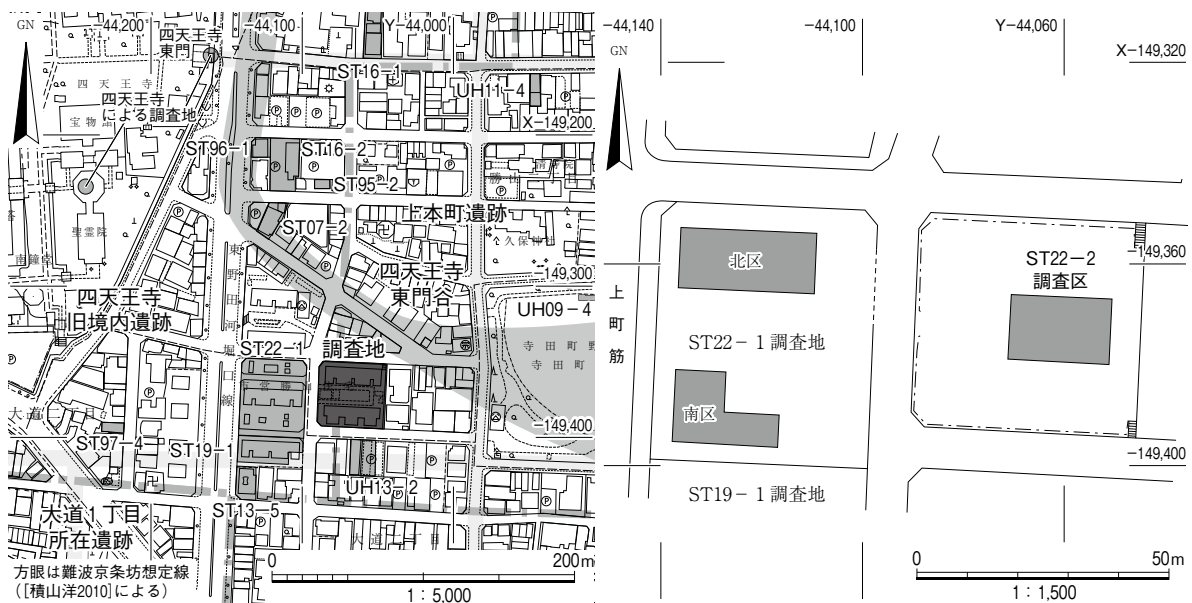


図1 調査地位置図

図2 調査区配置図

前の試掘調査で遺跡が残っている可能性が高いと判断され、本調査が行われることとなった(図2)。調査は、地層の年代や遺構・遺物の分布状況を調べて本地域の歴史の変遷把握のための基礎資料を得

ることを目的とし、頭書の期間で行った。表土と近代の地層は重機を用いて除去し、その後の掘下げは人力によって行った。途中、適宜に平面図・断面図を作成し、写真撮影によって記録保存を行った。遺構は注意深く掘り下げ、遺物の捕集に努めた。本報告で用いた基準点は株式会社安西工業がスタティック測量で測位し、方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。本報告の遺物の記載は大阪市文化財協会学芸員小田木富慈美が行い、それ以外は高橋・飯田が担当した。

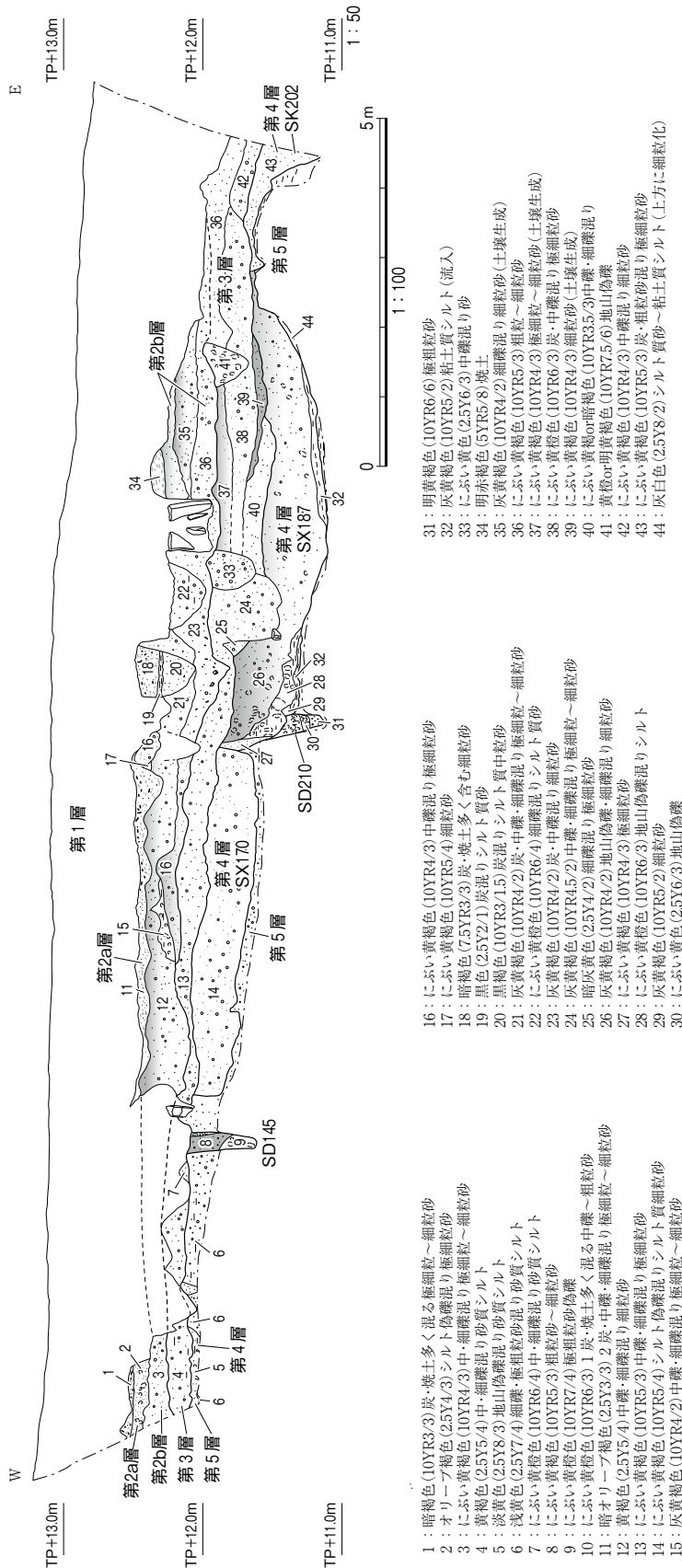


図4 北壁地層断面図

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3~5、図版2)

調査地の現況地形は、西側道路上でTP+13.6m、敷地内東部でTP+12.8mであり、東に向かって低くなっている。

地表面をなす人為堆積層を第1層として、以下の5層を確認した。

第1層：暗褐色(10YR3/3)瓦礫混り砂などからなり、層厚は約60~100cmである。近代~現代の整地層や攪乱埋土を一括している。攪乱は下位



図3 地層と遺構の関係図



層を一部破壊している。

第2層：近代の地層で調査区全域に分布する。第2a層・第2b層に細分した。

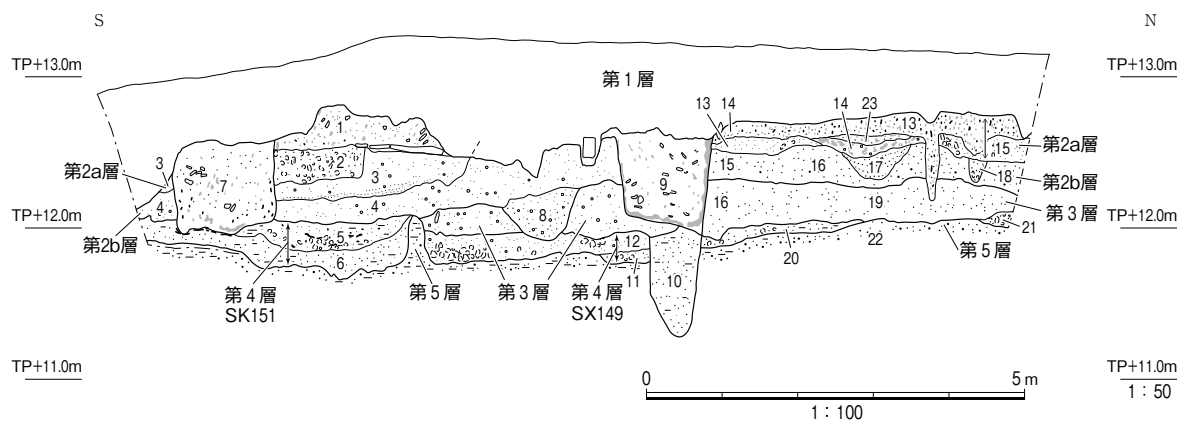
第2a層は暗褐色(10YR3/4)炭・焼土混り極細粒砂、にぶい黄橙色(10YR6/3)炭・焼土混り中礫～粗粒砂などからなる整地層で、層厚は最大30cmである。防空壕(図7)を充填し、近代の磁器やガラスを含むことから、第2次世界大戦戦災後の片付けをした際の整地層とみられる。

第2b層はにぶい黄褐色(10YR4/3)中・細礫混り極細粒～細粒砂、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)炭・中礫・細礫混り極細粒～細粒砂、灰黄褐色(10YR4/2)炭・中礫・細礫混り極細粒～細粒砂などからなる作土層で、東方ではさらに3層に細分される。層厚は最大60cmである。

第3層：黄褐色(2.5Y5/4)中・細礫混り砂質シルト、灰黄褐色(10YR4.5/2)中礫・細礫混り極細粒～細粒砂、にぶい黄橙色(10YR6/3)炭・中礫混り極細粒砂などからなる盛土層で、層厚は最大44cmである。肥前磁器・関西系陶器・丹波焼など17世紀後半から18世紀にかけての遺物が出土した。上面では18世紀から近代にかけての土壌・溝・陶管を用いた排水管などが検出された。

第4層：にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト偽礫混りシルト質細粒砂、灰黄褐色地山偽礫・細礫混り細粒砂などの主に客土からなる第5層上面の遺構の埋土を一括したものである。11世紀後葉から17世紀後半までの遺物を含む。当初、地層確認用の側溝に大型の土採り穴埋土がかかっていたため地層と認識した。岩相・層厚などは個々の遺構埋土のそれに譲る。

第5層：浅黄色(2.5Y7/4)細礫・極粗粒砂混り砂質シルト、灰白色(2.5Y8/2)シルト質砂～粘土質シルト、黄橙色(10YR7/8)にぶい黄色(2.5Y6/3)極粗粒～粗粒砂混り砂質シルトなどからなる地山層である。本層の上面では、古代末・中世～近世の建物・柱穴・井戸・土採り穴などが検出された。



- |                                    |   |
|------------------------------------|---|
| 1：暗褐色(10YR3/4)炭・焼土混り極細粒砂           | 13：灰褐色(7.5YR4/2)炭・焼土多く混じる極細粒～細粒砂            |
| 2：にぶい黄褐色(10YR5/4)三和土偽礫混り砂          | 14：暗赤褐色(5YR3/2)細礫～中礫混り焼土偽礫                  |
| 3：灰黄褐色(10YR4/2)細・中礫混り極細粒砂(下部流入土あり) | 15：にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト偽礫混り極細粒砂               |
| 4：黄灰色(2.5Y4/1)細・中礫混り極細粒砂           | 16：灰黄褐色(10YR4/2)わずかに粗粒砂混り細粒砂                |
| 5：黒褐色(10YR3/1.5)炭・シルト偽礫混り極細粒砂～シルト  | 17：黄褐色(2.5Y5/3)細礫混り細粒砂(自然堆積)                |
| 6：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質砂               | 18：褐色(7.5YR4/3)地山偽礫混り粗粒砂～細粒砂                |
| 7：黒褐色(7.5YR3/2)炭・焼土混り砂質シルト         | 19：にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト                     |
| 8：にぶい黄褐色(10YR5/3)中礫・細礫混り極細粒～細粒砂    | 20：にぶい黄色(2.5Y6/3)地山偽礫わずかに混る砂質シルト            |
| 9：灰黄褐色(10YR4.5/2)炭・焼土混り極細粒～細粒砂     | 21：にぶい黄橙色(10YR6/4)地山偽礫混りシルト質砂               |
| 10：にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質砂            | 22：黄橙色(10YR7/8)にぶい黄色(2.5Y6/3)極粗粒～粗粒砂混り砂質シルト |
| 11：暗灰黄色(2.5Y5/2)地山偽礫混りシルト質砂        | 23：赤褐色(5YR4/6)瓦礫混り砂                         |
| 12：にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト偽礫・中・細礫混り極細粒砂  |   |

図5 西壁地層断面図

ii) 遺構と遺物(図6～21、図版1～4)

a. 古代・中世の遺構と遺物

遺構はいずれも第5層上面で検出したものである。古代・中世の遺構としては建物・井戸・土壇・溝・土採り穴・小穴が検出された。

SA01 調査区中央北西のSD145とSP147・222～224で構成される布掘り堀形をもつ堀である(図6・7)。方位はN3°Eである。掘形(SD145)は幅0.22～0.35m、深さ0.30～0.45mで、底部は0.05～0.15mほどさらに掘り凹めている箇所があり、その内部に直径0.1mほどの柱のアタリがみられた。その間隔は0.50～2.55mと一定していない。また、遺構底から0.2mほど浮いた高さで0.2mほどの礎石とみられる石が1石据えられていた。同様の石はもう1石出土したが、発見直後に取り上げてしまっで位置を記録できていない。埋土は2層に大別でき(図6①断面)、上層はオリブ褐色(2.5Y4/3)細礫・粗粒砂混り極細粒砂～シルト、下層は浅黄色(2.5Y7/4)細礫～粗粒砂などであった。下層の上面から堀の板材の痕跡とみられる灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトがみられた。このことから、埋土下層は掘形の埋土、同上層は柱(および板材)の抜取り穴と考えられる。柱の周りの掘形が少し膨らんでいるのは、幅狭の掘形を一部壊して抜取りを行ったということであろう。一方、礎石とおぼしき石の出

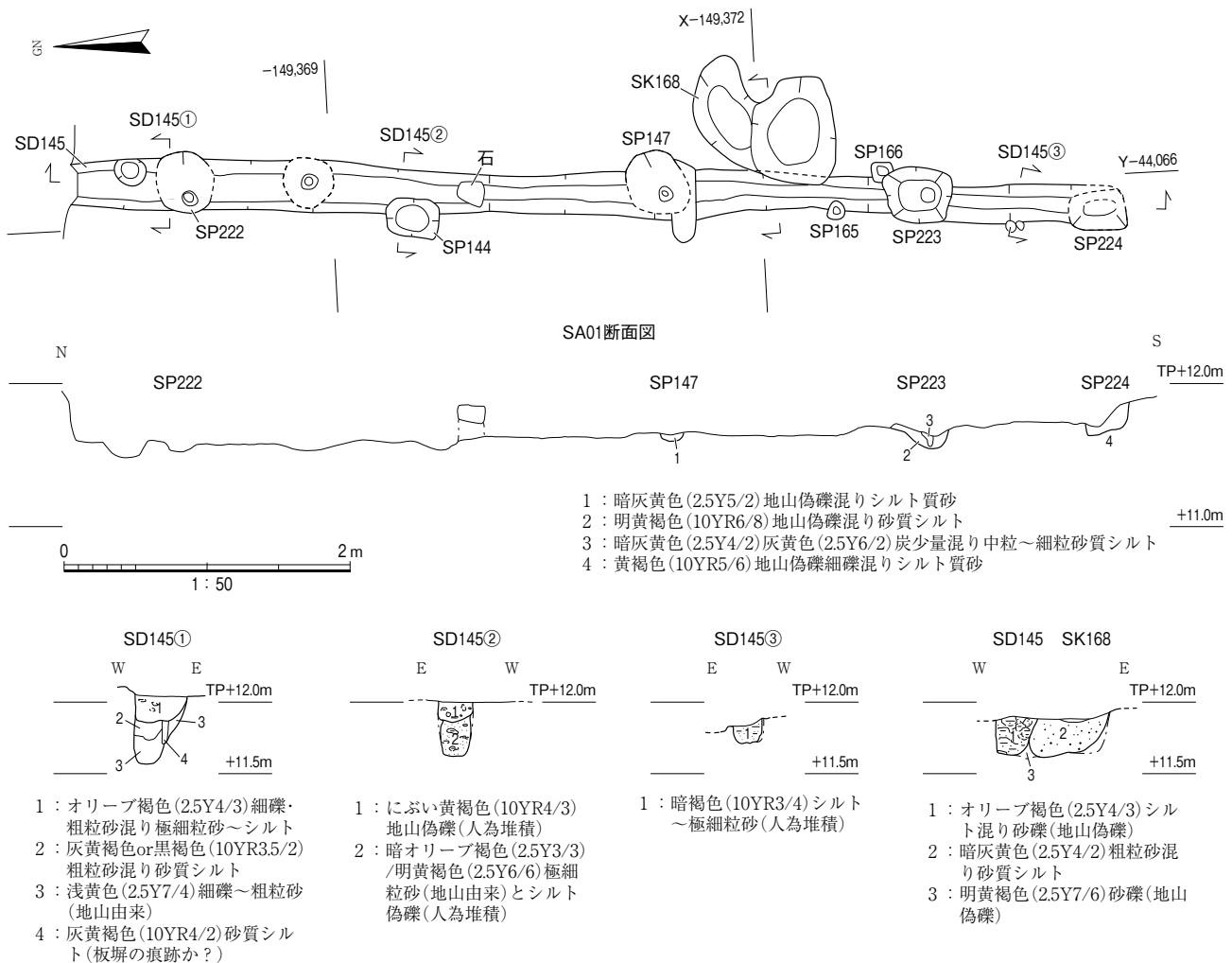


図6 SA01

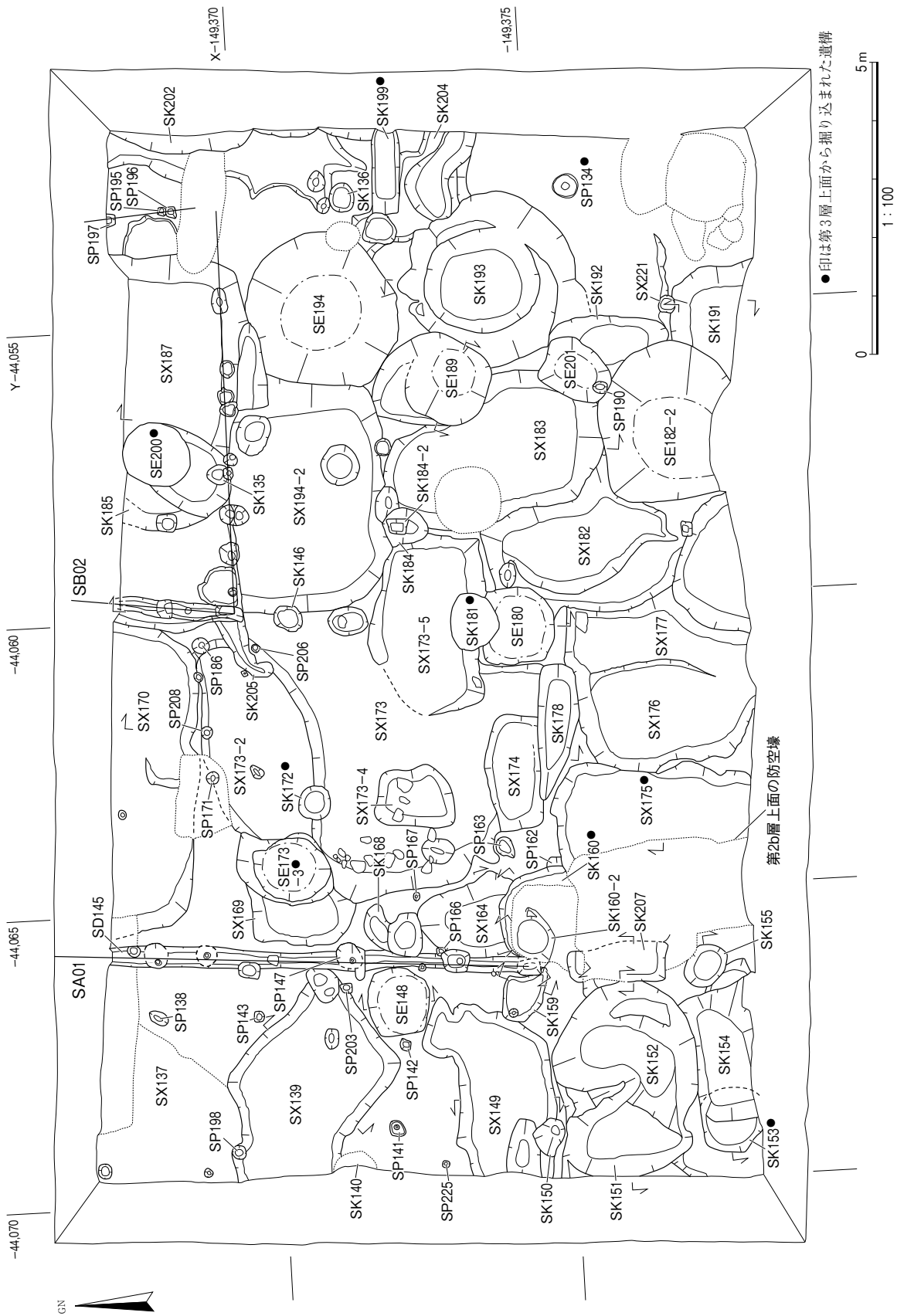


図7 第5層上面検出遺構

土位置は埋土下層の上面の高さに近く、抜取り穴を利用して据えた可能性がある。つまり、礎石を伴わない堀から伴う堀に建て替えたのではないだろうか。土師器・瓦器・東播系須恵器・中国産青磁などが出土した(図9)。以下はSD145から出土した遺物で、1・2は土師器皿である。いずれも底部は平底で、2は口縁端部を軽くつまんでいる。3は瓦器皿で、内面にはハケを施す。類似品は大阪市南西部から堺市北部周辺に分布する。4は瀬戸美濃焼の折縁皿で、長石釉を施す。口縁部は外反したのち端部を内湾させる。5は瓦質土器の火入れである。以上は4を除き15世紀後半から16世紀前半に属するもので、4は16世紀後半に下る。

SB02 調査区中央北東で検出した掘立柱建物である(図7・8)。SX187により壊されているが、SD210とSP195~197・212~215・217~220・226の柱穴12個で構成されている。西面は、幅約0.2~0.3m、深さ0.29mの布掘りの堀形(SD210)をもつ。柱痕跡とみられる窪みが2個あり、南端では0.14mの礎石が検出された。南面の柱穴の平面形は円形や隅丸方形を呈しており、柱間の距離は0.2~1.2mで、ばらつきが大きい。各々の規模は長軸0.13~0.50m、短軸0.20~0.44m、深さ0.23~0.50mであ

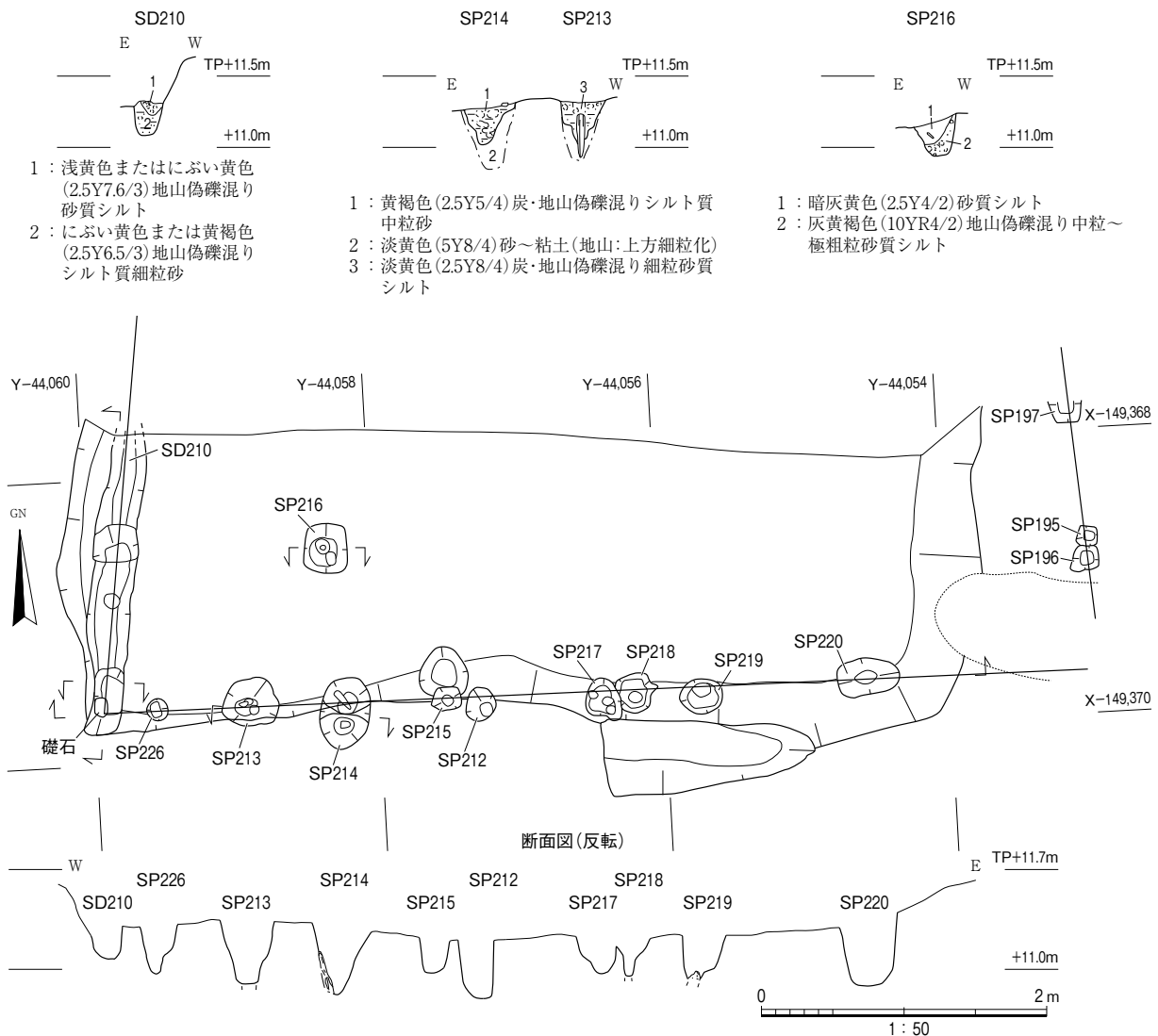


図8 SB02

る。SP212～214・217・218 は柱が残存していたが、その直径はいずれも0.1m未満と細く、先端は杭状に尖っていた。そのうちSP213・214・217は2本の柱が確認され、建替えに伴って打ち込まれた可能性が考えられる。東面の柱穴の平面形は隅丸方形を呈しており、長軸は0.12～0.2m、短軸は0.12～0.18m以上、深さ0.08～0.18mである。柱痕跡も礎石も残っていないが、南面でも見られたようにSP195・196が近接していた。東・南面の柱間距離のばらつき、柱の密度から見て、建替えが行われたのではないだろうか。南面柱筋の方位はほぼ正東西で、西面SD210はN8°Eである。各面柱筋は直角をなさない。全体的に柱は細く、柱間距離も不一である。簡易な小屋のような建物の可能性がある。SP214・215・220から土師器、須恵器、瓦質土器、瓦など中世の遺物が出土した(図9)。SP214から出土した6は土師器皿である。体部は屈曲して外反し、体部下半はユビオサエによる凹凸が著しい。15世紀後半であろう。

小穴群 SP138・141～144・163・165～167・171・186・198・203・206・208は、主に調査区北西部に散在した、東西0.10～0.26m、南北0.11～0.35m、深さ0.02～0.19mの小穴である(図6)。

SP216 調査区中央北東部に位置し、東西0.3m、南北0.33m、深さ0.31mの隅丸方形を呈する。暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト、灰黄褐色(10YR4/2)地山偽礫混り中粒～極粗粒砂質シルトで埋められていた。中世の土師器・瓦器・中国産青磁が出土した。

そのほか、SP186からは中世の土師器・須恵器・瓦器・中国産青磁などが出土した。

古代末の井戸SE182-2の1基と、中世の井戸SE148・180・189・194・201の5基を検出した。これらはSE189を除いて井戸側が発見されなかったが、その深さからみて井戸とするのが適当で、廃絶時に井戸側を抜き取った状態であるとみられる。

SE182-2 調査区南東部に位置し、東西2.75m、南北2.20m以上、深さは1.25mまで掘り下げたが、底に達していない。埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)地山偽礫・粗粒砂混り細粒砂質シルト、黄灰色(2.5Y4/1)炭・地山偽礫混りシルト質中粒～粗粒砂などで埋め戻されていた(図20)。平安時代後期の土師器・須恵器・瓦器、瓦などが出土した(図9～11)。7～21は土師器である。7～12は皿である。7の口縁部は「て」字状口縁部が形骸化した形態で、底部はユビオサエによる凹凸が著しい。8は口縁端部が緩やかに外反し、口縁部外面に一段のナデを施す。9～11は底部外面を糸切りすることから搬入品とみられる。12は耳皿である。色調は淡黄色～黄灰色を呈し、器壁は厚く、胎土には砂粒を多く含む。13・14は高台を有する椀である。13の器高は低く、外面にはユビオサエ痕跡が顕著に見られる。14は内外面にヘラミガキを施す。外面のヘラミガキは粗く、ユビオサエ痕跡が残る。15～18は高い高台を持つ皿ないしは杯で、いずれも雑なつくりである。高台径からみて法量は数種類あったとみられる。17の底部内面には二次的な被熱痕跡がある。19・20は摂津タイプの羽釜である。いずれも鏝・口縁部ともに短い。21は甕である。体部下半部が緩やかに膨らみ、外面には粗いハケを施す。22～24は須恵器である。22は長頸壺の口縁部である。23は東播系須恵器椀の底部で糸切りしている。胎土には径10mmの砂粒を含む。底部が明確に外方へ張り出すことから初期段階に属するものであろう。24は鉢である。口縁部は屈曲して外傾する。25は黒色土器B類で椀の底部である。内面には斜格子状のヘラミガキを施す。以上はTJ08-1次調査のSE201出土資料よりはやや新しく、同SK202出土資料[大阪

市教育委員会・大阪市文化財協会2010]よりも古相を呈することから、11世紀後葉に位置づけておきたい。26は唐草文軒平瓦で、珠文帯を有する。二次的に被熱している。27～33は平瓦である。27は須恵質で、凸面をナデによって仕上げている。28～31は凸面に縄目タタキを施すものである。32は凸面に斜格子状のタタキを施す。33は胎土に長石やチャートの砂礫を多く含み、凸面に横方向の強いナデを施す。凹面には模骨痕が見られる。34は丸瓦である。35は瓦を二次加工した円盤である。

SE148 調査区西部に位置し、東西1.16m、南北1.01m、深さ1.16mまで掘り下げたが、底に達していない。埋土は2層に分けられ、上層はにぶい黄褐色(10YR4/3)炭・焼土混り極細粒砂、下層は灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂混りわずかに粘土質シルトなどで埋められていた(図19)。中世の土師器・須恵器・瓦器・瀬戸美濃焼・中国産白磁、瓦などが出土した。

SE180 調査区中央に位置し、東西1.31m、南北1.24m、深さ1.46mまで掘り下げたが、底に達していない。埋土は暗褐色(10YR3/3)中礫混りシルト質砂である(図20)。中世の土師器、瓦器、東播系須恵器、常滑焼、中国産青磁・白磁、瓦、漆喰などが出土した(図11)。36～40は土師器皿である。36・37は口縁部がやや直立気味に屈曲する。38は口縁部が内湾する。39は口縁部外面にやや強いナデを加えるもので、胎土には砂粒を多く含む。40は口縁部外面に二段のナデを施す。41は東播系須恵器の捏鉢である。42・43は瓦器皿である。44・45は瓦器椀である。44は高台径が3.9cmで、底部内面にはごく粗い平行線状のヘラミガキを施す。45は器高が低く、内面には圏線状のヘラミガキを施す。高台は全周しない。46は中国産白磁の碗で、内面には櫛描文を施す。47は中国産青白磁で、型押し成型の合子ないしは袋物であろう。以上は13世紀前～中葉に属するものである。

SE189 調査区中央東部に位置し、東西1.60m、南北2.15m、深さは1.07mまで掘り下げたが、底に達していない。井戸側の抜き穴は南に偏ってみられ、その外側には裏込めが残っていた。抜き穴部分は検出面から1.30m掘り下げた時点で、縦板を組み合わせた井戸側が見つかった。その直径は0.7mである。埋土は黒褐色(2.5Y3/2)炭混りシルト質細粒砂、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質シルトなどで埋められていた(図19)。裏込め部分は地山偽礫を含むシルト～細粒砂で埋められており、その過程で16世紀の土師器壺50が正置された状態で埋納されていた(写真1)。主に抜き穴内から土師器・東播系須恵器・瓦質土器・瓦などが出土した(図11・12)。

48・49は土師器皿である。48は淡黄色を呈し、口縁端部を軽くつまんで仕上げる。49は口縁部に強いナデを施しており、底部との境には段を有する。



写真1 SE189遺物出土状況(西から)

50は土師器壺で、手づくねで成形したのち、繊維状の原体を外面全体に押し付けて調整している。口縁部外面はナデを施す。口縁部の1か所を指先で窪ませ、その中央に直径1mmの小円孔を穿つ。何らかの儀礼に用いたものであろうか。51は常滑焼の片口鉢である。底部内面には重ね焼きの痕跡を有する。52・53は瓦器椀である。いずれも高台はなく、内面にはごく粗い圏線状のヘラミガキを

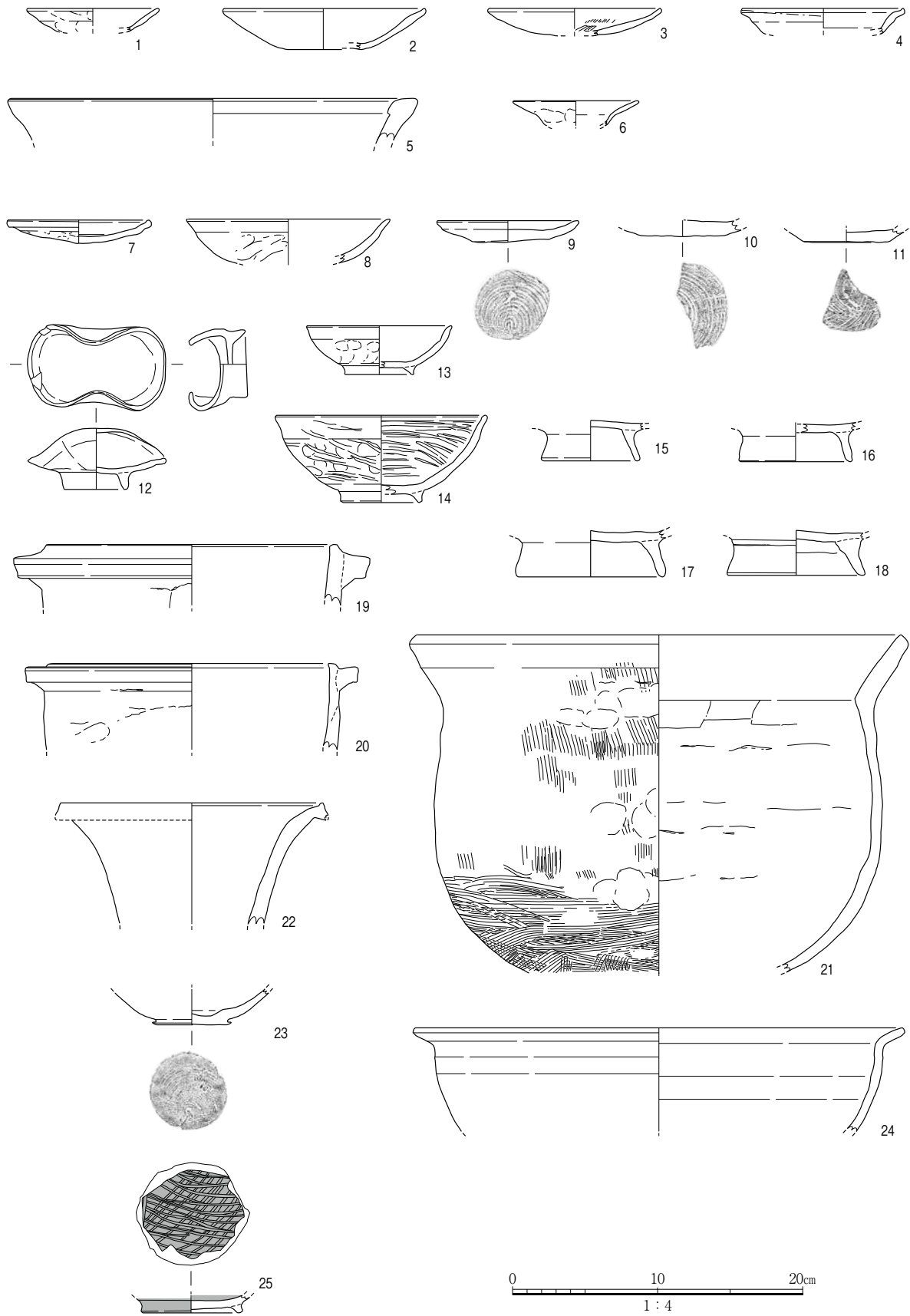


図9 古代末～中世の遺構出土遺物(1)  
 SA01(1～5)、SB02(6)、SE182-2土器類(7～25)

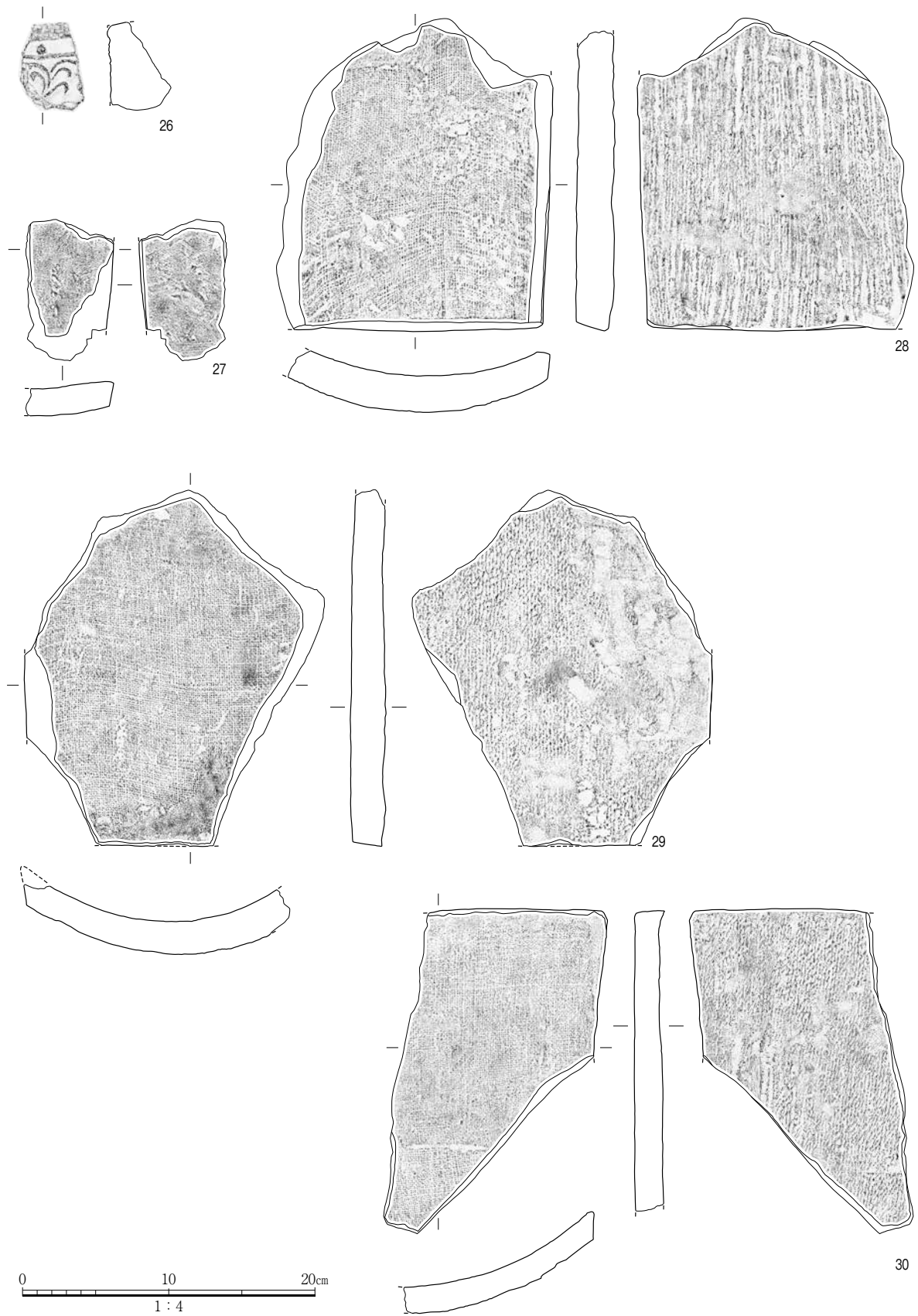


図10 古代末～中世の遺構出土遺物(2)  
SE182-2 瓦類(26~30)



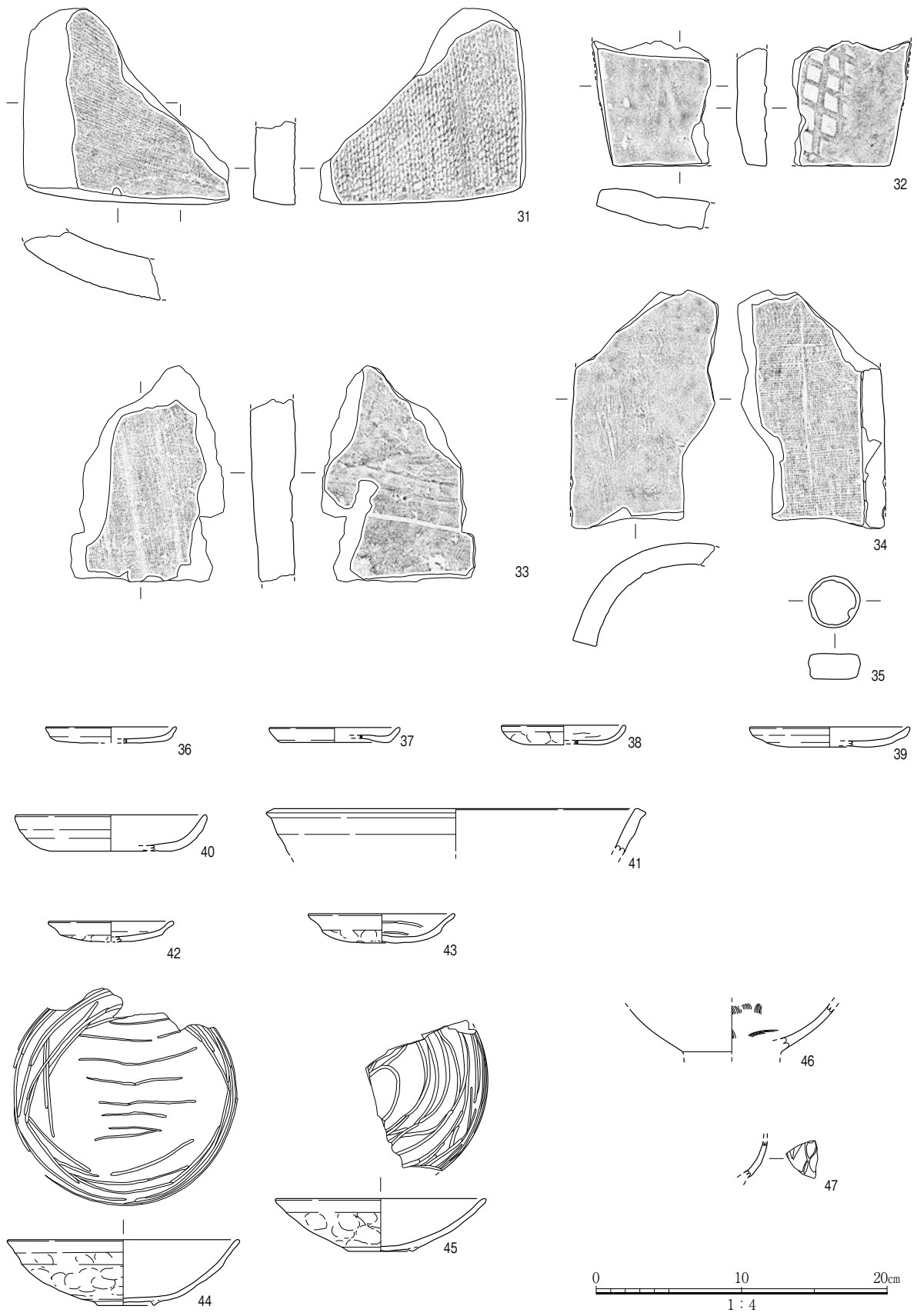


図11 古代末～中世の遺構出土遺物(3)  
SE182-2瓦類(31~35)、SE180(36~47)、SE189(48・49)

施す。54は瓦質土器の羽釜である。口縁部は直立し、鏝は短い。55は瓦質土器の火鉢である。56は滑石製石鍋である。上部は割れている可能性がある。57は文字文を施す軒平瓦で、「四天王寺」の文字間に「長久年中」の文字を配する。平安後期とされる『四天王寺古瓦聚成』405番と同範であろう[四天王寺文化財管理室1986]。以上の遺物は時期幅が広く、13～14世紀代のものを多く含むが、52・53は15世紀代の可能性があり、48・55は16世紀代に下る。遺物の年代観は13～16世紀にわたっており、廃絶後の埋戻しの際に様々な時期のものが混入したものとみられる。

SE194 調査区東部に位置し、当初はひとつの遺構とみていたが、掘り下げるうちにふたつに分かれ、その東側が本遺構である。西側はSX194-2として後述する。直径2.60m、深さ1.34mまで掘り下げたが、底に達していない。埋土は大きく2層に大別され、下層は底部付近に自然堆積層の粘土質シルトが堆積しており、上層は暗灰黄色(2.5Y4/2)地山偽礫混りシルトで埋められていた。中世の土師器、東播系須恵器、瓦器、瀬戸美濃焼瓦、常滑焼、中国産青磁・白磁、瓦、磚などが出土した(図12)。58～60は土師器皿である(図12)。58は器高が低く、口縁端部を丸く収める。59は体部が屈曲し、口縁部が大きく広がる。60は口縁端部を軽くつまんでいる。61は土師器羽釜で口縁部はほとんど屈曲せず、端部を丸く収める。62は東播系須恵器の捏鉢である。63・64は瓦器椀である。63はごく低い高台を貼り付ける。65は瓦質土器の火入である。66は中国産青磁の碗である。67は凸面にごく粗い斜格子タタキを施す丸瓦である。68は磚である。本遺構の遺物も時期幅が広く13～16世紀にわたる。

SE201 調査区南東部に位置している。東西0.90m以上、南北1.20m以上、深さ1.04mまで掘り下げたが、底に達していない。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)地山偽礫混りシルト質中粒～細粒砂の人為堆積層である。土師器、須恵器、瓦質土器、東播系須恵器、常滑焼、中国産青磁・白磁、瓦などが出土した(図13・14)。69は古墳時代後期(MT15型式)の須恵器杯身である。混入した遺物である。70は土師器皿の底部で、糸切りを施す。搬入品とみられる。71～86は土師器皿である。71～76は口径9cm程度の小皿で、口縁部外面をナデで仕上げている。77～86は口径約13～15.5cm程度で、口縁部外面に二段のナデを施すものが多い。いずれも外面にはユビオサエの痕跡が顕著である。87は土師器羽釜である。口縁部は短く屈曲し、器壁は薄い。88・89は東播系須恵器の捏鉢である。88は器壁が薄く、口縁部に重ね焼きの痕跡が見られる。89は体部外面下半にカキメ状の調整痕跡を有する。90～97は瓦器である。90・91は皿で、いずれも内面にはヘラミガキを施す。92～96は椀である。いずれも高台は断面三角形で、92～95の底部内面には平行線状のヘラミガキを施す。92の底部内面はハケ状工具で調整した痕跡が見られる。96は口縁部外面に二段のナデを施し、内面には圏線状のヘラミガキを施す。高台周辺は丁寧に調整しており、他の椀とはやや作りが異なる。97は三足を有する羽釜である。体部外面には煤が付着する。98は中国産白磁の皿である。底部内面は釉を剥いている。99は中国産青磁の碗で、器壁は薄く、口縁部端部を外方へつまんでいる。色調は暗オリーブ色を呈し、越州窯系とみられる。以上は69・70・99をのぞき、13世紀前葉に属するものであろう。100・101は丸瓦である(図14)。100はやや軟質の焼成で、凸面には縄目タタキ痕が見られる。101は須恵質焼成で、凸面の縄目タタキを横方向のナデで擦り消している。102～104は平瓦である。102は表面にコビキ痕跡が明瞭に残る。103・104は凸面に縄目タタキを施し、103は凹面の布目圧痕をナデ消ししている。

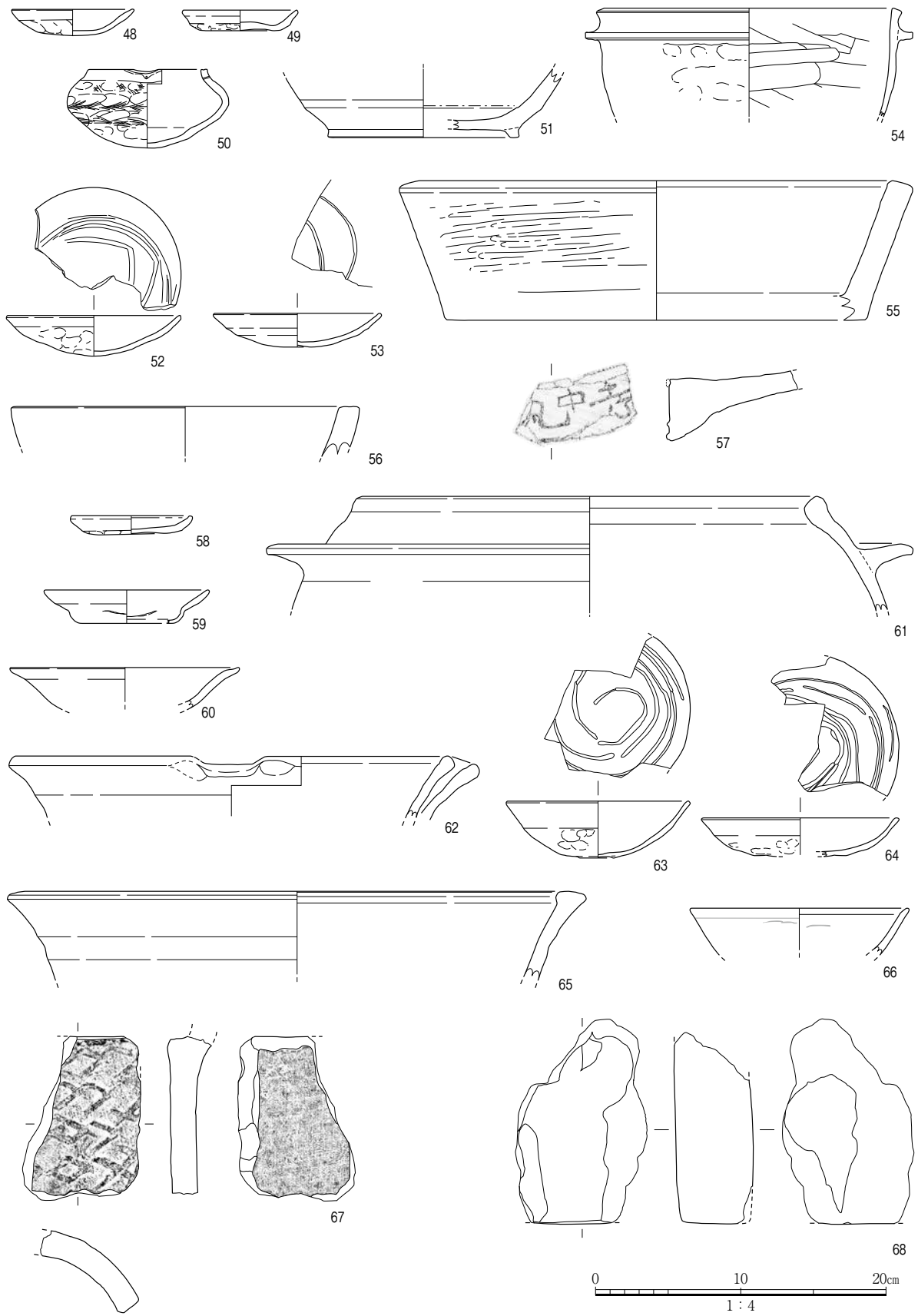


図12 中世の遺構出土遺物(1)  
SE189(48~57)、SE194(58~68)

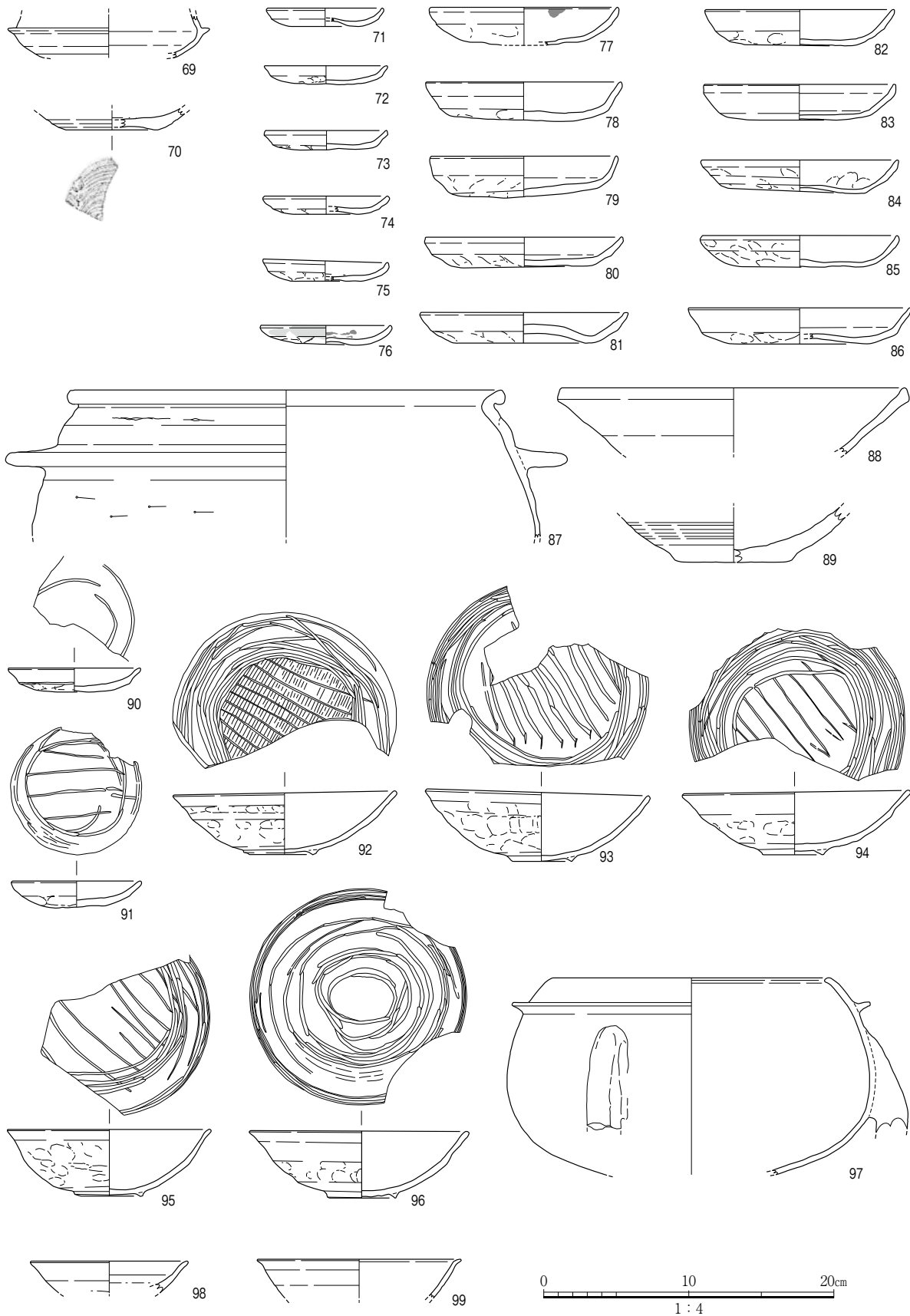


図13 中世の遺構出土遺物(2)  
SE201土器・陶器類(69~99)

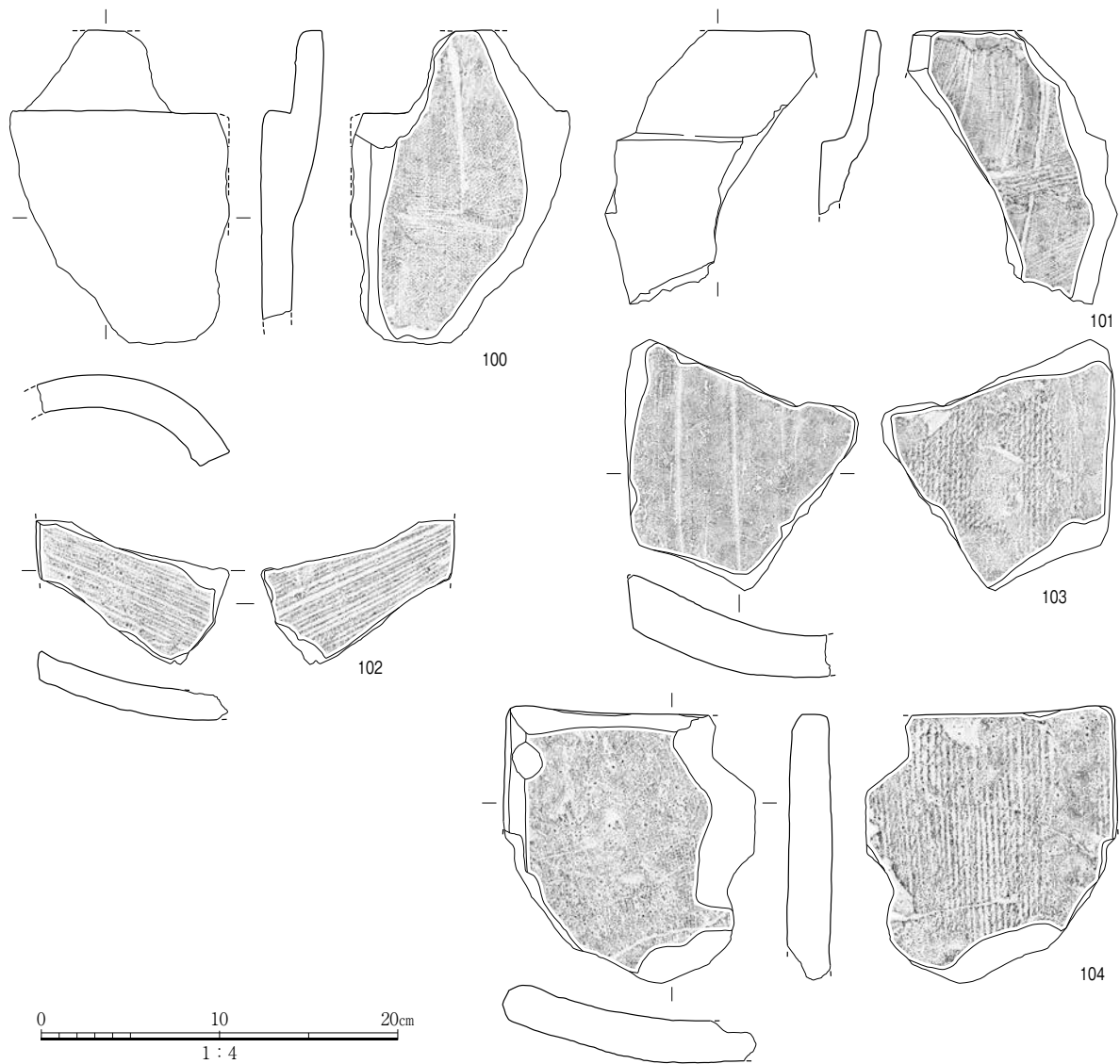


図14 中世の遺構出土遺物(3)  
SE201瓦類(100~104)

土壙状の遺構は調査区全域で検出した。このうち、以下に示すSX139・149・164・169・173・173-2・173-4・5・174・176・177・182・183・187・194-2は平面形が不整形なものもあるが、おおよそ長方形を呈しており、深さ0.05~0.22mと浅い。掘形は重複するものもあるが、隣接するものは境界を畦状に掘り残しており、こうした特徴から土採り穴と考えられる。

SX139 調査区北西部に位置し、東西3.30m以上、南北2.98m、深さ0.07mである。にぶい黄橙色(2.5Y6/4)地山偽礫混りシルト質砂で埋められていた(図19)。中世の土師器・瓦器などが出土した(図15)。105は土師器皿である。色調は灰白色を呈し、精良な胎土である。106は瓦質土器の羽釜で、口縁部は短く直立ぎみである。焼成はあまい。15世紀後葉~16世紀前葉であろう。

SX149 調査区西部に位置し、東西2.0m、南北1.6m、深さ0.27mである(図19)。にぶい黄褐色(10YR4/3)細礫混りシルト質砂で埋められていた。中世の土師器・須恵器・瓦器・瀬戸美濃焼・中国産白磁、瓦が出土している。

SX164 調査区中央西部に位置し、東西1.37m、南北1.35m以上、深さ0.12mである。暗灰黄色(2.5Y4/2)細礫・粗粒砂混り粘土質シルトで埋められていた(図19)。中世の土師器・東播系須恵器・瓦器・瓦質土器などが出土した。

SX169 調査区中央北西部に位置し、東西0.73m以上、南北1.79m、深さ0.22mである。暗灰黄(2.5Y5/2)地山偽礫混りシルト質砂で埋められていた。土師器・瓦器・瀬戸美濃焼・常滑焼、瓦などの遺物が出土した(図15)。107・108は土師器皿である。107は口縁部が外反し、底部中央が膨らむ。108は口縁端部を軽くつまんでいる。109は古瀬戸の播鉢形小鉢である。口縁部内外面のみに灰釉を施す。以上は15世紀後葉に属するとみられる。

SX170 調査区中央北西部に位置し、東西5.21m、南北1.37m以上、深さ0.37mである。埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)地山偽礫混りわずかにシルト質砂、にぶい黄褐色(10YR5/3)中礫・細礫混り極細粒砂で埋められていた(図19)。瓦器・瓦質土器・備前焼などの遺物が出土した(図15)。110は瓦質土器の羽釜である。口縁部は幅広で、外面には3段の凹線を施す。15世紀後葉に属する。

SX173 調査区中央部に位置し、掘り下げるにしたがって複数の土採り穴に分かれ、SX173・173-2・4・5に分けられた。東西6.3m以上、南北3.20m以上、深さは0.05~0.27mを測る。埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/3)地山偽礫混り粗粒砂質極細粒~細粒砂、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細礫混り砂質シルトなどで埋められていた(図19・20)。土師器・瓦質土器・東播系須恵器・瀬戸美濃焼陶器・常滑焼・中国産青磁、瓦などの遺物が出土した(図15)。111・112・115は土師器皿である。111・112の外面はユビオサエ痕が著しい。115は口縁部が緩やかに外反し、端部をつまんでいる。113・114は瓦器の系譜を引く椀と皿で、内面をハケ調整する。堺市北西部から大阪市南西部にかけて類似した資料が出土する。116~119は瓦質土器の火鉢である。これらはいわゆる奈良火鉢で、作りが丁寧である。116は方形浅鉢の脚部である。底部外面には離れ砂が付着する。117は円形浅鉢の口縁部で、端部付近に雷文のスタンプが巡る。118・119は方形浅鉢の口縁部で同一個体の可能性がある。端部付近に唐草文のスタンプを巡らす。以上は15世紀後葉に属するものであろう。

SX174 調査区中央部に位置し、東西1.99m、南北1.05m、深さ0.19mで、SX173を切る。埋土は黒褐色(2.5Y3/2)炭混り中粒砂質シルト、暗灰黄色(2.5Y4.2)極細粒~細粒砂質シルトで埋められていた(図19)。土師器・須恵器・瓦器・中国産白磁・備前焼・瀬戸美濃焼・常滑焼、瓦、砥石などの遺物が出土した(図15)。120~124は土師器皿である。120・121は作りや胎土が類似しており、全体をユビオサエで成形したのち、口縁部と内面に粗いナデを施す。122はやや器高が高く、外面全体にユビオサエの痕跡が顕著に見られる。123・124は底部が平底ぎみである。125は瓦器の系譜を引く皿で、内面をハケで調整する。126は中国産白磁の小杯で、平面が八角形を呈するものとみられる。127は古瀬戸の燭台であろう。128は備前焼大甕の口縁部である。以上は15世紀後葉に属するとみられる。

SX176・177 調査区南部に位置する。SX176は東西3.0m以上、南北1.56m以上、深さ0.09m、深さ0.22mである。黒褐色(10YR2/3)炭・地山偽礫混りシルト質細粒砂で埋められていた(図20)。SX177は東西1.0m、南北3.9m以上、深さ0.28mである。にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質砂、灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細粒砂で埋められていた。SX176がSX177を切っている。黒褐色(10YR2/3)

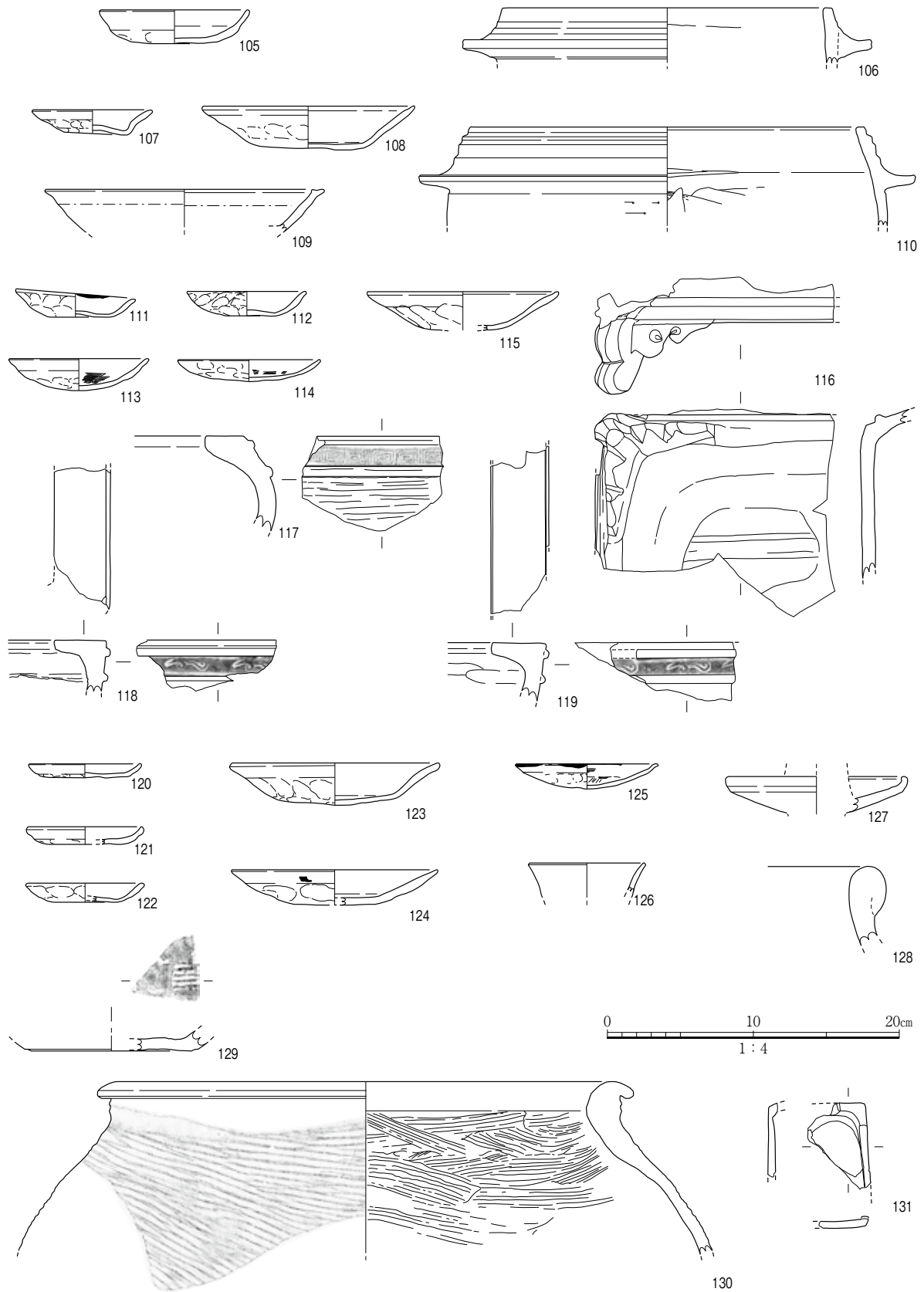


図15 中世の遺構出土遺物(4)

SX139(105・106)、SX169(107~109)、SX170(110)、SX173(111~119)、SX174(120~128)、SX183(129・131)、SX187(130)

炭・地山偽礫混りシルト質細粒砂、にぶい黄褐色(10YR5/3)地山偽礫混りシルト質砂、灰黄褐色(10YR4/2)シルト質極細粒砂などで埋められていた(図20)。中世の土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・常滑焼、瓦などが出土した。

**SX182** 調査区南部に位置し、東西2.80m、南北3.39m、深さ0.11mである。オリーブ褐色(2.5Y4/3)地山偽礫・炭混りシルト質砂である(図20)。古代～中世の須恵器・瓦質土器・瓦が出土した。

**SX183** 調査区中央東部に位置し、東西2.19m、南北3.89m、深さ0.17mを測る。底部には明黄褐色(2.5Y6/6)シルト質砂・地山偽礫混り粘土質シルトが流入して薄層をなし、上部はオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト～細粒砂で埋められていた(図20)。中世の土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・常滑焼・備前焼・硯・瓦などが出土した(図15)。129は備前焼播鉢の底部である。131は黒色粘板岩製の風字硯である。以上は15世紀代とみられる。

**SX187** 調査区北東部に位置し、東西6.50m、南北2.20m以上、深さ0.46mである。底部に灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルトが流入しており、灰黄褐色(10YR4/2)地山偽礫・細礫混り細粒砂で埋められていた(図20)。土師器・東播系須恵器・瓦器・瓦質土器・常滑焼などの15世紀以降の遺物が出土した(図15)。130は瓦質土器の甕で、口縁部は短く外方へ屈曲する。タタキの幅は5条/2cmである。15世紀代に属する。

**SX194-2** 調査区中央北東部に位置する、東西4.10m、南北2.70m以上、深さ0.24mである。暗灰黄色(2.5Y4/2)地山偽礫混りシルトで埋められていた(図20)。土師器・瓦・瓦質土器・中国産青磁・常滑焼など15世紀の遺物が出土した。

以下は土採り穴以外とみられる土壌である。

**SK136** 調査区東部に位置し、東西0.50m、南北0.42m、深さ0.11mを測る。黄褐色(2.5Y5/3)地山偽礫混りシルト質中粒砂で埋められていた。中世の土師器・瓦質土器などが出土した。

**SK146** 調査区中央北部に位置し、東西0.42m、南北0.48m、深さ0.05mである。埋土は褐灰色(10YR4/1)中礫・細礫混り細粒砂で、多量の土師器皿が重なるようにして埋納されていた(図16、写真2)。ほかに瓦質土器・常滑焼、瓦などの遺物が出土した(図17)。132～141は土師器皿である。いずれもユビオサエで全体を成形し、内面のみにナデを施す粗雑な作りである。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は雲母・シャモットを含み比較的精良である。これらは15世紀前半に属するとみられる。

**SK150** 調査区西部に位置し、東西0.66m、南北0.54m、深さ0.29mである。灰黄褐色(10YR5/2)シルト偽礫混り極細粒砂～シルトで埋められていた。中世の土師器・東播系須恵器・瓦器が出土した。

**SK152** 調査区南西部に位置し、東西3.50m以上、南北2.48m、深さ0.81mを測る。埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質砂で埋められていた(図21)。土師器、瓦器、瓦質土器、常滑焼、備前焼、中国産青磁・白磁などの遺物が出土した(図17)。142～147は土師器皿である。142は赤橙色を呈し、口縁部が強く屈曲する。胎土には2mm程度の砂粒を含む。搬入品であろう。143・144は口縁部が内湾し、器高が低い。145は口縁部が外反して器高が高いものである。146・147は口縁部外面にナデを施し、端部を軽くつまむ。148は瓦器の系譜を引く椀である。口径は縮小し、高台はない。149は中国産白磁の皿である。150・151は中国産青磁の碗である。152は中国産白磁で、型押し成型により鱗ない



しは羽毛の表現を施す。水滴であろうか。153～155は瓦質土器である。153は甕で、口縁部は緩やかに外反し、体部外面には細かなタタキを施す。14世紀代に遡るもので

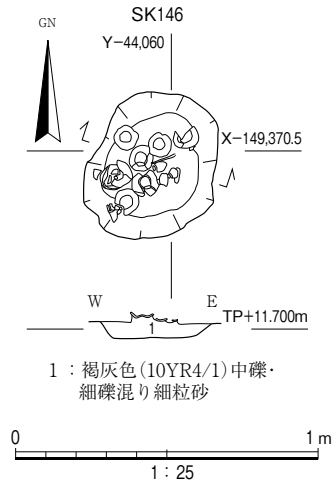


図16 SK146

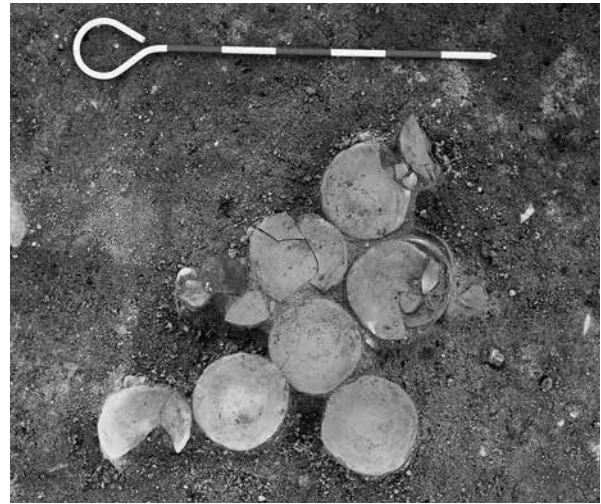


写真2 SK146遺物出土状況(北から)

であろう。154・155は瓦質土器の奈良火鉢である。154は風炉の口縁部、155は方形浅鉢の底部である。156は産地不明陶器で壺ないしは甕の体部とみられる。左回転の轆轤成形で暗赤褐色を呈し、灰釉を施す。胎土には砂粒を多く含む。中国南方産の可能性もある。以上は15世紀後半に属するものであろう。

SK154 南西部に位置し、東西2.8m、南北1.1m、深さ0.4mである。SX153に切られる。底部は自然堆積の薄層を挟みながら灰色(5Y6/1)粗粒砂～中礫などで埋められ、上部は黄褐色(2.5Y5/2)地山偽礫混りシルト質砂、オリーブ褐色(2.5Y4/3)地山偽礫・細礫混りシルト質細粒砂などで埋められていた(図21)。土師器・東播系須恵器・瓦器・中国産白磁などの遺物が出土した(図17)。157・158は土師器の皿である。いずれも器高は低く、口縁端部を丸く収める。159は瓦器皿である。底部内面に平行線状ヘラミガキを施す。160～164は瓦器碗である。いずれも口径は14cm程度で、高台径は3cm前後と小さく形骸化しており、全周しないものもある。底部内面には平行線状ないしは鋸歯状のヘラミガキを施す。165は瓦器鉢である。外面はユビオサエ痕が顕著で、内面には圏線状のヘラミガキを施す。166は中国産白磁の合子蓋である。天井部には花と鳳凰文を施す。以上は13世紀中葉に属するものであろう。167は常滑焼の甕である。口縁部は短く、端部をつまんで外反させている。

SK155 調査区中央南西部に位置し、東西0.70m、南北0.80m、深さ0.18mの円形を呈する土壌である。埋土は褐色(10YR4/4)粗粒砂混り極細粒砂質シルトで埋められていた(図21)。土師器・瓦片が出土した。

SK160-2 調査区中央西部に位置し、東西0.66m、南北0.73m、深さ0.82mである。埋土はにぶい黄色(2.5Y6/4)地山偽礫混りシルト質中粒～細粒砂である(図21)。底は平坦で水が溜った痕跡はなかった。貯蔵穴の可能性もある。中世の土師器・瓦器・東播系須恵器、瓦などの遺物が出土した。

SK185 調査区中央北東部に位置し、東西1.82m、南北1.40m、深さ0.15mの土壌である。灰黄褐色(10YR4/2)地山偽礫・細礫混り細粒砂、にぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒砂などで埋め戻されていた。土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、瀬戸美濃焼、中国産青磁・白磁、ベトナム産とみられる陶器などの遺物が出土した(図18)。168～174は土師器皿である。168は手づくねにより成形しており、底部はゆがんでいる。169～174の口縁部は大きく開き、端部を上方へ軽くつまむものが多い。いずれも胎土

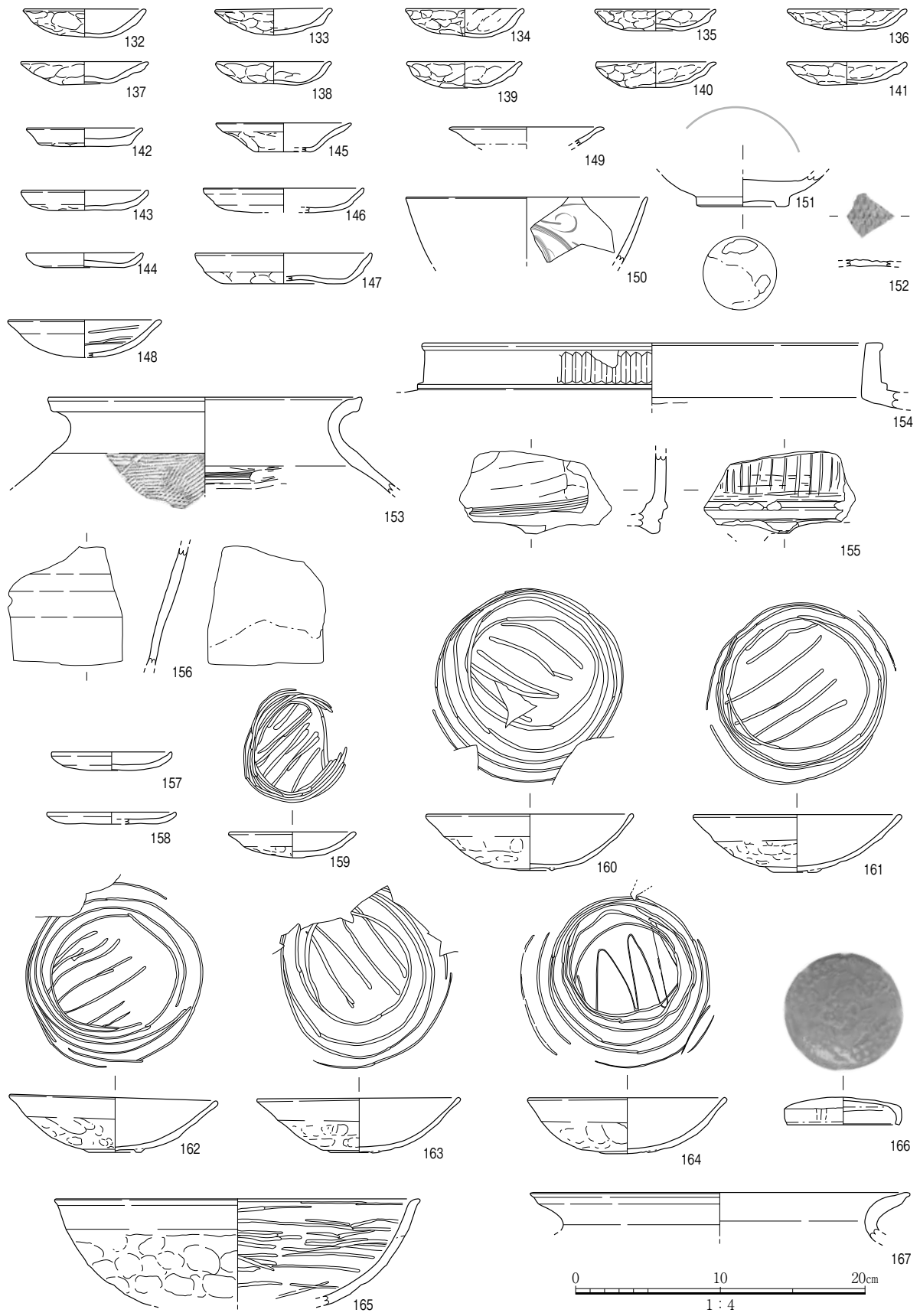


図17 中世の遺構出土遺物(5)

SK146(132~141)、SK152(142~156)、SK154(157~167)

は精良で灰白色を呈する。175は産地不明の陶器皿底部で、暗褐色を呈し、内面に灰釉を施す。轆轤回転方向は右である。混入品の可能性もある。176は常滑焼甕の口縁部で大型品であろう。端部は「N」字状である。177は瓦質土器で奈良火鉢である。口縁部外面には菱形の花文を施す。178は中国産青磁の碗底部で、内面には花文の刻印がある。179は中部ベトナム産陶器の長胴瓶蓋ないしは鉢である。轆轤成形しており、天井部は不調整である。胎土には白色の砂粒を多く含む。以上は16世紀中葉に属するものであろう。

SK191 調査区南部に位置し、東西2.88m、南北1.38m、深さ0.41mである。SX182-2を切っていた。暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)地山偽礫・中粒砂混り極細粒砂で埋められていた(図21)。中世の土師器・瓦器・瓦質土器・中国産白磁、瓦が出土した(図18)。180は土師器皿である。口縁端部を直立させる。雲母や砂粒を多く含む特徴的な胎土で、色調は橙色を呈する。搬入品であろう。

SK192 調査区南東部に位置し、東西1.14m以上、南北2.00m以上、深さ0.24mである。埋土は黒褐色または暗オリーブ褐色(2.5Y3/2.5)細礫～粗粒砂混りシルトである(図21)。中世の土師器・須恵器・瓦器・中国産白磁・常滑焼などが出土している(図18)。181は土師器皿である。器壁が薄く、手づくね成形である。182は中国産白磁の八角杯である。これらは15世紀代に属するものであろう。

SK193 調査区東部に位置し、直径約3.0m、深さ0.60mの円形を呈する土壌である。埋土は黒褐色(2.5Y2/2.5)または暗オリーブ褐色細礫～粗粒砂混りシルト、黄色(2.5Y8/6)砂質シルト～極細粒砂混り地山偽礫(シルト)などである(図21)。地山層偽礫主体で埋められていたため、土採り穴ではないと判断した。中世の土師器、須恵器、東播系須恵器、瓦器、瓦質土器、常滑焼、中国産青磁・白磁、瓦などが出土している(図18)。183～186は土師器皿である。183は器高が低く胎土が粗いもので、堺市北西部から大阪市南西部一帯で出土するタイプである。184は口縁端部を軽くつまんで直立させる。185は外面にユビオサエ痕が多く残る。186は口縁端部をナデによって外反させている。187は瓦質土器の鍋である。188～191は中国産白磁である。188・189は皿である。190は八角杯である。191は碗の底部である。192・193は中国産青磁である。192は碗で、外面に蓮弁文を施す。193は盤である。高台内の釉は掻き取っている194・195は軒平瓦である。194は表面の摩滅が著しく文様は不明である。195は特徴的な唐草文を施しており『四天王寺古瓦聚成』385・386と同文である。以上は一部を除いて15世紀後半に属するものであろう。

SK202 調査区北東部に位置し、東西0.33m以上、南北2.45m以上、深さ0.45mである土壌である。にぶい黄褐色(10YR5/3)炭・粗粒砂混り極細粒砂で埋められていた。土師器・須恵器・東播系須恵器・瓦質土器・常滑焼、瓦などの遺物が出土した(図18)。196・197は土師器皿である。196は灯明皿として使用している。198は瓦質土器の羽釜で口縁部は短く内傾する。199は瓦質土器の鍋である。200は信楽焼の甕とみられ、肩部外面には自然釉がかかる。以上は15世紀後半～16世紀前半に属するものであろう。

SK204 調査区東部に位置し、東西1.50m以上、南北0.73m、深さ0.28mの不整形の土壌である。埋土は明黄褐色(10YR6/8)中礫～粗粒砂であり、細粒な堆積物を含まなかった。混和材としての粗粒な砂～礫を貯蔵していた可能性がある。中世の土師器・東播系須恵器・瓦器・瓦質土器が出土した。

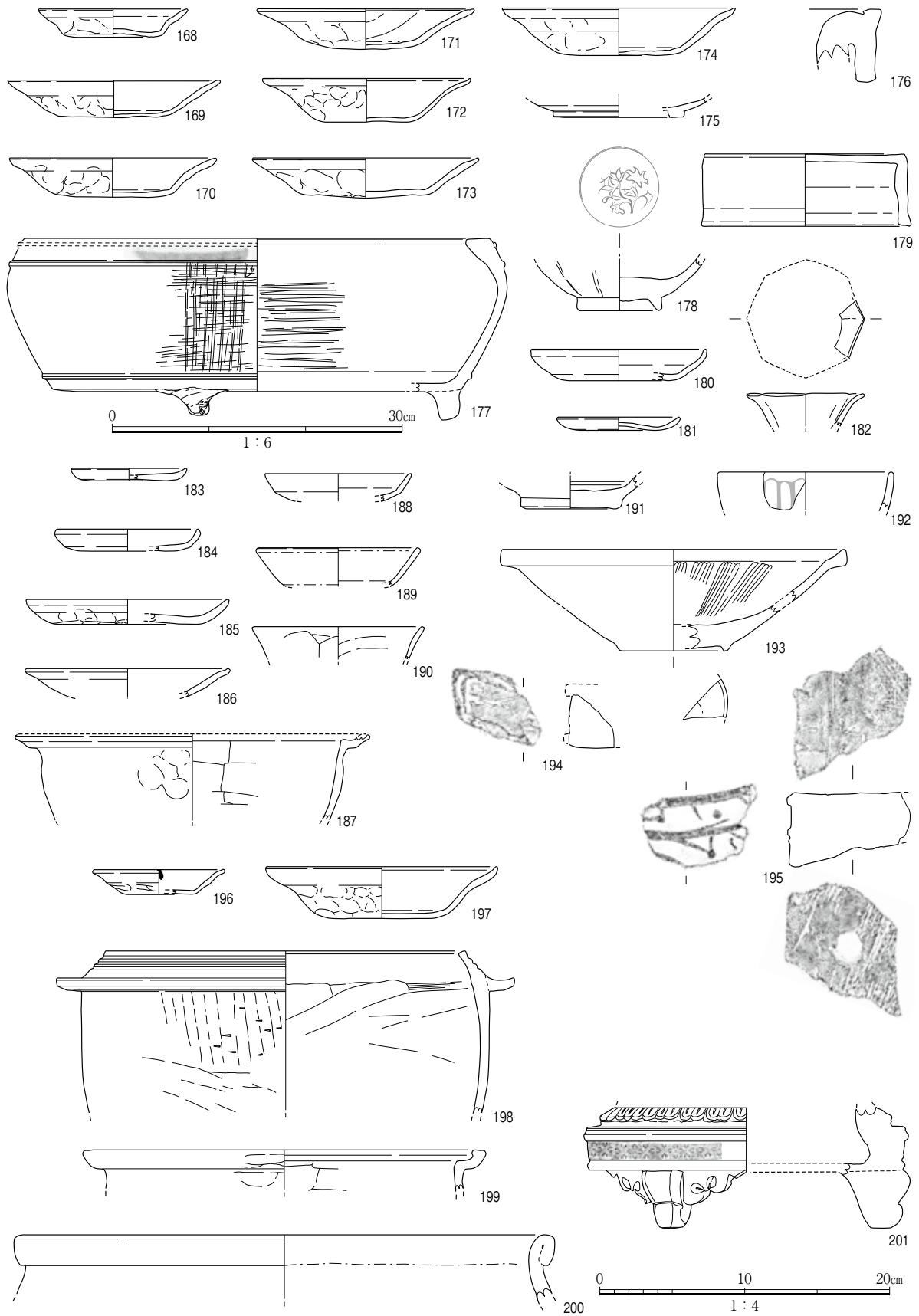


図18 中世の遺構出土遺物(6)

SK185(168~179)、SK191(180)、SK192(181・182)、SK193(183~195)、SK202(196~200)、SK211(201)

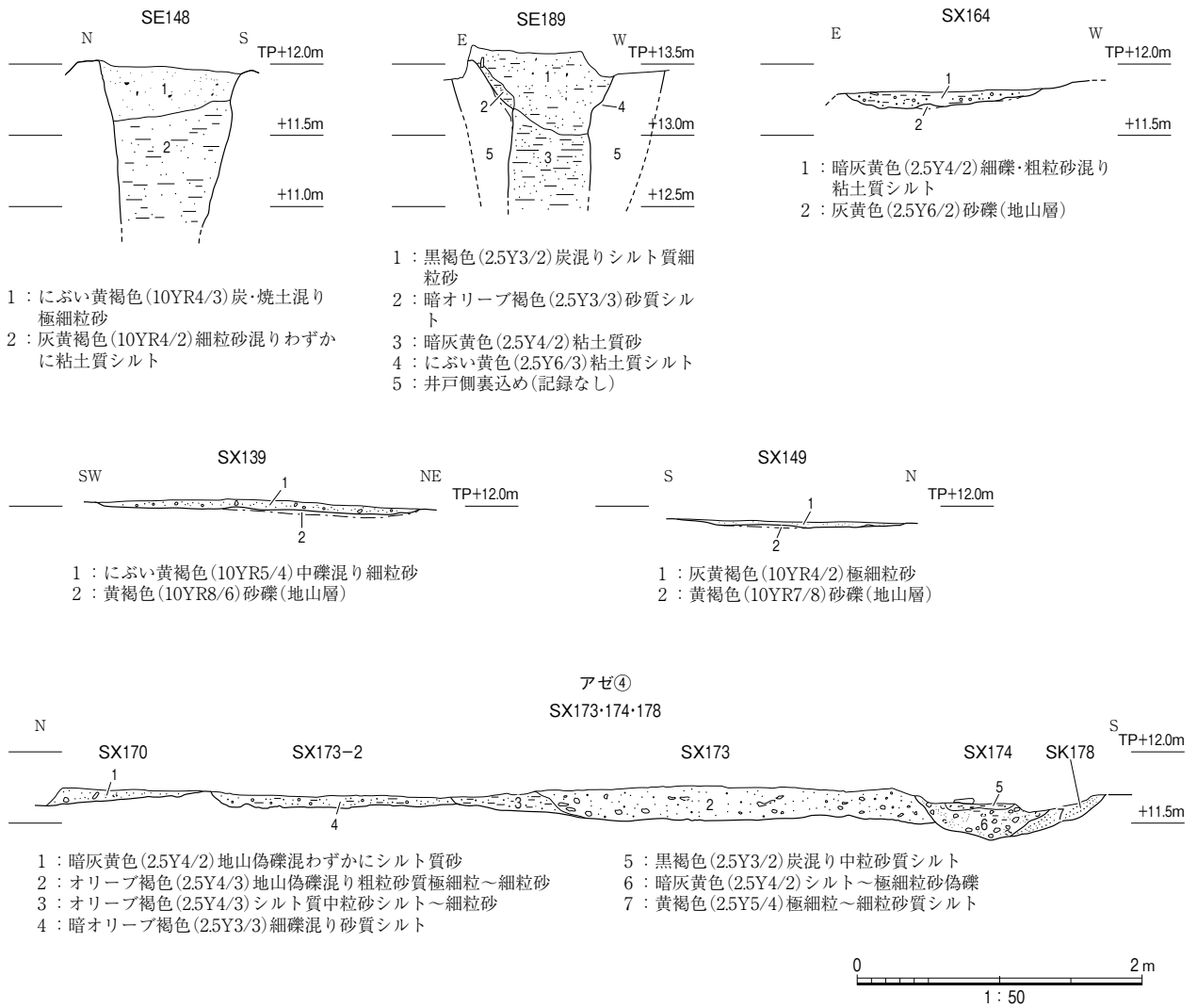


図19 遺構断面図(1)

SK205 調査区中央北部に位置し、東西1.16m以上、南北0.2～0.4m、深さ0.15mの不整形な土壌である。埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/3)中礫・細礫混り極細粒砂で埋められている(図20)。中世の土師器が出土した。

SK207 調査区南西部に位置し、東西0.66m以上、南北1.67m以上、深さ0.45mである。中央部を攪乱で破壊されている。灰黄褐色(10YR4/2)地山偽礫・粗粒砂混りシルト質細粒砂で埋められていた(図21)。中世の土師器・瓦器が出土した。

SK211 調査区北東部にあり、SB02に切られる。東西0.65m、南北0.62m、深さ0.10mの不整形な土壌である。出土した瓦質土器201は奈良火鉢の風炉である(図18)。底部外面に花菱文を巡らす。15世紀前半のものであろう。

このほか土採り穴以外の土壌は、SK159・161・178・168・184・184-2があるが、時期が判定できる遺物は出土しなかった。

#### b. 近世の遺構と遺物

以下は第5層上面で検出した遺構のうち、近世に属するものである(図7)。

SP134 調査区南東部に位置し、東西0.42m、南北0.43m、深さ0.24mの円形を呈する。灰黄色

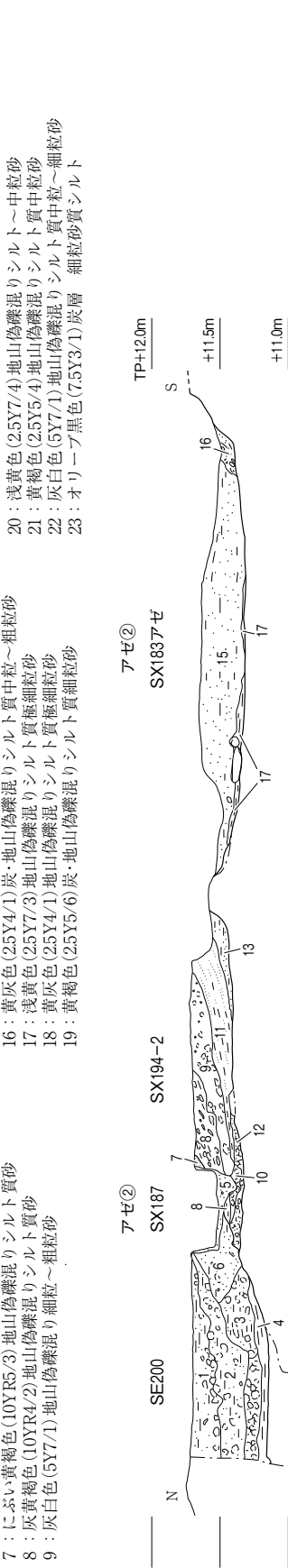
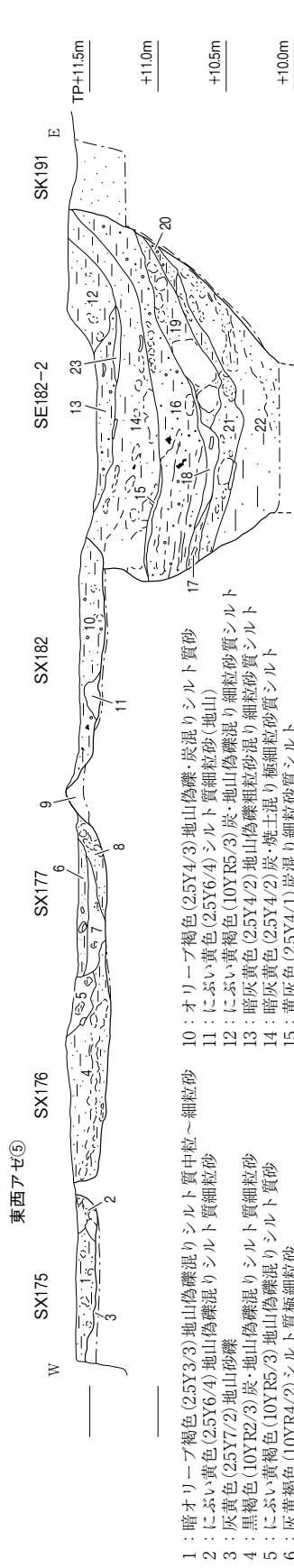
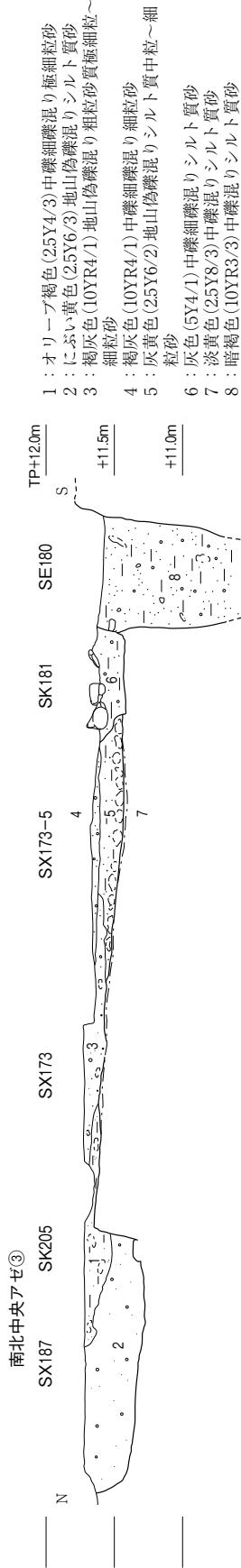


図20 遺構断面図(2)

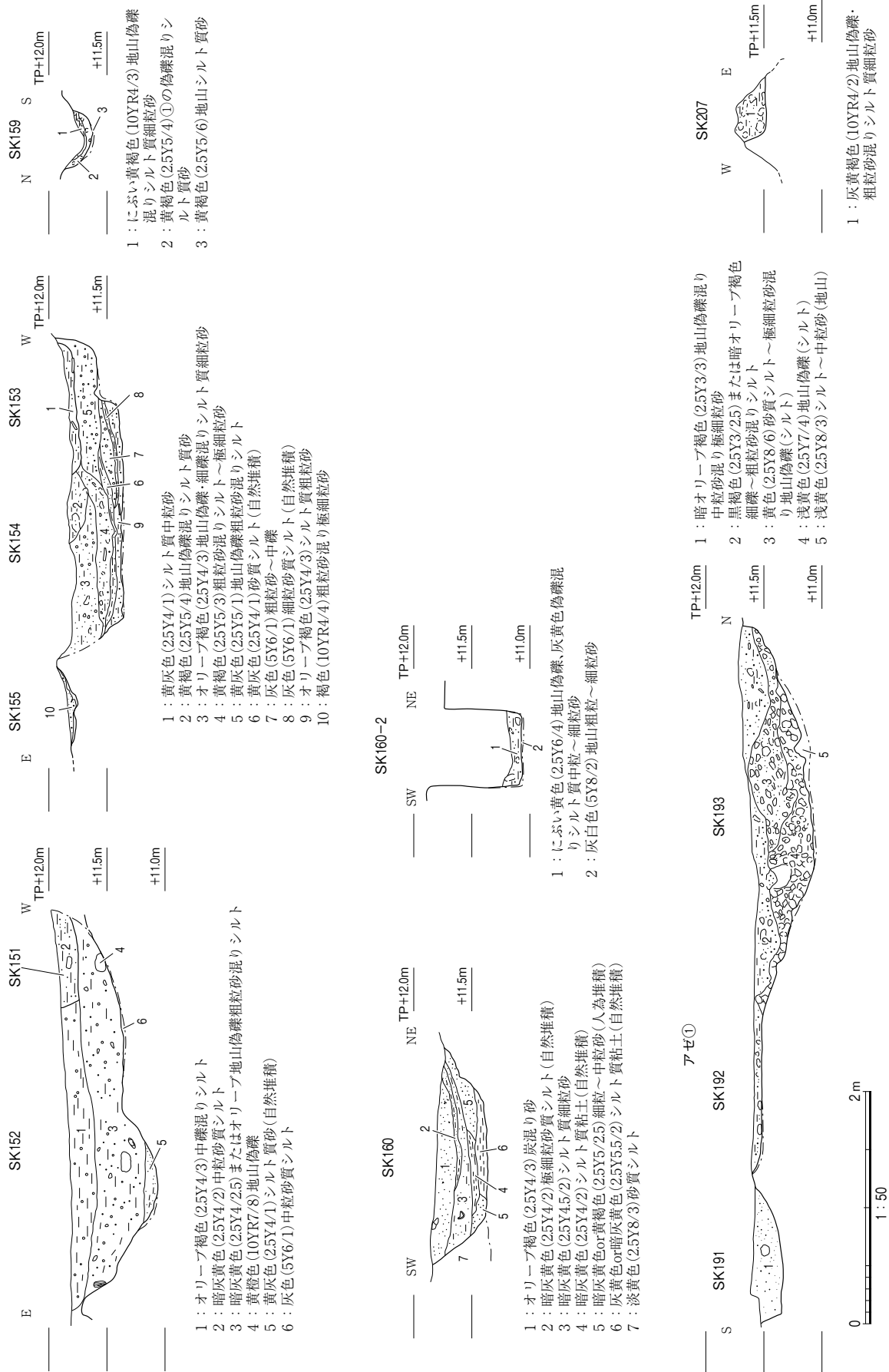


図21 遺構断面図(3)

(10YR5/2)細礫混りシルト質中粒砂である。17世紀後半の土師器が出土した。

**SX175** 調査区中央南西部に位置し、東西1.55m以上、南北3.40m以上、深さ0.09mである。埋土は暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)地山偽礫混りシルト質中粒～細粒砂、にぶい黄色(2.5Y6/4)地山偽礫混りシルト質細粒砂で埋められていた(図20)。形態的には土採り穴に近く、中世の遺構に近世の遺物が混入した可能性もある。近世の土師器・瓦器・瓦質土器・肥前陶器・中国産白磁などが出土した。

**SK153** 調査区南西隅に位置し、東西1.20m、南北1.0m、深さ0.14mである。底部に黄灰色(2.5Y4/1)シルト質中粒砂が堆積し、上部は黄褐色(2.5Y5/4)中・細礫混り砂質シルト(図21の3層)などで埋められていた。土師器・備前焼・丹波焼・肥前陶器・肥前磁器・瓦など17世紀後半以降の遺物が出土した(図22)。203は肥前陶器で呉器手の碗である。内外面に透明釉を施す。17世紀後半であろう。

**SK172** 調査区中央北西部に位置し、東西0.58m、南北0.53m、深さ0.26mを測る。埋土は灰白色(10YR8/2)中礫混り細粒砂である。土師器・須恵器などが出土した(図22)。207は土師器皿で、灯明皿として使用している。口縁端部は丸みを持ち、底部は平底気味である。口縁端部外面に施したナデの範囲は狭く、器壁はやや厚い。豊臣後期に属するものであろう。

**SK199** 調査区東部に位置し、東西1.45m以上、南北0.49m、深さ0.46mの土壇である。暗灰黄色(2.5Y5/2)地山偽礫混り砂質シルト、黒褐色(10YR3/1)地山偽礫混りシルトで埋められていた。近世

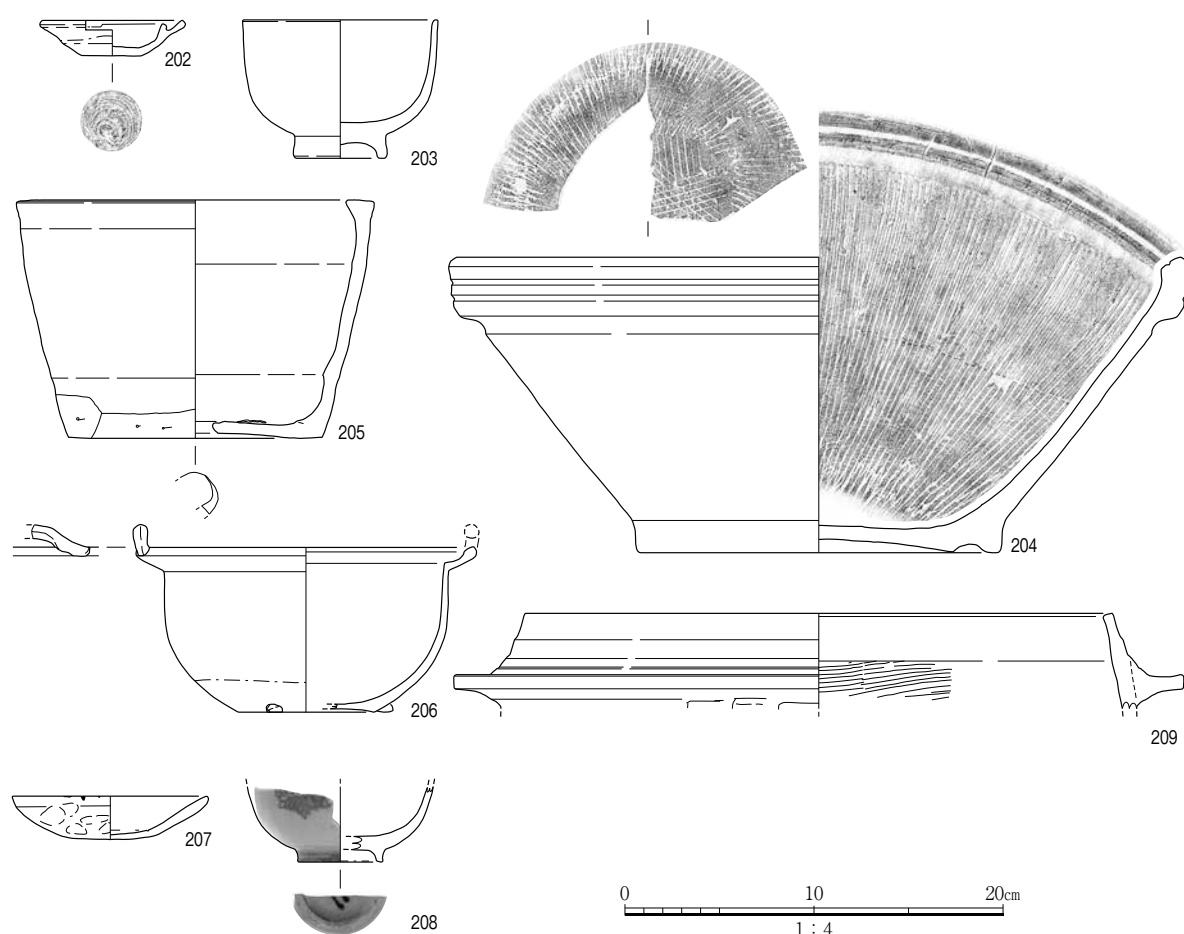


図22 近世の遺構出土遺物

SE200(202・204)、SK153(203)、SK160(205・206)、SK172(207)、SK181(208・209)



の土師器・瓦器・瓦質土器・常滑焼・瀬戸美濃焼・備前焼・肥前陶器、瓦が出土した。

第5層上面で検出した遺構には本来は第3層上面から掘り込まれた遺構も混在する。第3層の年代は18世紀であるので、出土遺物に18世紀以降のものを含む遺構は第3層上面のものと判断した。以下の遺構がそれに当る。

SE173-3 調査区北西部に位置する井戸である。東西1.22m、南北1.60m、深さは1.04mまで掘り下げたが、底に達していない。埋土はにぶい黄橙(10YR7/2)地山偽礫・細礫混り砂質シルトなどで埋められており、18世紀以降の土師器・瓦器・肥前磁器などが出土した。

SE200 調査区中央北東部に位置し、SK185を切る。東西1.08m、南北1.15m、深さは1.05mまで掘り下げたが、底に達していない。灰黄色(2.5Y7/2)粘土質シルト～砂質シルトで埋められている(図20)。肥前陶器・肥前磁器・堺播鉢・軟質施釉陶器、瓦などの遺物が出土した(図22)。202は軟質施釉陶器の灯明受皿である。204は堺播鉢である。胎土には石英・長石を多量に含み、内面は底部中央付近まで密に擦目を施す。底部中央の擦目は三角形とみられる。18世紀後半に属するものであろう。

SK160 調査区南西部に位置し、東西1.83m、南北1.10m、深さ0.48mである。流入した細粒な堆積物の薄層を挟みながら、オリーブ褐色(2.5Y4/3)炭混り砂、暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂などで埋められている(図21)。18世紀後葉以降の土師器・備前焼・肥前磁器・関西系陶器、瓦、石製品が出土した(図22)。205は堺産とみられる鉢である。底部中央を穿孔し、植木鉢として使用している。206は関西系陶器の土鍋である。内外面に鉄釉を施す。底部外面には小ぶりの脚を貼り付ける。以上は18世紀後半に属する。

SK181 調査区中央部に位置し、東西0.97m、南北0.83m、深さ0.21mである。灰色(5Y4/1)中礫細礫混りシルト質砂で埋められており(図20)、0.15～0.34mの石が複数検出された。土師器・瓦器・瓦質土器・肥前陶器・肥前磁器・国産青磁、瓦など18世紀初頭の遺物が出土した(図22)。208は肥前磁器の染付碗で、外面にはコンニャク印判により桐文を施す。18世紀前半であろう。209は瓦質土器の羽釜で15世紀代に属し、下位層からの混入品であろう。

### iii) 包含層出土遺物(図23)

第2～4層からは中世～近代の遺物が出土している。第4層出土としたものは本来いずれかの遺構に属するものであるが、側溝掘削時など遺構の峻別ができない段階で出土したもので、ここでは一括している。第2・3層は近世以降の地層であるため、中世以前の遺物はすべて混入と考えられる。以下では特徴的な遺物を抽出して記述する。

210～215は土師器皿である。216は中国産白磁の小碗、217は同碗である。218は中国産青磁の碗である。219は軟質施釉陶器の向付で、全体に長石釉を掛け、内外面に鉄絵を施す。高台内には判読不明の銘がある。断面は橙色を呈する。220～222は肥前磁器である。

220は染付碗の蓋で、内外面に蕪の文様を施す。221は白磁の紅皿である。222は染付の段重で、外面に蛸唐草文を施す。223は備前焼の徳利で、口縁部の一か所を欠損するもののほぼ完形である。底部外面には分銅形の刻印を有する。224は壺屋焼の徳利で泡盛容器である。225は瀬戸美濃焼磁器の染付皿で、内面には型紙刷絵を施す。226は中国産磁器で外面瑠璃釉の小杯である。227はベトナム中



外型部分に当たる。

以上のうち、211・217・218は13世紀後半～14世紀、212～216は15世紀～16世紀前半、210は16世紀中～後葉・219・223・227は16世紀後葉～17世紀初頭、220～222は18世紀、224・226は19世紀前～中葉、225は19世紀後葉に属する。

### 3) まとめ

#### i) 今回検出の遺構について

今回の調査では古代末～近世の遺構を検出した。もっとも、最古のものは11世紀後葉(SE182-2)で古代末～中世初頭に当るから、実質的には中世・近世の遺構ということになる。遺構の種類は、建物・井戸・土壙と土採り穴があり、前三者は居住に係るもので土採り穴は生産に係るものである。居住に係る遺構の年代は、11世紀後葉の後に間隙を挟んだ後、13～18世紀の間に散らばっていて、この間に居住地が継続したことがわかる。一方、土採り穴は15世紀代にほぼ限られ、この一時期に居住地の一部で土採りが行われたということであろう。

上記の遺構について、特徴的なことをいくつか挙げる。まず、土採り穴については、数寄屋建築の流行で「天王寺土」が盛んに採掘される近世後半より相当に古い。ほぼ同時期の土採り穴はST85-1次調査などでみつかっていて[大阪文化財研究所2015]、寺院で多用される土壁や築地用の採土が目的であったと推定できる。ST85-1次調査地は四天王寺伽藍地内に当るとみられるが、他者の土地でこのような行為を行わなかったと考えれば、当調査地は少なくとも寺域の中ということになるであろう。また、SK199の埋土は礫・粗粒砂のみからなっており、壁土(あるいは焼物)の混和材を貯蔵した穴とみることも可能である。その場合、そうした生産活動も行われたということになるであろう。

中国産白磁合子蓋166(SK154出土)、ベトナム産陶器179(SK185出土)、風字硯131(SX183出土)などは一般の集落の出土品とするとかかなり珍しく、寺の機構と何らかの関係をもつ人の存在が想定される。

#### ii) 四天王寺周辺の町場の拡大について

通説として、浄土信仰との関係で四天王寺西門が極楽浄土の東門として信仰を集め、寺西側の門前町が特に発達したという考え方があり。それに対し、中世を通じてみた場合に、寺の東西に想定される人口にさほど差はなかったとする批判がある[南秀雄2021]。井戸の分布密度が人口の偏りを反映するという前提で、中世四天王寺周辺の発掘調査で発見された井戸の数を単位面積当りで比較すると、西側に圧倒的な優位はみとめられないとするものであった。この説に今回の成果を加味したものが図24で、東側と西側の差はさらに縮まっている。浄土信仰とは関係のない寺東側地域(南側も)にも無視できないほどの人口があったことを読み取ることができるのである。

さらに浄土信仰と発掘調査で発見された遺構の関係を検討してみる。浄土信仰が広まり、貴族が盛んに参詣を行ったのは11・12世紀であるが、門前に当る地域でこの時期の遺構は意外にも少ない。信仰や参詣の主たる舞台となったのが、西門内外で門にごく近接した場所に設けられた念仏堂であったことに関係するのではないだろうか。12世紀末頃からは参詣の停止令が度々出されて有力者の参詣は

減っていった。その一方で、寺西側の門前町とされる地域で遺構が増えるのは13～16世紀であるから、浄土信仰の流行と門前町の拡大には時期的な齟齬がみとめられるのである。もっとも、庶民を主体とした「西門信仰」は近世にも続くので、やはりその流行と門前町の拡大は関係なかったとは言えないが、イコールとするには躊躇いを覚えるのである。

それでは浄土信仰の流行以外にも門前町発達の原因があるのではないか。これは今後の課題であるが、二つの可能性を示しておきたい。一つ目は交通との関係である。上町台地南部では古代条坊制の地割が中世・近世にも踏襲されていて[高橋工2010]、四天王寺周辺も例外ではない(図25)。南大門の南約90mの東西道路(図24)は難波京の条路(何条目かは不明)を踏襲したもので、古代には渋川道に接続する可能性が高く、近世「元和再建四天王寺図」には「大和街道」とされる。「往大路」の字名も明治までは残っていた。石鳥居の西は中世「一遍上人絵伝」にみるように境内地の西を画する道路で、難波京の西三坊(大)路に合致する。発掘調査では中世に下るが道路側溝も検出されている[大谷女子大学資料館1985・2000]。また、その西、字「椎寺外」の西を画する南北道路は、難波京西四坊東坊間(小)路に合致し、特に室町時代以降に庶民等によって流行する熊野参詣の経路(熊野街道)となった。

難波京朱雀大路は京の設計ラインとしては確かに存在したであろうが、発掘調査の結果からみても、あるいは地形条件からみても、実際に古代・中世において中心大路の役割を果たしていたとは考えられない。とすれば、東方・南方から難波に入る場合、上述の四天王寺南・西面を巡る道路は幹線道路であったはずである。四天王寺の門前町は、古代から交通面において発展しやすい条件下にあり、商業の発達や宗教関係の流行などを契機として、町場が拡大したのではないだろうか。

二つ目は四天王寺寺域との関係である。冒頭に述べた寺域「東西撥町、南北陸町」に照らせば、11世

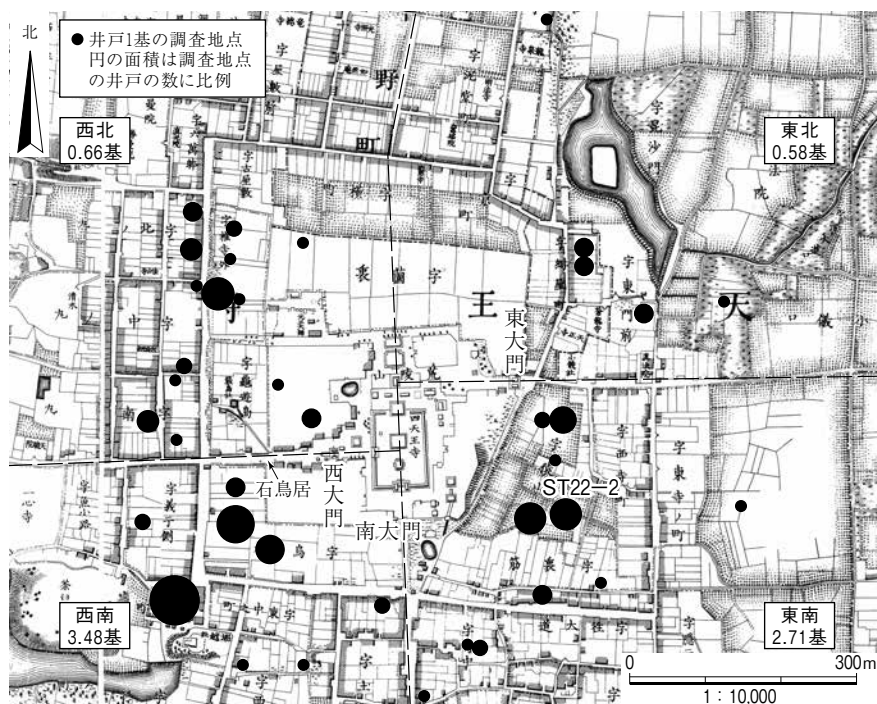
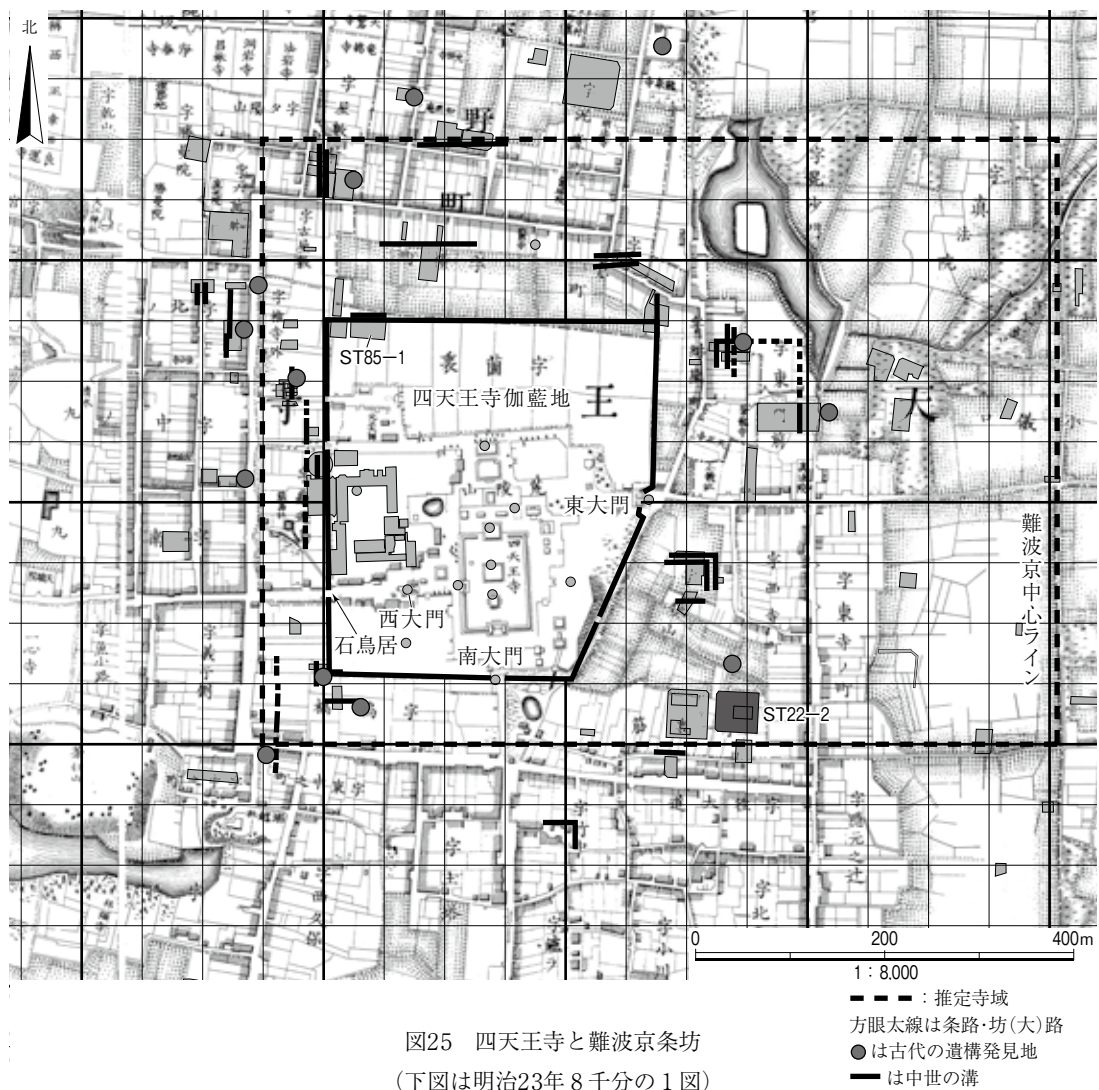


図24 四天王寺周辺で発掘された中世の井戸の分布  
([南秀雄2021]を改変；下図は明治23年1万分の1図)

紀の時点で、伽藍地の東方、朱雀大路推定ラインまでは間違いなく寺域に含まれる。寺域に暮らす人達は、生産や出仕によって寺を支える役割があったはずで、各時代を通じてある程度の規模をもつ集落が継続したはずである。この地域の発掘成果からみれば、屋敷地を囲むような溝があり、また、生産に係る遺構、一般の集落ではあまり出土しない遺物などがあって、こうしたものに寺域内集落の特色が表出しているのかもしれない。いずれにしても、門前町とは同一に論じられない可能性は高いが、町場を形成していたことが想像されるのである。



#### 引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「四天王寺旧境内遺跡発掘調査(ST07-2)報告書」:『平成19年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.69-74

2010、「天神橋遺跡発掘調査(TJ08-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.11-20

- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015a、「四天王寺旧境内遺跡発掘調査(ST13-5)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)』、pp.479-486
- 2015b、「上本町遺跡発掘調査(UH13-2)報告書」：『平成25年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.95-106
- 大阪市文化財協会2021、『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告Ⅱ』
- 大阪文化財研究所2011、『上本町遺跡発掘調査報告Ⅱ』、pp.1-30
- 2015、「ST95-9次調査」：『大阪市北部遺跡群発掘調査報告』、pp.71-74
- 2015、「ST85-1次調査」：『大阪市北部遺跡群発掘調査報告』、pp.74-84
- 四天王寺文化財管理室1986、『四天王寺古瓦聚成』
- 豆谷浩之1996、「四天王寺の寺域と「境内」について—調査の成果を手がかりに—」：『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』、大阪市文化財協会、pp.120-130
- 南秀雄2021、「井戸からみた中世四天王寺の町」：大阪市文化財情報『葦火』202号、pp.4-5
- 大谷女子大学資料館1985、『四天王寺 —西門とその周辺Ⅱ—』
- 2000、『四天王寺 —西門とその周辺Ⅳ—』
- 高橋工2010、「奈良時代の橋と難波京」：『上本町遺跡発掘調査報告』Ⅰ、pp.67-71



第5層上面遺構検出状況(西から)



第5層上面遺構完掘状況(西から)





北壁地層断面



第5層上面  
SE182-2・  
SK193など  
(南東から)



第5層上面東部  
SB02・SE194など  
(北から)





SA01  
(北から)



SK193・  
土採り穴SX173など  
(東から)



土採り穴  
SX170・173など  
(北西から)





SE182-2と  
土採り穴SX176・  
177など  
(東から)



SX173・183など  
土採り穴埋土断面  
(西から)



SX176・182など  
土採り穴埋土断面  
(北西から)





阿倍野区文の里三丁目24他19筆における建設工事に伴う  
難波大道跡発掘調査(ND22-1)報告書

調査個所 大阪市阿倍野区文の里3丁目24他19筆  
調査面積 800㎡  
調査期間 令和4年10月5日～11月11日  
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査担当者 調査課長 高橋 工、大庭重信、藤原啓史



## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は東の上町台地、西の我孫子台地の間に位置し、難波大道跡推定地の西側に隣接する(図1)。北側には松崎町遺跡・美章園遺跡・文の里遺跡B地点、南側には桃ヶ池遺跡があり、複数の調査が行われている。北側約300mのND06-2次調査では中世の区画施設とみられる溝や土壇・耕作溝が検出され[大阪市文化財協会2007]、FM11-1次調査では中世の水田作土層から古代の遺物が出土している[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013]。難波大道跡を挟んだ東側のBI08-1次調査では4世紀後半～5世紀初頭の埴輪が出土し、かつて東側にあった「鐘子塚」が古墳である可能性が高くなった[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010a]。また、南側約250mのMG08-1次調査では中世末の井戸が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010b]。

大阪市教育委員会が行った試掘調査により、地表下約0.3～0.5m以下の深さで中世以前の遺構面および遺物包含層が検出されたという報告をもとに、調査を実施した。調査区は明浄学院高校のグラウンド西南端にあたる東西20m、南北40mの範囲で(図2)、重機によりグラウンドの整地層および攪乱埋土を除去した後、平面調査に着手した。近世の調査および旧石器遺物の捕集を目的とした部分調査を行った後、調査区東南端で深掘りを行い、地表下0.5m以下の第3・4層が人工遺物を含まない段丘構成層であることを確認した。当初計画では現地地表下1.5～2m程度まで平面調査を行うこととなっていたが、大阪市教育委員会と協議の上、地表下0.5m以下の平面調査は行わず、当初予定の約半分の工期で調査を終了した。

本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成して得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P値(東京湾平均海面値)を用いてTP+○mと表

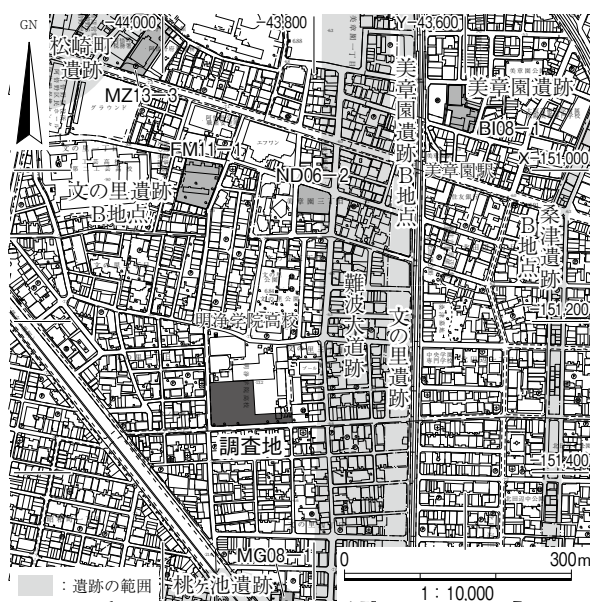


図1 調査地位置図

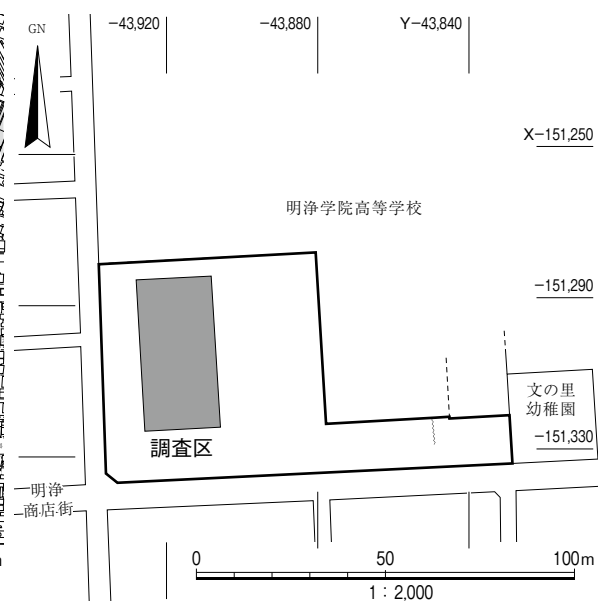


図2 調査区位置図

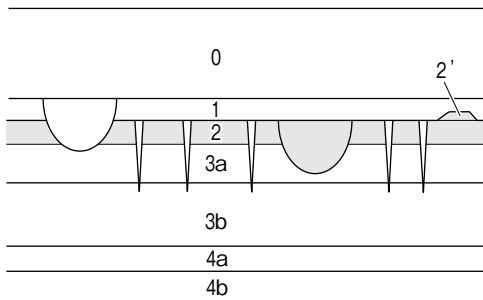


図3 地層と遺構の関係図

記した。

## 2) 層序

現地表面はTP+7.4~7.5mと平坦である。以下、TP+4.5mまでの地層を第0層~第4層に大別した。第2層上面で平面調査を行った後、第2層を部分的に掘り下げ、第3層以下は調査区南東端に設けた深掘りトレンチの断面で観察・記録を行った(図3~5)。

第0層：地山起源の偽礫を多く含む明浄学園の旧建物解体に伴う排土(下部)、グラウンド造成時に敷いたバラス(中部)、グラウンド表面の整地層(上部)からなり、層厚は40cm前後である。

第1層：黄褐色(2.5Y5/3)礫混じり砂質シルトからなる作土層である。層厚は10cm未満で調査区北東部にのみ遺存していた。本層から遺物は出土していないが、上面で18・19世紀の溝・土塋を検出し、第1層は近世の作土と考えられる。

第2層：灰黄褐色(10YR5/2)シルトからなる古土壌で、層厚は5~20cmである。調査区内ではTP+7.0m前後でほぼ水平に分布していた。本層上面からの乾痕が顕著に見られ、乾痕内を充填する細粒~極細粒砂を椀がけしたところわずかに火山ガラスや角閃石が含まれていた。微量のため火山灰

降下層準は特定できない。本層上面で倒木あととみられる土壌を確認した。なお、調査区東壁断面の一部で第2層の上位に最大層厚5cmの黒褐色(10YR3/2)粘土を確認し、これを第2'層とする。

第3層：第3a層と第3b層に区分した。第3a層はにぶい黄橙色(10YR7/3)シルト~シルト質粘土からなり、層厚は50cmある。第3b層は暗オリーブ灰(5GY7/1)ないしは黄色(5Y7/6)極細粒~細粒砂からなり、ラミナが断続的に観察できる。基底には極粗粒砂が薄く堆積する。層厚は300cmあり、第3b層から第3a層にかけて上方細粒化する。

第4層：第4a層と第4b層に区分した。第4a層はオリーブ灰色(5GY6/1)粗粒砂・礫混りシルト~極細粒砂からなり、層厚は5cmある。本層以下は上位層と比べて硬くしまる。層厚は5cmある。第4b層は黄色(5Y7/6)ないしは緑灰色(7.5GY6/1)中粒砂~礫からなり、層厚は30cmまで確認した。

層相および上下の関係から長原遺跡標準層序に対比させると[趙哲濟2003]、第2層はNG13B・C層、第3層はNG14~15層、第4層はNG16A層にそれぞれ相当し、第2・3層は低位段丘構成層、第4層は中位段丘構成層と考えられる。

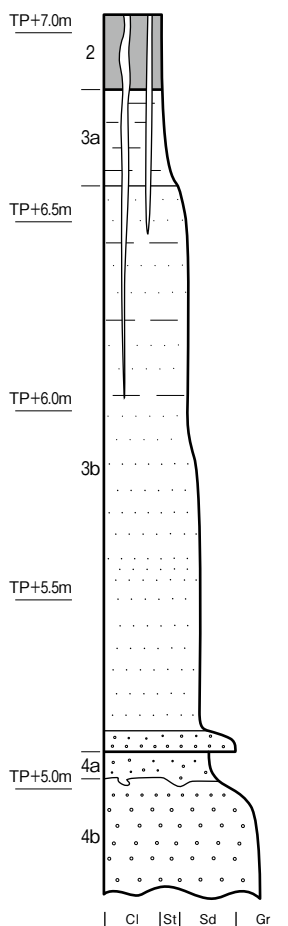


図4 深掘りトレンチ断面地質柱状図

## 3) 遺構と遺物

明浄学院高校のグラウンド造成に伴う第0層を除去後、調査区北東部

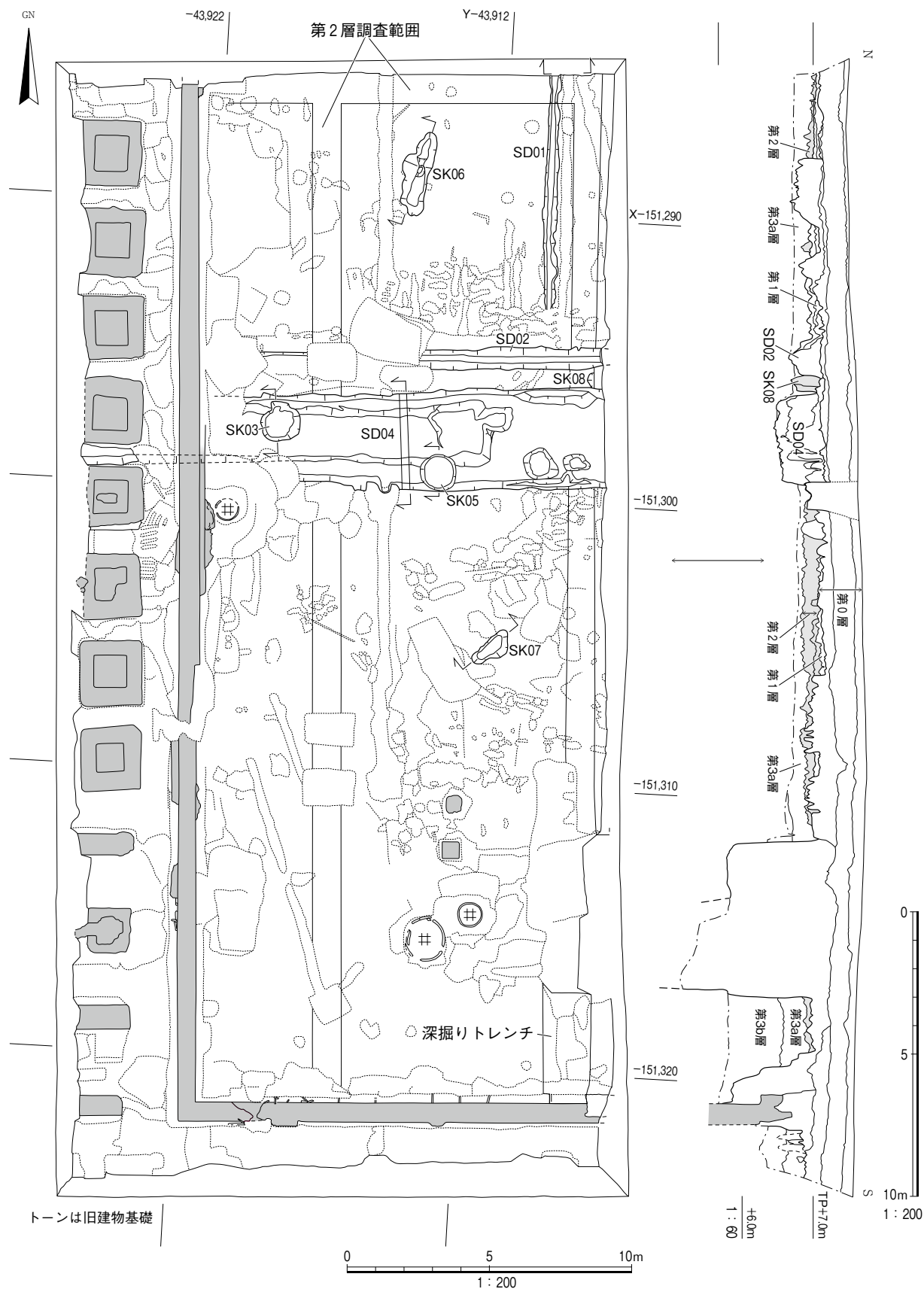


図5 調査区平面・断面図

に近世の作土である第1層が部分的に遺存していたが、大半が低位段丘構成層と考えられる第2層が露出しており、調査区西端と南端には1921年に開校した明浄学院の校舎である建物基礎が残っていた。第2層上面で遺構検出作業を行ったのち、調査区東壁添いおよび調査区中央に幅1mの南北トレンチ、調査区北壁添いに幅1mの東西トレンチを設けて石器遺物の捕集を目的に第2層を掘り下げたが、遺物は出土しなかった。

i) 第2層上面(図5・6)

調査区北部でSK06、調査区中部でSK07、調査区東壁でSK08を検出した。

SK06は長軸3.0m、短軸0.9m、深さ0.3m、SK07は長軸1.5m、短軸0.7m、深さ0.2mの不整楕円形で、SK08は長軸0.5m以上、短軸0.5m、深さ0.3mある。いずれも第2層の黒褐色粘土を埋土とし、下半が偽礫化していることから、風倒木と考えられる。遺物は出土しなかった。

ii) 第1層上面(図5～7)

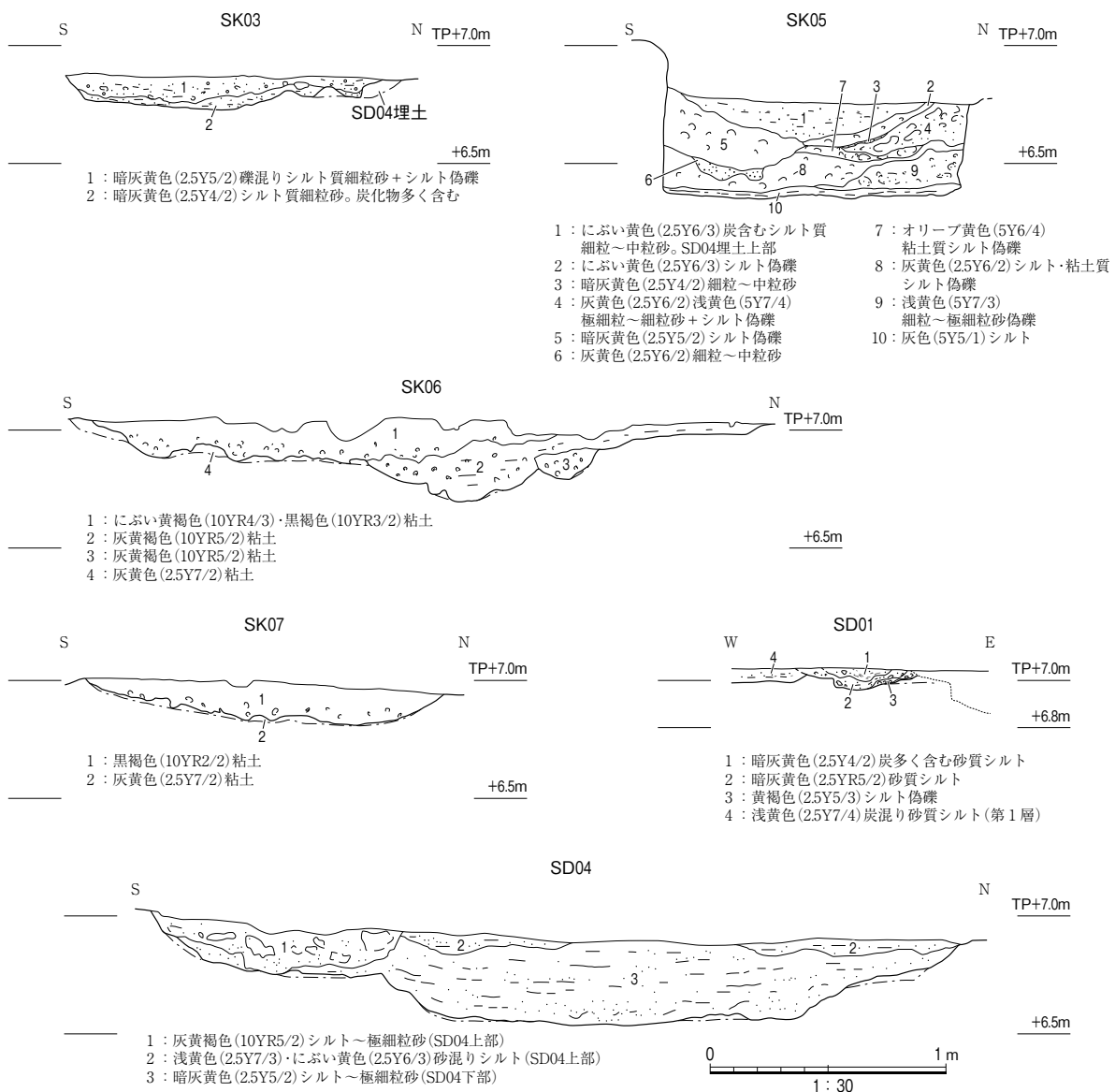


図6 遺構平面・断面図

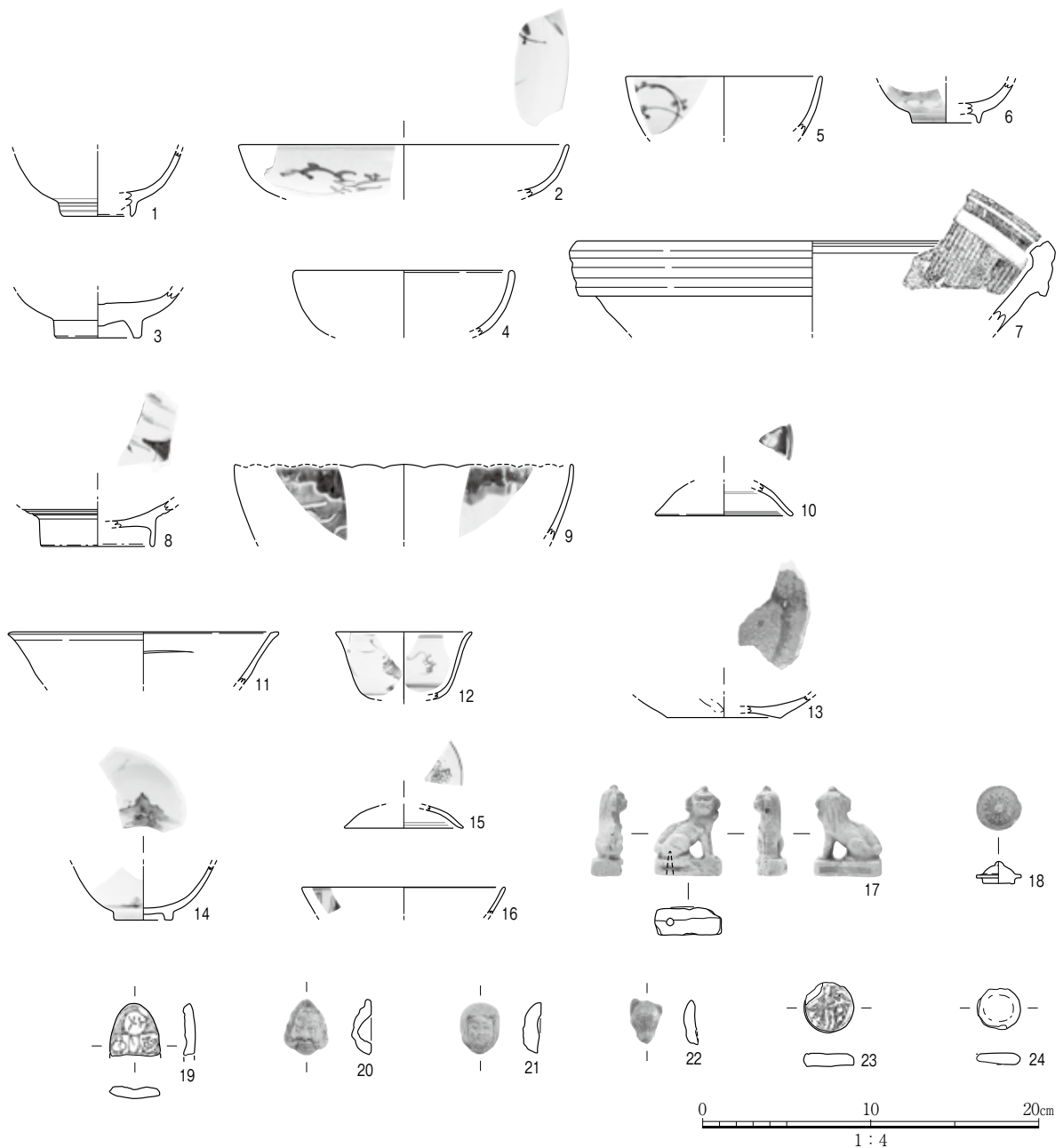


図7 出土遺物実測図

SD04(1~4)、SK05(5~7)、SK03(8~10)、SD01(12・13)、SD02(11・14~25)

調査区北半でSD01・02・04、SK03・05を検出した。

SD01は調査区北東部で検出した南北溝で、幅0.5m、深さ0.1mある。南端は現代の攪乱により削平されているが、南側のSD02までは及んでいない。SD01からは三田磁器色絵碗12、瀬戸美濃焼陶器土鍋13が出土した。12は19世紀前半、13は18世紀後半以降のものである。

SD02は調査区北部、SD04の北側でこれと並走する東西溝で、幅0.7m、深さ0.3mある。中国産白磁碗11、肥前磁器染付碗14、三田磁器染付蓋15、瀬戸美濃焼磁器染付飯碗16、土人形狛犬17、軟質施釉陶器ミニチュア蓋18、ミニチュア丁銀19、芥子面子20~22、泥面子23、基石24が出土した。11は13世紀代の古い遺物の混入品で、14が19世紀初頭、15が19世紀前半、16が19世紀末のものである。

SD04は幅3.5m、深さ0.4mの東西溝で、深さ0.4~0.6mある。底は平坦であるが、中央以東は二段

落ちでさらに深くなっている。水成の極細粒砂～シルト層で埋まっており(下部層)、最終的に埋められていた(上部層)。東から西へ水を流すための水路であろう。SD04からは肥前磁器染付碗1、染付皿2、肥前陶器碗3、平碗4が出土した。18世紀前半のものである。

SK03はSD04と重複し、SD04埋没後に掘られた円形土壙である。直径1.4m、深さ0.15m遺存していた。下層に炭化物粒が多く含まれ、廃棄土壙と考えられる。SK03からは肥前磁器染付鉢もしくは大皿8、染付鉢9、瀬戸美濃焼磁器染付蓋10が出土した。8・9は18世紀後半～19世紀初頭、10は19世紀前半のものである。

SK05もSD04と重複する円形土壙で、直径1.3m、深さ0.6mある。SD04が水成層でほぼ埋まった後に掘られ、最終的にSD04と一連で埋められていた。底にシルト薄層が堆積することから水溜めに用いられたと考えられ、SD04が機能しなくなった後、これに代わるものとして掘られたのであろう。SK05からは肥前磁器染付碗5・6、堺播鉢7が出土した。18世紀前半から中葉のものである。

#### 4)まとめ

調査の結果、低位段丘構成層より上位の地層はほとんど遺存しておらず、部分的に近世の作土層、および18・19世紀の溝・土壙を検出したにとどまった。また、TP+7.0m前後でNG13B・C層に対比される古土壌(第2層)を確認したが、本層中から旧石器遺物は出土しなかった。

#### 引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010a、「阿倍野区文の里四丁目における建設工事に伴う桃ヶ池遺跡発掘調査(MG08-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.501-505
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010b、「阿倍野区美章園二丁目における埋蔵文化財発掘調査(BI08-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.493-500
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「文の里遺跡B地点発掘調査(FM11-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)』、pp.493-498
- 大阪市文化財協会2007、『難波大道跡発掘調査報告』
- 趙哲済2003、「大阪平野のおいたちと人類遺跡」：日本第四紀学会2003年大阪大会実行委員会編『大阪100万年の自然と人のくらし-普及講演会資料集』、pp.1-16

深掘りトレンチ  
第2～4層断面  
(東から)



調査区全景(北から)



SD04断面(東から)











## 第 2 部



## 中之島蔵屋敷跡発掘調査（SNX22－1次）報告書

調査箇所	大阪市北区中之島一丁目4-3～4-8
調査面積	18m <sup>2</sup>
調査期間	令和4年8月17日
調査担当者	課長 鈴木 慎一、宮本 康治

### 〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地は北区中之島1丁目に位置し、大阪府立中之島図書館敷地内で、中之島蔵屋敷跡の範囲内にあたる。本地点付近は近世には津山藩・檜原藩あるいは石見浜田・福井などの屋敷が位置したことが推測され（新修大阪市史編纂委員会1989ほか）、その後公園用地となったのちに1904（明治37）年には府立中之島図書館が建築され現在にいたっている（大阪府立中之島図書館1994ほか）。

付近の発掘調査の状況を見ると、中之島地域では調査地西方の3丁目以西において蔵屋敷跡の調査が行われており、広島藩、久留米藩、鳥取藩等が該当する地点で発掘され、多くの成果が得られている（大阪市文化財協会（以下、大文協）2003・2004a、2020、2022ほか）。また堂島川をはさんで北側では佐賀藩蔵屋敷跡があり調査されているほか（大文協1991等）、南側は大坂城下町跡として調査例が見られる地域である（大文協2004bほか）。調査地付近では蔵屋敷跡関連の遺構が想定されるものの、これまであまり調査例がなく、遺構・遺物の状況は明らかになっていなかった地点である（図1・2）。

本地点で建物の建替が計画され、令和3年11月18日に試掘を行ったところ、現地表下1.8m以下で本発掘調査を要する地層が遺存していることが判明した。そこで計画建物の掘削が及ぶことが想定され、既設建物の基礎で攪乱されずに残存状況が良好とみられる地点で発掘調査を行うこととなった。調査は令和4年8月17日に実施した。重機による掘削の後に人力での掘り下げ、検出作業等を進



図1 調査地位置図 縮尺1:5,000

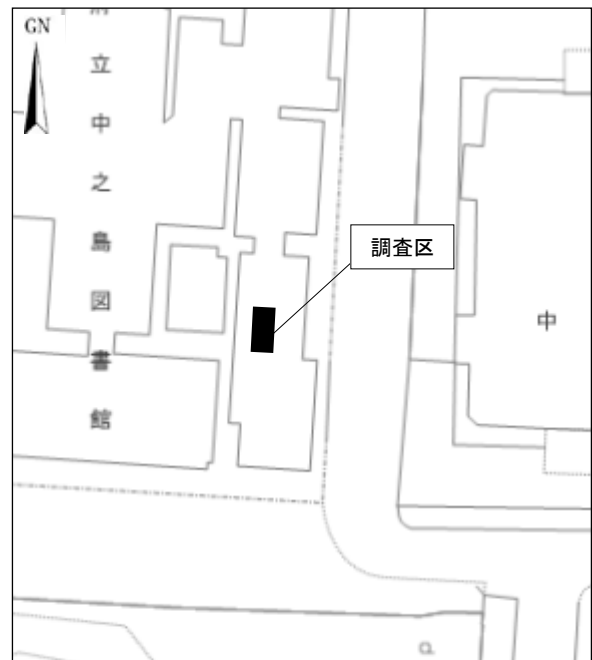


図2 調査区配置図 縮尺1:1,000

め、遺構の調査や写真・図面作成等の記録作業を行い、同日のうちに調査にかかわる作業を終え撤収した。

なお、調査地の方位については大阪市地図情報サイトのマップナビおおさか掲載の図にはめこんで求め、標高については国土地理院地図の敷地東側の道路面の標高をもとに記載している。

#### 〈調査の結果〉

##### 1. 層序 (図3、図版1～2)

調査においては部分的な確認を含め、現地表下約2.8mまでの状況を確認した。なお部分的な掘り下げを行ったが湧水もあって下位の観察は十分ではない。

第0層 褐色細～中粒砂やコンクリートガラ等を含む近現代の地層で、層厚は1.6mほどで、一部1.8～2.0mまでおよぶところもあった。

第1層 にぶい黄色細粒砂で、層厚は0.1m前後である。

第2層 にぶい黄～明黄褐色シルト質細～中粒砂で、層厚は0.2m程度である。第1、2層とも近世の盛土層とみられる。

第3層 黄褐色中～粗粒砂で、観察できた範囲では明確な自然堆積を示す構造は確認できていない。河川性の堆積に由来するものであろう。

##### 2. 遺構と遺物 (図3、図版1～2)

###### 主な検出遺構

主な検出作業は第2層の下面つまり第3層の上面で行った。ここでは数基の落込みを検出した。また地層が観察できた壁面では第1、2層の上面あるいはより上位からも遺構が形成されているようである。

SK01・02はともに廃棄土壌とみられるもので、SK01は検出状態では南北幅0.6mほど、SK02は南北幅0.9mほどで、壁面での観察ではより大きいとみられた。ともににぶい黄褐色シルト質砂を埋土としていた。SK03は直径0.5mの不整円形の落ち込みである。SK04は長径0.5mの落ち込みである。SK05は長径0.5m、短径0.3mほどの落ち込みで、いずれも暗褐色シルト質砂を埋土とする。SK06は西壁のみで確認した落ち込みである。SK07は調査区の南東で確認した落ち込みで、調査区外へと延びる。南北1.6m、東西1.1m以上の規模で、明治以降に下る可能性がある。

###### 主な出土遺物

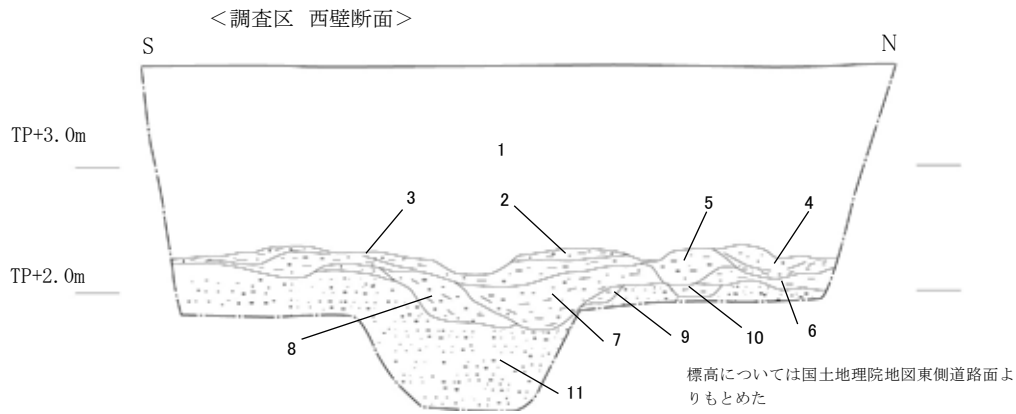
調査した遺構と各地層からの出土があった。第3層上面検出の遺構ではSK01で肥前磁器染付碗1や備前焼片や、土師器土釜2や皿、瓦、貝片など、SK02では備前焼の小壺3、土師器焙烙・瓦、SK03からは肥前陶器碗4などの遺物が出土している。17世紀後半あるいは18世紀にかかる時期とみられた。

また各地層からは第1・2層で肥前磁器や陶器、関西系陶器、瓦などの遺物が少量出土している。

#### 〈まとめ〉

本調査地では調査の結果、既設建物で現地表下1.5～1.8m付近まで破壊されていたものの、近世以前の地層が遺存しており、遺構・遺物を確認することができた。

最も下位では第3層とした砂層があって河川性の堆積に由来するとみられた。盛土の可能性があるが、開発がどのように開始されるかなどは明らかにできなかった。第2層とした整地以降は詳細は不明ながら屋敷地となっていくことが推測され、その整地は形成されている遺構からみると17世紀～18世紀前半以前とみられた。検出遺構には廃棄土壌があり、屋敷地内の一角の可能性はあるが、



- |                          |                         |
|--------------------------|-------------------------|
| 1: 現代の攪乱(第0層)            | 7: にぶい黄褐色シルト質細粒砂(SK02)  |
| 2: にぶい黄色中粒砂(第1層)         | 8: にぶい黄褐色シルト質細粒砂(SK01)  |
| 3: にぶい黄～明黄褐色シルト質細粒砂(第2層) | 9: 褐色細粒砂(SK06)          |
| 4: 褐色細粒砂(第2層)            | 10: 浅黄色細粒砂(SK04)        |
| 5: 浅黄色シルト質細粒砂(第2層)       | 11: 浅黄～にぶい黄褐色中～粗粒砂(第3層) |
| 6: オリーブ褐色細粒砂(第2層)        |                         |

＜第3層上面での遺構検出状況＞

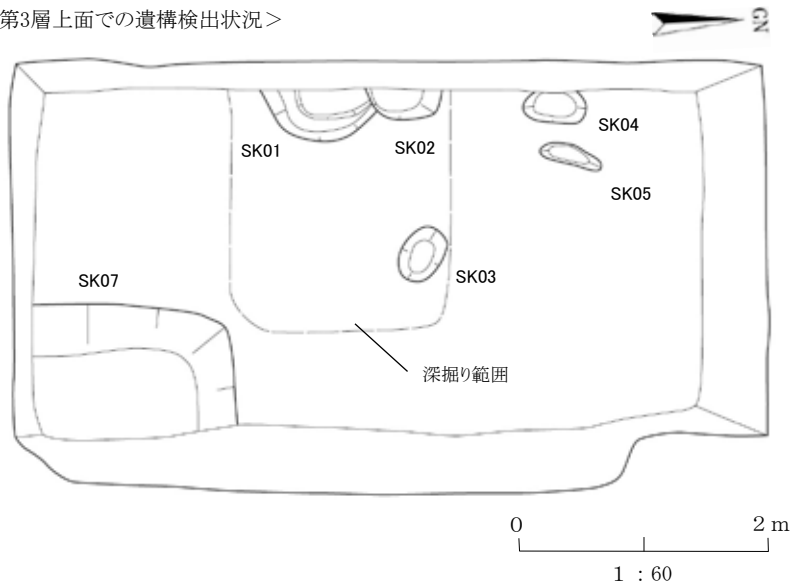


図3 調査区平面・断面図

どのような場所かなどかは不明である。主に確認できた地層および遺構の時期は17～18世紀代で、18世紀後半から19世紀代など、より後の時期の遺構は建物建設等で失われているようである。また蔵屋敷跡の調査においては、屋敷を営んだ藩の国元との関係をうかがうことのできる遺構・遺物が確認される場合もあるが、今回の調査ではそうした成果は得られていない。

以上のように、調査面積が大きくはなかったものの、17世紀あるいはそれ以降に屋敷地となり遺構が形成されたことが観察された。中之島地域でも1丁目付近ではこれまで知見のなかったことから、考古学的な側面から地域の変遷について資料を加える機会となった。

【引用参考文献】

- 大阪市博物館協会大阪文化財研究所2012『佐賀藩大阪蔵屋敷跡発掘調査報告』  
大阪市文化財協会1991『旧佐賀藩大坂蔵屋敷船入遺構調査報告』  
大阪市文化財協会2003『広島藩大坂蔵屋敷跡発掘調査報告』 I  
大阪市文化財協会2004a『広島藩大坂蔵屋敷跡発掘調査報告』 II  
大阪市文化財協会2004b『大坂城下町跡』 II  
大阪市文化財協会2020『広島藩大坂蔵屋敷跡発掘調査報告』 III  
大阪市文化財協会2022『久留米藩大坂蔵屋敷跡発掘調査報告』 I  
大阪府立中之島図書館1994『大阪府立中之島図書館90年』  
新修大阪市史編纂委員会1989『新修大阪市史』 第3巻





西壁断面の状況（北東から）



第3層上面完掘状況（北から）



第3層上面検出状況(北から)



SK01～03出土の主な遺物(1・2:SK01、3:SK02 4:SK03)

1:肥前磁器碗、2:土師器土釜、3:備前焼小壺、4:肥前陶器碗

## 天神橋遺跡発掘調査（STJ22 - 1次）報告書

調査個所	大阪市北区天神西町14-3、4、5、6、7
調査面積	21 m <sup>2</sup>
調査期間	令和4年8月22日～8月23日
調査担当者	課長 鈴木慎一 田中裕子

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は天神橋遺跡の西南部に位置する。付近一帯は、古代には東大寺新羅江荘あるいは安曇江荘の推定地であり、また古代の難波津・中世の渡辺津の北岸地域でもある。豊臣期には城下町天満として整備され、調査地の西側には慶長3（1598）年掘削の天満堀川が通っている。徳川期は大坂三郷の一つ、天満組の南西隅付近にあたり、北東約200mに位置する天満天神（大阪天満宮）の門前町でもあった。東約100mには古代まで遡る可能性が示唆されている天神橋筋が通っている（新修大阪市史編纂委員会 1988）。

調査地周辺の既往の調査では、南側50mのTJ00-1次調査において、古墳時代の土器埋納遺構や奈良時代後半～平安時代の遺物、室町時代の遺構が見つかっている（大文協 2002）。調査地西側に隣接するTJ08 - 1次調査においても古墳時代～奈良時代の遺物、古代末～中世の井戸や土壌、近世の井戸などを検出し、その西隣のTJ16-1次調査でも中世の遺物がまとまって出土している（大市教・大文協 2010、2017）。北東側30mのTJ11-4次調査は弥生時代・古代～中世の遺物、中世の溝や土壌、近世の井戸などが検出され、大川北岸部の開発の様相が明らかになりつつある（大文研 2011）。

今回、建設工事に先立つ試掘調査で現地表下約1.7m以下の深さで本格的な発掘調査を必要とする近世以前の遺構面および遺物包含層が検出されたことから、本調査を実施することとなった。発掘調査は事前に工事業者によってGL-1.6mまで重機により掘削された状態で開始した。当初東西9m×南北3mの27m<sup>2</sup>を設定したが、東側が近代以降の新しい埋土で埋め戻されており、中心部には地盤改良杭があったため、西側の3m×3mを中心に調査を進め、西側6mは南北幅を2mとした。令和4年8月22日より人力掘削、遺構検出・掘り下げ、記録などの作業を行い、8月

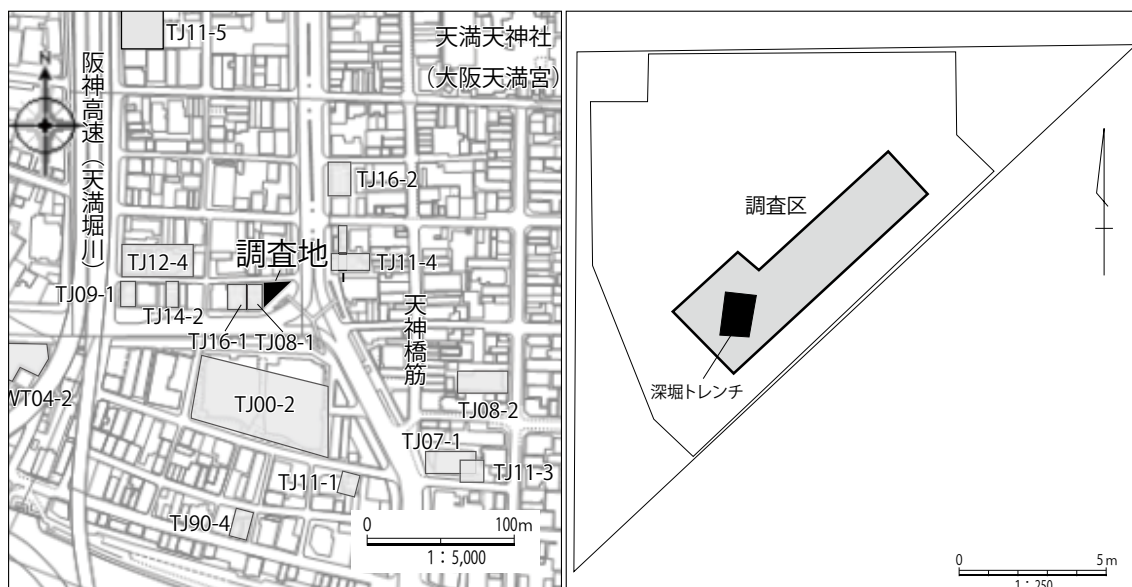


図1 調査地位置図

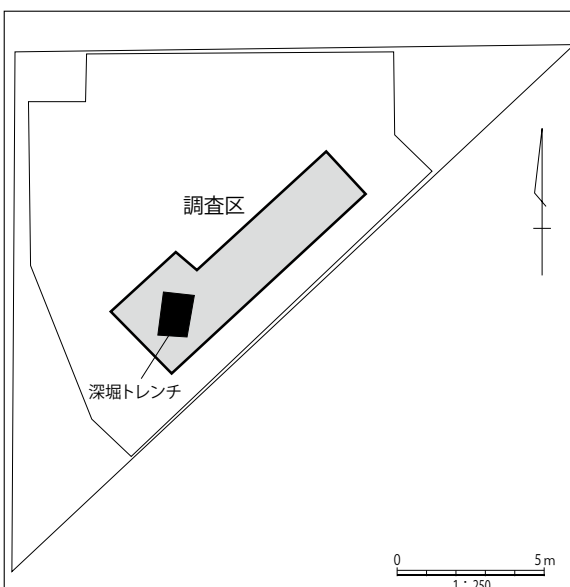


図2 調査区位置図



図3 地層と遺構の関係図

23日に現場作業は終了した。

本報告で用いた方位は、世界測地系に基づく座標北を基準とし、建物の配置を基準として街区図に当てはめて求めたものである。標高はT.P. 値（東京湾平均海面値）を用い、本文および図中ではTP±〇mと表記した。

〈調査の結果〉

1. 層序 (図3・4、図版1)

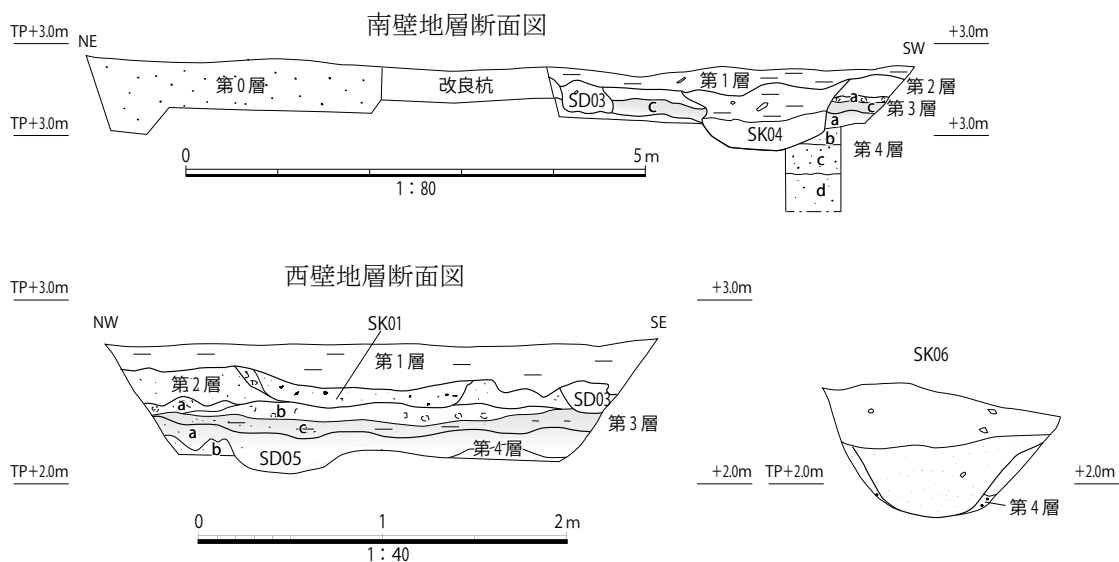
調査地はTP+4.6m前後で、ほぼ平坦である。

第0層 事前に重機によって掘削されていたGL-1.6mまでの部分、および近・現代以降の攪乱部分を第0層とする。

第1層 近世末の盛土層である。灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂質シルトからなり、層厚は8~30cmである。瀬戸美濃磁器染付碗1、肥前磁器青磁染付皿2・肥前陶器碗・丹波焼すり鉢、砥石、中国産青花碗が出土した。19世紀前半までの遺物を含む。

第2層 近世の盛土層である。灰オリーブ色(5Y5/2)シルト質細粒砂からなり、層厚は5~20cmである。肥前磁器染付碗3、肥前陶器碗・甕、関西系陶器碗4、土師器皿、頁岩製砥石など、18世紀後半ころを中心とする遺物が出土した。本層上面の検出の遺構としてSK01・SK04・SD03がある。

第3層 中世の作土・古土壌である。第3a~3c層に分かれる。第3a層は暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂シルトからなり、層厚は3~5cmで、偽礫を含む。第3b層は、灰黄褐色(7.5YR4/1)シルト質中粒砂からなり、よく攪拌されている。第3c層は黒褐色(10YR3/2)シルト質中粒~細粒砂からなり層厚は5~10cmである。上部に鉄分の析出が見られる。第3c層から瓦器の小片5が



- 第1層: 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂質シルト
- 第2層: 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト質細粒砂
- 第3a層: 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂シルト
- 第3b層: 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質中粒砂
- 第3c層: 黒褐色(10YR3/2)シルト質中粒~細粒砂
- 第4a層: 黒褐色(7.5YR3/1)わずかにシルト含む中粒砂
- 第4b層: 黒褐色(7.5YR3/2)中粒砂
- 第4c層: にぶい黄褐色(10YR4/3)中礫含む細礫~極細粒砂
- 第4d層: にぶい黄褐色(10YR7/4)細礫含む粗粒砂

図4 調査区地層断面図

出土したほか、第3層一括として土師器皿・甕や黒色土器B類椀6、須恵器杯蓋7、備前焼の可能性のある播鉢8なども出土している。

第4層 水成層である。第4a層～第4d層に分かれる。第4a層は、黒褐色(7.5YR3/1)わずかにシルト含む中粒砂からなり、層厚は15～20cmである。第4b層は黒褐色(7.5YR3/2)中粒砂で、層厚は約20cmである。第4a・4b層で土壌生成が進んでいる。隣接するTJ08-1次調査で検出された古土壌(第2A層)に対応する地層であろう。本層上面で検出した遺構としてSK06、SD05がある。第4c層は、にぶい黄褐色(10YR4/3)中礫含む細礫～極細粒砂からなり、層厚は約30cmである。第4d層は、にぶい黄褐色(10YR7/4)細礫含む粗粒砂からなり層厚は40cm以上である。第4c・4d層は深掘トレンチ内で確認した。遺物の出土はない。

## 2. 遺構と遺物(図4・5、図版1・2)

### ・第4層上面で検出した遺構

第4層上面で検出した遺構としてSK06、SD05がある。

SK06 調査区北角に位置する。直径1.1m、深さ0.4mの円形を呈する。埋土は上下2層に分けられる。上部は黒褐色(7.5YR3/2)シルト質中粒砂、下部は黒褐色(7.5YR3/1)シルト質中粒砂で、人為的に埋め戻されている。

出土遺物は埋土下部からは、土師器杯9・10、須恵器杯蓋11・12、甕13がある。9は杯Aで素文である。10は内面にまばらな放射状の暗文がある。11・12は杯B蓋であろう。13は内面に同心円当て具痕がある。これらの遺物は奈良時代後半を主体とする。

埋土上部からは、土師器皿、須恵器甕、瓦器14が出土した。14は内面底部にミガキがあり、皿とみられる。埋土上部としたが、暗色化しており掘り込み面が不明瞭のため、第3c層の可能性もある。

SD05 調査区の南角に位置する。幅0.6m、深さ0.1mの溝状の遺構である。埋土はにぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂で、第4a層で埋まる。人為的な掘削というより、自然に水が溜まった溝とみられる。遺物の出土はない。

### ・第2層上面で検出した遺構

第2層上面で、近世の遺構SD03、SK01・SK04を検出した。

SD03 幅0.5m、深さ0.4mの東西方向の溝状遺構である。埋土は黒褐色(7.5YR3/1)極粗粒

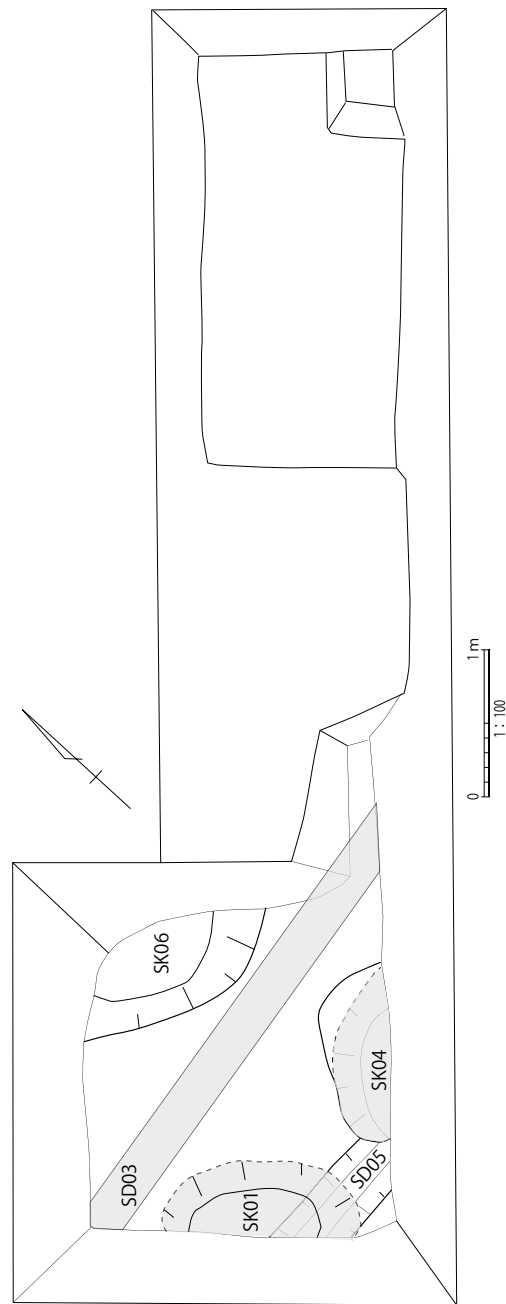


図5 遺構平面図(■は第2層上面検出の遺構)

砂混じる中粒砂質シルトで、水の流れた形跡はなく、一度に埋め戻されている。出土遺物は、肥前磁器染付皿 15、肥前陶器天目碗、丸碗 16・17、土師器皿 18、炉、硯 19、平瓦などである。15 は底に砂が付着する。17 世紀後半の遺物が主体であるが、第 2 層の年代などから、遺構としてはもう少し新しい時期となるであろう。東西方向に直線状に配置しており、敷地境の区画溝の可能性もある。

SK01 南北 1.2m、東西 0.6m、深さ 0.2m の円形の土坑で、埋土は褐灰色 (10YR4/1) シルト質中粒砂で、炭を含む。出土遺物は、肥前直染付碗 20、関西系陶器碗、土師器甕・皿 21 などがある。20 は体部外面に梅花文が描かれる。21 は灯明皿である。これらは 18 世紀代が主体である。

そのほか、混入品として、蓮華文軒丸瓦 22、須恵器甕、瓦器皿、丸瓦などがある。22 は複弁 8 葉に復元でき、蓮子は 1 + 6、珠文は 16 と見られる。外縁は素文の直立縁で、内外縁を分ける圏線はない。中房の外周を細い圏線が一条めぐる。瓦当は厚く、焼成は良好である。四天王寺出土の瓦に類例が見られ (四天王寺文化財管理室編 1986、No. 99・100)、奈良時代の製作とされる (網伸也 1997)。

SK04 直径 1.8 m、深さ 0.8 m の不正円形で、埋土は上下 2 層に分けられる。上部はにぶい黄橙色 (10YR6/3) シルト、下部はにぶい黄橙色 (10YR6/3) 中粒～極細粒砂からなる。出土遺物は、土師器皿 23、平瓦である。

・第 2・3 層一括として取り上げた遺物

第 2・3 層一括として取り上げた遺物に土師器皿・羽釜 24、模骨痕の残る平瓦 25 などがある。調査区北角から見つかっており SK06 に伴う可能性もある。

〈まとめ〉

今回の調査では以下の成果が得られた。

- ・複弁蓮華文軒丸瓦を含む須恵器・土師器など奈良時代～平安時代の遺物が出土した。
- ・奈良時代の可能性のある土壌および中世の古土壌・作土が検出された。
- ・近世の土壌および溝を検出した。東西方向の SD03 は区画溝の可能性はある。

出土した複弁蓮華文軒丸瓦は四天王寺で類例があるが、一方で天神橋遺跡では TJ00-1 次調査地で平安後期の軒平瓦が出土しており、TJ08-1 次・2 次・11-4 次調査地など周辺の調査地でも布目瓦や叩き成形の平瓦が出土している。難波津北岸の物資の移動や、付近で推定されている東大寺新羅江荘を考えていくうえで当遺跡の瓦の出土は非常に注目される。

そのほか中世の古土壌や作土、近世の遺構の検出もあり、本調査によって古代から中世、近世の天満組へと発展していく大川北岸の開発を知るための重要な成果を得られたといえる。

【引用参考文献】

- 網伸也 1997、「四天王寺出土瓦の編年的考察」『堅田直先生古希記念論文集』、pp. 535 - 551
- 大阪市文化財協会 2002、「天神橋遺跡の調査」『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—1999・2000 年度—』、pp. 181 - 190
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 2010、「北天神橋遺跡発掘調査 (TJ08 - 1) 報告書」『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告 (2008)』、pp. 11 - 20
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 2017、「北区天神西町における建設工事に伴う天神橋遺跡発掘調査 (TJ16 - 1) 報告書」『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—2016 年度—』、pp. 25 - 32
- 大阪市文化財研究所 2010、「北区天神橋一丁目における建設工事に伴う天神橋遺跡発掘調査 (TJ11 - 4) 報告書」『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告 (2011)』、pp. 79 - 89
- 四天王寺文化財管理室編 1986、『四天王寺古瓦聚成』、p. 74 - 15
- 新修大阪市史編纂委員会 1988、「難波の条理と交通路」『新修大阪市史』第一巻、pp. 778 - 800



南壁地層断面  
(北から)



第4層上面検出の遺構  
(北から)



第2層上面検出の遺構  
(北から)

图 版 2



出土遺物 (1・2 : 第1層、3・4 : 第2層、5~8 : 第3層、9~14 : SK06)



出土遺物 (15~19 : SD03、20~22 : SK01、23 : SK04、24・25 : 第2・3層一括)



## 大坂城下町跡発掘調査(SOJ22-1)報告書

調査箇所	大阪府中央区淡路町一丁目20の一部
調査面積	約20㎡
調査期間	令和5年3月22日
調査担当者	課長 鈴木 慎一、小倉 徹也

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は上町台地の西側にあり、大坂城下町跡内に位置する。周辺では調査地北側のOJ16-5次調査地で豊臣後期の土壌、徳川初期の土壌・柱穴、OJ98-2次調査地で豊臣期～徳川前期の井戸・土壌、OJ92-29次調査地で豊臣前期の東西溝、調査地東側のOJ07-10次調査地で徳川前期の土壌、調査地南側のOJ92-20次調査地で豊臣後期の瓦溜・塙列建物・礎石建物・小穴・土壌、徳川期の土壌を確認している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1993・1998・2005・2007・2013、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2016・2018]。

今回の調査は、建設工事に先立って実施した試掘調査によって豊臣期の遺物やその時期の盛土層が確認されたため、本調査を実施することになった(図1)。北側および東西の隣地の建物から安全な距離を取り、東西約4m×南北約5mの調査区を設定して3月22日に行った(図2)。調査はまず、重機によって現地表下約1.9mの深さまで掘削した後、以下を重機を併用しながら基本的に人力により掘り下げた。平面および地層断面の精査と遺構・遺物の有無を確認しながら調査を進め、平面図および

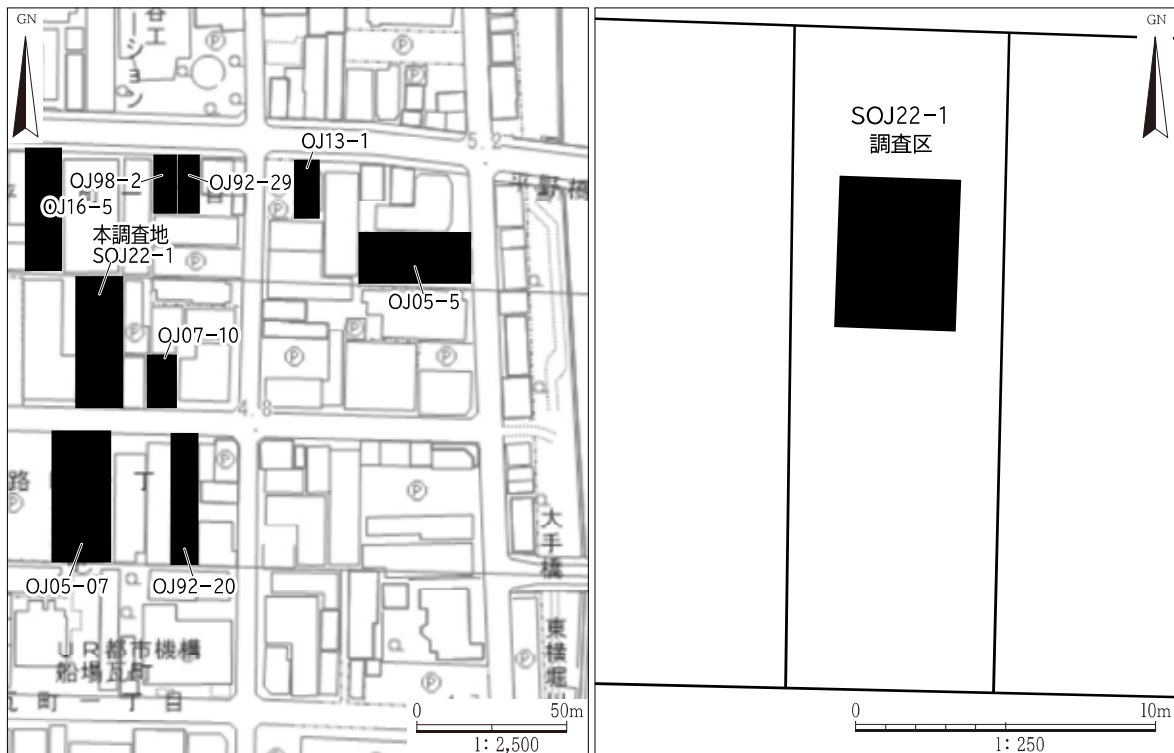


図1 調査地位置図

図2 調査区配置図

地層断面図の作成および写真撮影による記録作業を行った。その後、重機によって埋戻しを行い、現場での作業を終了した。

本報告で用いた方位は、図1・2については現場で記録した街区図を「マップナビおおさか」のデジタル地図(1/2500)に合成することにより得た座標に基づき、座標北を基準にした。また、図3に示した標高は地理院地図の標高値を用い、EL+〇mと記した。

〈調査の結果〉

1. 層序(表1、図3、図版1)

現地地表下2.8mまでの地層を観察し、その結果に基づいて調査地の層序を組み立てた。以下に各層の層相や特徴を記し、地層の模式柱状図を図3、層序表を表1、地層と遺構の状況を図版1に示す。

第0層 現代の盛土層および攪乱で、層厚は約180cmである。

第1層 近世の盛土層で、第1a層と第1b層に区分した。第1a層は黄灰色の細礫～粗粒砂からなり、層厚約10cmである。第1b層はわずかに細礫～中礫を含む炭混りの暗褐色中粒～粗粒砂からなり、層厚約40cmである。

第2層 近世の盛土層で、黄灰色シルト偽礫を多く含む炭混りの褐灰色中粒～粗粒砂からなり、層厚70cm以上である。上面でSK01～06を検出した。

第3層 暗褐色の粗粒～中粒砂からなる古土壌で、層厚10～20cmである。大部分は上位の第2層により削剥されて失われていたが、わずかに平面と地層断面に残されていたのみである。遺物は確認されなかったため正確な時期は不明であり、上位層以前に形成された理解し、ここでは中世以前とした。

第4層 海浜成層で、後浜の堆積層と考えた。上部と下部に区分し、上部は黄灰色の粗粒～中粒砂からなり、層厚30～40cmで、下部は黄灰色の極粗粒砂～中礫からなり、層厚15cm以上である。

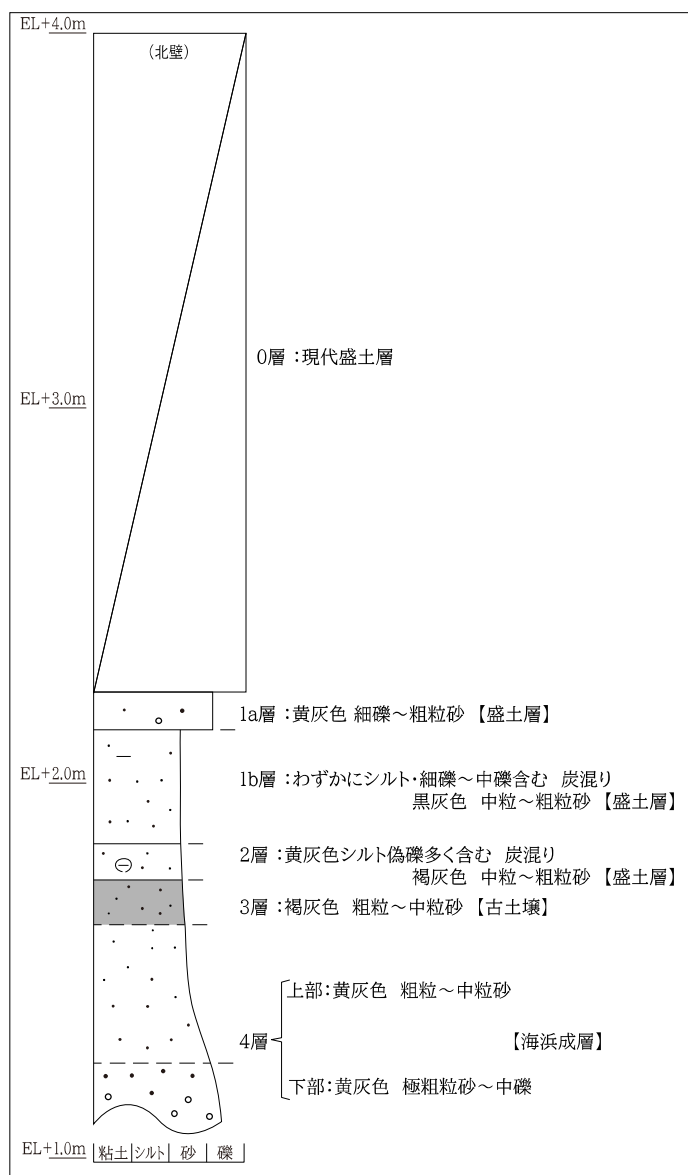


図3 模式柱状図

表1 層序表

SOJ22-1層序		層相	層厚(cm)	遺構	おもな遺物	時代		
沖積層 (難波累層)	上部層	第0層	現代の盛土層および攪乱	【盛土層】 【攪乱】	ca.180		現代	
		第1層	a	黄灰色 細礫～粗粒砂	【盛土層】	ca.10		近世
			b	わずかにシルト・細礫～中礫含む 炭混り 暗褐色 中粒～粗粒砂	【盛土層】	ca.40	陶磁器	
		第2層	黄灰色シルト偽礫多く含む 炭混り 褐色 中粒～粗粒砂	【盛土層】	≥70	←SK01～06	陶磁器	中世以前
		第3層	暗褐色 粗粒～中粒砂	【古土壤】	ca.10～20			
		第4層	上部:黄灰色 粗粒～中粒砂	【海浜成層】	ca.30～40			
下部:黄灰色 極粗粒砂～中礫	≥15							

←:上面検出遺構

## 2. 遺構と遺物(図版1)

本調査では第2層上面で土壌SK01～06を検出した。遺構平面を図版1に示す。

SK01は長さ0.72m、確認した幅0.26m、深さ0.38mの土壌で、埋土は炭混り褐色の中粒～粗粒砂からなる。北側は調査区外であった。

SK02は確認した長さ0.78m、幅0.54m、深さ0.35mの土壌で、埋土は炭混り褐色の中粒～粗粒砂からなる。南側でSK03を切っていた。

SK03は確認した南北長1.62m、確認した東西長1.27m、深さ0.95mの土壌で、黄灰色シルト偽礫を含み炭混りの褐色中粒～粗粒砂からなる。北側をSK02に、西側をSK04に切られていた。

SK04は確認した長さ0.93m、幅0.93m、深さ0.73mの土壌で、黄灰色シルト偽礫を含み炭混りの褐色中粒～粗粒砂からなる。東側ではSK03を切っていた。

SK05は確認した長さ0.69m×幅0.52m×深さ0.10mの土壌で、黄灰色シルト偽礫を含み炭混りの褐色中粒～粗粒砂からなる。北側はSK03に切られ、南側はSK06に切られていた。

SK06は長さ0.63m×幅0.56m×深さ0.37mの土壌で、黄灰色シルト偽礫を含み炭混りの褐色中粒～粗粒砂からなる。北側はSK05を切っていた。

いずれの遺構埋土から豊臣期～徳川期の主として陶磁器が出土した。また、遊離資料であるが古代に属する須恵器が出土した。

### 〈まとめ〉

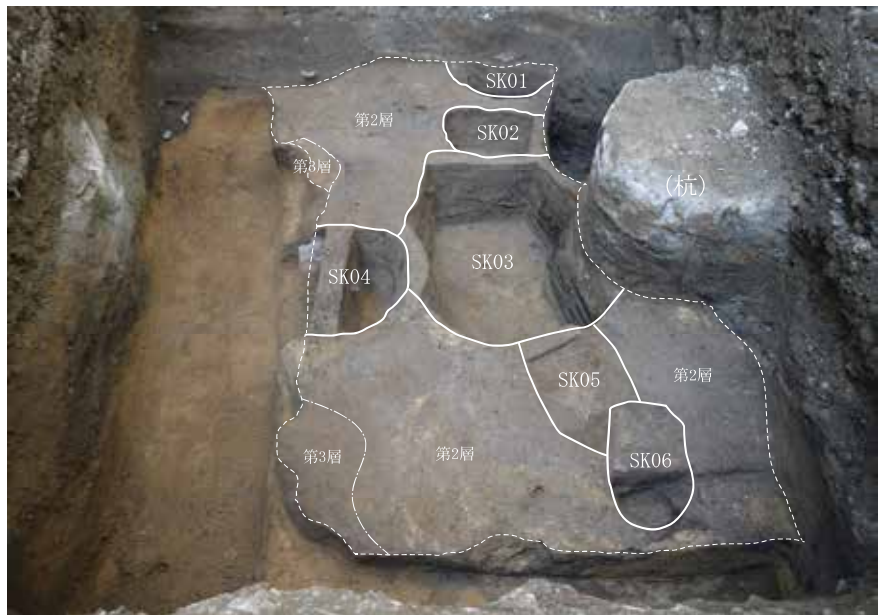
今回の調査では、豊臣期～徳川期の土壌を6基検出した。また、最下位にわずかではあるが古土壤が認められた。これまで周辺での調査成果と今後行われる調査によって、さらに豊臣期を含めた中世～近世の様子がさらに明らかになることが期待される。



北壁地層断面  
(南から)



第2層上面検出状況  
(南から)



SK04検出状況  
(西から)





## 大坂城跡発掘調査（SOS22－1次）報告書

調査箇所	大阪府中央区常盤町一丁目10-1
調査面積	18㎡
調査期間	令和4年10月13日
調査担当者	課長 鈴木 慎一、宮本 康治

### 〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地は中央区常盤町1丁目に位置し、大坂城跡の範囲内にあたる。付近では大坂城跡の遺構だけでなく、それ以前の遺構・遺物も確認されている（大阪市文化財協会（以下、大文協）2002・2003ほか）。北西のOS90-112調査地では奈良時代をはじめ各時代の成果が得られ、西方のOS93-28次調査地では近世の遺構・遺物が多く確認され、東方の東中学校が位置する一帯では豊臣期の大名屋敷地が調査されるなど（大文協1992）、多くの調査が行われており、大坂城跡あるいはそれ以前の時期の遺構・遺物が想定される地域である（図1・2）。

本地点で建物建設が計画され、令和2年10月29日に試掘を行ったところ、現地表下1.8m以下で本発掘調査を要する地層が遺存していることが判明した。そこで計画建物の掘削が及ぶことが想定され、既設建物の基礎で攪乱されずに残存状況が良好とみられる地点で発掘調査を行うこととなった。調査は令和4年10月13日に実施した。重機による掘削の後に人力での掘り下げ、検出作業等を進め、遺構の調査や写真・図面作成等の記録作業を行い、同日のうちに調査にかかわる作業を終え撤収した。

なお、調査区の方位は大阪市地図情報サイトのマップナビおおさか掲載の図にはめこんで求め、標高については国土地理院地図の敷地南側の道路面の標高をもとに記載している。



図1 調査地位置図 縮尺1:5,000



図2 調査区配置図 縮尺1:1,000

## 〈遺構と遺物〉

### 1. 層序 (図3、図版1)

調査においては部分的な確認を含め、現地表下約3.2mまでの状況を確認した。観察できた範囲では地山層（上町層）は確認できなかった。

第0層 褐色細～中粒砂やコンクリートガラ等を含む近現代の地層で、厚さは1.6mほどで、一部現地表下2m以深までおよぶところもあった。

第1層 調査区北よりで遺存していた地層で褐色砂質シルトで、層厚は0.2mほどである。近世の盛土層の可能性はある。

第2層 シルト～粘土偽礫を多く含む褐～明黄褐色粘土質シルトで、層厚は0.4～0.5m程度である。盛土層の可能性はある。

第3層 黄褐色砂質シルト～粘土質シルトで、層厚は1.0m以上である。

第4層 細～中粒砂を含む褐色粘土質シルトで、盛土層である。

第5層 粗粒砂を含む褐色粘土質シルトである。盛土層である。これら第3～5層は一連の盛土の可能性もあろう。

### 2. 主な遺構 (図3、図版1)

遺構の検出作業は主に第2層の上面で行った。調査区の西半および南部で攪乱が1.8mあるいはそれより深く及ぶ範囲があり、観察等は主に東よりで行った。平面的な調査の後、調査区東壁沿いで南北方向に部分的に掘り下げを行い、地層の観察を行った。

#### 第5～2層の盛土の状況

確認できた範囲では地山層（上町層）は確認できなかったが、盛土を行なっている状況が確認された。第5～3層にかけては南から北へと下る傾斜が観察され、第3層の段階で平坦になっているようである。第2層ではほぼ水平に整地されていた。第5～3層は層相が類似しており、一連の盛土の可能性もある。一方で第2層は偽礫を含んで層相が異なっていることが注意された。各層から少量ではあるが遺物が出土し、第5・4層からは埴輪片等、第3層から瓦・須恵器等が、第2層からは土師器・須恵器等が見つかった。遺物はおおむね古代以前とみられ、盛土が古代にさかのぼる可能性がある。

#### 第2層上面の検出状況

SK01・02が確認され、ともに廃棄土壌とみられた。第2層の上面で検出しているが、上位を攪乱されているため、より上位から形成されている可能性もある。SK01は長径2.1m、短径1.2mの平面が不整形で、深さ0.5mほどの規模で、黒色粘土質シルト～シルト質砂が埋土となっていた。埋土からは土器・陶磁器類等や鞆の羽口等が出土している。SK02は東西0.9m、南北0.5mの楕円形で深さ0.3mほどの規模である。埋土は灰オリーブ色粘土質シルトで、SK01と同様に鞆羽口や鉋滓等の金属加工関係の遺物が多く出土し、肥前陶器なども少量見つかった。

### 3. 主な出土遺物 (図版2)

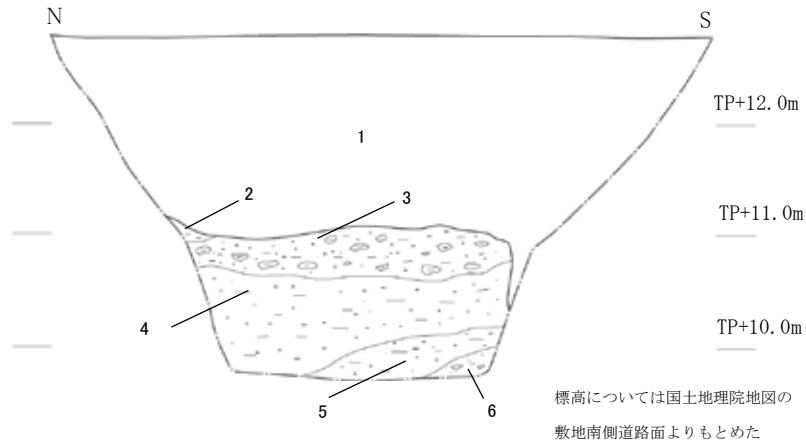
調査した遺構および各地層からの出土があった。

盛土・整地層である第2～5層では各層から少量ではあるが出土があり、第5～4層では埴輪1～6や須恵器甕7があった。埴輪には円筒埴輪1～5、盾形埴輪とみられる6があり、古墳時代後期、6世紀代に下るものである可能性がある。第3層から内面に布面のある丸瓦や須恵器片、第2層から土師器・須恵器片が出土している。

SK01からは肥前磁器染付碗8や陶器碗9・10、丹波焼播鉢かとみられる11、土師器皿12・焙烙13・



<調査区 東壁断面>



- |                                 |                               |
|---------------------------------|-------------------------------|
| 1: 現代攪乱・盛土層(第0層)                | 4: 含中粒砂黄褐色細粒砂質シルト～粘土質シルト(第3層) |
| 2: 褐～明黄褐色砂質シルト(第1層)             | 5: 褐色粘土質シルト(第4層)              |
| 3: シルト～粘土偽礫を含む褐～明黄褐色粘土質シルト(第2層) | 6: 含中～粗粒砂褐色粘土質シルト(第5層)        |

<第2層上面での検出状況および深掘り範囲>

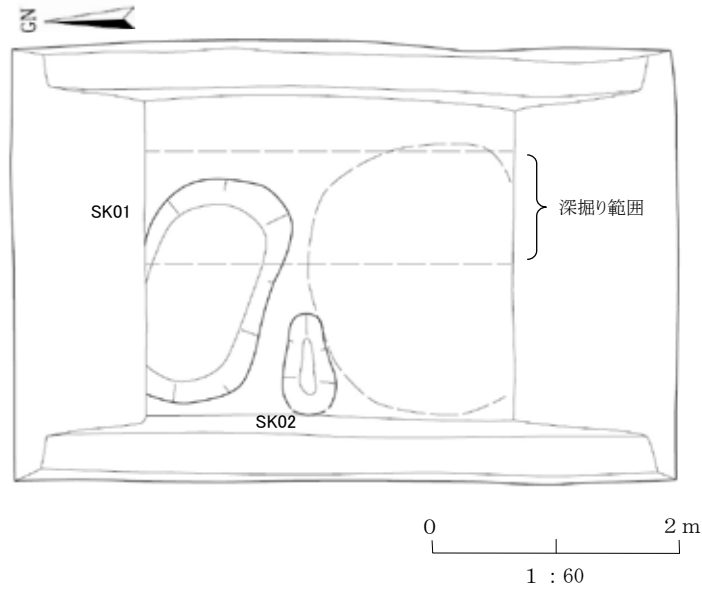


図3 調査区平面・断面図

火入、鞆羽口14等が出土した。SK02からは鞆羽口や鋳滓、砥石に加え、肥前陶器皿や備前焼片等があった。ともに17世紀後半から18世紀前半にかけてとみられた。

<まとめ>

本調査地では調査の結果、既設建物等で現地地表下1.8m付近まで破壊されていたものの、近世以前の地層が遺存しており、遺構・遺物を確認することができた。

下位では南から北へと下る傾斜をもつ盛土層が確認された。第5～4層で埴輪や須恵器片、第3層で瓦・須恵器等があって、盛土が行われたのが古代以前の可能性がある。調査地を含む上町台地の一

帯では前期難波宮造営期等に谷を埋めて整地している状況が確認されている。今回の盛土も同様の状況を示す可能性がある。ただし付近は大坂城など後の時代の大規模な整地も行われている地域でもあり、今後も周辺の状況をふまえながら年代的な位置づけを検証していく必要がある。また調査地付近では古墳そのものは確認されていないが、いくつかの地点で谷を埋める地層等から埴輪等の古墳関連の遺物の出土が知られている。古墳が難波宮造営時等に破壊され、埴輪等が盛土に含まれた状況が推測されており（大文協2004ほか）、本調査の資料も新たな知見となったといえよう。

第2層とした盛土上では近世の廃棄土壌SK01・02が検出された。17世紀後半から18世紀にかけてのもので、出土遺物には金属加工に関係の羽口等が含まれていた。調査地周辺では西方のOS93-28次調査地で金属加工関係の遺物が検出されるなど（大文協2003）、付近では近世の手工業者の存在が推測されており、新たな資料が加わった。

以上のように、調査面積が大きくなかったものの、一带の土地利用の変遷について新たな資料を加えることができた。

#### 【引用参考文献】

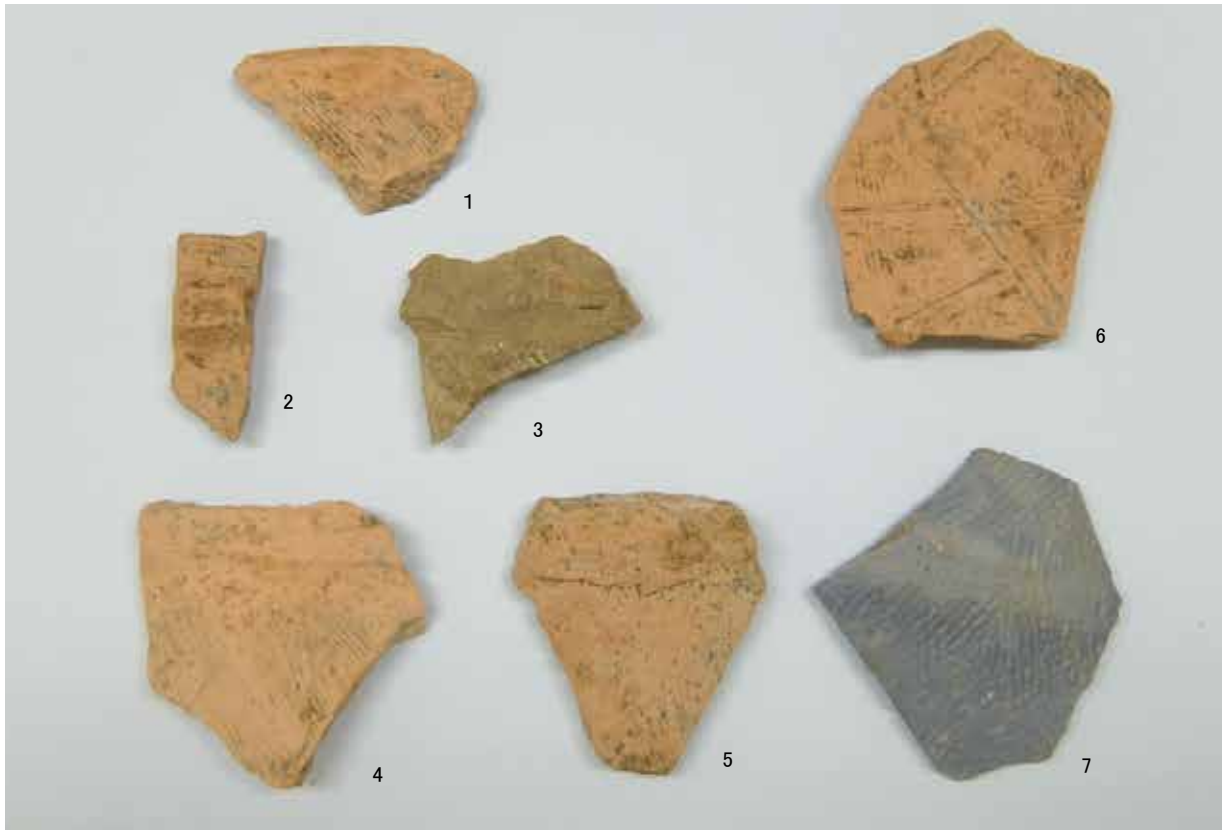
- 大阪市文化財協会1992『難波宮址の研究』第九
- 大阪市文化財協会2002『大坂城跡』VI
- 大阪市文化財協会2003『大坂城跡』VII
- 大阪市文化財協会2004『難波宮址の研究』第十二



東壁断面および断ち割りの状況（南西から）



第5層上面検出状況（南西から）



第4・5層出土の主な遺物(1～5:円筒埴輪、6:盾形埴輪、7:須恵器甕)



SK01出土の主な遺物(8:肥前磁器染付碗、9・10:肥前陶器碗、11:丹波焼播鉢か  
12:土師器皿、13:土師器焙烙、14:鞆羽口)

## 大坂城跡発掘調査(SOS22-3)報告書

調査箇所	大阪市中央区大手前一丁目29-3、31-6、33-1、33-3、 谷町一丁目12-4
調査面積	約18㎡
調査期間	令和5年12月13日
調査担当者	課長 鈴木 慎一、小倉 徹也

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は天端橋駅の東側、大川の左岸、攻撃斜面側に位置し、上町台地の北斜面を下った地形変換点付近に立地する。これまでに今回の調査地に隣接するOS89-80次、OS89-92次調査によって、南の大阪合同庁舎3号館の北に残る石垣を三ノ丸の北限と推定すると、本調査地は豊臣期大坂城の三ノ丸の外側で、惣構の内に位置すると推定されるところとなる[大阪市文化財協会2002]。

今回の調査は、建設工事に先立って実施した試掘調査によって近世以前の遺構や盛土層が確認されたため、本調査を実施することになった(図1)。調査区は旧建物の基礎を縫うように設定し(東西約2.5m×南北約6m)、12月13日に行った(図2)。調査はまず、重機によって遺構面まで掘削した後、以下を重機を併用しながら基本的に人力により掘り下げた。平面および地層断面の精査と遺構・遺物の有無を確認しながら調査を進め、平面図および地層断面図の作成、写真撮影による記録作業を行った。この後、重機によって埋戻しを行い、現場での作業を終了した。



図1 調査地位置図

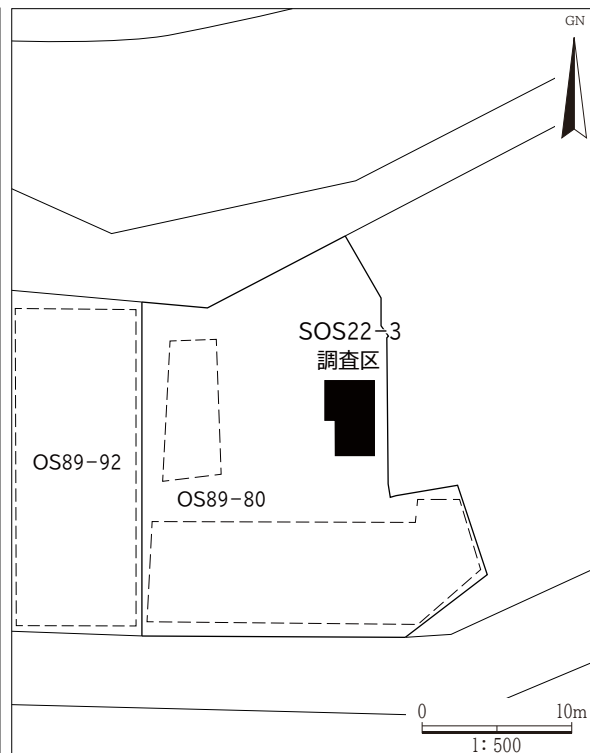


図2 調査区配置図

本報告で用いた方位は、図1・2については現場で記録した街区図を「マップナビおおさか」のデジタル地図(1/2500)に合成することにより得た座標に基づき、座標北を基準にした。また、図6では現場で計測した磁北を用い、標高は地理院地図の標高値を用い、EL+Omと記した。

〈調査の結果〉

1. 層序(表1、図3～5、図版1・2)

現地地表下3.3mまでの地層を観察し、その結果に基づいて調査地の層序を組み立てた。以下に、各層の層相や特徴を記し、層序表を表1、地層断面図を図3～5、地層と遺構の状況を図版1・2に示す。

第0層 現代の盛土層および攪乱で、層相により第0a・0b層に区分した。第0b層は黄灰色のシルト偽礫を特徴的に含む盛土層である。合わせた層厚は70～120cmである。

第1層 近世の整地層と盛土層で、第1a～1e層に区分し、さらに第1a層を上部と下部に細分した。第1a層上部はわずかにシルト含む灰色の中粒～細粒砂からなる整地層で、層厚は約5cm、第1a層下部は黄灰色ないし灰色の粗粒～中粒砂からなる盛土層で、層厚は約15cmである。第1a層上部上面で

表1 層序表

SOS22-3層序		層相	層厚(cm)	遺構・遺物	時代			
沖積層 (難波累層)	上部層	第0層	現代の盛土および攪乱 (0a層・0b層)	【盛土】 【攪乱】	70～120	現代		
		a	上部:わずかにシルト含む 灰色 中粒～細粒砂	【整地層】	ca.5	←SK01・SX01	徳川初期 (豊臣期)	
			下部:黄灰色・灰色 粗粒～中粒砂	【盛土層】	ca.15			
		b	わずかにシルト含む 灰色・褐色 粗粒～細粒砂(焼土・炭含む)	【整地層】	20～30			
			c	黄灰色 中粒～粗粒砂	【盛土層】	10～70		
				d	わずかにシルト含む 暗灰色 粗粒～中粒砂(炭含む)	【整地層】	5～10	←SE01
		e	黄灰色 粗粒～中粒砂	【盛土層】	10～25	←SK02・03		
			a	暗灰色・黒灰色 シルト混り極粗粒～中粒砂	【盛土層】	30～70		豊臣期
		b		暗灰色 シルト混り中粒～粗粒砂	【盛土層】	3～20		
		第3層	青灰色・灰色 極粗粒～中粒砂	【盛土層】	20～25			
		a	暗オリーブ灰色・灰色 シルト	【盛土層】	ca.10			
			b	わずかにシルト含む 暗灰色 極粗粒～中粒砂	【盛土層】	ca.40		
		第5層		わずかにシルト含む 暗灰色 中粒～粗粒砂	【盛土層】	ca.25		
第6層	青灰色・黄灰色 粗粒～中粒砂	【盛土層】	≥20					

←:上面検出遺構

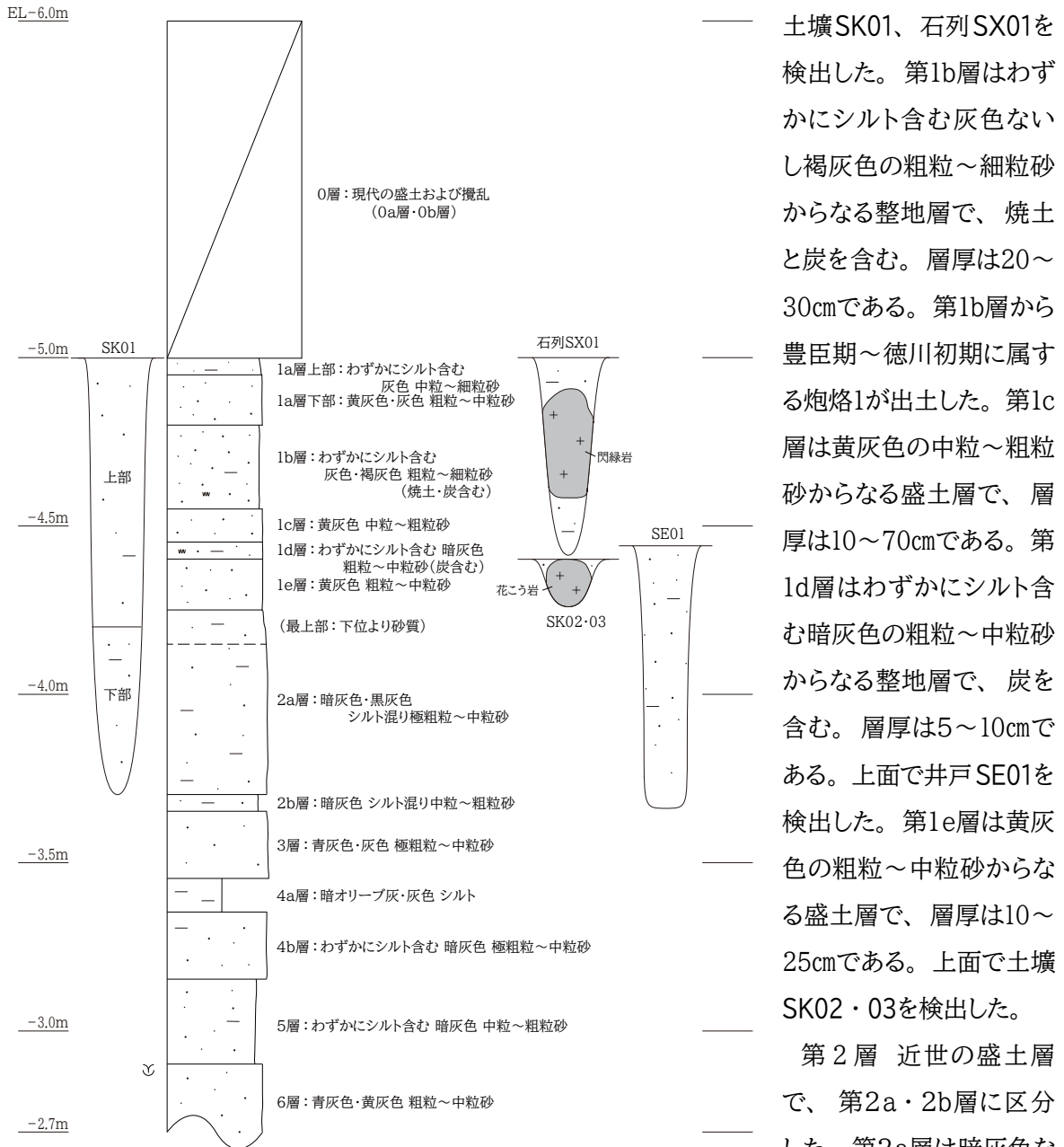


図3 地層と遺構の関係図

粗粒～中粒砂からなり、第2b層は暗灰色のシルト混り中粒～粗粒砂からなる。層厚は第2a層が30～70cmで、第2b層は3～20cmである。

第3層 近世の盛土層で、青灰色ないし灰色の極粗粒～中粒砂からなり、層厚は20～25cmである。

第4層 近世の盛土層で、第4a・4b層に区分した。第4a層は暗オリーブ灰色ないし灰色のシルトからなり、第4b層はわずかにシルト含む暗灰色の極粗粒～中粒砂からなる。層厚は第4a層が約10cmで、第4b層は約40cmである。

第5層 近世の盛土層で、わずかにシルト含む暗灰色の中粒～粗粒砂からなり、層厚は20～25cmである。本層から豊臣期に属する白磁2が出土した。

第6層 近世の盛土層で、青灰色ないし黄灰色の粗粒～中粒砂からなり、層厚は20cm以上である。

土壌SK01、石列SX01を検出した。第1b層はわずかにシルト含む灰色ないし褐灰色の粗粒～細粒砂からなる整地層で、焼土と炭を含む。層厚は20～30cmである。第1b層から豊臣期～徳川初期に属する炮烙1が出土した。第1c層は黄灰色の中粒～粗粒砂からなる盛土層で、層厚は10～70cmである。第1d層はわずかにシルト含む暗灰色の粗粒～中粒砂からなる整地層で、炭を含む。層厚は5～10cmである。上面で井戸SE01を検出した。第1e層は黄灰色の粗粒～中粒砂からなる盛土層で、層厚は10～25cmである。上面で土壌SK02・03を検出した。

第2層 近世の盛土層で、第2a・2b層に区分した。第2a層は暗灰色ないし黒灰色のシルト混り極

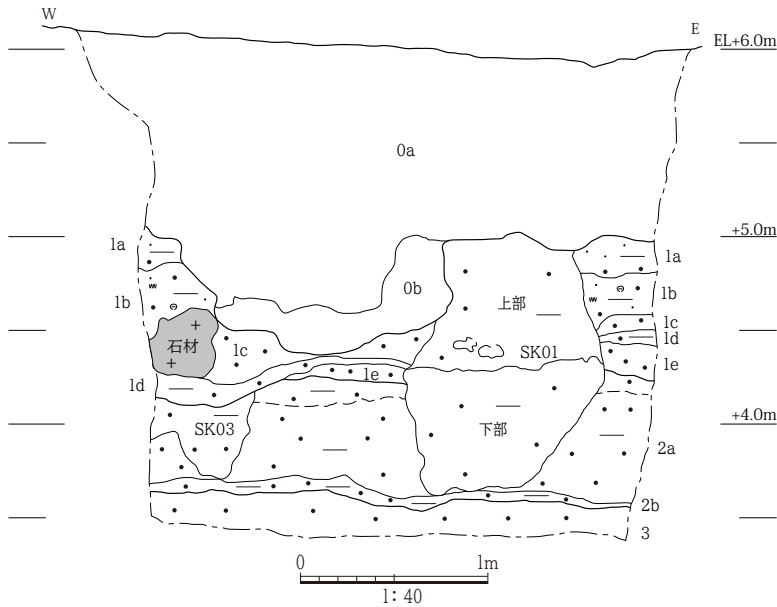


図4 北壁地層断面図

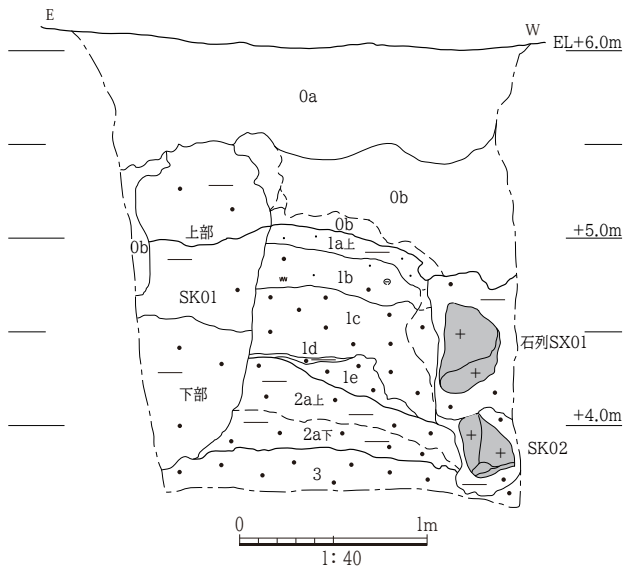


図5 南壁地層断面図

## 2. 遺構(図3～6、図版1・2)

本調査では第1a層上面において土壌SK01、石列SX01を、第1d層上面で井戸SE01、第1e層上面で土壌SK02・03を検出した。遺構平面図を図6および図版1・2に示す。

SK01 調査区東寄りに南北方向の土壌を確認した。幅70～100cm、深さ120～130cm、北と南は調査区外に延びていた。埋土は層相から上部と下部に区分した。上部はわずかにシルト含む褐灰色の粗粒～中粒砂からなり、層厚は40～80cm、下部は灰色のシルト混り中粒～粗粒砂からなり、層厚は60～90cmである。重機掘削時に確認したもので、本来の遺構面はさらに上位にあったと考えられる。埋土から豊臣期～徳川初期に属する鼠志野焼が出土した。

SX01 重機掘削中に石列を確認した。本来の遺構面はさ

らに上位にあったと考えられるが、現代の攪乱により原位置からずれていたため壁面での確認に留め、検出は行わなかった。調査区西側を南北方向に少なくとも3石以上が並んでいたものとみられ、区画を示すものと思われた。

SE01 調査区中央部で検出した井戸である。東西長105cm、南北長135cm、確認した深さ約75cmである。埋土はわずかにシルトを含む灰色の極粗粒～中粒砂で、埋土からは豊臣期に属する青花、瀬戸美濃焼天目碗、土師器播鉢が出土した。

SK02 確認した東西幅40cm、確認した南北長70cm、深さ40cmの土壌で、埋土は灰～黒灰色のわずかにシルトを含む粗粒～中粒砂である。礎石がみられたが、現代の攪乱によって礎石は原位置を失っていた。



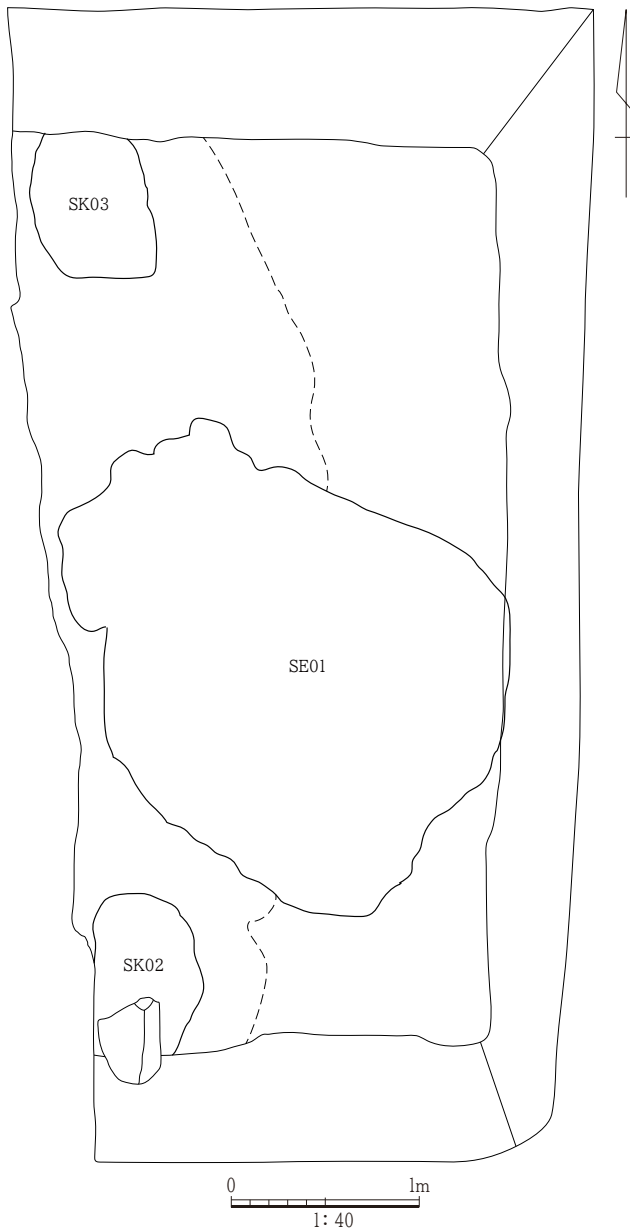


図6 遺構平面図

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002、「近畿興業株式会社による建設工事による大坂城跡発掘調査(OS00-52)」:『平成12年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』, pp.48-52

SK03 確認した東西幅45cm、確認した南北長65cm、深さ40cmの土壌で、埋土は灰～黒灰色のわずかにシルトを含む粗粒～中粒砂である。礎石がみられたが、現代の攪乱によって礎石は原位置を失っていた。

SK02・SK03はSX01とほぼ同じ位置にあり、南北に存在することから、この頃から区画が存在した可能性があると思われた。

#### 〈まとめ〉

今回の調査では豊臣期～徳川初期の遺構を確認することができた。西側のOS89-80次、OS89-92次、OS00-52次調査の調査成果と整合する結果を得ることができた。今後行われる調査によって、さらに全容が明らかになることが期待される。

#### 引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991、「桑原健太郎氏による建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS89-92)」:『平成元年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』, pp.65-76
- 大阪市文化財協会2002、「三ノ丸北西部の調査」:『大坂城跡』VI, pp.113-133



調査区全景  
(北西から)



北壁地層断面  
(南から)



南壁地層断面  
(北から)



図版 2

東壁地層断面  
(西から)



第3層上面検出状況  
(南から)



出土遺物



1: 炮烙(第1b層)、2: 白磁(第5層)、3: 志野焼(SK01)、4: 青花(SE01)、  
5: 瀬戸美濃焼(SE01)、6: 播鉢(SE01)

## 史跡四天王寺旧境内試掘調査 (SST22 - 1) 報告書

調査個所	大阪市天王寺区四天王寺一丁目11-18
調査面積	約23㎡
調査期間	令和4年11月9日・11月15日
調査担当者	課長 鈴木慎一 佐藤隆 田中裕子

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は史跡四天王寺旧境内の南西部、西の鳥居と西門を結ぶ参道の南側に位置する。もともとは天王寺消防署元町出張所があった場所である。

調査地周辺は四天王寺の西門信仰に関わる地域として、これまでに西門周辺や引声堂跡・四天王寺学園敷地内で発掘調査が行われ、創建期から中世・近世に至るまで様々な遺構・遺物が見つかった（四天王寺学園 1982、四天王寺 1988）。近年でも西門棟通りの延長線上にあった井戸の立会などから、GL-0.5 m以下で創建期の可能性のある柱列などが検出され（櫻田 2020）、非常に浅い位置に重要な遺構が存在することが確かめられている。

四天王寺では、聖徳太子千四百年御聖忌記念事業の一環として境内整備事業を計画しており、その第2期事業として、史跡内の数か所において宗教施設の復興や新設等を実施している（四天王寺 2019）。当該敷地においては、宗教施設である四天王寺会館（以下「会館」）の新設が検討されており、建設に当たって地下遺構を破壊しない基礎の設計を進めるため必要な情報を得る目的で、文化庁による史跡の現状変更の許可を得て、試掘調査を実施することとなった。

会館建設に当たっては、全面に設置する基礎の掘削が地下遺構を破壊しない深度におさまるかどうかを確認する必要がある。また基礎工事において、エレベーターピットおよび南西隅の排水管の部分は建物基礎より深い掘削が必要であるため、旧消防署出張所の解体時に撤去した既存基礎部分および消防署出張所の配管と同じ位置に排水管を埋設することにより、新たな掘削をしない方法を検討している。このため、地下遺構の状況把握と可能掘削深度・位置の確認を目的として必要最小限の範囲において試掘調査を実施した。

調査区は会館予定地内で3箇所を設定した。



図1 調査地位置図

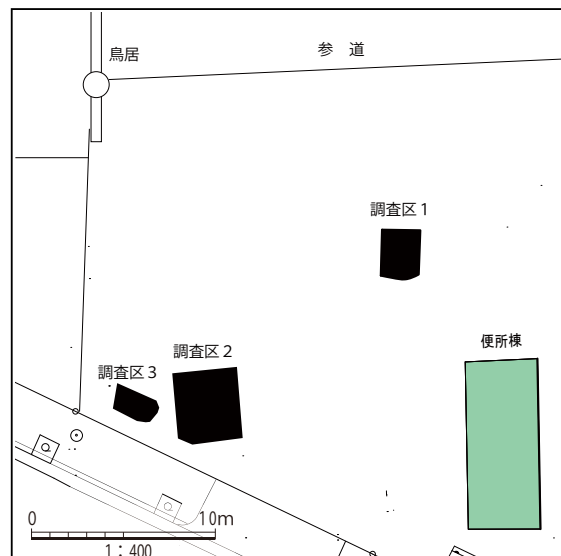


図2 調査区位置図

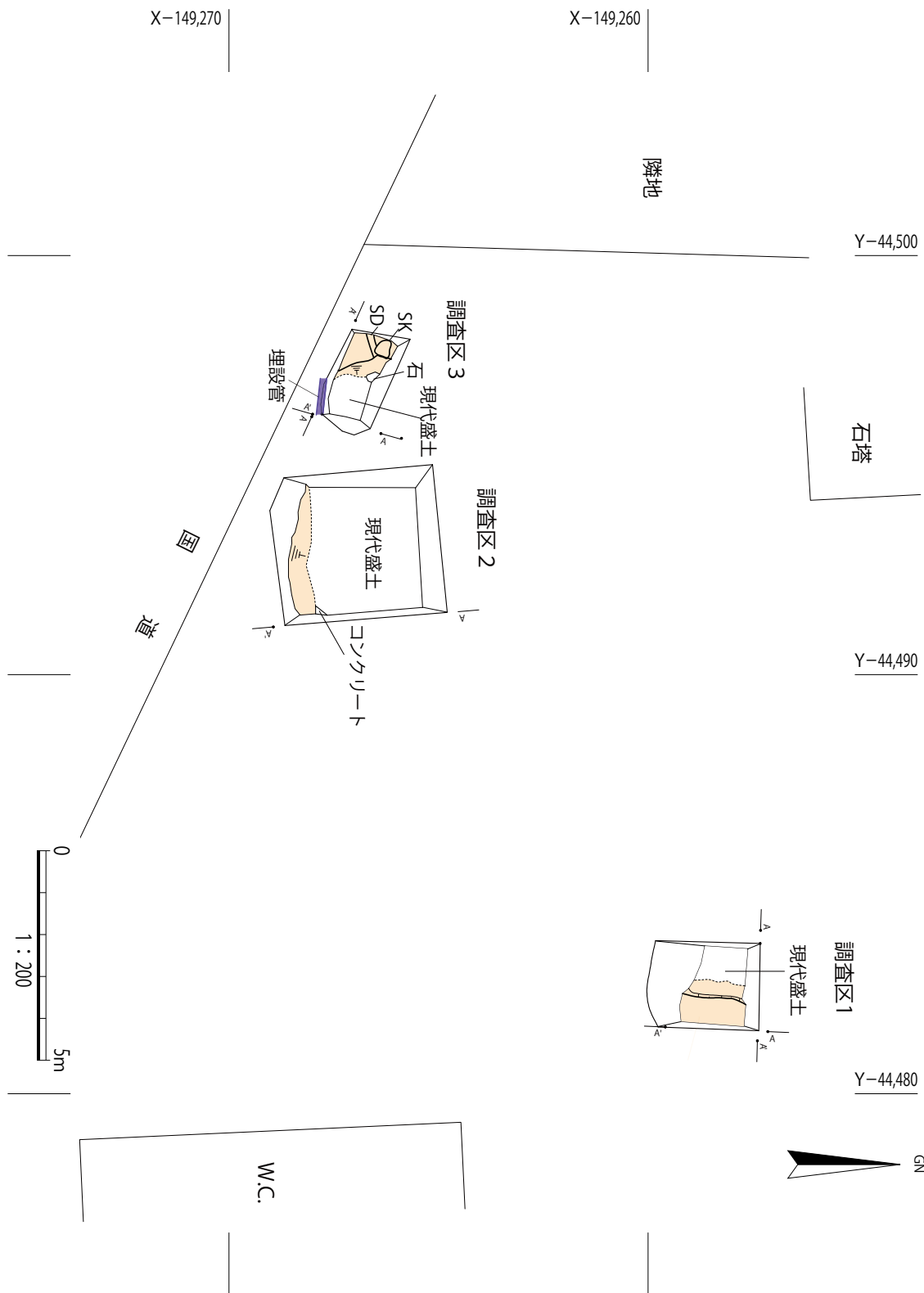


図3 遺構平面図 (■は史跡に関わる地層および地山層の残存する範囲)

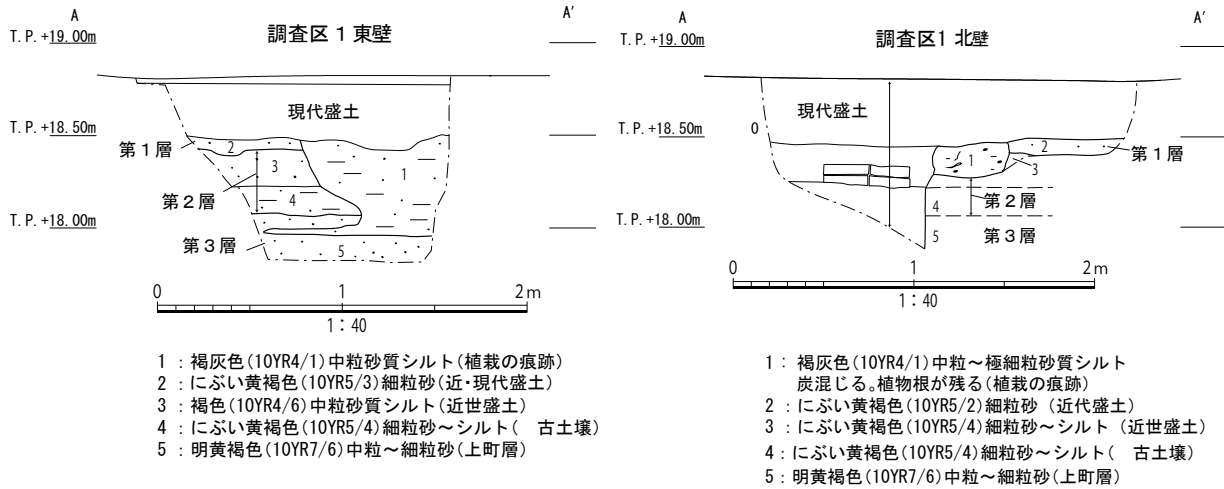


図4 調査区1 地層断面図

調査区1は会館建設予定地の東北部に設定した。当該敷地は参道から国道25号線に向かって、北から南に傾斜している。基礎掘削が可能な深度を把握することを目的として、地盤の最も高い付近に、東西2.0m×南北2.5mのトレンチを設定した。

調査区2は会館建設予定地の西南部に設定した。会館でエレベーターが設置可能かを検討するため、エレベーターピットが想定される位置の周辺において、旧消防署出張所の基礎による攪乱の範囲を把握することを目的とし、東西3.5m、南北4.0mで設定した。

調査区3は会館建設予定地の西南部に設定した。下水用の集水桝・埋設管の設置予定箇所の周辺において、旧消防署出張所の基礎による攪乱の範囲を把握することを目的に、東西2.5m×南北1.5mで設定した。

いずれの調査区も重機によって既存アスファルトを撤去した後は、重機と人力を併用しながらバラスや改良土等の現代盛土を徐々に掘り下げ、旧消防署出張所の基礎の撤去痕跡の範囲を平面的に確認した。既存掘削の範囲内はGL-1.0m以下まで掘り下げて、エレベーターピットおよび埋設管の設置個所に地下遺構や保存すべき地層が存在しないことを確認した。

試掘調査は令和4年11月9日に調査区1・2の調査を実施し、同11月15日に調査区3の調査を実施した。いずれも同日中に写真撮影、地層の記録、平面図の作成などを行い、埋め戻して撤収した。

現地における測量作業は株式会社島田組へ委託し、本報告書の編集作業は大阪市教育委員会にて行った。

本報告で用いた方位は、世界測地系に基づく座標北を基準とし、建物の配置を基準として街区図に当てはめて求めたものである。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文および図中ではTP±〇mと表記した。

#### 〈調査の結果〉

##### (1) 調査区1 (図3・4、図版1・2)

会館の建設予定地の東北部に設定した。当該地の地形は北が高く、南が低い。調査区付近は比較的現状地盤が高く、参道に近い地点である。

調査区東半部のアスファルト・バラス層の現代盛土より下の地層を以下に記載する。

第1層 にぶい黄褐色極粗粒砂で層厚8cmの近代～現代盛土である。本層の上面から植栽の掘り込みがあった。本層中から、鉄釘や鉄片などのほか、瀬戸美濃焼磁器染付碗1、丹波焼徳利2、

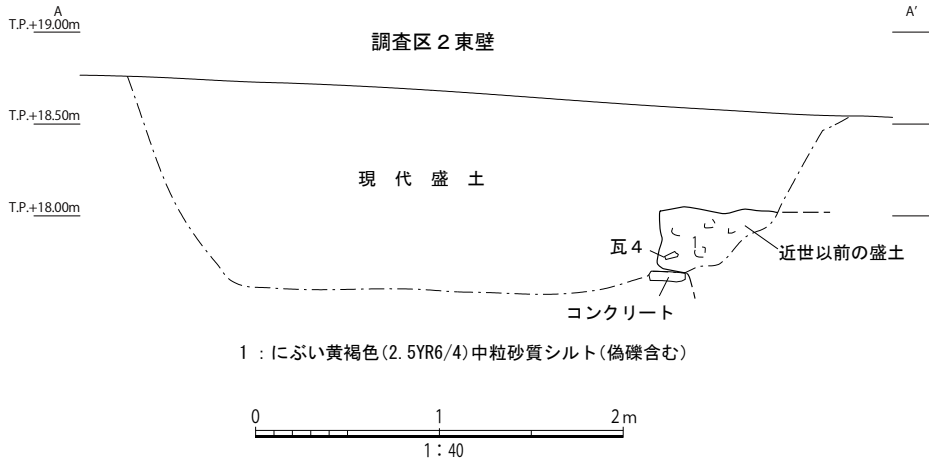


図5 調査区2地層断面図

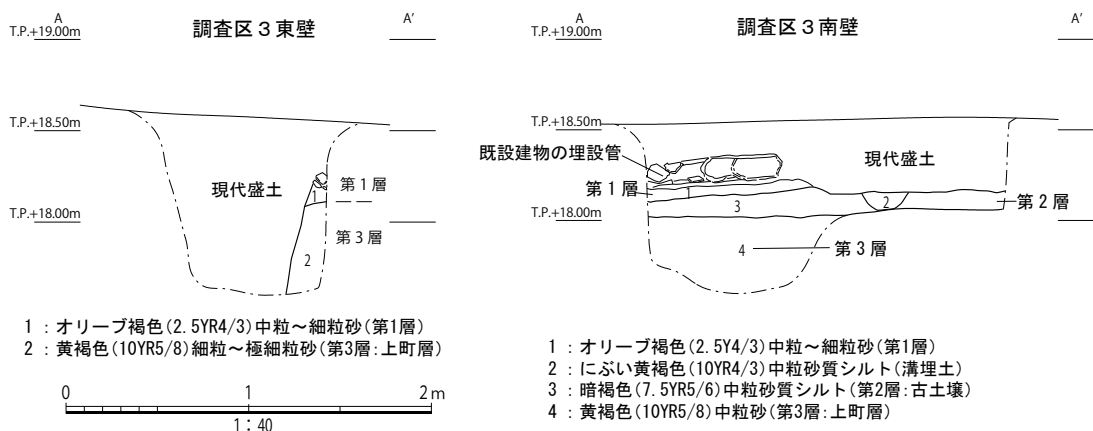


図6 調査区3地層断面図

染付皿3が出土した。1は底部内面に「岐〇28」と記載されている。第二次世界大戦中に岐阜県で焼かれたいわゆる“統制陶器”である。2は体部外面にイッチン描きの文字が描かれる幕末～明治期のものである。3は産地不明であるが、青花の可能性もある。

第2層 上部と下部に分けることができる。

上部は褐色中粒砂質シルトで層厚は20cmの整地層である。

下部はにぶい黄褐色細粒砂～シルトで、層厚は15cm、植物擾乱を受けており、第3層との境界は不明瞭である。第3層(上町層)を母材とする古土壤である。

第2層中からの遺物の出土はないが、上層や周辺との関係から近世以前の地層といえる。

第3層 明黄褐色中粒～細粒砂からなり、層厚は25cm以上で上町層である。

アスファルト・バラス層の現代盛土以下では、トレンチ東半部においてGL-0.4m以下で、近世以前とみられる地層が確認できた。またトレンチの西半部は旧消防署出張所の基礎とみられる攪乱がGL-0.6m以下に続く様子が確認できた。

## (2) 調査区2 (図3・5、図版1・2)

会館建設予定地の西南部に設定した。国道に近く、トレンチ上面も北から南に向かって20cmほど下がっている。

現代盛土より下の地層を以下に述べる。

第1層 にぶい黄褐色中粒砂質シルトからなり地山偽礫を含む。層厚は35cm以上で、近世の



盛土層である。本層中より平瓦 4、肥前磁器染付碗 5、土師器片 6 などが出土した。4 は近世以前のものとみられる。5 は口縁部に口紅を施す薄手の碗で、口縁部内外面に二重の圈線がある。19 世紀代の可能性がある。

本調査区内では、南壁沿い約 1 m の範囲に近世以前とみられる地層を確認したが、それ以北は旧建物基礎の攪乱であった。攪乱の深さは GL - 1.2 m 以下に及ぶ。

### (3) 調査区 3 (図 3・6、図版 1・2)

会館建設予定地の西南部に設定した。

現代盛土以下を 3 層に区分した。

第 1 層 オリーブ褐色中粒～細粒砂からなり、層厚は 10 cm である。煉瓦製の埋設管の埋め戻し土であり、近代～現代盛土層である。

第 2 層 暗褐色中粒砂質シルトからなり、層厚は 12 cm で、古土壌とみられる。本層上面で土壌・溝などを検出した。遺物の出土はないが、調査区 1・2 の結果から、近世以前の地層とみられる。

第 3 層 黄褐色中粒砂からなり層厚は 38 cm 以上、上町層である。

本調査区の西半部では GL-0.5 m 以下で近世以前とみられる古土壌 (第 2 層) が残っており、上面では土壌や溝が検出された。一方、東半部は GL-1.1 m 以下まで旧建物基礎による攪乱があり、あわせて東半部南壁の GL-0.5 m の深さで、国道 25 号線北歩道に向けて設置されていた旧埋設管の一部を確認した。

#### <まとめ>

本試掘調査の結果、旧消防署出張所の基礎の攪乱が及ばない場所では、GL-0.4 m ～ - 0.5 m 以下で、近世以前とみられる地層および遺構が残存する状況が確認できた。

一方で、旧消防署出張所の基礎がおよぶ範囲は、GL-1.2 m 以上にまで攪乱が及ぶことが確認できた。調査区 2 については、近世以前の地層が南側 1.0 m は残るが、それより北側は消防署基礎の攪乱を検出し、その範囲を確認することができた。

#### 【引用・参考文献】

櫻田小百合 2020 「史跡四天王寺旧境内 西大門南での立会調査について」『四天王寺』第 796 号、pp. 15-16

宗教法人四天王寺 2019 『史跡四天王寺旧境内保存活用計画』

四天王寺学園 1982 『四天王寺 - 西門とその周辺 -』

総本山四天王寺 1988 『四天王寺 - 引声堂と周辺地区の調査 -』





調査区1  
東壁地層断面  
(西から)



調査区2  
南壁地層断面  
(北西から)



調査区3  
南壁地層断面  
(北から)

図版 2



出土遺物  
調査1 (1~3)、調査区2 (4~6)

## 上本町遺跡発掘調査(SUH22-1)報告書

調査箇所	大阪市天王寺区北山町3-1
調査面積	約20㎡
調査期間	令和4年4月27～28日
調査担当者	課長 鈴木 慎一、小倉 徹也

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は大阪平野の中央西寄りに北北東-南南西方向に延びる上町台地上にあり、上本町遺跡内に位置する。今回の調査は、建設工事に先立って実施した試掘調査によって古代とみられる遺構が確認されたため、本調査を実施することになった(図1)。東西約5m×南北約4mの調査区を設定して4月27日～28日に行った(図2・図版1)。調査は、まず重機によって現地表下約1.0mの深さまで掘削した後、以下を人力により掘り下げた。平面および地層断面の精査と遺構・遺物の有無を確認しながら調査を進め、平面図および地層断面図の作成および写真撮影による記録作業を行った。この後、重機によって埋戻しを行い、現場での作業を終了した。

本報告で用いた方位は、図1・2については現場で記録した街区図を1/5000「マップナビおおさか」のデジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。また、図3に示した標高は地理院地図で表示される標高値を用いた。



図1 調査地位置図

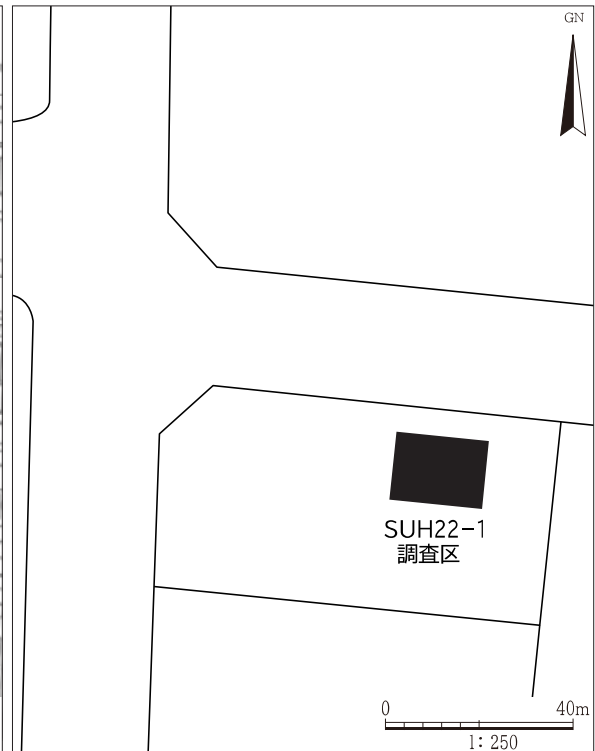


図2 調査区配置図

〈調査の結果〉

1. 層序(表1、図3、図版1)

現地表下3.0mまでの地層を観察し、その結果に基づいて調査地の層序を組み立てた。以下に各層の層相や特徴を記し、西壁・南壁地層断面図を図3、層序表を表1、西壁・南壁断面を図版1に示す。

第0層 現代の盛土および攪乱で、層厚は約180cmである。

第1層 シルトを含む灰～オリーブ灰色の中粒～細粒砂からなる近世の盛土層で、層厚は約25cmであった。上面で土壌SK01を検出した。

第2層 中位段丘構成層で、第2a層と第2b層に区分した。第2a層は灰色の中粒砂～中礫からなり、層厚は約100cmである。第2b層は明黄灰色のシルト～細粒砂からなり、層厚は約90cm以上である。第2a層上面で上面で土壌SK02、井戸SE01・02を検出した。

2. 遺構と遺物(図版1・2)

本調査では第1層上面で土壌SK01、第2a層上面で井戸SE01・02、土壌SK02を検出した。遺構平面図を図4、遺構および遺物写真を図版2に示す。

SK01は東西長1.4m、南北幅0.4m、深さ0.25mの土壌である。埋土は褐色のシルト混り中粒～細粒砂からなり、焼土を含む。西側は調査区外、東側は試掘墳によって失われていた。埋土から18世紀後半～19世紀の肥前陶器鉢5が出土した。

SK02は東西長1.5m、南北幅0.3m、深さ0.25mの土壌である。埋土は灰～オリーブ灰色のシルトを含む中粒～細粒砂からなり、西側、南側は調査区外であった。埋土から18世紀後半～19世紀の中国産磁器青花碗1の他、7世紀に属する須恵器杯8が出土した。

SE01は南北長1.9m、東西長2.0m、深さ1.7m以上の井戸である。埋土は上部から下部へ、灰色粗粒砂～細礫、含シルトオリーブ灰色中粒～細粒砂、灰色ないし黒灰色粗粒砂～中礫、灰色シルト混り中粒～細粒砂ならなる。東側、南側は調査区外であった。埋土から18世紀前半の肥前磁器染付碗4の他、9世紀に属する須恵器杯6・7等、多くの須恵器、土師器が出土した。

SE02は南北長2.1m、東西長3.1m、深さ1.9m以上の井戸である。埋土は上部が第2a・2b層の

表1 層序表

SUH22-1層序		層相	層厚(cm)	遺構	おもな遺物	時代	
沖積層 (難波累層)	上部層	第0層	現代の盛土および攪乱	【盛土】 【攪乱】	ca.180		現代
		第1層	含シルト 灰～オリーブ灰色 中粒～細粒砂	【盛土】	ca.25	←SK01 肥前陶器(18後半～19世紀)	近世
		第2層 a	灰色 中粒砂～中礫(砂礫層)	【河成層】	ca.100	←SE01・02、SK02	更新世
		b	明黄灰色 シルト～細粒砂		90≦		

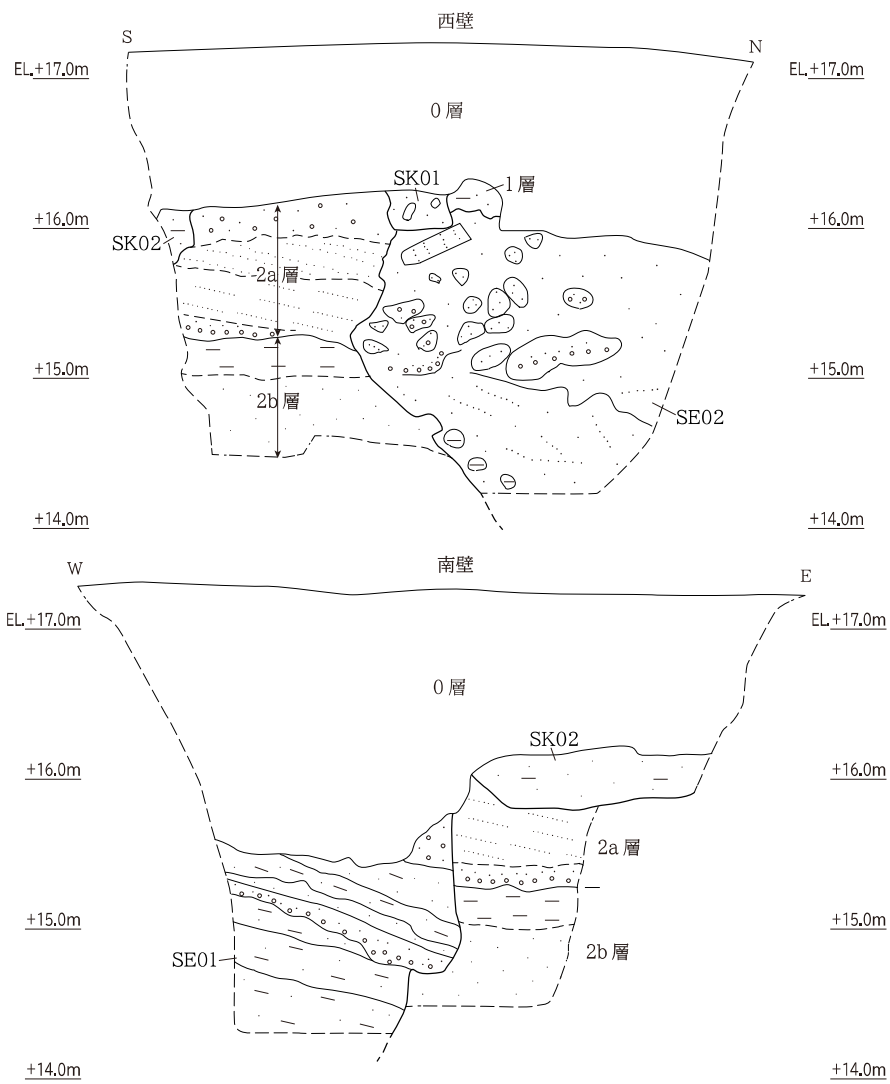


图3 西壁·南壁地层断面图

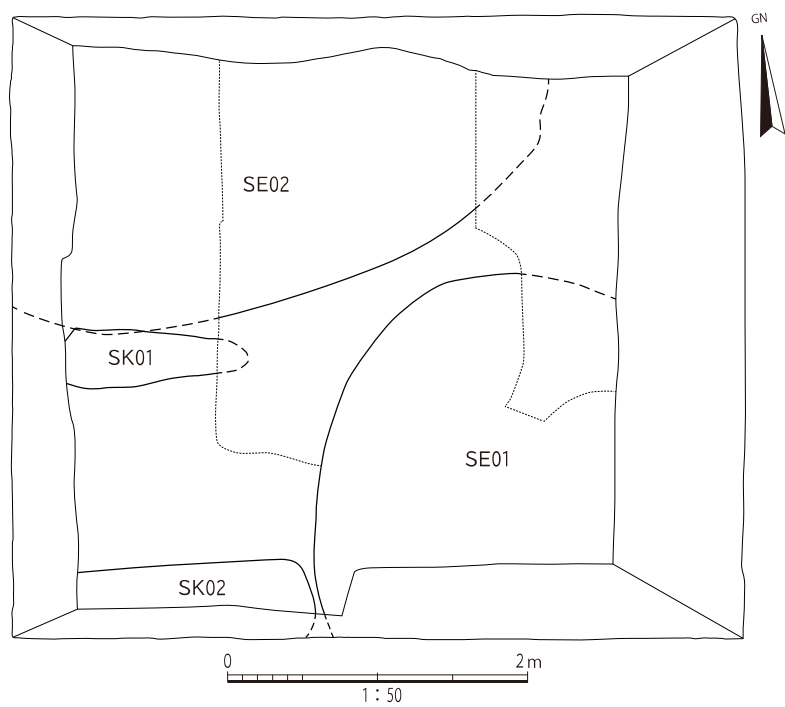


图4 遺構平面图

偽礫を多く含むオリーブ灰色の粗粒～中粒砂、下部が灰色の極粗粒～中粒砂からなる、西側、北側は調査区外であった。埋土から13世紀に属する瓦器椀2の他、白磁椀3、土師器、須恵器が出土した。

なお、SE01・02では湧水が著しく、井戸底まで確認することはできなかった。

#### 〈まとめ〉

今回の調査では、近世に属する井戸1基と土壌2基、中世に属する井戸を1基をそれぞれ検出した。注目されるのは2基の井戸とも、埋土から飛鳥時代～古代の遺物が多く出土したことである。付近に、これらの時代の遺構の存在が想定される。また、これまでの調査でも確認されているが、生活に不可欠な水資源、水源を有しない上町台地上であるが、台地自身の保水性の良いことが再確認でき、古より生活の場になり得た理由を改めて確認できた。



調査区全景(南西から)



西壁断面及び遺構検出状況  
(東から)



南壁断面(北から)



## 図版 2

SE02断面(東から)



SE01断面(北から)



出土遺物



1: 中国産磁器青花碗(SK02)、2: 瓦器碗(SE02)、3: 白磁碗(SE02)、4: 肥前磁器染付碗(SE01)、5: 肥前陶器鉢(SK01)、6・7: 須恵器杯(SE01)、8: 須恵器杯(SK02)

## 上本町遺跡発掘調査(SUH22-2)報告書

調査箇所	大阪市天王寺区上本町三丁目12-7
調査面積	約16㎡
調査期間	令和4年10月5日
調査担当者	課長 鈴木 慎一、小倉 徹也

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は、大阪平野の中央西寄りに北北東-南南西方向に延びる上町台地上にあり、上本町遺跡内に位置する。今回の調査は、建設工事に先立って実施した試掘調査によって古代とみられる遺構が確認されたため、本調査を実施することになった(図1)。東西の隣地の建物から安全な距離を取るため、当初設計から少し調査区を変更し、東西約3.7m×南北約4.2mの調査区を設定して10月5日に行った(図2)。調査は、まず重機によって現地表下約0.4mの深さまで掘削した後、以下を人力により掘り下げた。平面および地層断面の精査と遺構・遺物の有無を確認しながら調査を進め、平面図および地層断面図の作成および写真撮影による記録作業を行った。この後、重機によって埋戻しを行い、現場での作業を終了した。

本報告で用いた方位は、図1・2については現場で記録した街区図を「マップナビおおさか」のデジタル地図(1/2500)に合成することにより得た座標に基づき、座標北を基準にした。また、図3に示した標高は地理院地図の標高値を用い、EL+〇mと記した。



図1 調査地位置図

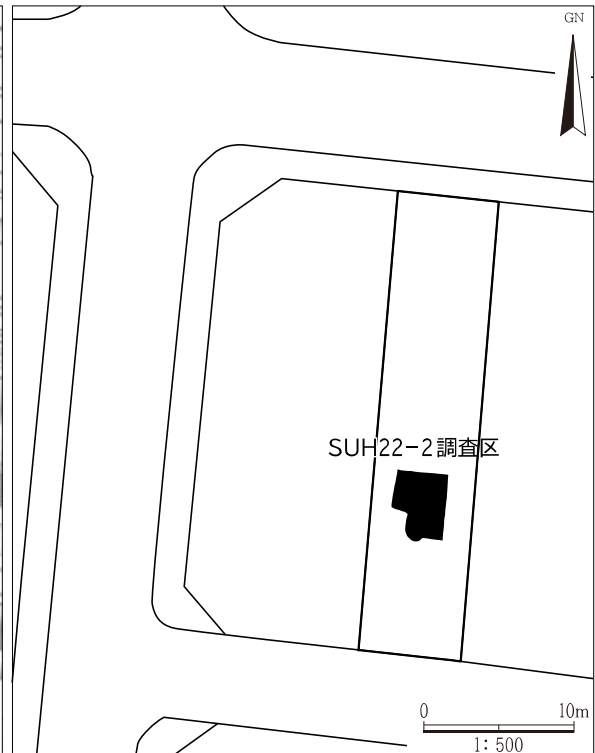


図2 調査区配置図

〈調査の結果〉

1. 層序(表1、図3、図版1)

現地地表下2.0mまでの地層を観察し、その結果に基づいて調査地の層序を組み立てた。以下に各層の層相や特徴を記し、地層の模式柱状図を図3、層序表を表1、地層と遺構の状況を図版1に示す。

第0層 現代の盛土および攪乱で、層厚は約30cmである。

第1層 褐灰ないし灰色のシルト混り粗粒～中粒砂からなる古土壌で、層厚は約35cmであった。上面で土壌SK01、ピットSP01・02を検出した。本層から土師器と須恵器2が出土した。

第2層 中位段丘構成層で、第2a層と第2b層に区分した。第2a層は黄白色の細礫～中礫からなる砂礫層で、層厚は約35cmである。第2b層は粗粒砂～細礫を含む黄白色の細粒～中粒砂混りシルトからなり、層厚は約70cm以上である。

2. 遺構と遺物(図4・5、図版1)

本調査では第1層上面で土壌SK01、柱穴SP01・02を検出した。遺構平面図を図4、遺構断面図を図5、出土遺物写真を図版1に示す。

SK01は確認した南北長約1.5m、東西長約2.2m、深さ約0.3mの土壌で、西側は調査区外、北側は攪乱によって失われていた。埋土は灰色のシルト混り粗粒～中粒砂からなる。埋土から破片ではあるが土師器と須恵器3・4が出土した。周辺の既存の調査結果と土壌の埋土の状況から、時期を決定できる遺物は出土していないが古代～古墳時代に属するものと思われた。

SP01は南北長0.28m、東西長0.29m、深さ0.11mで平

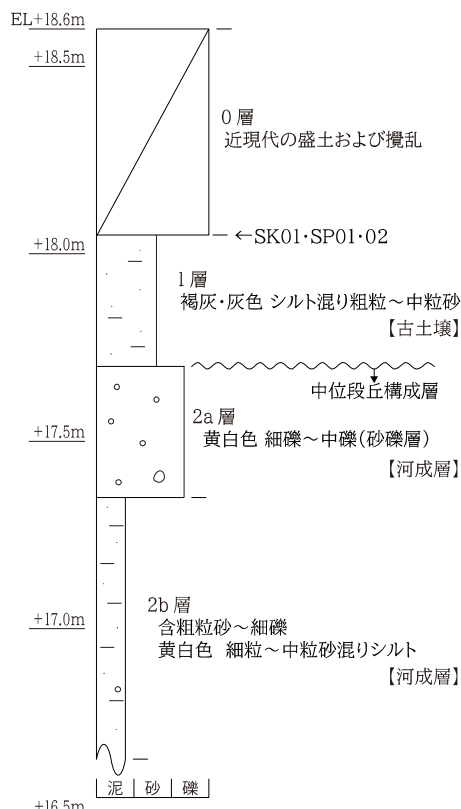


図3 模式柱状図

表1 層序表

SUH22-2層序		層相	層厚(cm)	遺構	おもな遺物	時代
沖積層 (難波界層)	上層	第0層 近現代の盛土および攪乱 【盛土】 【攪乱】	ca.55			近現代
	層	第1層 褐灰・灰色 シルト混り粗粒～中粒砂 【古土壌】	25～50	←SK01・SP01・02	土師器・須恵器	古代～古墳
中位段丘構成層	a	黄白色 細礫～中礫(砂礫層)	ca.35			更新世
	b	含粗粒砂～細礫, 黄白色 細粒～中粒砂混りシルト 【河成層】	70≦			

面形状が円形の柱穴である。掘形の埋土は褐灰色ないし灰色のシルト質粗粒～中粒砂ないしシルト混り粗粒～中粒砂からなり、柱痕跡の埋土は褐灰色ないし灰色のシルト混り粗粒～中粒砂からなる。ともに炭を含み、埋土から土師器片が出土した。周辺の既存の調査結果と柱穴の掘形、埋土の状況およびSP02と比較して、遺物は出土していないが近世以降の柱穴と想定された。なお、組み合う柱穴は見つからなかった。

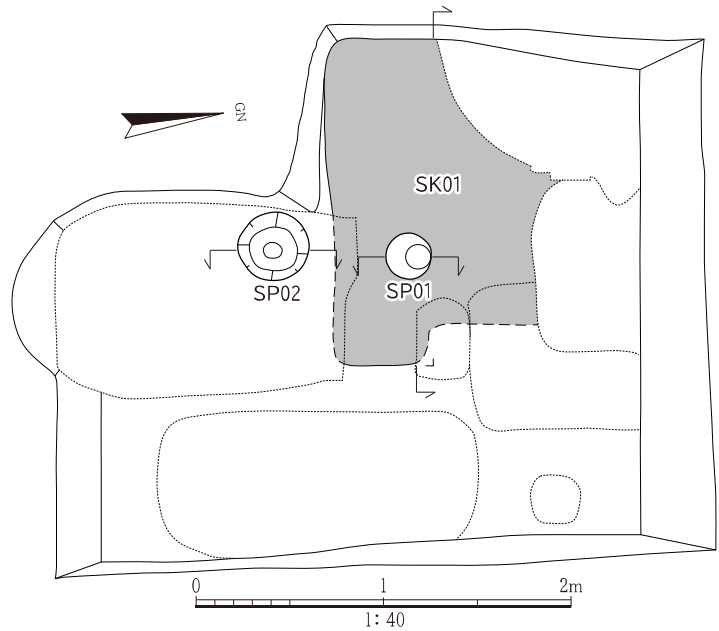


図4 遺構平面図

SP02は南北長0.42m、東西長0.44m、深さ0.38mで平面形状が楕円形の柱穴である。埋土はオリーブ灰色のシルト混り中粒～細粒砂からなり、埋土から破片ではあるが土師器1や須恵器が出土した。周辺の既存の調査結果と柱穴の掘形および埋土の状況から、時期を決定できる遺物は出土していないが古代～古墳時代に属するものと思われた。柱痕跡の名残が底部で認められたが、組み合う柱穴は見つからなかった。

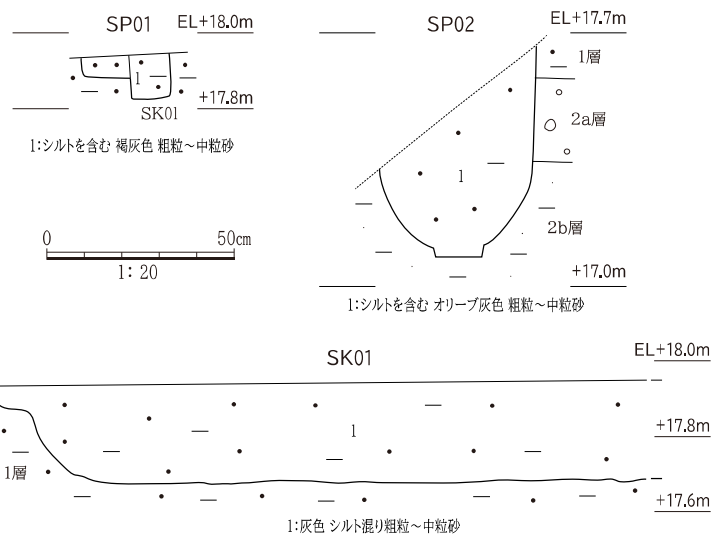


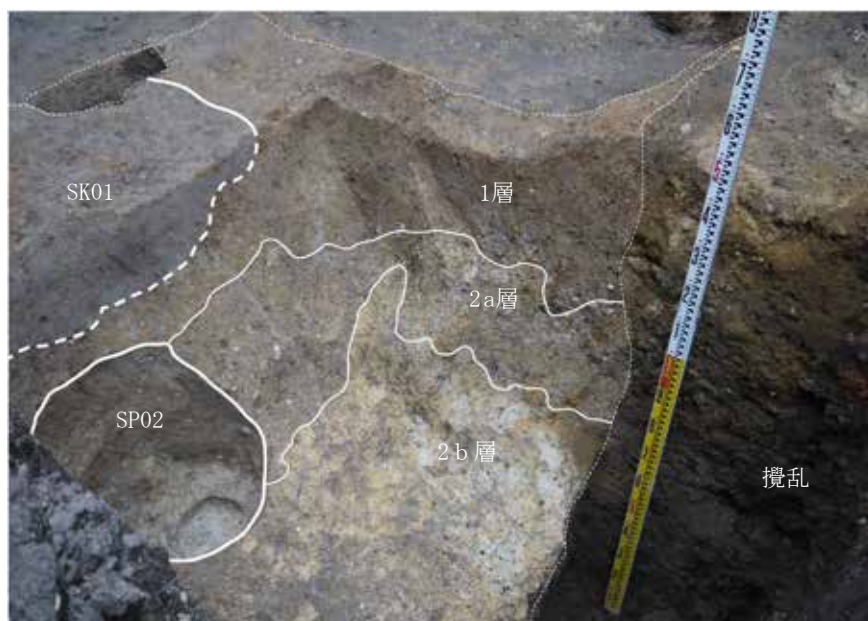
図5 遺構断面図

〈まとめ〉

今回の調査では、古代から古墳時代に属するとみられる土壌1基と柱穴1基、近世以降とみられる柱穴1基を検出した。これまで周辺での調査成果、古代より生活の場であったことを再確認できた。今後行われる調査によって、さらに古代から古墳時代の様子がさらに明らかになることが期待される。



遺構と地層の状況  
(南西から)



遺構検出状況  
(南から)



出土遺物



1: 土師器(SP02)、2: 須恵器(1層)、3: 須恵器(SK01)、4: 須恵器(SK01)





## 上本町遺跡発掘調査（SUH22－3次）報告書

調査箇所	大阪市天王寺区上汐四丁目5-28
調査面積	32㎡
調査期間	令和5年2月7日
調査担当者	課長 鈴木 慎一、宮本 康治

### 〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地は天王寺区上汐四丁目に位置し、周辺では主に古代から近世にかけての各時代の遺構・遺物が確認されている。調査地北側のUS04-2次調査では奈良時代の東西方向の溝や柱穴が（大阪市教育委員会ほか2005）、南側のUS06-1次調査地では奈良時代の建物跡などが検出されており（大阪市教育委員会ほか2008）、注意される地域である（図1・2）。

本地点で建物建設が計画され、令和4年12月26日に試掘を行ったところ、現地表下0.8m以下で近世以前に属する本発掘調査を要する地層が遺存していることが判明した。そこで計画建物の掘削が及ぶことが想定され、残存状況が良好とみられる地点で発掘調査を行うこととなった。調査は令和5年2月7日に実施した。重機による掘削の後に人力での掘り下げ、検出作業等を進め、遺構の調査や写真・図面作成等の記録作業を行い、同日のうちに調査にかかわる作業を終え撤収した。

なお、調査区の方位は大阪市地図情報サイトのマップナビおおさか掲載の図にはめこんで求め、標高については国土地理院地図の敷地東側の道路面の標高をもとに記載している。

### 〈遺構と遺物〉

#### 1. 層序（図3、図版1）

調査においては部分的な確認を含め、現地表下約1.5mまでの状況を確認した。地表下1.2～1.3mで



図1 調査地位置図 縮尺1:2,500

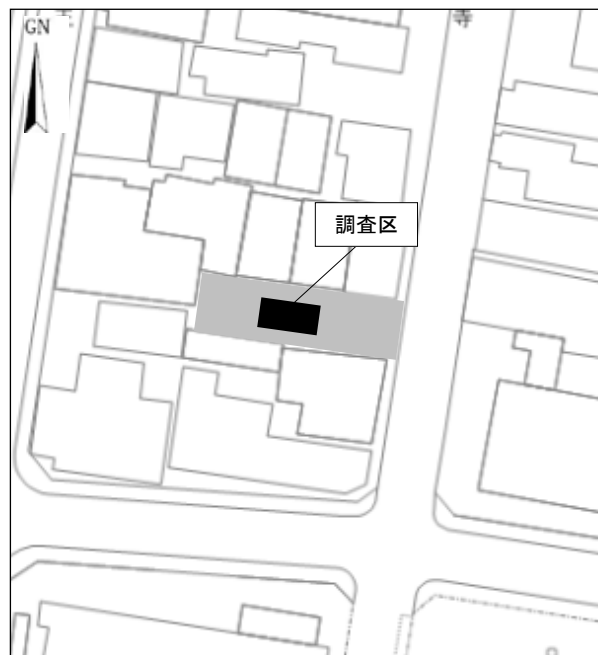


図2 調査区配置図 縮尺1:1,000

第5層とした上町層（地山層）が確認されている。

第0層 黒色細～中粒砂からなる近現代の地層で、厚さは0.4mほどで、一部現地表下1.5m程度まで及ぶところもあった。

第1層 黒褐色～黄色シルト質砂で、層厚は0.2mほどである。近世の盛土層とみられる。

第2層 黄褐～黄色砂質シルトで、層厚は0.2～0.3m程度である。近世の盛土層とみられる。

第3層 黄色砂質シルトで、層厚は0.2m程度で、近世の盛土層である。

第4層 下位に黄色シルト偽礫等を含むにぶい黄褐色細粒砂質シルト～細粒砂で、層厚は0.4～0.5mほどである。近世の耕作土の可能性はある。

第5層 黄～明黄褐色砂～シルトで、上町層に属する。

## 2. 主な遺構と遺物（図3、図版1・2）

### （1）主な遺構

遺構の検出作業は主に第4層の下面、第5層の上面で行った。

第5層上面では調査区の大半がSX01・02とした落込みで占められていた。調査区の北に広がるのがSX01、南にあるのがSX02である。掘削された状況等から、これらはもともと土採りによって形成されたものとみられた。

SX01・02と大別されたが、遺構としては同じような性格のものとみられた。SX01の中でも調査区東端のところ等で部分的に高く残るところがあった。そのため現状ではその単位は不明瞭であるが、もともとは概ね0.8～1.0m前後の幅で単位で掘削されていた可能性がある。下面では鋤・鍬等によるとみられる掘削の痕跡が残されていた。

埋土は第4層で、下端にシルト偽礫を部分的に含むところがあり、掘削時のこぼれの可能性がある。その上位にはにぶい黄褐～黄褐色シルト質砂～砂があつて耕作土とみられた。そのため土採りのために掘削された後、耕作地になったと考えられた。その時期は出土した肥前磁器等から18世紀後半あるいはそれ以降になる可能性がある。

それらの上位では第3～1層とした近世以降の盛土・整地層が確認された。そのため耕作地として利用された後に屋敷地となって利用されたと考えられた。それらの整地層等から形成された遺構が確認されている。第3層下面とみられる遺構にSK03・04がある。SK03は検出状態で東西2mほど、SK04は東西幅1.4mほどの落込みで、ともに廃棄土壌とみられた。埋土からは近世陶磁器・土器類等が出土している。また北東にある井戸とみられる円形の遺構SE05があつて、肥前磁器等が出土している。また小穴SP06などもあつた。

### （2）主な出土遺物（図版2）

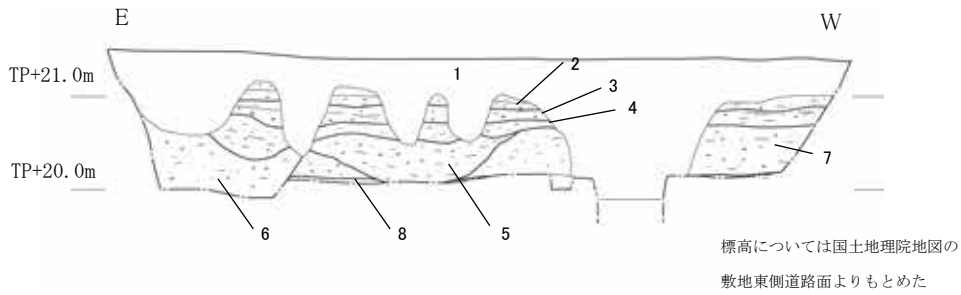
調査した遺構および各地層からの出土があつた。地山上面で検出のSX01・02からは土師器1・2・須恵器3・4や瓦器5、瓦質土器6、肥前磁器の染付碗7等が見つかった。18世紀代に入る時期のものである。

以上に加えて、試掘時には第4層に相当する地層から埴輪片8が確認されている。細片のため詳細はわからないがタガをもち、円筒埴輪等の可能性があるもので、外面側に黒斑が見られる。

### 〈まとめ〉

調査の結果、現地表下1.2～1.3mで地山層が確認され、その上面で遺構が確認された。調査区のほぼ全面がSX01・02とした落込みで占められていたが、土採りによるものと推測された。その後には耕作された後に整地・盛土が行われ屋敷地へと変化したようである。

<調査区 南壁断面>



- |                    |                            |
|--------------------|----------------------------|
| 1: 現代攪乱・盛土層(第0層)   | 5: 黒色シルト質砂(SK03)           |
| 2: 褐～黄色シルト質砂(第1層)  | 6: 褐色シルト質砂(SK04)           |
| 3: 黄褐～黄色砂質シルト(第2層) | 7: 含シルト偽礫にぶい黄褐色砂質シルト砂(第4層) |
| 4: 黄色砂質シルト(第3層)    | 8: 黄～黄褐色粘土質シルト～中粒砂(第5層)    |

<第5層上面での検出状況>

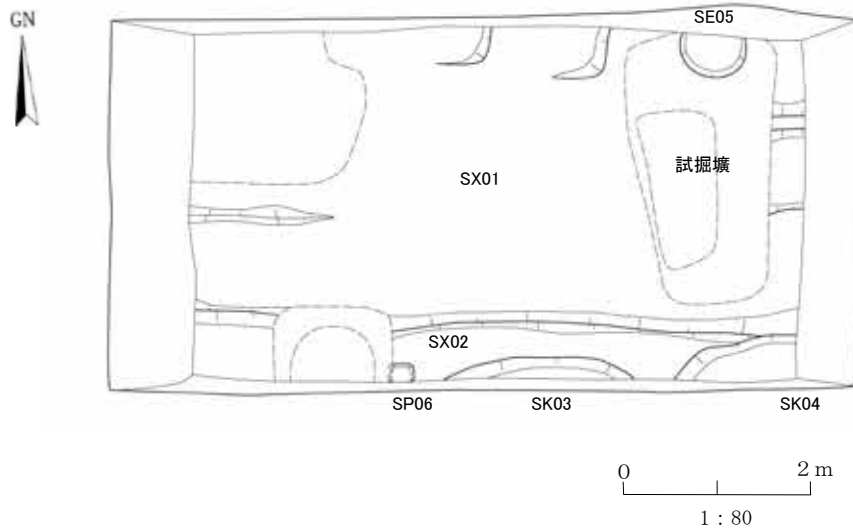


図3 調査区平面・断面図

本調査地の土採りについては18世紀代以降とみられたが、付近では調査地の東方等でいくつかの土採りの事例が知られている（大阪文化財研究所2018など）。時期を見ると、18世紀後半を中心に盛んに行われている例があり、本調査地の状況もそれらと類似する可能性がある。

また付近では古代の遺構が多く確認されているが、本調査地では遺物は少量出土したものの、遺構は確認されなかった。北や南に近接した地点では現地表下1m前後では遺構が確認されているが、本調査地ではそれより深くまで土採りによって掘り下げられていることから、土採り時に失われた可能性があろう。なお耕作土等からの出土であるが、古墳時代から古代・中世にさかのぼる遺物が確認されていることから、そうした時期の遺構が本来はあった可能性があろう。

以上のように、調査面積が大きくなかったものの、付近の土地利用の状況や歴史的な変遷について資料を加えることができた。

**【引用参考文献】**

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2002・03・04）』

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2006）』

大阪文化財研究所2018『上本町遺跡発掘調査報告』VI



調査区南壁と第5層上面完掘状況（北東から）



第5層上面完掘状況（西から）



第5層上面検出状況(西から)



主な出土遺物(1~6: SX01、6: SX02、8: 試掘時採集)

1・2: 土師器、3・4: 須恵器甕、5: 瓦器碗、6: 瓦質土器羽釜、7: 肥前磁器染付碗、8: 埴輪

## 阿倍野筋南遺跡発掘調査(SAS22-1)報告書

調査箇所	大阪市阿倍野区丸山通一丁目100-2、101、102
調査面積	約20㎡
調査期間	令和4年11月29日
調査担当者	課長 鈴木 慎一、小倉 徹也

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は、大阪平野の中央西寄りに北北東-南南西方向に延びる上町台地上にあり、阿倍野筋南遺跡内に位置する。周辺では調査地東側のAS16-1次調査地で中世の落込みや土壌のほか、13世紀代に属する遺物包含層(第2層)を確認している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2018]。

今回の調査は、建設工事に先立って実施した試掘調査によって中世以前とみられる溝状遺構や遺物が確認されたため、本調査を実施することになった(図1)。なお、溝状遺構の南への延長を本調査で溝SD01として検出した。東西の隣地の建物から安全な距離を取るため、当初設計から少し調査区を変更し、東西約5m×南北約4mの調査区を設定して11月29日に行った(図2)。調査は、まず重機によって現地表下約0.45mの深さまで掘削した後、以下を重機を併用しながら基本的に人力により掘り下げた。平面および地層断面の精査と遺構・遺物の有無を確認しながら調査を進め、平面図および地層断面図の作成および写真撮影による記録作業を行った。この後、重機によって埋戻しを行い、現場での作業を終了した。



図1 調査地位置図

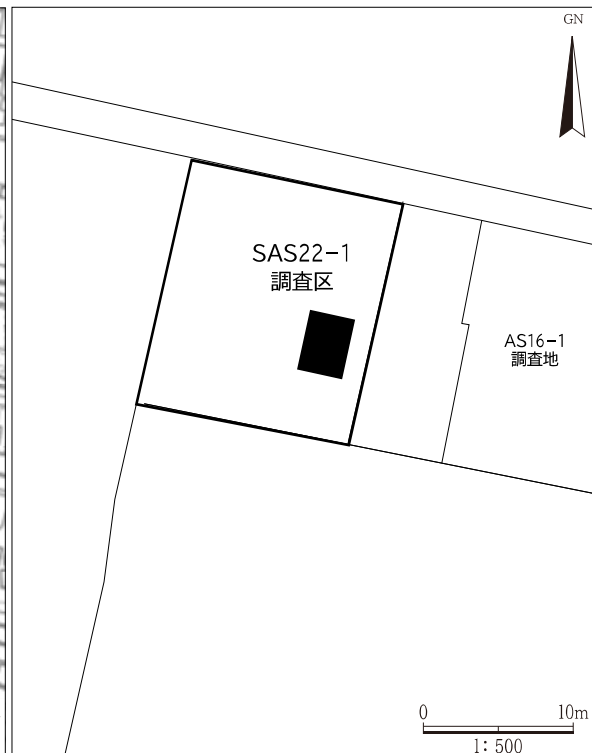


図2 調査区配置図

本報告で用いた方位は、図1・2については現場で記録した街区図を「マップナビおおさか」のデジタル地図(1/2500)に合成することにより得た座標に基づき、座標北を基準にした。また、図3に示した標高は地理院地図の標高値を用い、EL+Omと記した。

〈調査の結果〉

1. 層序(表1、図3、図版1)

現地地表下1.4mまでの地層を観察し、その結果に基づいて調査地の層序を組み立てた。以下に各層の層相や特徴を記し、地層の模式柱状図を図3、層序表を表1、地層と遺構の状況を図版1に示す。

第0層 現代の盛土層および攪乱で、層厚は10~15cmである。

第1層 近世の作土層で、第1a層と第1b層に区分した。第1a層はわずかにシルトを含む暗褐色の極粗粒~中粒砂からなり、層厚約5cmである。第1b層はわずかにシルトを含む褐色の極粗粒~中粒砂からなり、層厚10~15cmである。

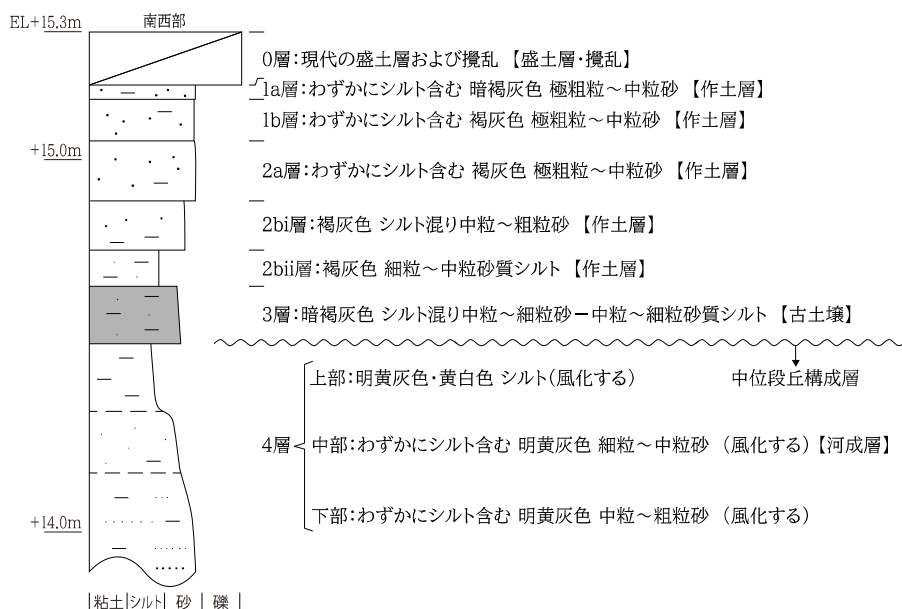


図3 模式柱状図

表1 層序表

SAS22-1層序		層相	層厚(cm)	遺構	おもな遺物	時代		
沖積層 (難波累層)	第0層	現代の盛土層および攪乱	【盛土】 【攪乱】	ca.10~15		現代		
	第1層	a	わずかにシルト含む 暗褐色 極粗粒~中粒砂	【作土層】	ca.5		近世	
		b	わずかにシルト含む 褐色 極粗粒~中粒砂	【作土層】	ca.10~15			
	第2層	a	わずかにシルト含む 褐色 極粗粒~中粒砂	【作土層】	ca.15~20		中世	
		b	i	褐色 シルト混り中粒~粗粒砂	【作土層】	ca.10~15		
			ii	褐色 細粒~中粒砂質シルト	【作土層】	ca.10~15		
	第3層	暗褐色 シルト混り中粒~細粒砂-中粒~細粒砂質シルト	【古土壌】	ca.15~20	←SD01	瓦器・土師器・須恵器	飛鳥時代	
中段丘構成層	第4層	上部: 明黄灰色・黄白色 シルト (風化する)		ca.20		更新世		
		中部: わずかにシルト含む 明黄灰色 細粒~中粒砂 (風化する) 【河成層】		ca.15				
		下部: わずかにシルト含む 明黄灰色 中粒~粗粒砂 (風化する)		25≦				

←: 上面検出遺構



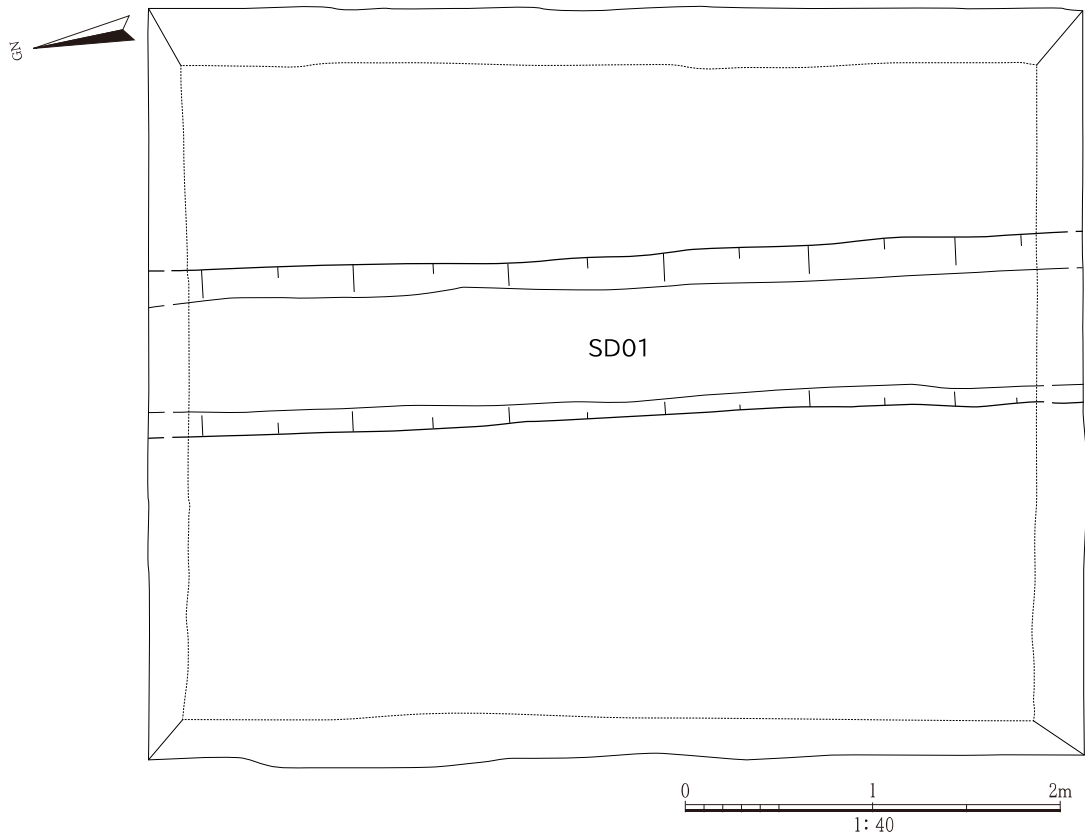


図4 遺構平面図

第2層 中世の作土層で、第2a層と第2b層に区分し、第2b層はさらに第2bi層と第2bii層に細分した。第2a層はわずかにシルトを含む褐灰色の極粗粒～中粒砂からなり、層厚15～20cmである。第2bi層は褐灰色のシルト混り中粒～粗粒砂からなり、層厚10～15cm、第2bii層は褐灰色の細粒～中粒砂質シルトからなり、層厚10～15cmである。

第3層 暗褐灰色のシルト混り中粒～細粒砂ないし、中粒～細粒砂質シルトからなる古土壌で、層厚15～20cmである。本層から中世に属する常滑焼甕3、土師器、7世紀代に属する須恵器杯蓋2が出土した。調査地東側AS16-1次調査の第2層は少し砂を含むにぶい黄褐色粘土質シルトからなる遺物包含層で、TP+14.8～15.1mに分布している。層相と高さが本層準に類似することから対比されると考えられる。出土遺物から13世紀に属する遺物包含層としており、本層は13世紀にかけて形成された古土壌と考えられる。なお、上面でSD01を検出した。

第4層 中位段丘構成層で、上部、中部、下部に細分した。上部は明黄灰色ないし黄白色のシルトからなり、層厚は約20cmである。中部はわずかにシルトを含む明黄灰色の細粒～中粒砂からなり、層厚は約15cmである。下部はわずかにシルトを含む明黄灰色の中粒～粗粒砂からなり、層厚25cm以上である。いずれも風化してやや粘土化していた。

## 2. 遺構と遺物(図4・5、図版1)

本調査では第3層上面で溝SD01を検出した。遺構平面図を図4、遺構

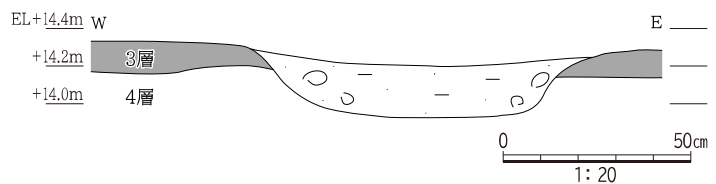


図5 溝SD01断面図

断面図を図5、出土遺物写真を図版1に示す。

SD01は確認した長さ約4m、幅約0.9m、深さ約0.15mの溝で、埋土は暗褐灰色のシルト混り中粒～細粒砂ないし中粒～細粒砂質シルトからなる。埋土から瓦器1と土師器、須恵器が出土した。中世の溝で、南側と北側は調査区外であるが、試掘調査で検出した溝状遺構が検出した層準、埋土の層相とその深さから延長部であることが分かり、さらに敷地外北側に延長すると考えられる。

なお、遊離資料であるが7世紀に属する須恵器杯身4・5が出土した。

#### 〈まとめ〉

今回の調査では、中世の南北溝1条を検出した。また、中位段丘構成層上に形成された古土壌が13世紀にかけて形成されていたことが明らかになった。これまで周辺での調査成果と今後行われる調査によって、さらに古墳時代から古代の様子がさらに明らかになることが期待される。

#### 参考文献

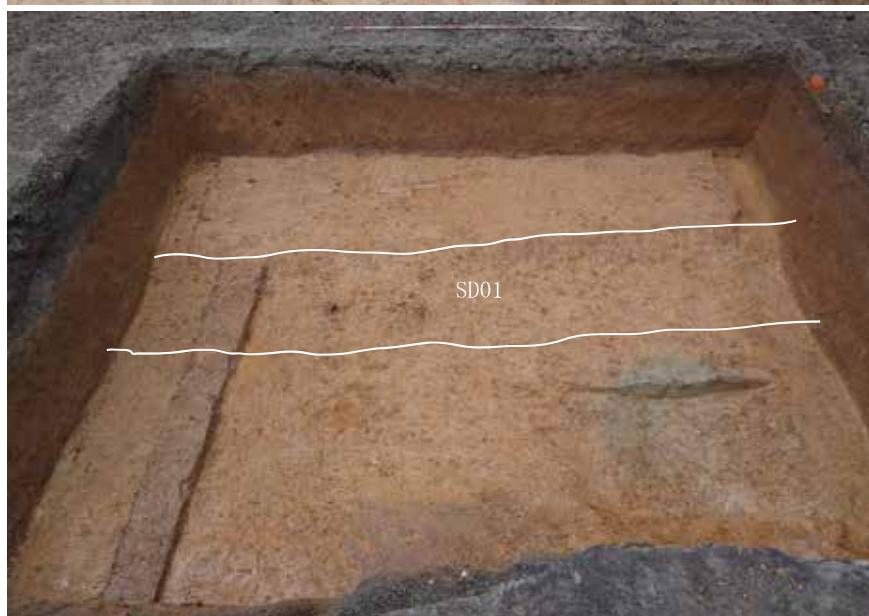
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2018、

「阿倍野区丸山通1丁目99-4他3筆における建設工事に伴う阿倍野筋南遺跡発掘調査(AS16-1)」：『平成28年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.589-595

東壁地層断面  
(北側：南西から)



SD01検出状況  
(西から)



出土遺物



1：瓦器(SD01)、2：須恵器(3層)、3：常滑焼(3層)、4・5：須恵器(遊離資料)



---

大 阪 市 内 埋 蔵 文 化 財 包 蔵 地  
発 掘 調 査 報 告 書 ( 2 0 2 2 )

発 行 日 令 和 6 年 3 月 29 日

発 行 大 阪 市 教 育 委 員 会  
( 一 財 ) 大 阪 市 文 化 財 協 会

編 集 大 阪 市 教 育 委 員 会 事 務 局 文 化 財 保 護 課  
( 大 阪 市 北 区 中 之 島 1-3-20 )

印 刷 株 式 会 社 京 阪 工 技 社

---

